

# Fate/Zero ゼロに向かう物語

俊海

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしも、間桐雁夜がバーサーカーで『漆黒の意志』をもつ彼ージョニー・ジョースターを召喚していたら？

そんなご都合主義の元に作られた、小説です。

ジョニーの性格が原作と乖離していると感じられるところがあるかもしれませんが、寛大な心で見逃してください。

2015/11/14 この度短編から長編に移行しました。

おそらく今後書いてい

くと思います。

## 目次

Fate／Zero ゼロに向かう物語	1
雁夜を縛るものはなくなった。	15
バーサーカーは狂わない。	30
サーヴァントのステータス 1	40
ウェイバーは終始状況に振り回される。	43
救国の英雄は狂戦士より狂う。	56
桜の環境は目まぐるしく変わる。	69
アサシンは隠れない。	80
才のある魔術師は救いがたい愚者になる。	95
猟犬達は狂信者に牙を剥く。	108
平凡な人間は自らの従者を穿つ。	119
サーヴァントのステータス 2	134
二本足の獣は気高きモノにすぎる。	138
信念と誇りはぶつかり合う。	154
人間は英雄になれない。	170
太陽の下で生まれた者たちは黄金に出会う。	184
醜悪な創造は破壊される。	199
バーサーカーは困惑する。	213
王達は譲らない	229
征服王は蹂躪する。	241
血のつながりは親子を意味しない。	252
漆黒は黄金に挑む。	265
運命の分かれ道	279
漆黒の狂人は足を得る。	292

漆黒の意志は銀の弾丸となりて。

## Fate／Zero ゼロに向かう物語

間桐雁夜は、魔術と言うものを忌み嫌っている。

それは自分の家系の魔術があまりにもおぞましいものだったり、恋敵が魔術師だったり、魔術師の倫理と言うものが理解できないものであったりするからだだが、とにかく雁夜は魔術と言うものに嫌悪を覚える人間であった。

「かはっ！……ぐ、ぐう……っ！」

そんな人間なのに、なぜ彼は今、苦悶の表情を浮かべて魔術を行使しているのか。

なぜわざわざ逃げ出したはずのこの家に戻ってきて、彼は血反吐を吐いているのか。

……答えは、その魔術の犠牲になった幼い少女を守るためだ。

自分の命と引き換えにしても、想い人の娘であり、今よりもお小सानころから可愛がっていた間桐桜——元遠坂桜を救い出すために、彼は拒絶していた魔術に手を出したのだ。

聖杯戦争と言う、過去の英霊を召喚し、万能の願望器である聖杯を奪い合う血みどろの戦い。

それを制すれば、桜を助けられると信じて彼は自分の肉を寄生させた蟲に食われながら、魔術師となった。

そして今、その英霊——サーヴァントを召喚する儀式を終えたところ。

全身の痛みに耐えながら、雁夜は自らの喚び出したサーヴァントの姿を見ようと前を向くと——

「な、なんだよこいつ……」

だが、いざ召喚したサーヴァントの第一印象に、雁夜は思わず息を呑んだ。

なにせ、彼が喚んだものは、理性を失い、意思の疎通をすることなど不可能に近い『バーサーカー』のはずだったのだから。

しかし、雁夜の前に現れたサーヴァントは、とてもじゃないが狂戦士には見えやしない。

生身の戦闘など不可能だとは思えないほどの細い体付きに、アメリカの国旗を思い起こすような衣装。

明らかに、古代の英雄だの、中世の武人だのではない。どう見ても、現代に近いサーヴァントだ。

しかも、その極めつけが――

「――一応聞いておこう。お前が僕のマスターか？」

口を開いて、言葉を発したことだ。

意味のないうめき声や、叫びではなく、雁夜に対しての明確な意志を持って、意思の疎通をするために、サーヴァントが口をきいた。

「あ、ああ……確かに俺がマスターだが……」

「おいおい、お前がマスターのくせに、僕に対して『なんだよこいつ』って言ったのか？そいつは何とも失礼な話じゃあないか？」

「い、いやお前の言いたいこともわかるんだが……。か、確認したい……お前のクラスは、一体何だ？」

「そんなことはお前が一番知っているはずだ。バーサーカーで僕を喚んだんだらう？だったらバーサーカー以外の何になるって言うんだ？」

なんとも生意気なサーヴァントである。

他人を、しかも初対面の相手に、馬鹿にしたような態度をとっているのは、生まれついているものだろうか？

それとも、彼の英霊としての誇りとして一般人相手にはそう易易とは頭を下げない意思表示のつもりか？

「全く……どうして僕をバーサーカーなんかで召喚したんだ？ライダーか、最悪アーチャーの方が適性が高いっていうのに……」  
「……クソ、失敗した……」

だが、そんなサーヴァントの言葉も耳に入らないくらい、雁夜はひどく落胆していた。

体中の激痛よりも、せつかくの希望さえも潰えてしまった事実が、雁夜のなけなしの気力を蝕んでいく。

まともに狂化させることもできないまま、バーサーカーを喚んでしまった。

あまりにも致命的すぎる、これでは桜を救い出すことができない。そう結論付けてしまった雁夜は、自分の愚鈍さを呪うしかなかった。

「……何をそんなに落ち込んでいるんだ？……お前」

「バーサーカーの狂化が失敗しているのに、どうやって元気を出せつて言うんだよ……」

「失敗……？いや、成功してるぞ？ちゃんと僕は『狂化』に当たるスキルを持つているはずだ」

そう告げられて、雁夜はすかさずバーサーカーのステータスを確認した。

そこには、『狂化』のスキルは存在していない。

あるべきはずのスキルの代わりに、書かれているものは――

「……『漆黒の意志』……？」

「おかげで助かったよ。もしも僕が狂つてたりなんかしていたら、まともに戦うことなんかできやしなかったんだから」

「ちよつと待て！お前のステータスも見たが、ほとんどがD以下ってどういうことだ!?!しかも一番高いパラメーターもCしかないじゃないか!」

先ほどの失望も、体中の痛みさえも忘れ、雁夜は吠えた。

このサーヴァントのステータスがあまりにも低すぎるせいだ。

幸運がCなのはまだいい。筋力や耐久もDあたり、見た目と同様、現代に近い英霊なら大体はこんなものだ。と納得できるくらいのステータスでもある。

だが、このサーヴァント、魔力はE、敏捷はE-だ。

はつきり言っただけにも戦える気がしない。

その上、さらに悪いことに……

「宝具がないのに、どうして狂化しないほうが強いって言い切れるんだ!?!」

バーサーカーは『宝具を持っていない』のである。

『狂化』のスキルは、理性を失う代わりにパラメーターを引き上げる効果がある。

しかし、その代償として、狂っているがゆえに、特殊な宝具でもない限り、その力を使うことができないというデメリットも存在する。

このバーサーカーは、宝具を持っていないのだから、むしろ『狂化』したほうが強くなれるとしか思えない。

「僕は宝具なんかいらなからな。ちよつとした能力と、『技術』が僕の武器さ」

「『技術』……だと?」

「そうさ。『技術』だから宝具にはならない。キャスターの強大な魔術が『魔術』というスキルとして認識されるように、ライダーの乗りこなしが『騎乗』として扱われるように、僕のそれはそういうものなのさ」

『技術』

なるほど、言われてみれば納得できる。



宝具というものは、原則的に時代が古くなる方が強くなる。過去であればあるほど、世界は神秘に包まれていたのだから。けれど、バーサーカーは新しい時代の英霊だ。

神秘というものは、人類が歴史を刻むほどに廃れていくものだが、それとは相対的に 積み上げられていくものが、人間の技術である。バーサーカーはそれが武器であるから『宝具』にはならないのだと言っているのだ。

「じゃあ、どんな『技術』なんだ？バーサーカーだからマッドサイエンスティストだったりしたのか？」

「僕は科学とかそういうのはよくわからないよ。僕の技術は『回転』だ」

「……『回転』？」

「まあ、そのあたりはおいおい説明するとして……だ……」

そこでようやく、バーサーカーは雁夜から視線を外した。

外して、次にその目が捉えたのは、こちらを観察するかのよう眺めている一人の老人だ。

間桐臓硯——雁夜の父親であり、魔術の力で人外と成り果て生き続けてきた文字通りの『怪物』である。

「さつきからやたらとこっちを見てくるが……あんたは一体なんなんだ？僕のマスターでもないんだろう？」

「なあに、そんな未熟者のためにいろいろと用意してやっているおせっかいな爺じゃ。別にワシはお主らの邪魔をするつもりはない」

「そうか、だったらそこにいるのが邪魔になるからさつきと出て行ってもらえないか？」

「おお、そうかい。じゃあ老耄はさつきと出て行かせてもらおうわい。じゃあそいつを頼んだぞバーサーカー」

やけに不気味な笑みを浮かべながら、臓硯は地下室から出て行っ

た。

雁夜は、妙にあつさり引き下がったことに違和感を覚えたが、自分としてもあの化物を見続けるのは精神的に来るものがあるため、あえて黙っていた。

「ふう……やつと鬱陶しい奴もいなくなったか。改めてよろしく頼むマスター」

「……雁夜、にしてくれ、マスターなんて呼ばれるのはむず痒くて仕方ない」

「そうか。じゃあカリヤ、まず聞かせてもらいたいことがある」

「何だ？」

「その、聖杯ってやつにかける願いつて何かを教えて欲しい」

願いの？

……ああ、そういうえば聖杯には願いを叶える力があつたんだっけ。そんなことには興味がなかったから忘れていた。

「……俺に、聖杯にかける願いはないよ」

「はあ？ だったらなんで参加してるんだ？」

「どうしても、救いたい子がいるんだ。桜っていう、まだ小さな子供だ」

「その子が、聖杯戦争とどう関係がある？」

「おぞましい魔術から桜を解放するために、臓硯に聖杯を渡すんだ。そうすれば、あの子も助かる……！」

雁夜にとつて、聖杯は桜との引換券程度にしか思っていなかった。そのためにも、絶対にこの聖杯戦争を勝ち抜かないと……

「……待て、おぞましい魔術だとか、桜って子供に関しても聞きたいことがあるが、『そんなこと』よりも重要なことがある」

「！お前っ！ 『そんなこと』とは何だ!?俺がどれだけ——」

「ああ『そんなこと』だね！はつきり言って、僕にとってはこっちの疑問の方が最優先されることだ！」

「――！」

雁夜の話聞き、それまで静かに話をしていたバーサーカーが声を荒げ始める。

自分が必死になって悩んでいる問題を『そんなこと』扱いされて、反論しようとする雁夜だったが、バーサーカーの剣幕に圧倒されて口をつぐんだ。

「カリヤー！お前今聖杯を『渡す』って言ったか!?そんなことをしたら僕の願いが叶えられなくなるじゃないか！」

「え……お前は何を言って……」

「ゾウゲンに譲っちゃったら僕はどのタイミングで聖杯を使えるんだ!?」

「そんなもの、臓硯に頼めば――」

「あの妖怪みたいなやつが、手に入れた聖杯を他人に使わせるようなタマに見えるのか!?僕は知っているぞ、ああいう人間を！自分の目的を達成出来たら、それに協力した奴に顧みることなく始末する、ゾウゲンはそういうやつだッ！」

バーサーカーは、生前に敵対した、ある人物を思い浮かべる。

多くの人の血が流れ、何人もの命が失われようとも、彼は『正義の行動』と信じて疑わなかったが、まだ自分よりは人間として正しい道を歩んでいた。

それでも、その人物は目的を達成したらそれで終わりだ。

その手助けになった人間を労うことなどしなかった。

臓硯は、その手のタイプの人間によく似ている。

だから、臓硯に聖杯が渡った時点で、バーサーカーの願いは届くことはなくなってしまう。

バーサーカーはそう断定した。

「もしもカリヤがゾウゲンに渡すなら、僕はお前を殺してでも止めるぞ。幸い僕には神秘なんて欠片もない状態で召喚されたからな、一週間ぐらいなら現界できる」

「お……おい？冗談……だよな？」

「冗談じゃない。僕のステータスを見ただろう？そこに答えが載っていたはずだ」

「ぐっ………クソッ！」

雁夜は確認してしまっている。

バーサーカーの持つ、『狂化』の代わりに与えられているスキル——『漆黒の意志』を。

だから、わかってしまう。

バーサーカーは、『やる』と決めたら『絶対にやる』のだと。

【固有スキル】

漆黒の意志：A

戦闘狂や殺人嗜好とは一線を画す純粋な殺意。

目的へ向かう意志が恐ろしく強く、そのためには殺人すら厭わず、人間性すら捨てられる覚悟を持つ。

普段は意思疎通や会話をすることは可能だが、一度『覚悟』を決めてしまえば、よほどのことがない限りマスターでもその行動を止めることはできない。

Cランク相当の『心眼（真）』及び『戦闘続行』を得る。

また『覚悟』を決めた時、バーサーカーの『あるスキル』の破壊力と効果を強化する。

なんだこのスキルは。

下手な『狂化』よりもよっぽど厄介じゃないか。

制御不能な理性ある人間なんて、どう扱えばいいんだ……！

「な……なんだよっ？お前がそこまでして叶えたい願いつてなんなんだ!？」

もう、これしかない。

叶えられる願いがどんなものなのかを聞いて、妥協点を探すしか。けれども、こんな意志を持っている奴の願いが、まともであるという保証が無い以上、分が悪すぎる賭けだ。

どうか、少しはマシな願いであつてくれ――

「……死んだ友人に、また会いたい」

「……………へ？」

何か、信じられないことを聞いた気がする。

まるで、銃を向けられ、射殺されると思つて身構えていたら、実は水鉄砲だったみたいだな。

そんな拍子抜けのようなものが雁夜を襲う。

「友人に会いたい……彼ともう一度話がしたい……ただ、それだけだ」

「いや……それだけつて、それは死者蘇生なんじゃ……」

「だからこそ、僕は聖杯が欲しいんだ。こればかりは譲れない」

「そうは言われても……」

雁夜にとって、却つてやりにくくなってしまった。

悪意ある願いなら、令呪でもなんでも使つて強制的に言う事を聞かせればいいのだが、あまりにも真つ当すぎる願いで、元一般人の雁夜としては無下にするのも良心がとがめてしまう。

「よし分かった。……カリヤ、お前はもうしたいんだ？言つてくれ」

「だから……俺は聖杯なんて……」

「そうじゃあない。サクラを魔術から解放するためにゾウゲンに聖杯を渡すと言つたな？どうしてそうなるんだ？そんなもの、さつさと誘

拐でもして遠くに連れて逃げればいいじゃあないか」

「無理なんだよ……臓硯からは逃げられないんだ……あいつが桜の体内に蟲を寄生させているから……」

「ゾウゲンを始末すればいいのか？」

「いや、まずは桜の心臓に居着いている蟲からどうにかしないと、臓硯が人質にとつてしまう……」

「サクラの蟲は一匹だけか？」

「数は分からないが、心臓にいるやつだけでも潰せたら助かるはずだ」

「ゾウゲンを殺すのも難しいと……」

「いくら殺しても、核になる蟲が生き残ってたら意味がないからな」

「……………ふむ」

殺せるものなら、自身の命と引き換えでも雁夜は臓硯を殺したい。だが、臓硯自身がおぞましい数の蟲に体を変化でき、桜の体内にも蟲がいる。

どうやって手出しすればいいのか、雁夜には分からなかった。

「じゃあ、もしもだ。仮の話だぞ？」

「……………なんだ？」

「もしも仮にだ。サクラの蟲を除去できて、ゾウゲンを始末することができたなら、聖杯は全部僕に譲ってくれないか？」

「はっ、そんなことができたなら、聖杯でもなんでもくれてやる」

「そうか。じゃあ案内しろ」

すつくとバーサーカーが立ち上がると、いきなりわけのわからないことを言い出した。

「案内って……………どこに？」

「サクラって子のところだ。そいつの蟲を殺してやる」

「……………なんだって？」

「僕の能力は、そういうのが得意だからな。両方共にケリをつけよう」

あまりに都合の良い言葉を聞いたせい、一瞬何を言われたか理解できなかった。

徐々に、頭で理解していくと、今までの絶望も苦痛も消え去って、雁夜はバーサーカーの肩を掴んだ。

「ほ、本当だな!?嘘じゃないよな!？」

「ああ、保証してもいいぜ。寄生虫くらいならどうってことはない」「こつちだ!絶対だぞ!絶対!絶対に治してくれよ!？」

肩の手を、バーサーカーの手にへと移動させて、病人の様相を呈していた人間とは思えないくらいの強い力で引っ張っていく。

もはや雁夜の頭には、この一年間の忌まわしい記憶や、全身を蝕む蟲のことなどすっぽ抜けて、桜を治すことしかなくなっていた。

「…………おじさん?」

「桜ちゃん…………っ!ようやくだ!ようやく君を助けられる!」

桜の部屋にバーサーカーを連れて飛び込むと、雁夜は桜を抱きしめた。

手加減を忘れてしまうほどに、掴んだ希望を離さないように。

「痛いよ……おじさん……」

「あ、ああ、ゴメンね桜ちゃん」

「ふーん……この子がサクラか。窓は……あるな」

桜の姿を認めると、次にバーサーカーは外が見える窓を探し始めた。

そこから目に入る木々を確認し、再び桜に向かい合う。

「雁夜、今から僕が行うことは少しショッキングかもしれないが、邪魔だけはしないでくれよ」

「ショッキングって……やっぱり苦痛を伴うとかか？」

「僕が今から見せるのは『回転』だ。僕の友人なら、もつと高度な治療ができるんだろうけど、痛みだけはないはずだから安心してくれ」

「……分かった。お前に任せる。桜ちゃん、少しだけ我慢できるかな？」

「うん……我慢、する」

「いい子だね。じゃあ、このお兄さんが桜ちゃんの悪いところ、全部治しちゃうから、頑張ってね」

「頑張る……おじさんの言うことだもん」

桜は素直に雁夜の言うことを聞いて、バーサーカーの前に立つ。

逆に雁夜は、桜をバーサーカーに任せ、少しだけ距離をとった。

あまりに近づきすぎたら邪魔になるだろうと思ったからだ。

「……………」

「……どうしたんだバーサーカー？指先を桜に向けて……何かするんじゃないのか？」

「今『回転』させているところだ」

「？いや回転もなにも、お前は何も持っていないじゃないか」

「そうだ、カリヤには見えない。同じ能力を持ったものにしか『この



力』は見えないんだ」

「何を言ってる——」

突如、桜の体に異変が起きた。

『穴』が空いたのだ。

しかもただの『穴』じゃない。動いている。まるでその『穴』が生きているかのように——

「カハッ！ううう……ゲホッ！ゲホッ！」

「桜ちゃん！おいバーサーカー！本当に大丈夫なんだろうな！桜ちゃんに何かあったら令呪を全部使ってもお前をぶち殺すぞ！」

「……サクラに我慢しろって言ったのはどこのどいつだった？」  
「うっ……」

「体内の蟲が殺されて、その血が出てきてるだけだ。サクラには怪我はない」

言い終わると同時に、桜の表面を蠢いていた『穴』も消えていく。体内の治療が終わって、精根尽き果てたのか、桜は深い眠りについていた。

「これで大丈夫。完璧にサクラのなかの蟲は殺し尽くせた。OK！……たぶん」

「え？今なんて言った？ちよつと待て！今小さく『たぶん』って付け足さなかったか？『たぶん』ッ!？」

「心配するなって！治ってるって！『穴』だって無くなったし、サクラも静かに寝てるんだから治ってるんだ！……きつと」

「何だよそれ!？」  
『きつと』  
「オオ!？」

バーサーカーの曖昧すぎる反応に雁夜は全力で突っ込む。

が、後日綺麗さっぱり蟲がいなくなった桜の姿があったため、実際に問題はなかったようだ。

これは、ゼロに向かう物語だ。

かつて、自分の『マイナス』を『ゼロ』に戻すことができた男が、異なる時代の『マイナス』を『ゼロ』に向かわせる物語。

バーサーカーの名は『ジョニー・ジョースター』

雁夜の運命は、この『無限の回転』を持つサーヴァントによって大きく変わる。

雁夜を縛るものはなくなった。

「それで、こうしてゾウゲンもいなくなったわけだけど、次の行動指針はどうする?」

なんでもないかのように、バーサーカーは『臓硯であつたもの』から、視線を雁夜へと向ける。

どうも、桜の体内にいた蟲が本体だつたらしく、バーサーカーの攻撃によって臓硯はこの世から消え去っていた。

「……ははは、何だつたんだろ、俺が臓硯に怯えていたのがバカみたいだ。あつさりと終わつちまつた……」

雁夜の言うように、臓硯はあつさりこの世から姿を消してしまつた。

しかも、バーサーカーが、少しの間指を向けていただけで。

ようやく、間桐の呪縛から解放されたのはいいけれど、自分が恐怖していた存在が消えてしまったせいで、何か心がぽっかり空いたような感覚になつてしまった。

「そうやって感傷に浸るのはあとにしてくれ。僕にも父親との関係には後ろめたいところはあるけど、今は聖杯戦争中だ」

「そうだな……。いや、それよりも先にお礼を言わせてくれ。お前のおかげで俺達は救われたよ」

「別に感謝されるようなことじゃあない。僕の目的のために、最善だと思つたからやつただけだ」

「それでも、救つてくれたのには変わりないさ。本当にありがとう」

言うと、雁夜はバーサーカーに向かつて頭を下げた。

「バーサーカーさん、おじさんと私を助けてくれて、ありがとうござい

ます」

それに倣ったかのように、桜もまた、バーサーカーに頭を下げる。  
この二人の行動を見た、バーサーカーはというと――

(……どうしよう、すごくむず痒い)

どう反応すればいいのか分からず、ひたすらに困っていた。

(生前だと、あんまり人から感謝されることってなかったからなあ……。こうやって手放しに感謝されると、嬉しいような、恥ずかしいような……)

バーサーカーは、人生の半分以上が信用できる人間が存在しない環境にあった。

自分のせいで亡くなった(かもしれない)兄や、かけがえのない友人、そして、最後に出会えた女性と、その間に生まれた子供。

自分が心から信用できる人間が、この四人しかいなかった。

その上、結構利己的な性格であり、『誰かのために行動する』ことが非常に稀である。

それはつまり、元から感謝されるようなことをする人間ではないし、極稀に他人を助けたとしても、ほとんどが礼をしてくるような人間ではないことが多かったのだ。

むしろ、恩を仇で返してくるような人間しかいない。

(……僕自身も大概だと思うけど、周りの人間も非常識な奴ばかりだったな。僕の人生)

おそらく、それでもバーサーカーの方が、いろんな意味で非常識な存在ではあると思うが、彼自身にはそんな自覚は存在しない。

「そうやって頭を下げないでくれないか？いや、君達が感謝してくれるのはありがたいけど、居心地が悪い」

「……そうか、分かった。でもそつちも分かってくれ。俺達は、お前にそれくらい救われたってことを」

「あ〜！分かった！OK！だからそれ以上言わないでくれッ！」

「どうしたのバーサーカーさん？少し顔が赤いよ？お熱？」

「僕のそばに近寄るなあぁー………ツ!!」

そこには、あの化物を打倒した英雄の姿はなく、ただただ照れているだけの青年がいた。

……………

『俺としては、お前のやりたいようにやったらいいと思う。あ、桜だけは巻き込むなよ?』

『そんなの当たり前だろ。これでも僕にだって子供がいる。無意味に子供を巻き込む心算はない』

『お、お前子持ちだったのかよ!?!』

そんな作戦会議とは名ばかりの会話を交わしてから数日後、サーヴァント同士の激しい戦闘の気配を感じ取ったバーサーカーは単独で倉庫街にやってきた。

かといって、そこに乱入するつもりは毛頭ない。

なにせお世辞にもバーサーカーのステータスは高いとは言えない。なるべく他の陣営の情報を入手して、互いに消耗してくれるのを待っていないと、この聖杯戦争では生き残れない。

「それにしても皮肉なもんだな。理性を奪われるはずのバーサーカーが頭を使ってサバイバルしないといけないなんて」

そんな状況をバーサーカーは自虐しながら苦笑する。

しかし実際、バーサーカーはそういう戦い方に向いているともいえる。

バーサーカーは近代の英霊だ。他の英霊に比べて素のスペックは低い、その分消費魔力が異常に低い。

そのうえ、『この世界』には彼の名はどこにも残されていない。

同姓同名の別人ならいるかもしれないが、この世界の歴史において『ステイール・ボール・ラン』が開催されたという文献がどこにもない。

つまりこの世界は彼にとつてパラレルワールドと言える場所で、歴史上にバーサーカーの名前を探し出すのは不可能だ。

知名度補正はないが、そのおかげで世界の修正力も低く、維持魔力さえ弱り切った雁夜でも余裕で賄える。

貧弱な代わりに、突かれて困る弱点がなければ、スタミナの問題もない。長期戦になるほどバーサーカーは有利になる。

「これだと、キャスターで召喚されてたらカリヤも一瞬でお陀仏だっただろうし、結果オーライだな」

ちなみにこのバーサーカーがキャスターだった場合、とんでもない代物を宝具として持ち込んだ状態で召喚されていた。

おそらく世界中に広まっているとある宗教の関係者であれば、目の色を変えてでも欲するであろう代物を。

「それはさておき、あいつらの情報を探るとするか」

気持ちを新たにしてバーサーカーは倉庫街に視線を向ける。

そこではセイバーとランサーが交戦している。

凄まじいという言葉でさえ生ぬるく思えるほどの攻防が繰り広げ

られ、その一太刀ごとに必殺の威力が込められている。

おそらく、バーサーカーでは彼らの攻撃に二、三回直撃するだけで現界すら危うくなるだろう。

『……大昔の英霊つてのは、あんな化け物だらけなのか？しかも一人は女の子だぞ』

「……僕に聞かないでくれ。正直僕でさえ常識外れとしか思えないんだ」

神秘というのは古くなればなるほど強くなり、知名度が高ければその分人々の理想を体現しやすくなる。

彼らはその極みに存在する英霊たちだ。バーサーカーとは比較にならない。

雁夜がパス越しに尋ねてくるが、バーサーカーにとっても彼らは規格外すぎる。

『でも、女で武勇に長けてる英霊つて……ジャンヌ・ダルクとかアマゾネスくらいじゃないか？一説によれば上杉謙信も女だったらしいって説もあるけど眉唾物だし』

「残念だがジャンヌの武器は旗だし、アマゾネスの時代にあんな立派な鎧はない。その上聖杯戦争では基本的に西洋の英霊しか召喚されない」

『う……じゃあお前は分かるのかよ？』

「今は互いに宝具を見せていないし正確なことは分からないけど、一つ言えることがある」

『そうなのか？それってなんだ？』

「あの二人は多分紀元後の英霊だ。互いに騎士って言ってるしな」  
『なるほど……』

騎士が現れたのは、おおよそその時代にあたる。

正確に言うなら古代ローマでもエクイテスという騎士の階級は

あつたが、彼らのどこか気品のある立ち振る舞いから、おそらく古代の英霊ではないだろうとバーサーカーは踏んでいた。

「なんにせよ、強力そうなサーヴァントがつぶし合ってくれているんだ、僕たちは高みの見物と行こうじゃあないか」

『ま、俺にできることは何も無いけどな』

「そういうなよ。こういう時に話し相手がいるっていうのはありがたいもんだぜ？一人だとただ見張ってるだけで退屈になっちゃうんだから」

『そう言ってくれれば助かるよ』

そんな会話を続けていたら、突如暗闇を雷光が迸る。

そしてその稲妻がセイバーとランサーの間に落ちると、牡牛に引かれた戦車が現れた。

「双方、剣を収めよ！王の御前であるぞ！」

そのチャリオットから大柄な男が降りてきて、高らかに謳いあげた。

内心バーサーカーは、『片方は剣ではなくて槍じゃあないのか？』と  
か思ったが。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争ではライダーのクラスを得て現界した！」

(……………何を言ってるんだ……………？……………こいつ……………)

自ら自分の真名をバラすなんて自殺行為にしか思えない。

バーサーカーは、イスカンダルの行動が何一つ理解できずにいた。

そしてそれは雁夜も同じで、こんなバカに世界は一度征服されかけたのかと呆れていた。



「何を考えてやがりますか、この馬鹿はー!!」

やらかしたライダーの横で激昂しているマスターと思しき少年。常識はずれな行動をするライダーに振り回されているのであろうことがうかがえる。

そんなマスターの怒りなどどこ吹く風と、ライダーは次の言葉を発した。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが……矛を交える前に先ず問うてみたい。うぬらの聖杯へのその願望は天地を喰らう大望に比してもなお重いものかどうか」

「貴様、何が言いたい？」

何か妙なことを言い出したライダーの真意を問うために、セイバーが尋ねる。

「うむ。噛み砕いて言うのだな。一つわが軍門に降り、聖杯を余に譲る気はないか？さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を征する快悦とともに分かち合う所存である」

そしてライダーはさらにやらかした。

しかもそんなたわけたことを真面目な顔で言い放つのだから始末が悪い。

ただでさえ白い目で見ていたセイバーとランサーが、もはや底冷えするような冷たさを伴って視線を向けて返答する。

「……先に名乗った心意気に、まあ感服せんでもないが……その提案には承諾しかねる。俺が聖杯を捧げると決めたマスターはただ一人。それは断じて貴様ではないぞライダー」

「……そもそもそんな戯言を述べ立てるために、貴様は私とランサーの勝負を邪魔だてしたというのか？戯言が過ぎたな征服王。騎士と

して許しがたい侮辱だ！」

残念でもなく当然だろ。

バーサーカーと雁夜の思考がシンクロした。

「……正直に言うと、聖杯を使わせてくれるならあいつらの仲間になってもいいとは思ったけど、ともに征服するって言ってもなあ」

『え、お前それ本気で考えてるのか？』

「そりゃあ当然だろ？ 僕たちの戦力は弱いんだ、強力な陣営を仲間に取り込むのは悪くないよ」

『……じゃあ、一回聞いてみたらどうだ？ 自分の願いに聖杯を使ってもいいかって』

「あー……でも、あの状況下でか？ それはただの自殺行為ってやつだろう？」

そもそも、ライダーが声をかけたのはあの二人が強力なサーヴァントだからであって、自分のような弱いサーヴァントは歯牙にもかけない可能性の方が高い。

それで相手にされなかったら、自分も正体をバラしたうえで強力なサーヴァントに囲まれるリスク付きだ。

だが、ライダーの陣営と協力できるなら、これ以上なく心強い。

もともとバーサーカーは目的のためなら誰かの仲間になることに抵抗はない。

バーサーカーが会いたいと願っている親友との共闘自体が、技術を会得するという目的のために付きまわっていたことから始まったのだから。

『なんだったら令呪で撤退をサポートしてもいいぞ』

「いいのか？」

『俺には聖杯戦争の知識なんてそんなにないし、バーサーカーが正しいって思うならやってみる価値はあるんじゃないか？』

「……そうか。じゃあ、試しに……」

マスターの了承を得て、バーサーカーは戦場へと走り始めた。こういうとき、バーサーカーは考える。あの時はこの足のために親友と共にいたのに、今では親友のために足を動かすことになるとは。

「むう……待遇は応相談だが？」

「くどい!!」

なおも引き下がるライダーを二人そろって切って捨てた。

その返事に、本当に残念そうな顔をしてライダーは頭を掻いた。

「こりゃー交渉決裂かあ。勿体無いなあ。残念だなあ」

「へえ、待遇は応相談だったのか。だったら僕なんかはどうだ？」

ちようどいいころ合いに、バーサーカーが戦場に乱入した。

突然の乱入者に、その場にいた全員の視線がバーサーカーに注がれる。

「ほう！余の求めに応じるものが現れるとはな！どうだ坊主！余の『ものは試し』というやつも捨てたものではないではないか！」

『『ものは試し』で真名をバラしたんかいっ!』

なにやらライダーの主従が漫才をし始めているが、バーサーカーには関係ない。

「それで、僕は仲間にしてもらえるのかい？」

「構わぬぞ！余は来る者は拒まずだからな！ところでお前さんはどのクラスだ？」

「……バーサーカーだ」

少し、バーサーカーは早まったかと頭を抱えた。  
仲間にしてからクラス名を聞くとは、どこか抜けているとしか思えない。

「ほうほう！理性があり会話もできるバーサーカーとな！それはまた珍しい！して、待遇について聞きたいらしいが、どういった内容だ？」  
「簡単なことさ、あんたが願いをかなえた後でいいから僕にも聖杯を使わせてほしい。あんたの願いをかなえても、それだけの余裕はあるんだろ？」

「なぜそう思う？」

「あんたは『余は貴様らを朋友として遇し、世界を征する快悦をともに分かち合う所存』と言った。ということとはつまり、ライダーの目的は世界征服で、そのためには僕たちを受肉させないといけないってことじゃあないのか？だったら僕達の方も聖杯の容量を残そうとしているはずだ」

「おいおい、そんなことをしたらお前さんを受肉できないではないか」  
「安心しろ。僕は現界するのに魔力はほとんど食わない。その分の願いを僕の願いに回してくれっただけさ」

「……喋ることができるところか、それなりに思考もできるとは、お前さんは本当にバーサーカーか？」

「ああ、まぎれもなく、僕はバーサーカーさ」

この段階で、別段バーサーカーの考え方は間違っではない。

ライダーは受肉して、仲間になったサーヴァントと世界征服しようとしているのは間違っではないし、ライダーのマスターも雁夜も叶えたい願いがあるわけではないので、実質一組分の願いをかなえるだけで済むというのも間違っではない。

ただ、ライダー組もバーサーカー組も知らないことがあった。

聖杯は願いをかなえるのに六騎分の魂が必要であること。

そして、実は『あるサーヴァント』が脱落してしまえば、その問題

はクリアーできてしまうということ。

「あいや分かった！そういうことなら問題ない、余の配下になれ！」

「ちよ、ちよつと待てよライダー！こんな奴を仲間にしていいのかよ！？」

「どうした坊主、何が不満だ？」

「不満だらけだー！！」

さつきから変動しまくる状況に、ようやくツツコミを入れられたのはライダーのマスターであった。

なんせ戦いに横やりを刺されたと思ったら、そいつがいきなり勧誘してきて、その勧誘に乗ったサーヴァントが現れ、挙句の果てにそのサーヴァントがバーサーカーなくせに意思疎通をしてくるという、常識はずれにもほどがある展開なのだから。

『いったい何を血迷って私の聖遺物を盗み出したのかと思えば……：よりにもよって君自身が聖杯戦争に参加する腹だったとはねえ。ウエイバー・ベルベット君』

そのライダーのマスターによって、ようやく調子が戻ったのか、男の声が倉庫街に響く。

どうやらウエイバーというのがライダーのマスターの名前らしい。

そして、その声の主は、ウエイバーにとって出会いたくなかった人間であることが、顔色からうかがえる。

『致し方ないなあウエイバー君。君については、私が特別に課外授業を受け持つてあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本来の意味……その恐怖と苦痛とを、余すところなく教えてあげるよ。光栄に思いたまえ』

つまり、男の言葉を要約すると二人は師弟関係にあり、そして弟子

であったウェイバーがイスカンドル召喚のための聖遺物を盗んで冬木市に来たということらしい。

そして今、男はウェイバーを明らかに見下している。

だが言い返せない、ウェイバーが言い返そうとしても恐怖がその口を閉ざしてしまふ。

「おう、魔術師よ。察するに、貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターとなる腹だったらしいな」

だが、代わって言い返す者がいた。ウェイバーのサーヴァントのライダーだ。

「だとしたら片腹痛いのう。余のマスターとなるべき男は余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ。姿を晒す度胸さえない臆病者なぞ、役者不足も甚だしいぞ」

多分、ライダーは本気で言っているのだろう。

本心から、共に肩を並べないものはマスターの資格なしと思っっているのだろう。

その言葉に続いて、バーサーカーが口を開く。

「よかったなあんた、ウェイバーってやつに聖遺物を盗まれて。間違はなくあんたじゃライダーとはうまくやっていけなかつたと僕は思う。……もしかしたら、今のサーヴァントでもぎくしゃくしてるんじゃないか？」

多分に皮肉が混じっている。

『お前が馬鹿にしている奴のほうか、お前なんかよりもよっぽどサーヴァントとうまくやってるぞ』と。

バーサーカーにも思うところはあるのかもしれない。自分の成し遂げた成果が認められない、認めようとしないう人間に対する悪感情と

というのが。

『……貴様まで私を馬鹿にするつもりか?』

「そんなことを言ったつもりはない。ただ、そういう事実を上げてるだけさ」

「おお、よく言ったバーサーカー! 全く、この戦争には腰抜けばかりが多くて困るのう。おいこら、他にもまだおるだろうが。闇にまぎれて覗き見をしている連中は!」

「……どういうことだ?」

バーサーカーが聞き返すと、ライダーは若干どや顔しながら言い放つ。

「セイバー、そしてランサーよ。うぬらの真っ向切つての競い合い、真に見事であった。あれほどの清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出てきた英霊が、よもや余一人ということはあるまいて」

確かにそれもそうだ。

バーサーカー自身も、勧誘がなければ出てくるつもりは一切なかったのだから、他にも隠れていてしかるべきだろう。

「聖杯に招かれし英霊は、今!ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものと知れ!」

……バーサーカーはすごく不安になってきていた。

やはりこいつと組むのはやめた方が良かったのではとさえ考え始めた。

今見てるやつは、情報収集のために観察しているのであって、ライダーにどう思われようと出てくるわけがない。

そんな挑発で出てくるような奴は、最初っからライダーのように乱

入してきただろうし、そんなことを言って何の意味があるんだと思ひ悩む。

が、そんなやつがいるあたり、聖杯戦争というのは非常に奇妙なものなのだろう。

「我を差し置いて“王”を称する不埒者が一夜のうちに二匹も湧くとはな」

第一印象は『黄金』だった。

もはや目が痛くなるほどに輝いている黄金の鎧を身にまとっている。

しかも一目でわかってしまうほどの傲岸不遜さ。いよいよもってバーサーカーは聖杯戦争はこんな魔境だったのかと激しい頭痛とともに思い始める。

「難癖付けられたところでなあ……イスカンドルたる余は世に知れ渡る征服王にほかならぬのだが」

あのライダーでさえ、自分以上に突飛な性格をしているサーヴァントがいることに呆気を取られた。

それでも、誰よりも先に黄金のサーヴァントに反応するところはさすがといったところか。

「戯け、真の英雄たる王は天上天下に我ただ一人。後は有象無象の雑種にすぎん」

「そこまで言うならまずは名乗りをあげたらどうだ？ 貴様も王たるものならばまさか己の偉名を憚りはすまい」

「問を投げるか、雑種風情が、王たる我に！ 我が拝謁の榮に欲してなお、この面貌を見知らぬと申すならそんな蒙昧は生かしておく価値すら無い！」



とんでもないことを抜かす王もいたもんだな。  
バーサーカーは一人ごちて、それに雁夜が反応した。

『あれってサーヴァントだよな、バーサーカー』

『確かにそうだ、サーヴァントだ。……なんでそんなことを?』

『素朴な疑問。サーヴァントって召使って意味だよな? あんな奴をサーヴァントなんてのにしたら間違いないく上手くいくわけないのになんであいつを召喚したんだ? 100%相性悪いだろ、どんな奴がマスターでも』

『確かに……言われてみればそーだね』

『そもそもあのサーヴァントって時臣の奴のサーヴァントだし、なんであいつあんな扱いにくそうなサーヴァントを選んだらそーな』

『……ああ、分かった。あんな奴を狙って召喚しようとするマスターなんて、『私ならうまく扱える!』なんて思ってそーで相当傲慢だからとかアアア?』

『なるほどー。確かに時臣はそういうやつだった!! 傲慢同士惹かれ合ってたって訳かよアア!!』

『アツハツハツハツハ!!』

今のでだいぶ気が楽になった。

やはり話し相手がいるのは素晴らしい。そう再認識したバーサーカーだった。

バーサーカーは狂わない。

ここに五騎のサーヴァントが出そろったが、誰も動き出そうとしない。

いや、正確には動き出すことができない。

下手に先走ってしまえば、残りのサーヴァントに狙われてしまうかもしれないからだ。

「誰の許しを得て我をみている。この狂犬が……！」

「え、僕？」

が、そんな定石など知ったことかと言わんばかりに、アーチャーがバーサーカーに敵意を向け始めた。

どうも、バーサーカーが雁夜と共にアーチャーのことを馬鹿にしていた空気を感じ取ったのだろう。

もはや言いがかりレベルで敵と認定してしまったバーサーカーは戸惑うばかり。

しかし、そんなバーサーカーの事情など、アーチャーには関係がない。

アーチャーの左右の空間が歪む。

そこから、施されている装飾や感じ取れる魔力の量から明らかに宝具だと分かる剣と槍が現れ、バーサーカーの方へとむけられた。

「せめて散りざまに我を興じさせよ。雑種ウ!!」

「うおっ!?!」

歪んだ空間から現れたアーチャーの剣と槍が、バーサーカーに向けて射出された。

その場にいたマスターには視認ができないほどの速度を伴った流星のごとき攻撃が、今バーサーカーの命を奪おうと迫りくる。

『なんてでたらめな攻撃なんだっ!?!』

雁夜がその規格外の攻撃に驚く。

アーチャーと言えば、確かに遠距離攻撃ではあるが、あれほどの宝具を弾の代わりに飛ばすなんて成金趣味もいいところだ。

だが、その成金趣味だろうがなんだろうが、その攻撃は単純ゆえに強力だ。どう取り繕おうとその事実は変わらない。

どのようなサーヴァントでも、アーチャーのあの攻撃が直撃すればリタイアは必至だろう。

だというのにバーサーカーは自分に迫ってくる宝具をよけようとしな

い。それどころか、彼の視線はわずかにライダーの方へと向けられていて、手に持っている『何か』に回転を加え始める。

そして、あと数瞬で被弾するそのギリギリのタイミングで自分に向かってくる流星に『何か』を投げ放った。

瞬間、金属同士のぶつかり合う轟音が響いた。

その衝撃によって舞い上がった粉塵が、バーサーカーの周りを覆い隠す。

視界が遮られ、バーサーカーの様子が見えない。それでも周囲のマスターたちの見解はほとんど一致していた。

『あの攻撃を受けてはひとたまりもないだろう』と。

「…………ふう、なんとかこれくらいはできるか」

『なっ!?!』

全員が、バーサーカーの早々の脱落を予期したとき、砂塵の中からバーサーカーの声が聞こえた。

その声に驚き、全員がそこに目をやると、バーサーカーはいまだ健在の姿で悠然と立っていた。

彼らは、バーサーカーがどうあがこうと、黄金のサーヴァントの裁きは覆らない。そう結論付けていた。

しかし現実には、そんな攻撃などものともせず、バーサーカーは『無傷』で立っている。

その右手には、奇妙な回転をしている『鉄球』が握られて、バーサーカーの足元には剣と槍が落ちていた。

「奴め、本当にバーサーカーか？」

サーヴァントたちには何が起こっていたのか理解できたらしく、ライダーが感心したように言葉をこぼす。

「な、何が起きたんだ……？」

「見えなかったのか？ バーサーカーは、あの鉄球でもって迫りくる剣を弾き飛ばし、その弾かれた剣が狙ったかのように槍とぶつかり、両方がバーサーカーに届くことなく地面にたたき落とされたのだ」

「はあっ!？」

ウェイバーの疑問にライダーが答えを返す。

つまりバーサーカーは、見かけでは大したことのないような鉄球を投げただけで、アーチャーの凄まじい攻撃を迎撃したということになる。

見るからに異常な攻撃を、別の方向に異常な防御で跳ねのけたバーサーカーにウェイバーは呆れたような声を挙げた。

「お前さん、狂戦士という割にはえらく芸達者な奴だのう」

「まあ、あいつほどは上手く投げられないけど、僕に向かってくると分かっているならどうにでもなるさ。待ち構えていればいいんだからな」

「な、なあバーサーカー、それがお前の宝具なのか？」

ライダーの言葉に、冷静に返事するバーサーカー。

そして、ウェイバーが多少は話の通じるサーヴァントと判断したの

か、その鉄球が宝具なのかと尋ねる。

案外、こうやって物怖じしないあたり、ウェイバーは相当肝が据わっているのかも。バーサーカーは考えながら、正直に答えた。

「いや？ 『鉄球』自体は、多少魔力を通しただけで、素材は本当にただの鉄だ。宝具でも何でもない」

「嘘だろ!？」

「本当さ。何なら見てみるかい？」

そのままバーサーカーはウェイバーに今しがた使った鉄球を投げてよこす。

即座にウェイバーがいろいろ解析してみるが、本当にそれはただの鉄球だった。

「じゃ、じゃあバーサーカーは、ただの鉄球であんな宝具を防いだってことかよ!？」

「……『鉄球』というよりは『回転』だけど、まあその認識でいいよ」

バーサーカーの武器は、『技術』によりもたらされた『回転』であり、真球であるならなんでもいい。

本来の武器もあるにはあるが、あちらの方は弾数が制限されるので、予備として鉄球を持っていたに過ぎない。

が、そんなことなど問題ではない。問題なのは『鉄球』で『宝具』を防いだことだ。

この結果は、ある引き金を引くのに十分である。

少し思い出してみよう。

その宝具を放ったのは一体誰だったのか。

どうしてその人物はバーサーカーに攻撃したのか。

そして——その理由で攻撃できるような人物が、この状況を許しておくことができるのか……!

少し穿った見方をされたというだけで処断しようとする人物が、自ら

の宝具をたかが鉄球で防がれて、なんとも思わない訳がないっ！

「……その塵芥に等しい玩具で、我が宝物を傷つけるとは………そこま  
で死に急ぐか、狗ッ！」

『死に急ぐも何も、そうしなかつたら死んでたつての』

『よせよカリヤ、傲慢な人間には理屈は通じないんだよ』

雁夜との会話もよそに、アーチャーが深紅の双眸をはつきりとした  
殺意を持ってバーサーカーに向ける。

アーチャーの背後から後光のように新たなる宝具が出現した。

その数16、槍や剣はもちろん斧、槌、矛………拳句の果ては用途の  
知れない奇怪な刃を持つ武器まである。

「そんな……馬鹿な……っ！」

ウェイバーの驚きも当然だ。

本来宝具は英霊を象徴するものであり、中には複数の宝具を持つ英  
霊も存在するのは確かだ。

しかし、数も種類もまるで統一性のないものを宝具にしている英霊  
がいるなんて想像の埒外なのだから。

そんな絶望的な光景を前に、バーサーカーが思うことはただ一つ。

(生前でも、ここまで上から目線&気が短い人間は見たことがない  
なあ)

もはやアーチャーに対して感心する段階に至っていた。

彼の知り合いには、一癖も二癖もある人物が大量にいたが、この  
アーチャーのように天上天下唯我独尊じみた性格の人間にあったこ  
とがない。

強いて言えばジョッキーとしてのライバルの彼くらいか。

だが、そんな彼でも目の前の金ぴかに比べたらとんでもなく謙虚に

見えてくるから驚きだ。

『で、バーサーカー、あの攻撃は防ぎきれるのか?』

『問題ないな。なんせ的が大きすぎる。数が多ければ多いほどこっちの方が有利だ』

『普通のサーヴァントだったら、あんな攻撃されたらひとたまりもないだろうに』

『どれだけ宝具が強かろうと弱かろうと、当たれば消滅するのに違いはないからな。数多のナイフを投げられるのと変わりないよ』

バーサーカーは弱いサーヴァントだ。ゆえに、攻撃力が10だろうが10000だろうが当たれば死ぬことに違いはない。

攻撃力なんかより、防ぎにくい宝具の方がバーサーカーは苦手としている。

その点で言えば、アーチャーはバーサーカーにとって相性がいい。

「その粗悪な玩具でもって、どこまで凌ぎきれるか……さあ、見せてみよう!」

アーチャーの号令によって16の宝具がバーサーカーに殺到する。

ミサイルの集中砲火のような武器の投擲に倉庫街は爆撃を受けたかのような有様になっていく。

すさまじい光景にその場にいた者は皆啞然とするが、そんな中、動いたのはバーサーカーだけだった。

バーサーカーは己に向かってくる武器の群れに対し、手にある鉄球でもって対処するらしい。

先ほどと同様に奇妙な回転を始めた鉄球は、最初に飛んできた矛の柄の部分にぶつかるそのままバーサーカーの手の元へ戻っていく。

その後は、先ほどの焼き直しとなる。

弾かれた矛が『鉄球』からの回転を受けて妙な回転を始め、バーサーカーを抹殺せんとする他の武器の軌道を大きくそらす。

そして矛の『回転』を受けた他の武器もまた、それに倣ったかのよう  
に『回転』し始め、また別の武器へとその『回転』を連鎖的に伝えて  
いく。

最後には、アーチャーの射出した武器はすべて、バーサーカーのい  
る方向とはまるで見当違いな場所に着弾していった。

16の武器が投擲されつくした後には、最初と変わらぬ様子で立つ  
バーサーカーと、その周りに散乱している武器たちが残る。

結局、アーチャーの憤怒は、バーサーカーを害することもできず、多  
少周りの景観を変えるにとどまる程度に終わった。

「どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとバーサー  
カーとの相性は最悪だな……」

バーサーカーの所業に驚きを隠せないセイバーやランサーと違い、  
どこか余裕そうな表情でライダーは一連の光景を振り返った。

「多くの武器を射出するのは普通であれば強みであろうよ。だが、そ  
れがバーサーカーを利することになっておる。奴の防御は相手の武  
器を利用して防いでいるのだからのう」

しかもアーチャーは、宝具を飛ばしているだけ。言ってみれば、手  
でぶん投じているのと変わりはない。

であれば、それらの宝具は外部からの力の影響を受ける——要は、  
掴んだり、弾き飛ばしたりが可能であるということ。

もしもアーチャーが担い手であるなら、宝具の特性を引き出せてい  
たかもしれないが、現実として『回転』が通用しているので、そう言っ  
たこともないだろう。

「……………」

そして、バーサーカーは無言で指をアーチャーに向ける。



その行動の意図が読み取れるものがあるはずもなく、訝し気にバーサーカーを見やるばかり。

そして、次の瞬間。

『なっ!?!』

アーチャーの立っていた街灯のポールが、『何も当たっていない』のに破壊された。

街灯はそのまま崩れ落ちるが、アーチャーは何事もなかったかのようになり立つ。

(……「射程」がギリギリだったか)

「痴れ者が！天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるか！」

内心舌打ちしつつ、アーチャーの怒りのお言葉を受け流す。

今の一撃、バーサーカーはアーチャーを葬るつもりだったが、相手の運が良かったか外れてしまった。

「その不敬は万死に値する。そんな雑種よ、もはや肉片一つ残さぬぞ！」

アーチャーの背後の空間が再び歪む。

そこから現れた武器の数はさつきほどの倍以上、数で押し切るつもりのようなのだ。

(……これは少しまずいか)

いくらバーサーカーといえど、絶え間なく延々と射出されていたら防ぎきることは不可能だ。

今ので一発『爪』を使ってしまったし、鉄球も親友ほどうまく使えないので数回投げたら壊れてしまうだろう。

覚悟を決めて、再び鉄球に手を伸ばし、迎撃しようと待ち構える。しかし、アーチャーの宝具がバーサーカーに向けて放たれることはなかった。

「きさままじごときの諫言で、王たる私の怒りを鎮めろと？大きく出たな時臣……」

どうやら、彼のマスターに呼び出されたらしい。

雁夜曰く、その人物は遠坂時臣らしいが。

『このままやれば勝てるのに、どうして撤退させるんだろうか？いや、僕からすれば助かったからいいけど』

『時臣のやつは勝てる勝負しかない奴だからな。宝具が防がれたっただけで不安がってるんだろ』

『……おいおいおいおい、なんだよそれ？100%勝てる勝負なんてあるわけないだろ？そいつは頭が凝り固まつてるんじゃないのか？』

『それありうるな。あいつFAXが使えないんだ』

『え？FAXって電話みたいに文字を送る機械だろ？なんでそれくらいのもので使えないんだ？』

『あいつ曰く』なにも新しい技術に頼らなくても、われわれ魔術師はそれに劣らず便利な道具を、とうの昔に手に入れている』とのことだ』  
『カリヤ、実際それってコストパフォーマンス的にはどうなんだ？』

『……魔術的にやるにはインクだの宝石だのが必要になってくる。この意味が分かるな？』

『はあっ!?トキオミは馬鹿なのか!?便利なものがあるならそつちを使った方がいいだろっ!』

『俺の知る限り、この傾向は魔術師なら大体そうらしいぞ』

『……いやさあ、僕のこの技術も、親友曰く先祖代々受け継がれたらしいものだけど、あいつ普通に使えるものは何でも使ってたよ?』

『そういうものなんだよ、魔術師ってのは』

そのことを聞き、少しだけバーサーカーは、自分を召喚した人間が雁夜でよかったと胸をなでおろしていた。

少なくとも、サーヴァントの行動を制限してくる時臣との相性は最悪だ。

バーサーカーは、そうだと決めたことは間違いなくやりとげる人間なのだから。

「雑種ども。次までに有象無象を間引いておけ。我と見えるのは真の英雄のみで良い」

雁夜と雑談していると、向こうも話がまとまったのか撤退する運びになったようだ。

そう言うとき黄金のサーヴァントの姿がそのきらめきだけを残して消えた。

「……なあウェイバー君といったか。君だったらあのサーヴァントが怒り狂ってるときに撤退しろって命令って出来るかい？」

「な、なに言ってるんだ!?!そんなのできるわけないだろう!!そんなことさせるくらいなら好きにやらせた方がましだ!!」

「だよなあ……」

バーサーカーがそばにいたライダーのマスターに尋ねると、期待した通りの答えが返ってきた。

もしかしたらトキオミって実はとんでもない器の人間なのではないか。そういう疑念すら出てくる。

が、多分トキオミには人の心が分からないんだろう。と結論付けることになった。

## サーヴァントのステータス 1

クラス：バーサーカー

マスター：間桐雁夜

真名：ジョニイ・ジョースター（ジョナサン・ジョースター）

性別：男性

身長：168cm / 体重：49kg

属性：中立・中庸

特技：乗馬

好きな物：イタリアンコーヒー 虫刺され跡 / 苦手な物：過去の自

分 白いネズミ

天敵：ヴァレンタイン大統領 デイエゴ・ブランドー

ステータス

筋力：D 耐久：D 敏捷：E | 魔力：E 幸運：C+ 宝具：

？

クラス別スキル

狂化：|

凶暴化する事で能力をアップさせるスキル。

……が、バーサーカーは自身のスキルによって、その恩恵はない。

代わりに正常な思考をすることができ、他人と会話することも可能である。

また、消費魔力も通常のサーヴァントとほぼ同じになる。

固有スキル

騎乗：C+

騎乗の才能。大抵の乗り物、動物なら人並み以上に乗りこなせるが、野獣ランクの獣は乗りこなせない。

更に馬を乗りこなす際、有利な補正が掛かる。

スタンド使い：A

人間が引き出す、目には見えない『精神的なエネルギー』を扱うことができる。

このスキルを持たない者には『精神的なエネルギー』を見ることができない。

また、このスキルを持つていると、奇妙な縁や数奇的な運命に巻き込まれやすくなる。

『精神的なエネルギー』は人によって見た目も能力も変わる。

バーサーカーの場合、名前は『爪』。

本体であるバーサーカーの爪を回転させ、カッターのように物体を切り裂いたり、爪を弾丸のように射出したりすることができる。

回転使い：A

自然界に存在する黄金長方形から得られる『回転』エネルギーを操る。

バーサーカーの場合、彼のスタンドである『爪』や真球である『鉄球』を『回転』させている。

しかしこのスキルは、自然によって生み出された物質が無ければ扱うことができない。

このスキルと『スタンド使い』を組み合わせることで、バーサーカーは状況に応じて異なった『爪』を使用できる。

『爪』はACT4まであり、それぞれで別の特性を持つ。

漆黒の意志：A

戦闘狂や殺人嗜好とは一線を画す純粋な殺意。

目的へ向かう意志が恐ろしく強く、そのためには殺人すら厭わず、人間性すら捨てられる覚悟を持つ。

普段は意思疎通や会話をすることは可能だが、一度『覚悟』を決めてしまえば、よほどのことがない限りマスターでもその行動を止め

ることはできない。

Cランク相当の『心眼(真)』及び『戦闘続行』を得る。

また『覚悟』を決めた時、バーサーカーの『スタンド使い』の破壊力と効果を強化する。

宝具

『?????????』  
?????ランク：? 種別：????  
????? レンジ：????  
最大補足：??

現在バーサーカーは宝具を使うことができない。

仮の話ではあるが、ライダーで召喚されていたなら生前の愛馬が、キャスターなら聖人の遺体が宝具になっていた。

ウェイバーは終始状況に振り回される。

「ところで、アーチャーがいなくなった訳だけでも……君たちはどうするつもりだい？」

バーサーカーは、セイバーとランサーの二人に問いかける。

元々はこの二人の一騎打ちのはずだったが、場が荒らされまくってそんな空気は霧散していた。

両者は気まずそうに顔を向かい合わせる。

「二応口合わせ程度ではあるけど、僕とライダーは仲間ってことになつてるし、君らがライダーを攻撃するなら、僕は即座にライダーに加勢するぞ?」

「……っ!」

この時バーサーカーはさりげなく選択肢を狭めていた。

明確にライダーと共闘することを宣言しておけば、セイバーたちはどちらと戦うことを選んでも、少なくとも二人が敵に回ると捉えてしまふ。

ライダーは真名から分かるように超ド級の英霊であり、正体不明のバーサーカーは宝具も使わずにアーチャーを追い返した。

そんな二人を同時に相手にしたくはないと考えるのが普通だ。

かといって、それでは元のように互いに勝負をすれば、二人が傍で見ている中で行わなければいけない。

こちらからみすみす情報を渡すばかりか、下手をすれば漁夫の利を取られるかもしれない。

つまるところ、二人は誰と戦うことを選んでも損しかしないのである。

「それで提案なんだけど、ここは一旦全員引くってことにしないかい? 初日から退場なんて真似はしたくないだろう?」

二人にとって、それは願ってもないことだった。確かに目の前の騎士とは決着をつけたい。だが、そこに横から茶々は入れられたくはない。

それに、ここで見逃してくれるというなら、この正体不明のバーサーカーの情報を得られるかもしれないのだから。

「……俺の主も引けと言っている。その提案に乗らせてもらおう」

「私も同じ意見だ。ランサー、ここは一旦勝負を預けるぞ」

「ああ、次に会った時に決着をつけよう」

二人とも、この場は引くようだ。

その言葉を聞いて、内心バーサーカーは『安心していた』。

『なあバーサーカー、このままライダーと一緒にどちらか倒した方が良かったんじゃないか？』

そんなバーサーカーの行動に、雁夜が念話でその意図を尋ねる。

『それができればいいんだけど……この場でやったら損するだけだ』

『……どうということだ？』

『ライダーと仲間になろうって時に、そんなことしたら見限られるだろう？』

ライダーが配下にしたいたいほど気に入っている相手を、疲弊しているからと倒しにかかるなんてことを、ライダーが許容するだろうか？

火事場泥棒みたいな真似をして、ライダーから信用が勝ち取れるだろうか？

むしろ、そのことに激怒して、こちらを敵と認識してくるに決まっている。



『向こうから襲ってくるなら助けてくれるかもだけど、この場では僕から仕掛けるわけにはいかないんだよ』

『なるほどなあ。騎士道がどうかって話じゃないんだな』

『僕に騎士道なんかないよ。勝負なんて勝ったもん勝ちさ。まあ他人が勝手にやる分には否定する気はないけどね』

『そういうところ、やっぱりシビアだよな、お前』

そもそもバーサーカーに騎士道を求める方がどうかしているだろう。

クラスからして狂戦士なわけだし、近代の英霊なのだし。

「おうバーサーカー、あの二人は退散したようだぞ？お前さんはどうするつもりだ？」

「……ああ、それなんだけど」

「な、なあバーサーカー？」

ライダーが声をかけてきたので、バーサーカーが本題に入ろうと思ったら、ウェイバーが横から口を突っ込んできた。

出鼻をくじかれた形になるが、これくらいで頭に来るほどバーサーカーは狭量ではないので、なんとも思わずウェイバーの方に顔を向ける。

「どうかしたかい、ウェイバー君」

「お、お前って本当に僕達と組むつもりなのか？」

ウェイバーは、恐怖が9割、期待が1割という面持ちでバーサーカーに問うてきた。

(都合がいいな。向こうから話を振ってきたぞ)

その質問はバーサーカーが今まさに聞こうとしたことだ。

あの二人を撤退させた最も大きな理由は、ライダーとの同盟関係を盤石にするためだ。

だからこそ、あのまま全員で殴り合つて、有耶無耶のままに全員撤退という流れにはしたくなかったバーサーカーは、相手に引いてもらう必要があつた。

あの場でどちらか一騎を落とすよりも、強力な味方を作る方が勝ち残る確率が高くなる。

というのも、バーサーカーではセイバーやランサーとの真つ向勝負では『勝つことがとんでもなく難しい』。

ステータスで劣つてしまうバーサーカーに近接勝負に持ち込んでくるあの二騎は、バーサーカーにとつて天敵と言つてもいい。

その弱点を補うには、彼らと同格以上の味方がほしい。だからバーサーカーはライダーの誘いに乗つたのだ。

「ああ、僕は冗談で言つたつもりはないよ。聖杯を使わせてくれるなら、ライダーへの協力を惜しむつもりはない」

「それで……なんで僕たちの仲間になろうと？」

「ライダーが呼びかけてたからだよ。正直、聖杯を使わせてくれるなら誰でも良かったっていうのが本音だ」

「な、お前っ!？」

「ほう、余の目の前でそれを堂々と言うか？」

「あんただったらそれくらいお見通しだろ？そして、あんたはそれがお見通しだったとしても、僕を部下にしてくれるほど懐が広いはずだ」

ライダーは、まあ、色々とあれではあるが、間違いなく人を見る目はある。

そんなライダー相手に自分の腹の中を隠していたところで意味がない。

だったらさっさと正直に話してしまった方が、バーサーカーとしても楽だ。

「がっはっはっはっ!!言うのうお主!!まさか余の器を試すような物言いをする者がいるとは思わなんだわ!!」

そして、そのバーサーカーの言動はライダーのお気に召したようだ。

ある意味でバーサーカーはライダーを信用しているのだ。

『征服王イスカンダルなら、腹に何か抱えているものでも受け入れる度量がある』と。

そう評価されているのだから、ライダーの機嫌が悪くなるはずがない

「そう言われると前言を覆すわけにはいかんな。その胆力、先ほどの芸当と言い、我が配下として申し分ない!」

「僕はお眼鏡にかなったと、そう受け取っても?」

「そうだ!この聖杯戦争を勝ち抜いた暁には、余と世界を制する快悦を共に分かち合おうではないか!!」

「……ああ、勝ち抜けたなら付き合ってやるさ」

完全に打算のみで組んだつもりのもバーサーカーであったが、本当に勝ち残れたなら、ライダーに付き合ってもいいかな、とほんの少し思ってしまった。

こういうところが、ライダーが征服王たる所以だろうか。

「それじゃあ、今後は同盟を組んで行動しよう。それについて色々お互いに話しておきたいんだけど、今日はもう遅いし、明日の朝にでもどこかで集合しないか?」

「そうなの……そうだ、せっかくの新しい臣下なのだから、我らがそちらの拠点に向かおうではないか!何気遣いは無用だ、歓迎の用意はせんでもいいぞ!!」

「おい待てよライダー!?!相手の陣地に入るだなんて自殺行為だぞ!!」

「坊主、何を抜かすか！我が臣下を侮辱するでないわっ!!」

「あー……ライダー、僕は気にしてないからそう怒鳴らないでくれ。耳鳴りがする」

この二人、完全に主従が逆転している。

バーサーカーからしてもウェイバーの言ってる事の方が正しいと思える。

相手の本拠地に行こうだなんて、自ら蜘蛛の巣にかかりに行くようなものだ。

大体、ライダーが無条件で人を信用しすぎである。

『カリヤ、こういうことになったんだけど、了承していいか?』

『……どうしよう。蟲はちゃんと処理したはずだけど、サーヴァントってそういう嗅覚とかもすごいんじゃないか?』

『そこら辺は、うちの魔術で使うからで押し通せばいい。別に嘘じゃないんだから』

『そうだったんだよなあ……もう俺の体にも、桜ちゃんの体にも蟲はいないから忘れそうになるけどさ』

『じゃ、二人を明日こっちに呼ぶってことで』

『ん、了解』

そして、この二人もどこかずれていた。

自陣に招き入れたら、相手に自分の情報を渡すことになるかもしれないのに……。

二人とも魔術にはそれほど関りがないので、自分の手の内をさらけ出すとかそういう発想にならないだけで、聖杯戦争の参加者とは思えないくらい、そういうところは無防備になってしまう。

実際、見られて困るようなものは二人にはないのだから、問題はなのだけれど。

「いいよ。こっちの家は広いし魔術的な防衛システムもあるから他の

陣営から干渉されることもない。住所をメモに書いて渡すから、これを見てきてくれ」

「……本当に罨とかじゃないよな？」

「大丈夫だよ。……初対面だから信用できないかもしれないけど、僕は君らを害するつもりは一切ない。それにライダーを怒らせるとおっかなそうだからね」

「……ははは、違うないや」

もしもバーサーカーがウェイバーを殺したところで、そのままライダーに反撃されて消えてしまうだろう。

そんな光景がありありと浮かんで、少しだけ警戒心をウェイバーは解いた。

「僕は敵には容赦ないし、自分の身が危なければその時は助けるのは難しいかもしれない。けれど僕は、仲間になったからには裏切りはしない。それだけは誓ってもいい」

「……分かったよ。でもっ、裏切ったら本当に怖いからな!!ライダーだけじゃなくて僕だって怒るからなっ！」

なんでこんな子供が、聖杯戦争に参加しているんだろう？

バーサーカーが、そんなことを内心で思ったとか思わなかったとか。

……………

『お前って本当にライダーの方が適正あるんだな』

『馬乗りの一族だからね。それなりの騎乗スキルは持つてるよ』

『それは馬じゃなくてバイクだけだな』

『乗り物なら何でも乗りこなせるさ。もつとも、馬の方が僕にはあつてるけどね』

いったんライダーたちと別れたバーサーカーは、事前に用意していたバイクを巧みに操りながら雁夜に返答する。

バーサーカーが生まれた時代は馬くらいしか走っておらず、ようやく自動車が発明されたあたりだ。

しかし『騎乗』スキルは『乗り物』という概念に対して発揮されるスキルであるため、未知の乗り物であっても直感によって自在に乗りこなすことができる。

『それでもこのバイクつてやつには驚かされるよ。馬じゃ出せないような速度を出し続けても疲れないんだから』

『馬乗りだって言うなら、馬とか用意した方が良かったか？』

『……あつたほうがいいけど、サーヴァント同士の戦いじゃ真つ先に狙われるだろうなア』

察しの良い敵ならば、宝具でも何でもない馬をサーヴァントが乗っているというだけで『あの馬には何か秘密があるに違いない』と判断して、バーサーカーよりも先に馬を標的にするだろう。

そうなったら、馬を用意しても無駄に終わってしまう。

『それに、こんな街中で馬に乗ってるやつがいたら通報されるじゃないか。僕は嫌だぞ留置所に入るのは』

『……うん間違いなく目立つな』

サーヴァントが職質されているのを想像するだけで悲しくなってくる。

戦闘では使えないし、移動にも不便。だっただら最初から無い方がいい。

『そうだ。ライダーってイस्कンダルなんだろう？馬の一つや二つは貸してくれるんじゃないか？』

『……残念だが、イस्कンダルの時代の馬には『あぶみ鐙』がない。それじゃあダメなんだ』

『そっか……あれって11世紀に発明されたんだっけ。それじゃああるわけないか』

『まっ、生前でも戦うときは大半降りてたし大丈夫さ』

親友に最後の回転について教えてもらった時、彼はイस्कンダルを例に挙げて鐙の話をしていた。

それでは駄目だ。バーサーカーの奥の手中の奥の手が使えない。

無いものねだりしても意味がないと割り切って、バーサーカーはライダーの話に切り替える。

『それにしてもうまく出来すぎてる気がするよ。こんなに早くからライダーたちと組めるなんてさ』

『ああ、見た感じマスターも善良そうな子供だったし、人格面でも問題がないな』

『……僕の前世に、あんなに真っ直ぐに生きてた人間いたかなア。蹴落とすことしか考えてないやつばかりだったし』

『お前の周囲の環境って一体どんなのだったんだよ……』

それもこれも、バーサーカーが『聖人の遺体』を集めていたからなのだから自業自得と言えようなのだが。

『でも、そんなお前が、どうしてウェイバー君に『絶対に裏切らない』っ

て言ったんだ？そんなこと言いそうないイメージなかったんだけど』

『……カリヤは僕をどんな人間だと思ってるんだ』

『じゃあ、自分で否定できるか？』

『むりだな』

あつきりと自分の言葉を翻した。

自分が他人からどう思われるかなんて、自分を客観視できないような人間ではないバーサーカーには察しはつく。

『だろ？違和感しかないじゃないか。だってのに、なんで初対面の奴に裏切らないなんて断言したんだ？』

『裏切っても僕に得がないからね。裏切る予定がないから事実を伝えたまでき。その方がウェイバーも安心できるだろうしさ』

セイバーやランサーは、仲間になれば心強いが聖杯を分け合うことができない。

アーチャーは、仲間という概念があるかすら怪しいし、そもそも向こうがこちらを敵視している。

正体も分からないアサシンやキャスターも近接戦に強い陣営じゃない。

なので、バーサーカーにとって一番自陣に入れておきたいのがライダーになってしまう。

『……それはそうだけど』

『それに……なくんか、ウェイバーってやつが放つとけないんだよね……』

『ああ、そういうえばお前も子供がいるって言ってたな。そのせいかな？』  
『それもあるんだけど……あの声で喋られると、前世の僕の子孫を相手にしてるみたいでさア〜』

『前世って……生前より前の？』

『そ。ついでに言うと、セイバーの声も聞いてて落ち着かない。正直



すぐくやりづらい』

『……バーサーカー、その話題にはあまり触れないようにしよう。理由は分からないけどとてもまずい気がする』

『……うん、自分から言い出しておいてあれだけど、僕もそんな気がしてきた』

何やら嫌な予感を察知した雁夜がバーサーカーを制止させた。

このままいくと、世界が崩壊しかねない話題になりそうだった。

しかし、嫌な予感がするのは分かるが、具体的にどうまずいのかはこの二人には分からなかった。

『そういえば、カリヤの体の調子はどうだ？ 激痛が走るとかそういうのは？』

気まぎれになった空気を払拭するために、バーサーカーがまた別の話題を引き出した。

割かし重要な話題を出すことで今の発言をなかつたことにしたいらしい。

『全くなくなったよ。白髪とか眼とかはさすがに戻らないけどさ』

『……それは僕には治せないな』

『いいんだよこれで。命があるだけで十分ありがたいよ』

桜の体内の蟲を取り除いた後、ついでだからとバーサーカーは雁夜の蟲も殺していた。

もしも雁夜が燃費の悪いバーサーカーを召喚していたのであったなら、魔力不足で現界ができなかっただろうが、このバーサーカーは消費魔力が非常に少ない。

下手したらバーサーカーのくせに全サーヴァントで一番低燃費の可能性すらある。

なので、蟲を殺したところで、雁夜にわずかながらも残されている

魔術回路だけでバーサーカーは問題なく戦うことができた。

かといって、雁夜の半死人のような容貌は戻すことはできなかった。

バーサーカーの能力は、そう万能なものではない。

『いや、体が不自由だっという苦しみは僕にも経験があるよ。19歳まで下半身不随だったもんだからね』

『……だから敏捷が低いのか。納得』

『案外僕が喚ばれたのも、カリヤと似ているからかもな』

『かもな……』

この二人、実は共通点が多かったりする。

実家は裕福で、兄がいたり。

父親からまともな愛情を受けていなかったり。

その後、父親が原因で家から飛び出したり。

飛び出した後に手に入れた希望を失ったり。

半身不随になってしまったり。

残された希望のために、死と隣り合わせの世界に飛び込んだり

……。

『……………』

『……………』

『……なあ、カリヤ』

『……なんだバーサーカー』

『運転に集中したいし……そろそろ話するのやめるよ……』

『ああそうだな……気を付けろよ……』

これ以上は互いに傷つけるだけと判断した両者は、会話はこれで打ち切ることにした。

とりあえず今はこれ以上口を開かないでおこう。

二十代後半の男たちは、その共通の意志でもって念話を切った。

「……ダメだ、悲しくなってきた。もう今日は早く帰って寝よう」

睡眠はいい。何も考えずに済む。

サーヴァントだから、夢は見ないし安心だ。

「そうと決まったら、さっさと帰って……うん？」

バーサーカーの前に一台の車が止まっていた。

もう人気のない道路上に、ポツンと、信号があるわけでもないのに。

訝しげに見ていたが、その車から降りてきた人物にバーサーカーは驚かされる。

「あれは……セイバー!？」

救国の英雄は狂戦士より狂う。

「あれは……セイバー!？」

確かにあれは、先ほど別れたばかりのセイバーだった。

それに引き続きセイバーのマスターと思われる女性も降車する。

よく見ると、セイバーたちが乗っていた車の前に人影がある。

黒いローブを着こみ、目が魚のようにぎよろぎよろして、異様に白い肌の男。

その容貌全てがバーサーカーに生理的嫌悪を催させる。

「絶対なんか変だ……放っておきたいけど、この距離じゃばれてるし……」

こちらから視認できるということは、向こうも気づいてはいるはず。

しかも彼女は最上級の英霊だ。気配を察知していてもおかしくない。

それにしても帰り際にたまたま同じ道を通り、こんな場面で再会するのは奇妙な縁である。

これも『スタンド使い』のスキルによる『奇妙な縁や数奇的な運命に巻き込まれやすくなる』効果の一部だろうか。

「……こうなったら、変にこそこそするより堂々と話しかけてしまおう」

バーサーカーに戦う意思はないし、変に姿を隠そうとしたらいらぬ勘違いを生んでしまう可能性がある。

例えば、セイバーを影から奇襲をかけようとしているのではと思われでもしたらこちらに斬りかかって来るかも知れない。

そうなったらバーサーカーにとっては絶体絶命。ほぼ勝ち目はな

い。  
「だつたらわざと姿を現して、敵対するつもりはないとアピールした方が幾分生存率が上がる。」

「セイバーも困惑しているみたいだし、敵意はこつちには向かないだろう……多分」

それに、一見するとセイバーたちは酔っ払いに絡まれて困ってる女生徒に見えなくもない。

見た目が少女である分、いくらバーサーカーでも精神衛生上よろしくない。  
いくら敵とはいえ、ちよつと手を貸してやっても罰は当たらないだろう。  
そう判断したバーサーカーは、構うことなく現場に近づいた。

……………

「お迎えにあがりました聖処女よ」  
「なっ!？」

いきなり恭しく頭を下げられ、セイバーが戸惑う。

目の前の人物に、生前でも聖杯戦争でも面識が彼女にはない。

そもそもセイバーはブリテンの王であるアーサー・ペンドラゴンであり、聖処女たるジャンヌ・ダルクなんかではない。

むしろ、彼女の国とセイバーの国は歴史上何度も争ってすらいる。

とどのつまり、セイバーはジャンヌ・ダルクとは全く関係がない。

(これはどうしたものでしょうか……っ!?)

目の前の男をどう対処しようかと困惑したと同時に背後からサーヴァントが近づいてくるのを感じ取った。

しかも、接近してくる速度が速い。エンジン音もしてきたことから、相手も自分たちと同じように車かバイクに乗っているのだろう。

何にせよ、このままではすぐに自分たちの背面を取られる。その状況に、焦りからセイバーが一筋の冷や汗を垂らした。

(背後からもサーヴァントがっ!?まさか、はさみうちの形になっているのではっ!?)

だとしたらまずい。右は壁で左は崖、アイリスフィールの逃げ場がない。圧倒的不利な立場に立たされる。

そうやって焦燥しているうちに、セイバー達を追跡してきたサーヴァントが彼女たちのすぐ後ろで立ち止まり、バイクのエンジンを切る。

せめても、いったい誰が追跡してきたのかを知るために、振り返ろうと瞬間――

コンコンツ

「ノックしてもしもし」

ノックの音と共に、やたらと気が抜けて、棒読みな声が聞こえてきた。

セイバーが振り向いた目の前に、けだるげな表情のバーサーカーが自身の物であろうバイクを指でたたきながら立っていた。

「ちよつと道路をふさぐのはやめてくれないかなア？他の人に迷惑だぞ」

「バーサーカーっ!? ついて来ていたのは貴方だったんですか!？」

バーサーカーが堂々とそこにいたという事実が、セイバーを安心させた。

なぜならバーサーカーはセイバーに声をかけてきたからだ。

相手に自分の存在を明らかにするということは、つまりバーサーカーは不意打ちをするつもりはなかったということ。

このことから、バーサーカー達が挟み撃ちを企てていたという線は薄くなった。

その上で、バーサーカーはセイバーから見てかなりの常識人である。

色んなところで予想外なことをするが、話は通じる類の人間だ。

破天荒にもほどがあるライダーや、傲岸不遜が極まりすぎているアーチャーに比べると、どれほどまっとうな人間性をしているか。

むしろ、彼女の味方であるはずのマスターよりも意思疎通がやりやすい。

そんなサーヴァントが、この目の前に狂言を吐き続けている男がいる中やってきたのだ。

多少は心にゆとりが持てるというものであろう。

(……やっぱり気づいてたか)

一方でバーサーカーはバーサーカーでほつとしていた。

ありえないとは思うが、万が一気づかれていなかったら自ら敵地に乗り込んだバカになっていたのだから。

そして、今の安堵の表情から、やはりセイバーは挟み撃ちなどの可能性を考慮していたらしいとバーサーカーは判断した。

ならば、ここで姿を現して正解だった。バーサーカーの考えは間違っただけではなかったのだ。

(「こいつもサーヴァント……か。ついでだし鎌をかけてやろう」)

ついでにと、バーサーカーはとぼけたふりをしてセイバーに話を振る。

「……あれ？もしかしてこいつセイバーの知り合い？……お前、よくこんな奴と関われるな。僕だったら一秒でも一緒に居たくないぞ……」

「いえ……私にも見覚えはありませんが……。バーサーカーこそ、面識は？」

「あるわけないよ。こんなやつ初めて見た」

これで、セイバーは『バーサーカーと目の前にいるサーヴァントは無関係である』という認識になった。

セイバーに敵視されたくないバーサーカーにとって、この立ち位置は重要だった。

これならば、セイバーが『正体不明で妄言を吐いてくるサーヴァント』よりも『敵とはいえ意思疎通が可能なバーサーカー』を優先して狙ってくることはない。

「おおお、御無体な！この顔をお忘れになったと仰せですか!？」

セイバーの『見覚えがない』という発言に反応して、男は本気で狼狽している。

しかし、その男の困惑がどれだけのものであろうと、セイバーには本当に身に覚えがない。

このままでは話は平行線だと判断したセイバーはありのままの事実を伝える。

「知るも何も貴公とは初対面だ。……何を勘違いしているのか知らぬ



が、人違いではないのか？」

「おお、おおお……っ！」

その言葉がとどめになったのか、絶望した表情とともに頭を掻きむしり始めた男の顔は、まさに狂っていた。

セイバーと対面したときは、あれほど歓喜の表情を湛えていたのに、今は深い落胆に彩られている。

躁鬱の激しさが、常人のそれではなかった。

「私です！貴女の忠実なる永遠の僕、ジル・ド・レエにてございます！あなたの復活だけを祈願し、今一度貴女とめぐり合う奇跡だけを待ち望み、こうして時の果てまでも馳せ参じてきたのですぞ。ジャンヌ！！」

「ジル・ド・レエ……!?!」

セイバーには馴染みはないが、バーサーカーは童話の中で知っている。

『青髭』という童話に出てくる、残虐極まりない金持ちの男のモデルになったともいわれる人物だ。

そして、それゆえにバーサーカーは目の前の男の危険性に気づいてしまう。

ジル・ド・レエという人物は、百年戦争においてジャンヌ・ダルクと共に戦争の終結に貢献し、その当時は『救国の英雄』とも呼ばれるほどの英雄であった。

しかし、それとは裏腹に、ジャンヌが処刑されたことから精神を病み、何百人ともいわれる幼い少年たちを拉致、虐殺した『反英霊』という一側面も持っている。

おそらく、今回は後者の一面が色濃く出てしまっているのだろう。

「私は貴殿の名を知らぬし、そのジャンヌなどと言う名前にも心当たりが無い」

「そんな……お忘れなのか!?生前の(´)自身を!？」

そう、ジル・ド・レエは『精神を病んでいる』のだ。

精神を病んでいる人間に、まともな受け答えができるわけがない。自らに都合のいい事実しか認識することができない。それでも本人にとってはそれが真実だ。

自分の中の真実との食い違いにジル・ド・レエはさらに取り乱すが、セイバーは冷徹な瞳で見返した。

「貴公が自ら名乗りをあげた以上は、私もまた騎士の礼に則って真名を告げよう。我が名はアルトリア。ウーサー・ペンドラゴンの嫡子たるブリテンの王だ」

「おおお！オオオオオ!!」

セイバーが自らの真名を明かすと、ジル・ド・レエは、悲痛な慟哭とともに地面を拳で叩き始めた。

自身の手を傷つけながらも、ジル・ド・レエは地面を殴るのをやめない。

「何と痛ましい。何と嘆かわしい。記憶を失うのみならず、そこまで錯乱してしまうとは……おのれ……おのれえッ！我が麗しの乙女に、神は何処まで残酷な仕打ちを!!」

「お前はいったい何を言っている。そもそも私は……」

「ジャンヌ、貴女が認められないのも無理は無い。かつて誰よりも激しく、誰よりも敬虔に神を信じていた貴女だ。それが神に見捨てられ、何の加護も救済も無いまま魔女として処刑されたのだ。己を見失うのも無理は無い」

これは会話ではない。

その事実には、ようやくセイバーは気づいた。

目の前の男は、『セイバーがジャンヌだと認める』以外の返答を聞く

気はないのだろう。

繰り返し言う。これは会話ではない。

これは『ジル・ド・レエにとつての事実を確認するためだけの儀式』にすぎないのだ。

「目覚めるのですジャンヌツ!!これ以上、神ごときに惑わされてはならない!貴女はオルレアンの聖処女、フランスの救世主たるジャンヌ・ダルクその人なのだっ!!」

「いい加減にしろ、見苦しい!!」

如何にセイバーと言えど、この男の妄言には付き合っていない。

目の前の狂人の言葉に激しい怒りを覚えたセイバーは、叫ぶように叱責した。

「わが身はセイバー!貴公もサーヴァントならば聖杯を求めて現界したのであろう!!ここでめぐり合った縁などそれ以上でも以下でもない!!」

「セイバー、言っても無駄よ」

アイリスフィールがセイバーを制止する。

この手の者は相手にするだけ無駄だ。それゆえの制止であり、ジル・ド・レエに情けを掛けたわけではない。

自分の中の現実しか目に入らないものに、何を言っても意味がない。

それがアイリスフィールの感想であり――

「ジャンヌ、もはや御自身をセイバーと御名乗りめさるな、我らはすでにサーヴァントなどという頸木に繋がれてはい――」

「オラアッ!」

——バーサーカーの感想でもあった。

もはや話を聞く気すらないと言わんばかりに、バーサーカーは『鉄球』をジル・ド・レエに投擲した。

「ぬうつ?!?...いきなり何をなさるおつもりですか、貴方は?」

しかし、倉庫街での戦いをのぞき見していた彼は、『鉄球』に触れるとマズイということに狂った頭でも理解していた。

それが分かっているなら、元は軍人のジル・ド・レエには躲すことも可能だ。

なにせ『鉄球』の速度はそれほど速くはないのだから。

「お前と会話をしても無駄だつてわかったからな...:それならここで終わらせた方がいいだろう?」

「無駄とは何ですか?! 私はただ神の呪いに縛られているジャンヌを救おうと...:つ!」

バーサーカーの物言いにジル・ド・レエが反論しようとした。

が、その言葉は最後まで発せられることはなかった。

彼が、自身の腕に違和感を覚えたからだ。

「こ、これは...:『穴』ッ!」

いや、もはやその『穴』は腕ではなく、ジル・ド・レエの心臓部に向かっている。

何かとんでもないことが起きようとしていると感づいたジル・ド・レエはとつさにその『穴』を左手で覆った。

「ひきやあああつ!」

そして『穴』が左手に移った瞬間、『穴』が消え、同時にジル・ド・

レエの左手が破壊された。

その痛みにジル・ド・レエは悲鳴を上げ、慌てて負傷した左手を右手で押さえる。

あまりの衝撃に、呼吸を荒げながら、バーサーカーに呪い殺すかのような視線を向ける。

「ぎ、貴様っ!!よくもやってくれたなっ!」

『『よくもやってくれたな』……だって?そんな言葉が出てくるなんて……お前はバカなのか?』

「何を抜かすか、この匹夫がっ!!」

「おいおいおいおい、これは聖杯戦争だぜ?他のサーヴァントを蹴散らし、最後に残ったものが聖杯を手に入れるんだろう?だったら、倒せる奴は倒せるときに始末しておくつてのが定石つてやつじゃあないか」

そのジル・ド・レエの憤怒もどこ吹く風と、バーサーカーは冷ややかな視線を返していた。

セイバーがジル・ド・レエに苛立っていても斬りかからなかったのは、立っていない者に斬りかかるのが彼女の主義に反するからで、サーヴァントのスタンスとしてはバーサーカーの方が正しい。

中でも、騎士道も何もない、目的のためなら人間性を捨てられるバーサーカーにとって、ジル・ド・レエの言葉はいちやもんをつけられているのとさして変わらない。

「ふはははは!戯言を!!万能の釜たる願望器は、すでに我が手に収まっている!なぜならば我が唯一の願望、聖処女ジャンヌ・ダルクの復活がまぎれもなくここに果たされているのだから!貴様が聖杯を手にするなどありえんことだ!!」

「……って言うてるけど、セイバーはどう思う?」

「……………」

話を振られたセイバーは、何も言葉は返さなかった。が、唐突にジル・ド・レエの目の前の道路に斬撃が刻まれる。そのたった一発の斬撃が幾万の言葉よりも雄弁にセイバーの心情を物語っていた。

「……次は手加減抜きで斬るぞ『キャスター』」

絞り出したようなセイバーの言葉に、ジル・ド・レイは荒れ狂うような感情を鎮め、ただただセイバーを無表情に見つめた。そして、キャスターが心底悲しそうに、ポツリとつぶやいた。

「もはや言葉だけでは足りぬほど……そこまで心を閉ざしておいでかジャンヌ?」

分かり切っていたことだが、キャスターにセイバーの言葉は通じない。

いや、通じてはいるが都合のいいようにしかとられていない。

いまだにキャスターは、セイバーがジャンヌであると疑っていないのだから。

「致し方ありますまい。それなりの荒療治が必要、とあらば……次は相応の準備を整えてまいります。誓いますぞジャンヌ、この次に会うときは必ずや……貴女の魂を、そのこの神の呪いから解放して差し上げます」

最後まで勘違いしたまま、ジル・ド・レエは霊体化して夜の闇に消えていった。

消える間に、バーサーカーを殺意のこもった眼差しで睨みつけながら。

その視線の意図を考えて、バーサーカーは気づく。

「……もしかして、これって僕がセイバーを呪った神だとか勘違いされてないか？」

「……………」『その神』と言っていましたからね」

「そうか……そうだよなア……なんだよこれ、とんだ厄介事じゃあないか……」

あそこでキャスターを攻撃しなかったならば、と考えるが、それでもあの狂った思考ではどういう扱いをされるかが分かったものじゃない。

下手をすると、セイバーのすぐ近くにいたというだけで恨みの対象にすらなる可能性がある。

あの場で姿を現して正解だった。バーサーカーの考えは間違っただけではなかったのだ。

ただ、どちらを選んでも正解ではあるが、どちらを選んでも間違いだった。

あの選択肢は、セイバーに狙われるか、キャスターに狙われるかの違いしかなかったというだけだ。

「……………」これでアーチャーに続いて、キャスターにまで狙われる羽目になってしまった……なんてこった……」

「そ、その……なんと声をかけて良いか……。巻き込んでしまっただけで申し訳ないです……」

「……………」いや、セイバーたちは悪くないんだ。全部キャスター達が悪いんだ……」

こうやって敵からも心配されるのも、バーサーカーにとって珍しい体験だった。

そんな相手に八つ当たりができるような性格ではないバーサーカーは、自分の身に降りかかった理不尽を、キャスター達に対象を移すことで心の安定化を図る。

それに、キャスターに狙われようが、バーサーカーにとって周りが

すべて敵だなんて状況いつものことだ。

これくらいではへこたれはしない。

……まあ、少しは気分は沈みはするが。

(……まさか、バーサーカー狂戦士がこの聖杯戦争の中でも常識的なサーヴァントとは皮肉が過ぎますね)

八つ当たりもせず、見て見ぬ振りができない性格と言い、倉庫街での対応の仕方と言い、『狂った戦士』のはずのバーサーカーが非常に常識的であることに、セイバーは憐れみを感じた。

いつそ狂えてしまった方が楽なのではないかと、とりとめのないことまで考えてしまう。

「じゃあね、セイバー達。今度こそお別れだ。先に行くよ」

「はい……それと、今回の手助け感謝しますバーサーカー。この礼は後日必ず」

「……期待せずに待ってるよ」

そのまま、バーサーカーはバイクにまたがり暗い夜道を走り去っていった。

狂った戦士のはずの彼が、危なげなくバイクを運転して……。

「……セイバー」

「どうしましたアイリスフィール？」

「キヤスターがバーサーカーより狂ってるって……おかしな話よね」

「……バーサーカーを基準に考えてしまえば、この聖杯戦争に出ているサーヴァントの半分が狂っていることになりそうですね」

バーサーカーとはいったい何だったのか。

そんな哲学めいたことを考えてしまう二人であった。



桜の環境は目まぐるしく変わる。

「……ただいま」

「お、やっと帰ってきたかバーサーカー。ずいぶん遅かったな」

「……カリヤ、良い話と悪い話がある。どっちから聞きたい？」

「なんだよ唐突だな……。じゃあ良い話の方で」

「キャスターのサーヴァントの真名はジル・ド・レエだってことが分かった」

「へえ、すごいじゃないか。じゃあ悪い方は？」

「……そのキャスターに狙われるようになった」

「どういう道を帰ってきたらそういう結果が付きまどってくるんだお前はアーツ!!」

「そんなこと僕が知るかよツ！どうしようもないだろこんなのはツ！」

「お前の幸運はC＋だろうが！運が悪すぎんだろ！」

「だからこそこの結果じゃあないかツ！結果として見たら何の損失も出さずに敵の情報を得られたんだから！」

「……そういわれるとそうか」

「物事の片方の面しか見ないのはやめろよ。……まさか僕がこのセリフを言うことになるなんてなア」

現在、日付も変わった時刻。

二人は深夜のテンションで少々ハイって奴になっている。

またはやけくそも言う。

「そんなことより、さっさと寝てればいいのに何で起きてるんだ？カリヤの体はまだ万全じゃあないんだろう？」

「それはそうだけど、バーサーカーが帰ってくるまでは待つてようっと思っただ。頑張ってるやつを差し置いて、こっただけ休むつても変だしさ」

「……だからってお前なア」

「そうだ、腹とか減ってないか？俺はこんなんだから料理はできないけど、インスタント食品なら買い込んでるから、なにか食べたらどうだ？」

「……そいつはどうも」

そう言い捨てる、バーサーカーは雁夜から顔を背けた。

バーサーカーは雁夜のような人間が苦手だ。

自分のことを心配してくる奴なんて、生前はとても少なかった。

だから、こうやって人情味にあふれた対応をされると、どうしているのか分からなくなる。

だが、苦手というだけで、嫌じゃあない。

結局、バーサーカーは照れているだけだった。

「それじゃあ遠慮なく食べるよ。僕はこのカップ麺を……」

「……………」

「……なんでこんな時間に起きてるんだい、サクラ」

そんなバーサーカー達を見つめる少女がいた。

召喚されたと同時に、バーサーカーが助けた間桐桜だ。

もう桜ぐらいの年齢の子供ならば眠くなるような時間なのに、なぜ起きているのか。

「……おじさんも、バーサーカーさんも起きてる、から、私だけ寝るのがいけない気がする」

「そんなこと言って、もうサクラも眠そうじゃあないか。子供なんだから早く寝ろよ」

バーサーカーが屈みこんで桜と視線を合わせると、桜の目が虚ろになっっているのが分かる。

そのうえ桜は、すでに舟をこぎはじめていて、眠そうにしているのが一目瞭然だった。

それでも、桜は必死に起きていたのだろう、こんな夜遅くまで、二人が起きているからと。

「この聖杯戦争だって君のためじゃあなくて僕の望みをかなえるためのものだ。サクラが気に病む必要なんかないよ」

「それでも……二人とも、私を助けてくれたもん……。だから、お迎えくらい……しなくちゃって……」

「……ほら、僕はもう帰ってきたし、早く寝よう?」

「……ふわあ……うん、そうする……」

やわらかい笑みを浮かべながら、バーサーカーは桜の頭をなでる。

その仕草に釣られたかのように、桜は小さなあくびをしてから頷いた。

そしてバーサーカーはツカツカと雁夜の元まで駆け寄り、口を開く。

「……カリヤッ! 早急にサクラを寝かせろッ! お前がベッドまで連れていってやるんだッ! CAがファースト・クラスの客に酒とキャビアをサービスするように丁寧に運ぶんだぞッ!」

「お、おう……ほら桜ちゃん、おじさんに掴まって」

「……んゆう………はあい……」

バーサーカーが唐突に目の前まで近付いて、大声で命令したものだから雁夜は面食らったが、命令自体は雁夜も同意すべきことだったため素直に従った。

桜に向かって両手を広げてやると、彼女は今にも寝てしまいそうな様子でトテトテと歩み寄り、雁夜の首にギュウツとしがみついた。

しっかりと桜を抱きかかえると、バーサーカーに言われたように優しく桜を寝室に連れて行く。

「ほら、寝かせてきたぞ。これでいいか?」

「全く……こんな時間まで寝かしつけないなんて、どうかしてるんじゃないかい？それでもカリヤはサクラの保護者なのか？」

「何回も注意はしたんだけど……お前が帰ってくるまでは起きてるって聞かないんだ」

「だからって、あんな小さい子供が起きてるのを許容するのはどうなんだよ。睡眠は子供には大事だろ」

そこまで喋って、バーサーカーは気づいた。雁夜の目が優しくなっていることに。

はて？どうしてカリヤは自分をそんな目で見ていいのか。そんな疑問に答えるかのように、雁夜は笑いながら言った。

「分かってはいたけど……お前って実は相当お人好しだろ？しかも子供に対しては特にそうだ」

「え？今なんて言った？」

「バーサーカーって良い奴だろって言ったんだよ」

「……おまえ何言ってるんだカリヤ。結論はともかく理由を言え」

「桜にあんなに優しそうな対応しといてよく言うよ。帰ってきた時も俺の心配してたし、なるべくなら善人であろうとはしてるじゃないか」

「……僕にそんな資格はないよ。昔から僕はとんでもない屑だったし、結局その性根は最期まで治らなかつた。僕が良い奴だなんて、テストで書いたら0点だ」

「そうやって自分を卑下するなよ。少なくとも、俺が今までの人生で出会った中では大分善人だ」

雁夜のこういうところが一番苦手だ。

自分のことを英雄か何かだと勘違いしているのが。

所詮、自分はただの人間だって言うだけなのに。

バーサーカーが雁夜に関して不満があるとすればこの一点に尽きるだろう。

彼は何か偉業を成し遂げたわけじゃない。誰かのために戦ってきただけでもない。

すべての行動は、自分のためにやってきたことだ。

だというのに、そうやって祭り上げられると、その気持ちを裏切っている気分になる。

だからバーサーカーは、自分のマスターが苦手なのだ。

「はいはい、じゃあそういうことにしとくよ。そんじゃ、僕はこれから夜食を食べるから、カリヤは先に休んでおけ。聖杯戦争も始まったばかりなのにくたばっちゃいました、なんてことになったら笑い話にもならないからな」

「分かったよ。それじゃあおやすみ、バーサーカー」

「……ああ、おやすみ」

でも雁夜自体は嫌いじゃない。

だから、喧嘩腰になることもなく軽く流すだけにとどめておいた。

そんな心情もお見通しなのか、雁夜は微笑しながら寝室に戻っていった。

.....

「……………っ!?!」

少女の目が覚めた。

いや、目が覚めたというよりは飛び起きたというべきだろう。

声一つ出さず、それでも必死の形相で少女は覚醒する。

「また……………あのときの夢……………」

桜は数日前に地獄から救い上げられた。

自分のために、ようやく得られた平穏な日常を手放してこの魔窟に戻ってきた雁夜と、その雁夜によつて召喚されたバーサーカーの二人によつて。

今となつては、あの蟲による凌辱も、恐怖の象徴であつた間桐臓硯も、桜の世界から消え失せていた。

それでも、その時のトラウマが悪夢となつて桜に襲い掛かる。

長きにわたる地獄が、夢の中でもなお桜を苦しめる。

もしも平穏な日常に戻ることができなかつたら、耐えることができなかもしれない。

救いがなければ諦めることもできたのに、しかし桜は二人によつて助けだされてしまった。

なまじ救われてしまったばかりに、今はあの地獄に戻されてしまうことを恐れてしまう。

「……………まだ……………こんな時間……………」

そばにある時計を見ると、まだ時刻は三時前。

夜が明けるにはまだまだ時間がある。

今日、バーサーカーが帰ってくるのを待っていたのはバーサーカーが心配だから。

それは嘘ではない。だけどそれだけが理由じゃない。

自分を助けてくれた人がそばにいないと、桜は不安で不安で仕方な

いのだ。

雁夜が直接戦場に出向かず、家から念話だけしていたのは、桜を一人にさせると怖がってしまったからだ。

誰かが桜の傍にいないと恐怖に押しつぶされるから、聖杯戦争にはバーサーカーが一人で戦っていた。

雁夜は、家から出ることができない。桜を守るために参戦したのだから、そこを違えるつもりはない。

それに桜はまだ幼い女の子だ、そう思って何が悪いだろう。

魔術の家系に生まれなければ、両親を恋しがってもおかしくない年齢なのだから。

「……起きちゃったのかい？桜ちゃん」

桜の横から、話しかける声が聞こえてくる。

そちらの方に目をやると、桜の寝ているベッドの横に置いた椅子に座っている雁夜の姿があった。

「雁夜おじさん……起きてたの？」

「……うん。なかなか寝付けなくてね」

正確には桜の挙動に反応して目が覚めたのだが、そんなことをおくびにも出さず返答する。

数日過ごしていて桜の悪夢を見る周期を体が覚えたのか、桜が目覚ますときはほぼ雁夜も起きるようになってしまった。

「大丈夫だよ桜ちゃん。もう君が怖がるものなんてないんだから」

傍にいてあげないといけない。この子には自分がいてあげないといけない。

だから雁夜は、こうして桜と同じ部屋で寝ている。

自分なんかが親代わりだなんて鳥澁がましいかもしれないけど、桜

の恐怖を取り除けるならと雁夜が桜に提案したのだ。

「でも……おじさんもバーサーカーさんもいなくなったら……」  
「心配いらないさ。桜ちゃんを放つてどこかに行くわけないだろう？」  
「だけど、聖杯戦争……ですよ？それでやられちゃったら……」  
「それこそ大丈夫だよ。なんせおじさんのバーサーカーは最強だからね。どんな奴が相手でもパパッと倒しちゃうさ」

根拠もないことを言っている自覚はある。

でも、そうだと信じている。バーサーカーは最強なんだと。

自分たち二人を救い上げ、時臣のサーヴァントにも食らいつくことができるのだ。最強じゃなかったらなんなんだ。

「……そうだよ。……おじさんのバーサーカーさんはさいきよーだよね」

「もちろん。だから安心してお休み。おじさんもそばにいるから」

「……ねえおじさん。お願いしても……いいですか？」

「何かな？桜ちゃんのためなら何でもするよ」

ちよつと逡巡した様子を見せたが、意を決してお願ひ事をする。

「……おじさん……一緒に寝てくれませんか？その……同じベッドで……」

「……ああ、いいとも。狭くなるけどいいかな？」

「うん……近くで寝てくれる方が……安心できます……」

「分かった。それじゃあ失礼するね」

雁夜が桜のベッドにもぐりこむ。

落ち着くような温かさがすぐそばにくる。

自分を守ってくれた人、その人を体全体で感じるができる。



(ああ……今度はいい夢が見られそう……)

その温度に安心して、桜は再び瞼を落とし始める。

……

「……ようやく桜も、甘えられるようになったか」

穏やかな寝息を立て始めた桜を見て、雁夜は一人つぶやく。

今日まで一緒に寝なかったのは、あの蟲が原因だ。

あの時の恐怖が刷り込まれて、何かが自分の体に触れていると感じただけで、桜は怯えていた。

なので、雁夜は距離をとって寝ていたのだ。

「俺には子供なんていないけど、自分にもできたらこんな感じなのかもな」

いまだ彼の初恋は継続中である。

もう人妻になってしまったが、今でも雁夜は彼女のことを想っている。

「桜は俺の命に代えても守ろう。それが俺にできる唯一の仕事だ」

改めてそう決意する。

親としての姿を、その理想をすでに彼は知っているから。

自分の家族のために、禁忌に触れ、最後には自らを犠牲にした人間を雁夜は知っているから。

「つたく、バーサーカーも素直じゃないよな。あんな親なかなかないっての」

おそらく子供に対して優しいのは、自分の子供と被るからだろう。

自分にとつての子供は『交換できない幸せ』だから、他人の子供も助けたいというのが理由だろう。

そう雁夜は推察していた。

「……だつてのに、あいつはなんで桜をこんな目に合わせて平気な顔をしていられるんだ」

そして次第に怒りの感情が込みあがってくる。

桜の本当の父親、遠坂時臣に対する憤りがわいてくる。

「……一度、あいつとは話し合わないといけないな。何を思って桜をこんな家に放り込んだのか、なんで家族で離ればなれにしたのかを……」

怒りはある。失望もしている。だが雁夜には時臣への憎しみはない。

雁夜はまだ時臣の内情を知らないから、そこを互いに理解しないといけないと思っているからだ。

自分が持てなかつた全てを持ってしている時臣だが、我を忘れて憎んで

はいけない。

「まあ、それでも一発ぶん殴ってやるくらいは赦されるよな？」

こんな骨ばった青白い手で殴れるかはわからないけど。

そう自嘲しながら、雁夜もまた深い眠りについていった。

アサシンは隠れない。

ウェイバー・ベルベツトは、自分は優秀な人間だと思っている。

祖母から数えて三代目と、魔術師としての歴史が浅い家柄の出身で、そのため魔術刻印の数は少ないが、そんなハンデなど努力と才能でいくらでも補えると信じているのだ。

しかし、魔術師たちの総本山ともいえるロンドンの時計塔は、名門と呼ばれる家に生まれただけの優等生達が幅を利かせ、自分たちのような血統の浅いものがまともな評価をされることはほとんどあり得ないという、ウェイバーが忌み嫌っていた権威主義の塊ともいえる世界だった。

それでもと、その時計塔の仕組みそのものに挑戦するかのようになり、ある日、一つの論文を作成し始めた。

構想三年、執筆一年を費やした論文『新世紀に問う魔導の道』が完成したときは、この間違っている時計塔の体制に影響を与えるものと確信していた。

だが、その論文を、ケイネスはウェイバーの目の前で破り捨てたのだ。

自分の集大成を破り捨てられたという事実には呆然としているウェイバーに、ケイネスは『こんなのは妄想にすぎない』とバカにしたセリフを吐いた。

その時の屈辱は今でも忘れられない。

だからこそ、自分を馬鹿にした連中を見返すためにこの『聖杯戦争』に参加したのだから。

自分の考えこそが正しかったのだと証明するために。

「バーサーカー、約束通り訪問してやったぞ！早くここを開けるがよい！」

「……はあ」

しかし、目の前のサーヴァントを見ると、参加したことを後悔

してしまいそうになる。

ウェイバーのサーヴァントであるライダーは、『アドミラブル大戦略』というロゴの入ったTシャツにジーパンという、現代風——とは言っても、それでも何かがおかしくはあるが——の衣装に身を包んでいる。

どうしてそこまで現代の衣装を着たがるのか、なぜその衣装の料金を自分が支払わなくてはいけないのかとウェイバーを悩ませ、その上ライダーは、最初は下に何も履かずに外に出ようとしたのだから始末に悪い。

今ライダーはバーサーカーの拠点の前で大声を出している。

なんでインターホンを使わないのか。近所迷惑甚だしい。

「……ライダー、いくらなんでも時間を考えろよ」

「むっ？何を言うか小僧、言われた通り朝のうちここにやってきたではないか」

「ああ、確かにそうだよ！確かに朝だよ今はっ！まさに今から朝が始まるんだからなっ!!」

ライダーが間桐家に到着したのは日の出の時間だった。

冬とはいえ、かなり早い。そんな早朝に大声で叫んでいるのだから腹が立つ。

おそらく、ウェイバーの機嫌が悪いのも、睡眠時間が十分ではないからだということと関係があるのだろう。

「そうがなり立てるな。兵は拙速を貴ぶと言う。ならばこの早期の行動に何ら恥ずべきことはなからう」

「恥ずかしいとかじゃなくてマナーを考慮ろって言ってるんだ!!何で大声を出してんだ！お前の声は無駄に響くから五月蠅いんだよ!!」

「そんなもの、征服王のこの豪胆さを臣下に見せ付けるために決まっておろう！」

「本っ当にバカだなお前——っ！」

朝から体力を使わせるサーヴァントだ。  
腕力に自信のないウェイバーでは、聖杯戦争が終わるまで体力持つかすら危うい。

「そら、そんなことを言っているうちにバーサーカーの奴が出てきたぞ。向こうも準備はできていたということだろう」

「……はあ」

聖杯戦争がはじまってから、ため息をつく回数が増えてきたような気がする。

それはともかくとして、ライダーの言う通り、屋敷の中からバーサーカーが現れた。

サーヴァントには睡眠が必要ないとはいえ、慌てた様子を見せないあたり、向こうも想定の内だったということか、冷静な性格だからと言うだけなのか、それとも――

「……やあライダー、ウェイバー君、約束通り来てくれたようで感謝するよ」

「何、余は約定を違えるような男ではない。感謝されるようなことではない」

「うん、そこは僕も素直に評価するよ。さすがは征服王イスカンダルだ」

「はっはっはっ！そうであろう、そうであろう！」

バーサーカーの言葉に気を良くしたライダーが大声をあげて笑う。

しかし、ウェイバーだけが何か嫌な予感がして後ずさる。

バーサーカーはにこやかに対応しているのに、すごく恐ろしい何かの気配を感じた。

「それはともかくとして、だ」

「うむ？ バーサーカー、どうかし——」

チュインツ！という音と共に、自慢げに踏ん反りがえっているライダーの頬を何かがかすめた。

あまりにも突然の出来事に、あの豪放磊落なライダーが途中でセリフが途切つてしまう。

何が起こったのか分からないという様相のライダーと、滅茶苦茶怯えまくるウェイバー。

そして、二人が、ふと目の前にいる同盟相手であるサーヴァントの目を覗き込んだ。

直後、ウェイバーは覗き込まない方が良かったと後悔した。

バーサーカーの瞳の中で黒い小さな炎が燃えているのが見えてしまったから……。

「……今はまだ早朝だ……インターホンもある……どうしてライダーは大声で僕らを呼んだんだ……？」

「それは、まあ、余の豪胆さをだな？」

「お前自身のはた迷惑なアピールと言うのは、重病人や幼い子供の安眠妨害をする以上に価値があるものなのか……？」

圧倒している。

バーサーカーがあのかスカンダル大王を圧倒している。

バーサーカーから、容赦がない、やると決めたらやると言う『スゴ味』を感じる。

先ほどからウェイバーが感じていた嫌な予感というのは、これのことだったのだ

「ライダー……まだ情状酌量の余地ありだが……次同じことをやったなら、即！始末してやる……」

「……肝に銘じておこう」

ライダーの傍若無人さに辟易していたウェイバーにとって、今のやりこまれているライダーの姿は溜飲が下がるものだったかもしれないが、そんなことより目の前のサーヴァントへの恐怖の方が上回っているので、そんな余裕はこれっぽっちもなかった。

.....

「それにしても、臣下になった直後に謀反を起こすとは、中々やりおるなお前さん」

「……謀反を起こされた本人からそんな評価をされるとは思わなかったよ」

「そういった者も飲み込んでこそその征服王だからのう」

喉元過ぎれば熱さ忘れる。という言葉がバーサーカーの脳裏をよぎった。

殺されかけたというのに全く気にしていないライダーの様子に、自分はやったことながらも呆れてしまう。

「頼むから朝から大声を出さないでくれ。僕の陣営の人間はどっちも衰弱してるんだ。しっかり寝ないと体力が持たない」

「それはすまなかった。今後はこういうことがないように気を付けよ



う」

理由を述べれば反省はしてくれる分、まだライダーは接しやすい相手だ。

アーチャーやキャスターでは絶対に無理だろう。

それでも非常識な人間であることには違いのないのだが。

「ところでバーサーカー、この装束はどうだ？この胸板に世界の全図を乗せることができるあたり、実に小気味良いと思わんか？」

「……………」

「どうだ？どう思う？」

ライダーが着ているのは、ゲームか何かのロゴがプリントされたTシャツ。

そんなものを自慢げに見せつけられても、一般の感性を持っているものならどう反応すべきか分からない。

無言になったバーサーカーを見て、ウェイバーはこいつも返答に困っているのかと思った。

「いい——ねえ——すごくいいよ！超イケてる」

が、バーサーカーの口からありえない言葉が飛び出した。

あろうことかライダーのセンスを肯定したのだ。

……………言葉の割には、なんとというか、こう、バーサーカーの顔面の筋肉が口元以外全く動かないほど凄まじく真顔な上に、人間はここまで感情を込めずに喋ることができるのかと思うくらいの棒読み加減ではあるが。

「あつ…………ヤバイ！スゴクいいツ！激ヤバかもしれないツ！頭に浮かぶんだよ！世界征服って感じのイメージが！」

「本当か!!本当にそう思うか!?!」

「最先端を行くって言うのかな……目を奪われるよ！ギリシャ辺りなら大ヒット間違いないかも！」

「実は余もそう思っておったのだよ！そうだろうっ!？」

次から次へとポンポン出てくるバーサーカーの賞賛の言葉。

自分のセンスを理解してもらえたのがよほど嬉しかったのか、ライダーの気分が高揚しまくっている。

……なお、上記のセリフをバーサーカーは表情もトーンも先ほどこから一切変えずに喋っているのだが。

「……これって、本気で気に入ってるのか？それともわざと合わせてるだけなのか？」

喋っている内容とバーサーカーの態度のギャップに、ウェイバーはどっちなのか判別できずにいた。

その答えは、目の前のサーヴァントにしかわからない。

「それはともかく、僕のマスターはまだ寝ているから、聖杯戦争について話し合うのは後ででもいいか？もしも用事があるなら僕だけになるけど」

「いや構わん。こちらから押し掛けたのだ、いくらでも待とうではないか」

「そうしてくれると助かる。あと二時間くらいしたら起きてくると思うから、それまでは自由にしてくれ」

ウェイバーにしてみれば、こんな早朝にたたき起こされたというのに待たされることに釈然としないが、考えてみれば全ての元凶はライダーにある。バーサーカーを恨むのは筋違いと言うものだろう。

だとしても、まだまだ眠いし、朝食も食べていないので腹も減る。コンディションとしては最悪だ。

「ふわあくあ……………うん？」

あくびをして目をこすっていたら、目の前にバーサーカーが立っていた。

何か器のようなものを右手に持った。

「……………ぼ、僕に何か用でもあるのか、バーサーカー？」

「いや……………あのライダーのことだ……………君はまだ何も食べてないんだろ？」

「まあそうだけど……………それが？」

「インスタントだけど、食べるかい？朝だし、そんなに重たくないものを選んだつもりだけど」

そう言って、右手に持っていたカップうどんをウェイバーに渡した。

それを受け取ったウェイバーは、状況が呑み込むことができず、手元にあるカップ麺のパッケージと、正面にいるバーサーカーの顔を何か交互に見た。

しばらく時間がたって、バーサーカーが自分のことを気遣ってくれているということにようやくウェイバーは気づく。

「……………いいのか？」

「そつちから押し掛けてきたとはいえ、何もせずにいるっていうのもあれだからね。これくらいは構わないよ」

「……………その、悪かった」

「気にしなくていいさ。ライダーを見てみるよ、あいつなんか全種類制覇するつもりだぞ」

そう言ってバーサーカーが指さした先には、用意していたであろうカップ麺やその他インスタント製品を各々一つずつ作っているライダーの姿があった。

……彼には遠慮と言うものがないのだろうか。

「うーむ、手軽に作れて保存もでき、何より旨い。まさに兵糧にもってこいだのう。しかも飽きないように数多くの味もあるとはたまげたもんだわい」

何やら感心した様子でライダーがインスタント食品を眺めている。確かにライダーの時代にインスタント食品があれば、兵糧の問題は大幅に改善できただろう。

そんなインスタントラーメンを発明した日本人というのは、食に関してはどこまでも貪欲な民族なのかもしれない。

「またあいつは……!」

「あれくらいなら同盟を結ぶための必要経費さ。それで、食べる? 食べない?」

「……食べる」

「了解。お湯ならあつちのやかんにあるから、好きに入れてくれ」

空腹の中、こうも勧められたら断れない。

まさか自分を毒殺するつもりもないだろうし、素直に食べることにしたウエイバーだった。

……

「すまないね、わざわざ来てくれたのに寝ちやってて……」  
「あー、いや、こっちこそこんな早朝に来て悪かったよ」

バーサーカーの言う通り、雁夜はあれから二時間後に起床してきた。

ウェイバーは、雁夜の姿に、まさに死人のような人間だという感想を抱いてしまった。

しかし、どこことなく人のよさそうな雰囲気があって、聖杯戦争に参加するような魔術師とは到底思えない。

どうしてこの人が、こんなバトルロイヤルに参加しているのか不思議で仕方がない。

「ふむ、確かに風が吹けば折れてしまいそうなほどに衰弱しておるな。お前さんが余に憤った理由も分かる」

「おい、ライダーー！」

「ははは、いいんだよウェイバー君。誰だってこの姿を見たらそう思うさ」

ライダーの無遠慮な言葉にウェイバーが咎めようとするが、雁夜自身は気にした様子もない。

一年間蟲蔵に入れられ、生きること諦めていた雁夜からすれば、『死にそう』という言葉は『生きている』と言われているのと変わらない。

むしろ気にせず言ってくれる方が気負いしなくていいから楽だ。

「見た目通り、俺の体は中も外もボロボロだ。バーサーカーが助けてくれなかったら一月もしないうちに死んでた身だからね。全然間違ったことは言っていない」

「……そうか。お前がそういうならいいけど……」

ウェイバーは何か申し訳ない気分になるが、本人が言うならと引き下がった。

ちなみにウェイバーは日本語がしゃべることができない。

雁夜が会話できるのは、彼がルポライターで海外に行く時に学んだからだ。

サーヴァントは言語を知識として与えられる。なので会話する分には問題ない。

約一名を除いて。

「……おじさん、この人なんて言ってるの？」

「このお兄さんはね、おじさんが病気みたいだから辛いのか。って心配してくれたんだよ、桜ちゃん」

雁夜のすぐそばに座っている桜には、四人が何を喋っているのか分からない。

まだ幼い少女に英語を理解するのは仕方ないことだが。

「……失礼だけど、その女の子は？」

「ああ、この子は桜って言って、俺の子供みたいなものだよ」

正確には姪だけだね。と雁夜は付け加える。

ウェイバーは、桜が雁夜の傍に居るのは父親が恋しいからなのだろうと判断したが、それでも聖杯戦争の話をするのに、小さい子供をこの場に連れてきていいのだろうかと言ひま。

(内容が分からないならいいんだけど、それでもなあ)

考えても分からないので、ウェイバーは桜のことについて考えるのをやめた。

実は、その理由がとてつもなく重たいものだと知らずに。

「じゃあ長々と話していても始まらないし、本題から入るぞ」

微妙な空気が流れ始めた瞬間、バーサーカーが口火を切る。  
事実、このまま傷付くだけの空間になるのは誰も得しない。

「僕達が君達の下につくことに反対意見はあるかい？」

「無論、余にはこれっぽっちもないぞ」

「……僕も賛成」

ライダーは当然ながら、ウェイバーも割かし前向きだった。

ある程度接していて、バーサーカー達は悪いやつらではないと確信  
できたからだ。

しかもバーサーカーは、ウェイバーが敵視しているケイネスに言い  
返してもくれた。

なので、ウェイバーからしてもバーサーカーは好印象なイメージが  
残る。

「それで、今のところはどこの陣営もサーヴァントは脱落していない  
んだけど……」

「あれ？アサシンは脱落したんだからいいんじゃないのか？」

「そうだな。俺もお前もそれを見たはずだぞ」

ウェイバーと雁夜はアサシンがああ金色のサーヴァントに倒され  
ているのを見ている。

なのでアサシンはもういない。そう二人は思っている。

しかし、バーサーカーが逆に問い返す。

「……君達もアサシンがアーチャーにやられるところを見たんだろう  
？」

「そうだ。僕だって使い魔を通してその現場を……」

「でもおかしくないか。マスターたちがアサシンが倒されるところを目撃した。それがおかしくないか？」

「そのどこがおかしいんだよ？」

「逆に、どうしてマスター全員がアサシンが倒される場面を目撃できなかったんだ？アサシンは隠密行動に長けてるんだぞ」

「それは……」

「まるでアサシンが来るのが分かっていたかのようにアーチャーが迎撃態勢をとっていた……とか、他のマスターの使い魔が見張っているのが分かっているはずなのにあんな偵察をしていた……とか、何一つばれないように偵察しようという動きが全くない。そこが変だ……」

言われてみれば、バーサーカーの言う通りだ。

『気配遮断』のスキルを持っているからといって、アサシンの地力が極端に落ちているわけではない。

生前から暗殺に長けているからこそハサンの名が得られるのだ。

であれば、どうしてマスター全員の目に留まる形でアーチャーに倒されたのか。

あのアーチャーがいつ来るか分からないアサシンを迎え撃つために待機していたとは考えにくいし、そもそもアサシンのマスターもなぜ令呪を使って撤退させなかったのか……。

「……………まさか……………」

「なるほど……………」

ウェイバーと雁夜は、バーサーカーが何を言いたいのかが分かったようだ。

そしてライダーがバーサーカーの考えているだろうことを引き継いで言葉にする。

「つまりお前さんは、アサシンは『気配遮断』に頼らなければいけない



ほど、隠密行動がまるでできない無能だったか、もしくは隠密行動はできたが、わざと見せつけるように倒された。そう言いたいわけだな？」

「そういうことだよ。アサシンはまだ脱落していない可能性が高い。そう考えて行動しなくっちゃあならない」

バーサーカーは洞察力が高い。

特に、何かしら奇妙なことが起こった時、その理由を把握する能力に秀でている。

普通の人間では『そんなことをするなんてバカな奴だ』とか『そんなバカげた能力があるわけがない』と否定することも、バーサーカーの場合は『そんなバカな行動をとったからには間違いなく何かしらの理由がある』とか『そうなるからにはそういう能力があるということだ』と肯定することから始まる。

つまり、バーサーカーは常識外のことが起きても対応することができるのだ。

さんざん彼の人生では奇妙なことしか起こらなかったのだから、当然ともいえるが。

「お前さん、ますますバーサーカーらしくなくなっていくのう」

「褒め言葉と受け取っておくよ」

ライダーの軽口に、口元に笑みを浮かべて軽口を返す。

なんだかんだ、この二人は相性がいいのかもしれない。

「それらを踏まえて、僕たちがこれからどう行動していくかだけでも……」

そうやって敵のサーヴァントについて考えながら、自分たちがどう動くか話し合おうとしたバーサーカーの耳に、重い破裂音が響いた。

一般の人間には聞こえず、魔術に関わる者だけが聞こえる音だ。

「何だ？今は……？」

さっきの音はライダー達にも聞こえたようだ。

どこから聞こえたのかと、桜を含めた全員がきよろきよろしている。

窓の方を見ると、遠くから煙が上がっているが見えた。

「あれって確か冬木教会の方向だよな？」

「聖杯戦争をする上で、何か不具合でもあったんじゃないか？」

おそらく、魔術的な措置がされているあの煙も魔術師たちの目にしか映らないはずだ。

それが冬木教会から打ち上げられたと言うことは、監督役がマスター達に伝えることがあることを意味する。

「でもまともにサーヴァント同士で交戦したのは昨日が初めてだったのに、気が早いな」

聖杯戦争中に監督役が参加者たちを召集するのは異例中の異例だ。

可能性として挙げられるのは、聖杯戦争のルールの追加か変更。もしくは聖杯戦争そのものが破綻するような事態が発生したときくらいだ。

「……とりあえず会議は中断だ。何が起こったのか、僕達には知る必要がある」

才のある魔術師は救いがたい愚者になる。

自らの魔術工房へと変質させた、冬木ハイアットホテル客室最上階——地上三十二階のスイートルームフロアで、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは少し苛立ち気味に頭を指で叩いていた。

ランサーのマスターでもある彼の苛立ちの一番の原因は、もちろん聖杯戦争に関すること——

「……この部屋の装飾はもう少し何とかならなかったのかね」

ではない。

ホテルの部屋に対しての不満であった。

生まれつきの貴族であるケイネスには、『贅を凝らした部屋』というものをよく知っている。

少なくとも、このように高価な家具や調度品を並べただけの無駄に広い部屋は断じて豪華というものではない。

こんなもの、中身のない飾り立てられただけの張りぼてと何ら変わらない。

「ランサー、出て来い」

「——は。お側に」

そんな無駄なことでもストレスをためるくらいなら、とケイネスはランサーを実体化させるよう命じた。

部屋のあれこれについて考えるより、自分のサーヴァントと会話でもしていた方が気がまぎれる。

「今夜はご苦労だった。誉れ高きティルムツド・オディナの双槍、存分に見せてもらった」

「恐縮であります。我が主よ」

特に何か含むものもなく、素直にケイネスはランサーを労った。それをランサーはケイネスの膝下に屈した姿勢から微動だにせず、礼を返した。

しかし、その不平不満を一切漏らさないであろう態度が、ランサーが自分には言えないようなことを腹に抱えているのではという疑念をケイネスに抱かせる。

もう少しは自分の生徒であった少年のように態度や行動でも示してくれば分かりやすくもあるのだが。と心中で苦々しく思いながら言葉を続ける。

「思ったほどの戦果は上げられはしなかったが、あの場においては我々は一定のアドバンテージをとったとみていいだろう。何せセイバーに治療不可能な手傷を負わせたのだからな」

ランサーの『必滅の黄薔薇』は、ひとたび穿てばその傷を癒さない呪いの槍。ランサーがセイバーをその槍でもって負傷させたのは大きな成果と言える。

何せセイバーは世界中の人間が知っているであろう『アーサー・ペンドラゴン』だ。

英霊の中でも規格外のサーヴァントである以上、今後の脅威になるのは目に見えている。

そのセイバーの戦力を削れたのだ、期待外れ、というほどの結果ではない。

「当然のことではあるが、次にセイバーと相見えた時には必ず決着をつけよ。いいな?」

「ええ、必ずや、あのセイバーの首級をとることをお約束いたします」  
「それなら良い。……ある意味私はあの不出来な生徒に感謝すべきなのかもしれない」

「……と、申されますと?」

そこで初めてランサーは表情を変えた。

ケイネスはプライドが高い人間だ。

そんなケイネスが、自分の聖遺物を奪ったり、あの場で混乱を引き起こしたりと、ケイネスの邪魔しかしていないウェイバーに対して感謝するとは、到底思えない。

実を言うと、今の戦果に関する会話も、セイバーを討ち取れなかった自分に対する叱責だとランサーは予期していたのに。

「なに、私とイスカンドル大王では相性が悪すぎるといっただけだ。あんな外れサーヴァントを自ら率先して引いてくれたのだ、ありがたいというものだろう」

ケイネスの言う通り、彼とライダーの相性は最悪である。

自己主張の強いサーヴァントでは、ケイネスとは真っ向から衝突するのが目に見えている。それなら何を考えているか分からないが、自分の命令に従ってくれるランサーの方が遥かにましだ。

ウェイバーが聖遺物を盗んでいなければ、ライダーがケイネスのサーヴァントになっていたのだ。ある意味ケイネスも運が良かったと言えよう。

「そもそも魔術師とは、魔術工房をつくり、秘術を尽くして競い合うものだ。あのようにならば堂々と無策に戦いを仕掛けるのは魔術師ではない。ただの蛮族と言うのだよ」

「なるほど、言いえて妙ですね」

魔術師ではないランサーでも、何も考えずに戦場に飛び込んだりはしない。

現代ほど戦略や戦術と言うものはない時代ではあったが、少なくともライダーのようにその場のノリみたいな勢いでは戦いに挑んだりしなかった。

そんなことを平然とやってしまうライダーでは、確かにケイネスと

は馬が合わなかったに違いない。

「そんなことも分からずあの二人は私を馬鹿にしおって……。いいか、ランサー。セイバーを打倒した次はライダーとバーサーカーの首を私に捧げる。他のサーヴァントは後回しでも構わん」

「言われるまでもありません。我が槍は貴方と共にあり、貴方のためにある。主に降りかかる火の粉はすべて俺が払いのけましょう」

こういうところは、プライドの高さが見えるケイネスであった。

ともかくにも、自分を虚仮にするような存在が許せないのだから。

サーヴァントごときが私をなめるな。そういう感情が表情に表れている。

「あらケイネス、あのウェイバーって子はいいのかしら？ その子も貴方の顔に泥を塗ったようなものでしょう？」

ランサーでもケイネスでもない、女性の声が部屋に響いた。

そして部屋の奥の寝室から、ケイネスよりやや若い品位と理知によつて磨かれた麗人が姿を現す。

まさに女帝のような風格を持ち合わせている女性ではあるが、今その顔は硬くなく、どこかケイネスをからかうような表情だった。

「……ソラウ、別に今はそれはいいだろう」

女性のその言葉に、ただただばつが悪そうにケイネスは口ごもる。

ソラウ・ヌアザレ・ソフィアは、アーチボルト家と同格と言われるほどの魔術の名門であるソフィア家の一員である。

ケイネスの所属する降霊学科の長であり恩師でもあるソフィア리학長の息女にして、彼の未来の伴侶——要するに許婚だ。

本来なら、両者ともに名門の家の者であるがゆえに、本人たちの意

志も関係なしに、あずかり知らぬところで婚約を結ばれていてもおかしくはないほどの婚約。

だが、彼ら二人の間には、周りから勝手に決められただけの配偶者というような冷めた関係をうかがわせる空気が全くない。

むしろ、どこか楽し気にしているような気さえする。特にソラウ嬢のほうだ。

「そんなことないでしょう？ 貴方を馬鹿にしたのは確かにその二人ではあるけれど、原因になったのはライダーのマスターじゃない。なにどうして『ライダーのマスターの首を捧げろ』と言わなかったのかしら」

「取るに足らない人間だからだ。捨て置いても問題はない」

「そういえば、この間ケイネスってこんなことを言っていたわよね。

『魔術師としては三流だが、中々に骨のあるやつがいる』って、その生徒の名前なんて言ったかしら」

「……ソラウ、分かっている聞いているだろう？」

「ええ、もちろん」

非常にげんなりした表情で言葉を返すと、それはもう見事なまでにきれいな笑顔をソラウはケイネスに見せた。

ソラウに惚れている身としては、彼女が笑顔になってくれるのは何よりのことだったが、その原因が自分の情けなさにあると思うと、ケイネスの頭痛は悪化した。

「そう言ったかもしれないが、ウェイバー・ベルベットが三流なのは間違いない。あの論文にしたって妄想の域を出ていないし、奴のような浅い歴史しかない魔術師など、この戦争で生き残れるはずもない」

「へえ？ 貴方が生徒の論文に対して『妄想だ』って評価をするなんて珍しいわね。いつもだったら『本の内容をそのまま書くとは、少しは自分で考えることができるのか』とか『想像力がなさすぎる。これなら妄想の方がましだ』っていうのに。そもそも生徒の論文の内容を覚

えていることの方が稀じゃない」

「……ソラウ、君は私をいじって楽しいのかい？」

「ええ、すっごく」

これまたソラウは綺麗な笑顔を見せてくれた。

なぜだ。なぜこうも自分はソラウに頭が上がらないのか。何か弱みでも握られているのだろうか。

そう自問するケイネスだったが、そんな理由など古来から分かり切っているのだ。

いわゆる、『惚れた弱み』というやつである。

「まあ認めてはいるさ。奴は魔術師としては三流だが、研究者としての洞察や分析の能力は秀でたものがある。魔術師ではなく研究者や講師としてなら、ウェイバー・ベルベツトはとんでもない才能の塊だ」  
「貴方にそこまで言わせるっていうことは、相当なものなんでしょうね」

「あの論文は内容自体は評価には値するが、現実味のない条件ばかりで構成されていた。だから『これが実現するなどありえん、妄想をするのは良いが、もう少し現実に則して練り直したまえ』と言ってやったのだが……それでどうして聖杯戦争に参加するという選択肢をとったのか私には理解しがたいがね」

「……とんでもない行動力ね」

「あまつさえ、私の聖遺物を盗んだ挙句、聖杯戦争に参加してあの態度と言ったら目も当てられん。せつかく私が彼の望み通り『対等な場での勝負』を受けてやっているというのに、怯えるばかりでは意味がないだろうに」

ケイネスのあの一連のセリフはウェイバーに発破をかけるのが目的だったらしい。

本人がそう思うだけで、あの内容は逆鱗に触れた相手を処罰しようとしているとしか思えないものだったが、ケイネスにはそのあたりの



心の機微が分からない。

「貴方にそんな心算があつたなんて思いもしなかつたわ。魔術師としての戦いとか言つて、引きこもつて隠れて見てるだけで終わるつて想像してたのに。対等な勝負を受けるような性格だったかしら、ケイネスつて」

「ちよつと言いきすぎじゃないかソラウ？ まだまだ聖杯戦争も序盤なのだし、様子見をだな？」

「別に私はケイネスのことを臆病者だとか言つてるわけじゃないわよ？ ただ、ランサーばかり前に出して自分は前線に出なかつたら魔術師としての勝負もできないと思つただけで……」

「そ、ソラウ様！ ちよつとそれ以上はやめませんか!? 俺の主の侮辱は止めていただきたい！」

「ランサーにそう言われたら仕方ないわ。ケイネス、ランサーに感謝しなさいよ」

「ぐ、ぐむむ……!」

「そういうの良いですからッ！ ケイネス殿も俺を親の仇のように見ないでください！」

そこまでして頭を下げたくないのか、ケイネスはランサーを睨みつける。

あまりに状況がソラウによってかき回され、ランサーも先ほどまでの武人然とした態度はどこへやら慌てた様子で場の鎮静化を試みる。

そこには、楽しそうに笑う女性一人に振り回される男二人と言う情けない構図が出来上がっていた。

「別に私は決闘と言うものを馬鹿にしてはいない。騎士道と言うものも理解はしているし、私に挑むものがあるなら受けて立つただけだ」

「……そうなのですか？」

「魔術師らしからぬとは思うがね、どのような道でも『誇り』を持つているものはいるといふのは認めている」

本来ならケイネスは魔術師以外の人間は見下すような性格をしていた。

というよりは、一般的な魔術師であるならば魔術と言うものに誇りを持つているのでケイネスに限った話ではない。

だというのに、なぜ彼は他者を認められるような人間になれたのか。

「……私は挫折と言うものを知らない。あらゆる結果がついてくることが『当然』だとすら思えるほどにな」

壁に突き当たることも、限界に悩むこともなく、ケイネスはあらゆる成功をおさめ続けてきた。

彼は天才だった。だからこそこのような結果に満足感も達成感もなにもない。何をやってももうまくいくのだから、そんなものに誇りや誇りなど持てはしない。

ゆえに、彼の誇りは貴族であることや魔術師であることだ。決して才能があるからではない。

「私が子供のころの世界は無味乾燥だったよ。何をやっても面白くないのだから」

「……ケイネス殿」

「だがだ」

そこでケイネスは言葉を切った。

そして少しばかり、子供のような表情を浮かべて再度口を開く。

「そんなときに知ったのだよ。どんな困難にも打ち勝ち、勇敢に立ち向かうことができる誇り高き貴族の存在をな」

「貴族、ですか？」

「ああ、私も実際に会ったことはないが、100年前には確かにいたそ

うだ。私も、彼のことを最初は魔術師でも何でもないただの人間だと侮っていたが、なかなかどうして素晴らしい人物さ」

あのケイネスがここまで手放しで称賛するとは、いったいどういう人間なんだろうか。

しかも、貴族ではあるが魔術師でもないのであれば、歯牙にもかけないのではなからうか。

少年だったとはいえ、そんなケイネスに影響を与えるとは、並大抵のことではない。

「貴族としての誇りと義務を常に持ち、愛する女性の名誉が傷つけられたと分かれば強敵だろうと打倒し、吸血鬼に身を墮とした親友との因縁にその手で決着をつける。そんな輝かしい人生を送った人間だ」  
「……それは、素晴らしい御仁ですね」

ランサーはケイネスの言う人物に嫉妬した。  
過ぎ去ってしまった自分の人生を否定するつもりはない。

それでも、ランサーはその人物のように本懐をとげて生きたかったから。

だから同時に、ランサーは心から称賛する。

ケイネスの語る人物は、まさに騎士道を歩んでいるような人間だ。そんな人間を尊敬するというのなら、ケイネスが他の道の誇りを認めるのも分かる。きっとその貴族も、他人を貶めることはしなかっただろうから、それに倣っているのだ。

「貴様もそう思うだろう？　そして彼は教えてくれたのだ、困難があるほど人間は成長するのだとな。だから私は探した、自分にとっての壁とは何かを」

ランサーの反応に気を良くしたのか、ケイネスは軽く微笑して話を続ける。

いつも険しい表情を浮かべているはずのケイネスだが、今の彼の顔はまるで憧れのヒーローを語る少年のようであった。

「それでも見つからなかった。文字通り何でも出来てしまうからな。敗北が知りたい、壁にぶつかりたい、困難に悩みたい。そう思っている、私の世界には障害となるべきものが存在しなかった」

ケイネスの言うことは増長などではない、単純な事実だ。

それでも普通の人間が悩むように、天才であるケイネスも悩んでいた。

凡人には理解できない悩みを、非凡な彼は持っていた。

おおよそ、殆どの人間が味わう経験をケイネスは体験したことがなかった。

つまり端的に言うところなる。

『ケイネスは、挫折したい』のだ。

「この聖杯戦争もその一環なのだよ。私の経歴に箔をつけるという目的もあるが、この魔術師同士が鎬を削り、聖杯を勝ち取ろうとするこの戦いで確かめたいのだ。私の世界は、全てがつまらないものでしかできていないのかどうかをな」

「そう……だったのですか……」

「そして、もしもその試練を与えられ、乗り越えることができたなら、彼のような気高さと勇気を持てるかもしれない。それが私の望みだ。……そんな私のことを愚か者だと嘲笑うかね？ 魔術師は魔術師らしく引きこもっておればいいと叱責するかね？ そんなバカな理由で聖杯戦争に臨んだ救いがたい大ばか者だと落胆したかね？」

「いえ、もしも私が貴方に向かってそのような言葉を嘘偽りでも口にしたのなら、自らの槍で自決してご覧に入れましょう。その信念には心から感服いたします、ケイネス殿」

ケイネスの心の内を知って、ランサーは自らの主を見る目が変わった

た。

自分の名声を高めるためだけに聖杯を求めているものだと思っていたのに、それだけではなく、自らを高めるために試練を求めるといふ『気高い飢え』のために参加していた。

もちろん、前者だけであつても、ランサーの主には聖杯を捧げたいという気持ちに偽りはない。

けれど、このときになってようやくランサーは、自分のマスターのことを『今生の主』ではなく『ケイネス・エルメロイ・アーチボルト』という一個人で向き合うことができたような心地だった。

「魔術師ではないが、私は彼に一目置いている……いや、尊敬すらしている。だから貴様が名誉のために戦うというのも理解できるし、騎士道と言うものに執着するのも認めてやる。だが、それ以外では私の命令には必ず従ってもらうぞ、いいな？」

「——っ！　ありがたき幸せです！」

主君が自分の心胆を理解してくれていることに、ランサーは歓喜した。

ランサーの望みはただ一つ、騎士として誇りを全うしたいだけ。

そしてケイネスは、ランサーが騎士としてあることを認めてくれた。

ランサーの望みである、『主と共に誉れある戦いに臨み、聖杯を捧げる』それが実現するのだ、まさに至上、これに勝る喜びなどランサーには存在しない。

「本当に、ケイネスって変よね。わざわざこんな命がけの戦いに参加しなくても、時計塔に居れば約束された未来が待っているというのに」

そんな男二人が会話している横から、ソラウがくすくす笑いながらケイネスを小ばかにする。

ただ、ソラウのその笑みには悪意と言うものは一切なく、まるで手にかかる弟を見ているかのようなものだった。

せつかくの気分に水を差されて、若干ムツとしながらケイネスが言い返す。

「君にもさんざん言っただろう、こればかりはそんなもので測れることじゃない。単なる私の意地だよ」

「ええそうね。婚約する前から耳に残るほどその話を聞かされたもの、今更だわ」

「大体、そこまで言うならなんで君はついてきたんだね？これは私の問題なのに、君まで付き合う必要はないだろう？」

「だって、ケイネスって見ていて面白いんだもの。初めてよ、ここまで私の心を動かすことのできた人間って」

「だからって、君はなあ……」

「何よ、彼を目指しているなら私一人くらい守れるでしょ？」

「それはまあそうだが……」

自分の意見を押し通そうとするソラウに辟易するケイネス。

どこからどうみても痴話げんかをしているようにしか見えない。

そういえば、これまでずっとケイネスはソラウにやりこめられている。

そのことに気づいたランサーは、この場の空気を換えるために気になっっていたことを口にした。

「我が主、失礼ながらお聞きしたいことがあるのですが」

「む、うん、そうか。いったい何だね？」

明らかに助かった、と言うような反応のケイネスと向かい合い、ランサーは自分の疑問を投げかけた。

「先ほどから言っておられる、その誇り高き貴族の名は何というので

「しょうか？」

「ああ、そうだったな、お前には言っていないかった。いいだろう教えてやる」

ケイネスは少し得意げにして、ランサーの問いに答える。

そのケイネスには、まるで小さい子供が自慢話をするような雰囲気があった。

「どのような困難であろうとも怯むことなく、それを真正面から受け止め、乗り越えることが出来る、一世紀前に『実在していた』誇り高き貴族——」

——名を『ジヨナサン・ジョースター』と言う。

猟犬達は狂信者に牙を剥く。

「キャスターを討伐せよ……か……」

使い魔越しに伝えられた聖杯戦争のルール変更。

キャスターがどんなサーヴァントなのか知っているバーサーカーにとつては、まあ自然な成り行きだろうと思った。

なにせ、キャスターはあのジル・ド・レエだ。精神を病み、子供たちを虐殺したという逸話がある奴ならば、秘匿だの考えずにこの町にいる人間に手をかけてもおかしくはないだろうと予想はしていた。

そのままでは魔術には関係のない表の人間たちの目に触れてしまい、聖杯戦争そのものが中止になってしまうのは明白だ。

そうなつてはまずいと判断した監督役が提示したルールは、一時他の陣営は休戦しキャスターを一丸となつて討ち取れという内容だった。

また、見事キャスターを倒せたなら、単独ならば倒した陣営に令呪を一画、共闘での成果なら、事に当たった全員に一画ずつ与えるとのことだ。

「……このルールは僕らには有利だね。もともと共闘してるんだから、僕らの陣営に二画ずつ手に入ることになる」

バーサーカーはライダーと組んでいる。

互いに足を引っ張り合うこともないし、うまくいけば令呪も他の陣営よりも得られる。

明らかに自分たちにとってメリットの方が大きい。

……なのに、なぜ監督役はこんなルールを提示したのだろうか。

「監督役はアサシンのマスターを匿っている。ただでさえ表に出られないのに、他の陣営に有利になるようなことをするのか？」



アサシンは脱落した——ということになっている。

あくまでバーサーカーの推察でしかないが、アサシンはまだ生き残っているはずだ。

であれば、それが分かかっていてなおマスターを保護しているのなら、監督役もグルになつているとしか考えられない。

そして表向きは脱落しているアサシンは、キャスター討伐による令呪を手にすることができない。

このままでは、アサシン陣営と監督役は損するだけ。だとすると――

「恐らくだが、アサシン組とアーチャー組は裏で手を組んでおるのだろうよ。アサシンの存在を隠し、情報収集させるためにな」

「ちよつと待てよ!?!じゃあ何か? 聖杯戦争の監督役とこの土地の管理者が協力し合つてゐることか!?!」

「……俺にはアサシンのマスターに心当たりがあるよ。たぶん監督役の息子である言峰綺礼だ。一応時臣の弟子だからな」

「なんだよそれ! この聖杯戦争癒着だらけじゃないか!」

事前に策謀を巡らせすぎているアーチャーとアサシンのマスター達に、ウェイバーは激昂する。

監督役とはいわば聖杯戦争の審判役のようなものだ。そんな監督役を味方にいるなんて、アーチャー陣営が有利にもほどがある。

「大丈夫さウェイバー、僕の参加してたレースに比べたら全然マシだよ」

「……レースだったら別にそこまでのことじゃないだろ? どんなレースだったんだよ」

「そうだな……主催者のような立場の人物が僕達の命を狙っていて、事あるごとに刺客を送ってくるようなレースかな。しかも他の参加者までがどんどん敵に回っていく感じっていつたら分かるか?」

「それは本当にレースなのか!?!」

バーサーカーの参加していたレースも、ある意味では聖杯戦争に近いものがあるかもしれない。

多くの人間が、ある一つの者を求めて殺し合うあたりが。

「それに悪い話ばかりじゃない。僕には『キャスターの情報』があるんだからな」

「……お前さん、それは本当なのか？」

ライダーが少し目を丸くして問いかける。

どこにいるのか分からない、潜伏しているキャスターの情報を持っているのはライダーにも予想外だったのだろう。

「ああ、昨日の夜たまたま因縁をつけられてね、聞きもしないのにべらべら喋ってくれたよ」

厳密には、セイバーを相手に勝手に喋っていただけだ。

そのせいで色々気が滅入るようなことはあったが、総合で見れば＋と言ってもいいだろう。

「真名はジル・ド・レエ。何でかは分からないけど、セイバーに執着している様子だったし、あれなら勝手にセイバーあたりに接触するだろうね」

「おお、バーサーカーやるではないか」

「だが問題点もある」

今回の件は自分たちにとっても色々と好都合だったが、その代わりに周りの敵にも都合がいい点がある。

自分たちだけが得するなんて、そんな都合のいい話はない。

「キャスターのことについては、ランサー陣営以外は知っているって

いうことだ」

直接対面したセイバーはもちろんのこと、諜報をしているであろうアサシンによってアーチャーたちにもそのことは知られているはず。今バーサーカーはライダー達にも伝えたが、そうなるどころからも情報を得ていないのはランサー達だけ。

バーサーカーがたまたま知りえたというのは、アドバンテージを稼いだというよりは、デイスアドバンテージにならなかつただけのようなものだ。

「そして、アサシンが生きているってことは、おそらくアーチャー達はキヤスターの工房の場所やマスターの顔と名前も知っている」

アサシンたちは気兼ねなく情報収集ができるのだ。もうキヤスターの情報はほとんどすべて割り出していると考えた方がいい。

そしてそれは、自分たちがアサシンに監視されているということにもなる。

キヤスター討伐に目が行って、背後から暗殺されたって不思議ではない。

「最後に……まあこれは完全に私的な理由だけど。実は僕は、キヤスターに狙われてるってことだ」

何を勘違いしたのか、キヤスターは、バーサーカーがセイバーを誑かした神か何かだと思い込んでいる。

だとすれば、バーサーカーを目の前にしてキヤスターが何をしでかすか分からない。

討伐するのにも、手間がかかる可能性が高い。

「……と、以上のような問題点があるんだけど、何か質問は？」

「聞いていて、時臣が有利だということは分かった」

雁夜の言う通り、アーチャーが有利だという事実が揺らがない。キャスターに関して正確な情報を持っている、単純にサーヴァントが強い、監督役も含めた同盟相手がいる。

キャスター討伐令が茶番にしか見えてこない。

「そもそも、そこまで分かっているんだったら時臣の奴はなんで静観してるんだよ。何の関係もない子供たちが殺されてるんだぞ。アサシンでも差し向ければやれるだろ？」

「……わざわざ隠匿したアサシンを使ったら他のマスターにばれるからだろ」

「そりやそうだけど、あいつはこの土地の管理者なんだぞ。それなのに、なんで……」

「そんなもの、聖杯がほしいからじゃあないか」

「……所詮は魔術師か。そりやそうだ、あいつに人間性を期待した俺が馬鹿だった」

バーサーカーの返答に、雁夜は行き場のない苛立ちを壁にぶつける。

雁夜は魔術師のこういふところが嫌いだ。魔術のためなら一般人に犠牲が出ようと構わないとするその精神が理解できない。

何が魔術だ。何が聖杯だ。そんなもののために、無関係な人間の命が巻き添えを食らうのか。

もとはと言えば、今事件を起こしているキャスターも、聖杯戦争がなかったら喚び出されていなかったのに――

「……カリヤ、これは魔術師だとかそういうのは関係ないんだよ」

「バーサーカー……」

「人間の歴史で分かるように、劇的変化のある時、必ず戦闘が行われる。プラスの裏側には絶対にマイナスがある。何か大きな物事を起こすには、犠牲と言うものが出るしまうのさ」

「それでも……」  
「だから」

なおも食い下がる雁夜を横に、バーサーカーは立ち上がり、歩き出す。

そして、雁夜の傍にいた桜に近づくと、彼女の頭を撫でて、柔らかな笑みを浮かべながら雁夜の顔を真正面から見る。

「サクラののように、小さい子供が犠牲になって不安になるのも分かる。だからこそ、僕達でキャスターを倒そう。そしてトキオミを鼻で笑ってやればいいさ、『魔術師でもない俺でも助けられたぞ』ってな」  
「……そうだな。その方が時臣のダメージも大きいだろうしな」

不思議だ。バーサーカーにそう言われると雁夜は不思議と落ち着いてしまう。

雁夜も人間だ。憎く思っではいけないとは分かっているも、時臣との因縁はそう簡単に断ち切れるものじゃない。

そんなとき、バーサーカーの言葉はそれを思いとどまらせてくれる。

上から押し付けるわけじゃない、下から持ち上げるわけでもない、対等に自分と向き合ってくれるバーサーカーの言葉だから、素直に受け取ることができるのかもしれない。

「そうと決まればキャスター討伐に向けての計画を立てよう。何か提案があるやつはいるかい？」

「それなんだけどさ……僕から一ついいかな？」

恐る恐るといった様子で、ウェイバーが手を挙げた。

……よく考えると、作戦会議をしている人間はウェイバーとそれ以外で年齢が離れすぎている。

イスカandalであるライダーは32歳で没しているし、バーサー

カーは29歳で死亡、雁夜も27歳と全員四捨五入すれば30歳なのだ。多少は恐縮しても仕方がないだろう。

「どうした小僧。貴様から何か言いだすとは珍しいではないか」

「もしかしたら、キャスターの工房がどこにあるのか分かるかもしれない」

『……えっ?』

ウェイバーの言葉に、三人全員が目を剥いた。

本命の中でも大本命であるキャスターの根城が分かるのなら、それはもう大金屋どころの話ではない。

だから全員が驚いたのだが、そこまで反応されるとは思っていなかったウェイバーは居心地が悪そうに話を続ける。

「監督役の神父が言っただろ、『キャスターは魔術の痕跡を平然と残している』ってさ。だからその魔術の痕跡をたどっていけば、キャスターの工房に繋がってるはずだ」

「……なるほど。それで、どうやって探査するんだ?」

「一番簡単なのは、川の水を調べることかな。この街はど真ん中に流水があるんだし、本当に何も細工していないならそれを調べるだけで大まかな場所は特定できる」

「……ウェイバー君はそれができるのかい?俺は蟲を使役するくらいしかできないからよく分からないんだけど」

「魔術としては基礎的なことだ、褒められるようなことじゃない」

それでも十分すごいと思うんだけどなあ、とバーサーカーは心の中でつぶやく。

どうもウェイバーと言う人間は、『自分にできることを普通にできる』ということがどれほど凄いことか理解できていないようだ。

やはり魔術師として未熟であることに対するコンプレックスからくるもののだろうか。

「そういうことなら、僕らは川の水でも集めてくればいいのかい？今はまだ昼だし、それまでなら僕も手伝うよ」

「……お前って、本当に狂戦士バーサーカーなのか？全然狂ってるようには見えな  
いんだけど」

ウェイバーの疑問ももつともである。

バーサーカーの性格は、どれだけ穿った見方をしたとしてもせいぜい『人間臭い』としか言い表せない。

別段悪事を働こうとしている様子はないし、かといってマスターに  
対して反逆するという凶暴さもない。

人間としての倫理観はまっとうであるし、それどころか思考能力も  
高い方だ。

なんでコイツがバーサーカーなのか、不思議に思うのも当然だろ  
う。

「……………ああ、僕は真正銘バーサーカーさ。目的のためなら、人間  
性を捨ててでも成し遂げようとする——狂ただの人間だよ」

ウェイバーの問いに対し、どこか悲しそうにそう言い捨てる  
と、バーサーカーは全員に背を向けて扉の方に向かっていく。

「おい、バーサーカー。お前さん何処に行くつもりだ？」

「何処って……水を集めてこなくっちゃあならないんだろう？それな  
ら一刻も早く集めるべきじゃあないか」

「それだったら、もつと数を増やして……」

「大丈夫だ、バイクで行ってくるからそんなに時間はかからない。日  
没までの時間もまだまだあるし、君たちはしばらくここで休んでお  
け」

「でも、どこから水を集めてくるかなんて……」

「河口から100m間隔で上流まで集めてくる。それならいいかい

「？」

「まあ、それなら構わないけどさ……」

「よし、OK。じゃあ行ってくるよ」

背後から声を掛けられても、バーサーカーは一切振り向かず言葉  
を返す。

言葉の調子は普段通りではあったが、何か様子がおかしいのは明らかだ。

そんな疑問を残して、バーサーカーは足早に外に飛び出していた。

……………

「……やっぱり、カリヤは『正しい道』を歩いている人間なんだろうな」

独り、バイクに乗りながらバーサーカーは思い出す。

「いったい自分は現界してから、どれほどに『バーサーカーらしくない』と言われてきただろうか？」

誰もが自分を見て、『狂っていない』と感想を漏らす。

皆が皆、『バーサーカーは正常だ』と言つてのける。そう言つてしま  
う。

……そんなわけがない。そうじゃあなかったら自分はバーサー  
カーで召喚されるわけがない。

そんな聖杯と言うのは甘いものじゃあない。



「やっぱり僕は、人間としておかしいんだ。今更だけど、そう再認識させられたよ」

なにせ、さきほどの雁夜への回答は『自分が時臣ならそうするであろう』ことを言ったただけだ。

そして雁夜は、その回答に対して『人間性を期待した俺が馬鹿だった』と感じた。

それはつまり、『バーサーカーは人間性を捨てている』と言われたも同然ではないか。

自分だったら見ず知らずの子供のためには動こうとは思わない。

自分が大切になっているものが助かるなら、他の誰かが身代わりになることを良しとする。

自分に危険が及ぶなら、誰かを犠牲にすることに躊躇いはない。

「そうだ。僕は聖杯を手に入れられるなら、この街にいる子供なんか見捨てたって構わない。もう一度『アイツ』に会えるなら、それ以外がどうなろうと知ったことじゃあない。だって僕には関係がないんだから」

もちろん子供が殺害されていると聞かされても、気分は決して良くはならない。それどころか、その仕立て人に対して怒りや嫌悪感を催すほどだ。

それでも、バーサーカーは『そこで終わる』。そう思うだけで、自ら助けに行こうとは思わない。

助けられるなら助けよう、自分の邪魔にならないなら手を差し伸べてもいい。

——だけど、子供たちを助けることで自分が不利になると分かっているなら、バーサーカーは迷わず子供たちを見捨てるだろう。

例えば、もしもキャスターが子供を人質にしたなら、バーサーカーは人質ごとキャスターを殺しにかかるつもりだ。

自らの目的のためなら、人間性を捨てられる。それがバーサーカーが狂った人間たる所以なのだから。

「やっぱり、僕には英雄だなんて荷が重いな……それもそうか、もともと『自分より正しい道』を歩んでいる人間を殺したくらいなんだからな……」

生前から変わっていない自分の性根に苦笑いが出てくる。

バカは死んでも治らないとはよく言ったものだ。

「……考えたってしょうがないか……とにかく、川の水を集めにいこう」

早朝からやってきたウェイバーは今頃寝ているだろうか。

大胆不敵なライダーはあの格好で街を練り歩いているのだろうか。

最近になって人間味を取り戻してきた桜はこのまま昔のように笑うことができるのだろうか。

自分を信用してくれている雁夜はまた体調を崩してはいないだろうか。

……そして、彼らは、自分のどす黒い中身を知ってもなお、自分を信じてくれるだろうか。

そんな益体もないことを考えながら、バーサーカーはバイクを走らせていく。

平凡な人間は自らの従者を穿つ。

セイバーを目標としているのなら、キャスターはアインツベルンの城に向かうだろうということを雁夜から聞いたバーサーカーは、日が沈むと真つ先に城のある森へと向かうことを決意した。

まずは相手の出方も分からないから、その手の内を探るためにもライダー達には待機させ、偵察には自分一人だけで行くと行ってバイクに跨った——つもりだった。

「……なるほど、ウェイバーはこの速度にいつも耐えていたのか。心底同情するよ」

「……うん、なんというかありがとう」

「なんだだらしない。この程度で根を上げるとは肝が細いのう」

お前と比べれば、誰の肝臓だって矮小に見えるだろうさ。そう突っ込む気力すら湧いてこないバーサーカー。

出立しようと思った瞬間、ライダーに首根っこを掴まれ、彼の宝具である『ゴルディアス・ホイール神威の車輪』に投げ込まれた挙句、馬やバイクでも体験したことのないような速度で振り回されれば、多少は慣れているウェイバーならともかく、初乗りであるバーサーカーではグロッキーになるのも無理はない。

もしもこれに雁夜が乗せられていたら、本気で寿命が残り一ヶ月になつていたに違いない。

「大体、なんでライダー達までついてきたんだ？今回は偵察するだけだから、僕一人で十分だつてのに」

「そうは言ってもな、状況と言うのは刻一刻と変わっていくものだ。キャスターを討伐するチャンスがあるやもしれんだろう？」

「……狂ってはいってもキャスターは救国の英雄だ。そうやすやすとは倒せないよ」

精神を病んでいても、ジル・ド・レエは元帥にまで上り詰めた英霊だ。

フランスを救った英雄の軍略や戦略は、そう侮つていいものではない。

しかも今から向かう場所はセイバー達の領域だ、間違いなく妨害されてしまうだろう。彼女たちもまた令呪がほしいはずなのだから。

「それでキャスターはもうこの森には入っているのか？」

「間違いなく入っていったらうよ。なにせ醜悪な気配が尾を引いて垂れ流されておるからのう」

バーサーカーには、魔力を感知するだの気配を察知するだのは苦手だ。

殺意を向けられれば感づきはするが、誰それがここにいた、というのは分かりづらい。

キャスターはもうセイバーの陣地に突入していったと断言するライダーに、ほんの少しだけついて来てもらってよかったかもしれないと思ひ直す。

「ここからは歩いていくぞ。ライダーの宝具じゃ移動速度が速すぎて、キャスターを見失いかねないからな」

「あい判った。さあ行くぞ坊主、へばっている暇はないぞ」

「うわっ!? ころ、僕を担ぎ上げるな！ 降ろせっ！」

言うや否やライダーはウェイバーを肩に担ぎながら森へと直進していく。

そのあまりの扱いにウェイバーも抗議するがどこ吹く風と豪快に笑いながら歩みを止めないライダー。

……おそらく、罫が仕掛けられていてもすぐに対処できるようにライダーが自身で運搬しているのだろうが、バーサーカーから見てもその誘拐されているかのような有様に哀愁を感じた。

「何をしておるかバーサーカー。お前さんも早く来い」

「……ああ、分かったよ」

呼びかけられて、少し駆け足でライダーのもとに向かう。

この三人の中で一番戦闘力があるのはライダーだ、なるべく離れたようにしておくべきだ。

「……バーサーカー、少しスピードを上げよ。何やら嫌な予感がする」  
「あんたがそう言うんなら、きつとそうなんだろうな。よし、急ごう」

直感のスキルは持つてはいないものの、ライダーのこういう勘は信じるに値する。

バーサーカーには魔力を感じることでできる能力はないが、キャスターがもうすでにセイバーの元へとたどり着いているのかもしれない。

そうなったら、あの狂ったキャスターのことだ。悪趣味な企みでもしている可能性が高い。

全サーヴァントの中でも最も敏捷が低いバーサーカーも、少しばかり気合を入れてわずかでも早くキャスターを捕捉するため走り出す。

………

キャスターは夜の森を歩いていた。

しかし一人ではない。その後方におよそ10人ほどの子供が追従している。

おそらく最年長の者でも小学生あたりのその集団は、全員が夢遊病者のようにふらふらと歩いている。

それもそのはず、ここにいる子供は皆キャスターが魔術を用いて誘拐してきた子供たちなのだから。

しばらくして、唐突にキャスターはその歩みを止めると、あらぬ方向に顔を向けてにんまりと顔をゆがませた。

いやあらぬ方角ではない、そのキャスターの視線は、アイリスフィールの千里眼の視点を見据えていたのだ。

その方向を向いたまま、キャスターは慇懃な仕草で一礼する。

「昨夜の約定どおり、ジル・ド・レエ罷り越してございます。我が麗しの聖処女ジャンヌに今一度お目通りを願いたい」

こう言っても、相手がセイバーをこちらに向けてくるのか悩むことだろう。

何か罫があるのではないか、セイバーだけでキャスターを討つことができるのか、などと逡巡するのはキャスター自身がよく分かっていた。

事実そうであったが、キャスターとしてはどうしてもセイバーに向いてもらわなくてはいけない。

……だからこそ、この子供たちを連れてきたのだ。

「……まあ取次ぎはごゆるりと、私も気長に待たせていただくつもりで、それなりの準備をして参りましたからね。なに、他愛もない遊戯なのですが……少々庭の隅をお借りしますよ」

キャスターが指を鳴らすと、子供たちの虚ろな目が見開かれた。

魔術が解けた子供たちは、何が起こっているのか分からない様子であたりを見回し始める。

そんな困惑している子供たちにニコリと笑い、キヤスターは彼らに告げる。

「さあさあ子供達、鬼ごっこを始めますよ。ルールは簡単、この私から逃げ切れれば良いのです。さもなければ……」

キヤスターは近くにいた子供の頭に軽く手を置いた。

これから起こる惨劇を思うと笑みがこぼれるのを抑えきれない。

狂笑を浮かべると、その手に魔力を込め、

瞬間、キヤスターの視界が真っ赤に染まった。

「……っ！が、あああああああああああああああ!!!」

静かな森に、大きな悲鳴が響き渡る。

それがキヤスターの目的であった子供の血であったなら、子供たちの悲鳴になっていただろう。

しかし、今現実には叫び声をあげたのは、子供ではなくキヤスターであった。

なぜなら、そのキヤスターの腕に何か貫通していったから――

「……キヤスター、お前ちよつと時代遅れじゃあないか？最近の子供はそんな古臭い遊びはそんなにしらないらしいぞ」

この痛みをキヤスターは知っている。

この声色をキヤスターは知っている。

どちらも、昨夜セイバーと共にその脳髓に刻み込まれている。

一日で可能な限り治癒を施したその腕が、昨日の焼き直しのように凶弾によって穿たれた。

「うむ、近頃は『テレビゲーム』なるものが流行っておるそうぞ。なかでも『RPG』というのが人気でな、余もやっておるわ。今攻略を進めているのは、確か最新作とやらのLIVE A LIFE——」  
「ライダー、お前また勝手に通販で頼んだのかよ!? 道理で財布の中のお金が減つてると思ったよ!」

続いて、緊張感のかけらもない二人組の声が聞こえてくる。

今まさに凄惨な光景が作り出されようとしていた場面にはまるで似つかわしくない。

だが、そんなことキヤスターには些細なことだ。

そんなことよりも、この腕を打ち抜いた人物がすぐそばにいるという事実キヤスターは意識を向ける。

「鬼ごっこは昼間にやるものだ。今は夜中だしライダーおすすめとやらのRPGに則って、『魔王退治』をさせてもらう」  
「ば、バアアアサアアアカアアアアアアアア!!」

キヤスターの怨嗟の視線にも怯まず、森の陰からバーサーカーが姿を現した。

その後ろから、ライダーとウェイバーも続く。

「おいお前らー早くこっちに来い!」

「う……あ……!」

「ひっぐ……ひっぐ……」

今もなお硬直して動けずにいる子供たちにウェイバーは叫ぶが、それだけで動けるほど彼らは成熟していない。

怯えて足がすくんで、まともに体が動かない。そんな子供であれば普通の反応だ。

狂気に満ちていようがキヤスターは軍人だ。そんな隙を逃がすほど胡乱ではない。



「ひっ!？」

「いやっ!」

キャスターは自分の傷など構わずその両手で子供二人の首根っこを掴んだ。

それに触発されて、他の子供たちはこちらへと一目散に逃げこんできた。

ジル・ド・レエの傍にいる子供の数が減ったのは不幸中の幸いだが、人質が存在するという状況は変わっていない。

思わずバーサーカーは歯噛みする。

「許すまじ……許すまじ愚かなる神よ!どこまでも私の邪魔建てをするか!そこまでして私を止めるのであれば、逆に私が貴様を殺してやる!お前の呪縛から我が聖女をこの私が解放するのだ!!」

聞くに堪えない妄言を喚き散らされ、バーサーカーはその聖処女とやらの同情し始めた。

こんな粘着質な男に付きまとわれるとは、なんとも悲惨だ。

「さあ神よ!もしも貴様が慈悲深い存在であるならば、この子供たちの身代わりになって見ろ!自らの手で命を絶つというのなら、この二人を解放してやる!」

「……無茶言うな。そもそも僕は神なんかじゃない」

言っではみるが、キャスターには通じないだろう。

自分にとつて都合のいい世界しか認識できないジル・ド・レエに説得だの説明だのは意味をなさない。

だとしても『自害しろ』と言われて、はいそうですかと受ける気もバーサーカーにはさらさらない。

そんなことをするくらいなら、子供を見捨ててキャスターを撃ち殺

すまでだ。

『……バーサーカー、あの二人助けられないか?』

予期はしていたが、実際に聞かれると非常に頭を悩ませる。

雁夜は一般人だ。この状況を見て、そう聞いてくるのはバーサーカーも分かっていた。

しかし、バーサーカーにだってできないことはある。

『無理だな。僕に限らずあんな状況じゃあ誰も助けられないよ』

『お前の爪なら、やれるんじゃない?』

『その前にキャスターはあの頭をひねりつぶすだろうね。言っとくけどライダーでも間に合わないよ』

キャスターの手は、子供たちにすでにふれているのだ。

こちらが何かアクションした瞬間に、キャスターは子供たちの頭を粉碎するのが目に見えている。

ライダーの宝具も、細かい動きをするのには向いていない。

助けられる方法は、ない。

『……今のままじゃあ不可能だよ。僕だって死ぬ気はないし、どうしてもっていうなら令呪でも使うんだな』

『なっ!?』

自害でもさせない限り、自分は止まる気はない。と言ってるかのようなバーサーカーのセリフに雁夜は驚愕した。

そんな雁夜に構わずバーサーカーは言葉を続ける。

『カリヤ、今の段階でも僕らは多くの子供を救ってるんだ。それ以上を望むなんて奇跡でも起きないと無理さ。だったらもう良いじゃないか』

『だ、だが……それは……』

『どう言ったって無駄だぞ。僕はこのまま子供に構わずキャスターに攻撃する』

『……どうしても、止められないのか?』

『ああ、僕はこれが最善だと『覚悟』している。行動を曲げることはできない』

バーサーカーは、一度『覚悟』を決めてしまえば、よほどのことがない限りマスターでもその行動を止めることはできない。

それこそ、絶対的命権を持つ令呪でも使わない限りは。

それを聞き届け、雁夜もまた『覚悟』を決めた。

「……話は終わりましたかな?それで、どうしますか?見捨てますか?それとも……」

「考えるまでもない。それを許してしまったら、お前はまた人質を取るに決まってる。そうなったら泥沼だ。これ以上被害を出さないためにもお前をここで殺す」

「くはははは!!やはり神は残酷なものだ!!たった二人の人間さえも救うことができないとは!!それともただただ無能なだけか!!」

「……令呪で自害させられない限り、はね。そうと決まれば覚悟してもらおう……!」

慈悲深い神など存在しないことを証明したかったのか、その答えはキャスターを満足させるものだったらしい。

バーサーカーの返答にジル・ド・レエは驚喜する。

ライダーにもバーサーカーの判断は理解できる。王である以上、彼もまたそのような決断を迫られることがあったのだから。

ウェイバーも無力な自分を柵に上げてバーサーカーを咎めることなどできない。

しかし、それがキャスターの思惑に乗ってしまったようで、そんな有様に三人は顔をしかめる、が。

「……………え？」

突然バーサーカーが声を漏らした。

体の自由が利かない。

まるで何かに縛られているように。

今まさにキャスターに向けようとしていた腕が、自らの方へと向きを変えていく。

「バーサーカー、お前さん何をしようとしている？」

「お、おいマスター、何やってるんだお前？まさか本気か？」

ライダーが声をかけるが、バーサーカーは慌てたような口ぶりで別の誰かに話しかける。

しかし、そんなことなどお構いなしに、徐々にバーサーカーの手はこめかみにへと照準を合わせる。

バーサーカーの不審な動きに、ライダー達はおろかキャスターまでもが狂笑を止めて凝視する。

『令呪を持って命じる』

「止めろッ！そんなことをするんじゃないッ！マジに僕を自害させるつもりなのかッ!?考え直せッ！」

何処からか聞こえてきたその言葉にキャスターはほくそ笑んだ。

どうもバーサーカーのマスターは、自分のサーヴァントよりも子供たちの命を優先したらしい。

それならそれでいい、神が自ら命を絶つというのなら、聖女への呪縛も解けるはずなのだから。

『子供たちを助けるために、自分の体に爪を撃て！』

「うわああああああああ!!!こ、こんなところでッ！こんなところ

ろで終わるのは嫌だッ！頼むマスター！止めてく——」

ドン。と言う音と共にバーサーカーは自分の頭を撃った。

そして、その弾痕から少しずつ、バーサーカーの体が崩れ始める。彼の体はバラバラになっていき、その姿はその場にいた者たちからは見えなくなってしまうた。

「かにははははははははははは!! 呆気ない幕切れでしたねえ！しかしそれも当然のこと！聖処女を見捨てた神にはお似合いの末路と言うものでしょう!! ああ、これでようやくジャンヌをお迎えできる!! 我が願いは成就せり!!」

誰も声を発することができない。

神を討ち取れたと勘違いしているキャスター以外、誰も声を出すことができなかった。

呆気ない。呆気なさすぎるバーサーカーの最期に、思考が追い付かない。

「それでは、この子らにはジャンヌを取り戻すためにも我が宝具の生贄になってもらいましょうかね」

「……バーサーカーはその童たちの身代わりになったのではないのか？ 貴様、その約定を違えるつもりか？」

「知りませんね。神の方が私達を裏切ったのですから、この程度なんてことはないでしょう」

「あー……よく分かった。貴様、本当に救いがたい愚か者だな」

最初から、ジル・ド・レエは約束を守る気はなかったのだ。

そんなものを鵜呑みにしたバーサーカーのマスターの方が愚かだったと、それだけだと言っている。

その言いぶりに、ライダーの雰囲気が何か変わった。

それを察したのか、キャスターは子供たちから手を離し、一冊の分

厚い本をどこから取り出す。

膨大な魔力が渦巻き、あちこちに放たれている。  
いよいよもってその魔力が高まった瞬間――

『……………チュ……………チュミミィーゥン……………』

「なんですかこの音……ガッ!？」

キャスターの本を持っている腕が吹き飛んだ。

ライダーは何もしていない、ウェイバーももちろんそうだ。

子供たちも硬直するばかりで何も行動していない。

ならば、誰が……？

「……………約束を反故にするつもりだったのか……………なら、これで対等って訳だな……………」

キャスターは気づくべきだった。

なぜ、わざわざバーサーカーのマスターが念話を使わずに令呪で命令したのか。

キャスターに聴かせるかのように、自害させるような使い方をしたのか。

少し考えれば、その一連の行動はキャスターに勘違いさせるために決まっていると分かったはずなのに。

「残念だが、僕はまだ死んじやあいない……………契約不履行だって言われる前でよかったよ」

キャスターの背後から、バーサーカーの声が聞こえてくる。  
その声の方へ顔を向けると、全員が驚愕した表情を浮かべた。  
なぜならバーサーカーは、上半身上半身だけになってそこに存在していたからだ。

そのバーサーカーの異常な光景に、周りの人間は愕然とするが、当の本人はお構いなしに再び指先をキャスターの腕へと向け、『爪』を撃ちだす。

「あぎやつ!?!」

「僕の『直感』だけど、お前の力の源はその本にあるみたいだからな、その腕を狙わせてもらう」

不思議と、今のバーサーカーは調子調子がいい。

今何を狙うべきなのか、どうすればこの場を切り抜けられるのかが手に取るようにわかる。

そして、その『直感』の通り、キャスターの弱点はその本——  
『螺湮城教本』プレラーティーズ・スベルブックだ。

キャスターは、これがあるから本来魔術師ではないのにもかかわらず魔術が使える。

逆に言えば、これが使えなければキャスターは何の能力もないサーヴァントに成り下がる。

「何をぼさつとしているんだライダー! さつさとその子供たちを連れて撤退しろッ! お前の宝具なら子供くらい乗せられるだろッ!」

「それはいいが、お前さんはどうするつもりだ!?!」

「あいにくと令呪で『子供たちを助ける』必要がある! 先に行けッ! こんな奴僕一人で十分だ!」

バーサーカーは令呪で『子供たちを助ける』と命じられている。

つまり今のバーサーカーは、子供たちを助けることを優先して行動しなくてはならない。

キャスターをはさんで反対側にいるバーサーカーまで助けていたら、子供たちの生存率は下がってしまう。それは今のバーサーカーには取れない選択肢だ。

「行けってッ！こいつの傍に子供がいたら厄介なことになる。この領域は先に抜けるッ……！僕を待つ必要はない………安全が確保できればすぐに行くッ！」

「わかった………先に行っておるぞ。絶対に戻ってこい」

「あぁッ行けーッ！」

戦車に子供たちを乗せ終えると、轟雷と共にライダー達は空の彼方へと消えていった。

結局、バーサーカーは、子供たちを誰一人欠かすことなく救い出すことに成功したのだ。

『ふう……察しが良くて助かったよカリヤ。僕としては、こんなところで令呪を使ってほしくはなかったんだけどな』

『よく言うよ、お前から言い出したんだろうが『子供たちを助けたいなら令呪を使え』ってな』

『今のままじゃ不可能』『行動を曲げることはできない』バーサーカーはそう言った。

さらに『これ以上助けたいなら奇跡でも起きないと無理』と言う言葉。

そのまま受け取るならあきらめさせるようなセリフだが、雁夜はこの言葉の裏の意味に気づいたのだ。

令呪は奇跡を起こすためにあるもの。

つまりバーサーカーは、『子供を助けたいのなら、令呪で僕をサポートしろ』と言っていたということになる。

あのままだと本気でバーサーカーは子供を見捨てていただろう。なにせ、バーサーカーはキャスターとさほどステータスが変わらな



い。

子供たちがいては、どう頑張っても相打ちが限界になる。

だから令呪だ。令呪でサポートをして、ライダーに子供たちを連れて行ってもらえば問題が解決するというわけだ。

そして、今日の前のこいつをどうにかすれば目標は達成される。

「キャスター、『覚悟』はいいか？僕はできているぞ……………」

「…………貴様こそ、覚悟はいいだろうな？天の国から地の煉獄へと引きずり落としてくれる!!」

『狂った人間』同士が、森の中で激突した。

## サーヴァントのステータス 2

クラス：バーサーカー

マスター：間桐雁夜

真名：ジョニイ・ジョースター（ジョナサン・ジョースター）

性別：男性

身長：168cm / 体重：49kg

属性：中立・中庸

特技：乗馬

好きな物：イタリアンコーヒー 虫刺され跡 / 苦手な物：過去の自

分 白いネズミ

天敵：ヴァレンタイン大統領 デイエゴ・ブランドー

ステータス

筋力：D 耐久：D+ 敏捷：D- 魔力：E 幸運：C+ 宝具：

？

クラス別スキル

狂化：-

凶暴化する事で能力をアップさせるスキル。

……が、バーサーカーは自身のスキルによって、その恩恵はない。

代わりに正常な思考をすることができ、他人と会話することも可能である。

また、消費魔力も通常のサーヴァントとほぼ同じになる。

固有スキル

騎乗：C+

騎乗の才能。大抵の乗り物、動物なら人並み以上に乗りこなせるが、野獣ランクの獣は乗りこなせない。

更に馬を乗りこなす際、有利な補正が掛かる。

スタンド使い：A

人間が引き出す、目には見えない『精神的なエネルギー』を扱うことができる。

このスキルを持たない者には『精神的なエネルギー』を見ることはできない。

また、このスキルを持つていると、奇妙な縁や数奇的な運命に巻き込まれやすくなる。

『精神的なエネルギー』は人によって見た目も能力も変わる。

バーサーカーの場合、名前は『爪』。

本体であるバーサーカーの爪を回転させ、カッターのように物体を切り裂いたり、爪を弾丸のように射出したりすることができる。

回転使い：A

自然界に存在する黄金長方形から得られる『回転』エネルギーを操る。

バーサーカーの場合、彼のスタンドである『爪』や真球である『鉄球』を『回転』させている。

しかしこのスキルは、自然によって生み出された物質が無ければ扱うことができない。

このスキルと『スタンド使い』を組み合わせることで、バーサーカーは状況に応じて異なった『爪』を使用できる。

『爪』はACT4まであり、それぞれで別の特性を持つ。

漆黒の意志：A

戦闘狂や殺人嗜好とは一線を画す純粋な殺意。

目的へ向かう意志が恐ろしく強く、そのためには殺人すら厭わず、人間性すら捨てられる覚悟を持つ。

普段は意思疎通や会話をすることは可能だが、一度『覚悟』を決めてしまえば、よほどのことがない限りマスターでもその行動を止め





二本足の獣は気高きモノにすぎる。

バーサーカーとキャスター以外が存在しない森の中で両者は互いににらみ合う。

先ほどまでは、バーサーカーの『爪』が面白いほどに——決して愉快な状況ではないのだが、キャスターの腕に突き刺さっていた。

しかし、ある拍子に狙って撃つてもなぜかキャスターの腕がそれを避けるようになったのだ。

ならば胴体を、と標的を変えてもキャスターには一発も当たらない。

バーサーカーの『爪』は同じ才能を持つ人間にしか見ることはできない。それはサーヴァントであろうと例外ではない。

だというのに、なぜキャスターは避けることができたのか。

「おやおや、どうして私とその攻撃を躲しているのか分からない、と言った表情をしていますねえ」

「……ああ、その通りだよ」

したり顔で自分の疑問を指摘するキャスターにいら立ちが募るが、そう答えるしかない。

否定したところで意味がないし、調子に乗らせるとうっかりその秘密をばらしてくれるかもしれない。

「簡単なことです。貴方の攻撃は見えないですが、指先から発射しているのでしょうか？何かにつけて指をこちらに向けていますからね。だとすれば、その指先に入らないようにすれば避けられるというだけですよ」

「……なるほど……納得」

「もし『穴』になったとしても、そうなたら私でもその軌道を見ることはできます。『穴』の追跡はせいぜい十数秒、そうすればほらこの通り、私にも腕の応急処置ができるほどの時間があるというわけです

よ」

さすがは救国の英雄、戦術眼ははまだ健在だ。

この何回かの攻撃でバーサーカーの対処法を考え付いたらしい。

しかも、その際にキャスターは『螺湮城教本』プレラーティーズ・スベルブックを使って自らの負傷を癒してしまった。

「しかも！その射撃には制限回数があるんでしよう？そうでなかったらもつと撃ち込んできているはずですからねえ？」

「……………」

何から何までキャスターの言う通りだ。

一つ訂正するなら『爪』の制限回数の問題は時間が経てば解消されるということだ。

その上カモミールを摂取すれば『爪』の回復する速度は上がり、おおよそ一分くらいで元には戻る。

が、この目の前の光景を考えると、そうやって回復させている暇すらないのだろう。

バーサーカーとキャスターの間に、いつの間にか遮蔽物が生まれていた。

キャスターの血から生み出された烏賊のような生物の触手が、夥しい数で蠢いている。

それらの単体は、オニヒトデのような姿をしているが、あくまで『よな』姿であり、こんな生物は地球上のどこにも存在しない。

「……趣味の悪い造形だな。まるで僕と同郷の作家が書いた神話に出てくる怪物とそっくりじゃあないか」

奇しくもバーサーカーの参加していたレースの開催された年にその作家は生を得ている。

しかも、ほぼ一ヶ月違い。なのでバーサーカーの亡くなったところに

はその作家はまだ10歳ほどだ。

明確な面識はないが、どこか奇妙な縁を感じずにはいられない。

「そいつは確か、ナポレオンが持っているはずじゃあないのか？」

「何を言いますか、これは我が盟友により託された私の宝具。プレラーティの遺したこの魔道書により、私はこのように悪魔の軍団を従えることができるようになったのです。——あなた神を滅ぼすにはお似合いの軍団と思いませんか？」

そういう間にも、人間の腕ほどの太さのそれが、バーサーカーを拘束しようと襲い掛かる。

こういう手合いはまともに相手をする方が無駄だと判断したバーサーカーは、再び自分の体に『爪』を撃つて『穴』の中へと退避し、異形の怪物達に『爪』を放つ。

今の攻撃で数匹は倒せたが、倒された先からそれ以上の数の海魔が召喚されていく。

「だから僕は神じゃないって……ああもう、このやりとりにも飽きてきたッ！本っ当に面倒くさい奴だなお前ッ！」

あの宝具がバーサーカーの予想している効果と同じであったなら、この異形の怪物の群れはあの本がある限り無限に湧き続けることだろう。

あの神話では魔術書自体が怪物だったりする。しかもキャスターの持っているものはそれらの中でも相当高位に存在する代物。

だとすれば、魔術師でもないはずのキャスターが魔術を行使しているところを見るとあの書物そのものが魔力炉としての機能を持っていると考えた方が自然だ。

……それはつまり、キャスターには魔力切れと言うものが存在しないということの意味する。

あの怪物を殺したとしてもその残骸から援軍をすぐさま呼び出す



だろう。

残弾数が限られるバーサーカーでは、真正面からの勝負は避ける方がいい。

そういう意味でも、キャスターはバーサーカーにとって『面倒くさい奴』ともいえる。

「それと、貴方の逃げ道はありませんよ。森の外側への道は我が軍勢が配置されています。逃げようなどとゆめゆめ思わないことです」

「……『森の外側』……？『逃げる』……」

見てみると、確かにキャスターの後ろには数を増した魍魎達であふれかえっている。

如何に『ACT3』を使つたとしても、あの防壁を突破することはできない。

自分のステータスはあの異形の化け物たちを無理やり突破できるほどのものではない。

倒せば倒すほど増えていく敵、誰の目から見ても圧倒的不利なこの状況。

だというのにバーサーカーはどこか落ち着いていた。

普通の人間は倒すことのできない相手が立ちはだかり包囲されている時、どうやってその包囲網を抜け出し逃げ出そうとばかり考えるだが、バーサーカーは違った。彼は何と逆に――

「それはちよつと違うな……『逃げる』のは合ってる……だが合っているのはそこだけだ」

「何を……」

「僕が逃げる道はそつちじゃあなくて……こつちだよ」

「な――あっ!?!」

言うのと、バーサーカーは『森の中』へと指をさす。

バーサーカーのその行動の意図に気づいたキャスターは慌てて海

魔達を襲い掛からせるが、もう遅い。

「追いつけるもんなら追いついてみせろ！今の僕はちよつとばかり速いぞッ！」

キヤスターに背を向け、全力で『森の内側』へと駆け出していく。もうバーサーカーの令呪の効果は切れている。しかし、改めて自分のステータスを確認したら、何故か『敏捷』と『耐久』のステータスが上がっている。

Dランク相当の『狂化』があるのと同じだけの上昇効果、それでもバーサーカーの理性には何ら影響はない。

かすかに読み取れたバーサーカーの『宝具』の効果らしいが……

(……おかしい……僕は『宝具』を持っていないはずなのに、なんで今更出てくるんだ……？それに、なんでこんなにも分からないんだ……僕の宝具なのに……？)

バーサーカー自身も、その宝具の存在に今の今まで『気づかなかつた』。

確かに召喚されたときは『宝具』をもっていないはずだった。だが今確認すると無かつたはずの宝具がそこにある。

最後に自分で確認したのは二日前だが、その時は最初と同じステータスだったのに。

まだ出現しただけならいいが、ところどころノイズがかかっている情報を読み取ることができない。

使おうと思ってもどういう効果なのか分からないし、どう使えばいいのかさえバーサーカーには理解できない。

身体強化の効果は得ているから認識しなくてもいいのかもしれないが、どこかじれたい。

「……まさか、戦えば戦うほど強くなるとかそういう『RPG』みたい

な宝具じゃあないだろうな？」

聖杯戦争が始まって上がっているのだからそう考えるのが自然だが、どこか腑に落ちない。

『聖人の遺体』を集めているならともかく、今はただ戦っているだけだ。

『爪』も戦いの中で成長したとも言えなくはないが、もう今はすでに完成している。

だとしたらなぜ、こうして能力が上がっているのか？

「だけど、僕にとっては好都合だったことに変わりはない。問題なく逃げられる」

今はそんなことを考えていられるほど暇じゃない。

背後からの攻撃に細心の注意を払いながら逃げなくてはいけないのに、考え事をしていては集中できない。

幸い宝具の効果でバーサーカーはキャスターと敏捷は同じだ。

―がついてはいるものの、それだけでは速度が下がることはない。

背後からバーサーカーを捕らえようとしてくる海魔達を『鉄球の回転』や『爪』で倒しながらさらに奥へと侵入していく。

「森の反対側から逃げ出そうとしても、我が軍勢はこうしている間に数を増やして森の周りを取り囲んでいつている！奥に行けば行くほど貴方は追い詰められているですぞ！何が狙いなのですか貴方は！」  
「追い詰められている？ああ、確かに海魔は遠くの方まで増殖していつてるみたいだな」

キャスターの言う通り、すでに化け物たちはその数をどんどん増やしていつている。

まさに多勢に無勢、しかも中心に行くほどバーサーカーを包囲する数は少なく済む。

だというのに、窮地に立たされていくにも拘らず、バーサーカーは  
なおも森の奥へと駆け抜けていく。

「それがいいんだよ……。僕を包囲させるために奥に向かっ  
てるんだよ……。あえてだ。追いついて来いッ！」

「何を小癪な……。もうよろしい、魍魎達よ、あの神を地の底へと引き釣  
り降ろせ！」

異形の怪物たちの攻撃を必死に躲しながらバーサーカーは奥へ奥  
へと進んでいく。

このままいけば、バーサーカーを数の暴力で押しつぶせるキャス  
ターの方が有利だというのに、どうしてバーサーカーは愚直にも奥の  
方へと駆け抜けていくのか。

「ハアツ……。ハアツ……。ハアツ……。か、壁……。？」

その逃走劇も終結を迎える。

森を駆け抜けていたはずのバーサーカーの目の前に突如として巨  
大な壁が立ちふさがったのだ。

それ以上先へと進むことのできないバーサーカーは立ち止まる。  
立ち止まるしかなくなる。

ようやくバーサーカーを追い詰められたキャスターは、その姿を見  
て余裕綽綽と嘲りをかける。

「さあ、どうしますか？これで真正銘『袋の鼠』と言うやつです。私  
の軍勢が包囲するまでもなく、このような障害物に退路を阻まれると  
は運がないですねえ」

「……………ハアツハアツ……。『壁』に……。退路を阻まれる……………」

呼吸の乱れるバーサーカーを海魔達が襲い掛かる。

今度こそ、我が宿敵を葬ることができる。その事実にはキャスターは

破顔する。

この神を倒せるのなら、聖女のための生贄を奪われたことも、ここまで手間取らされたことも、中へと侵入することに激しさを増した妨害も、全て忘れられる。

もうすでに、キヤスターはバーサーカーに勝った気になっていた。

「……キヤスター……」

「どうしました？末期の祈りでもしたいのですかな？」

それがいけなかった。忘れてはいけなかったのに、勝った気になって忘れてしまった。

キヤスターは何のためにこの森に来たのかを、どうして森の中心に行けば行くほど妨害の威力が増していったのかを、キヤスターは忘れてしまった。

「壁に退路を阻まれるから……いいんじやあないか……」

「はっ！ついに狂いましたかっ！バーサーカーらしい最期ですねっ！さあ、恐怖なさい！絶望なさい！それこそが私の糧となるのです！」

キヤスターは、この森の中心には一体誰がいるのかと言うことを忘れてしまった。

だから、この結末は当然のものだったのだろう。

二人を取り囲んでいた海魔達が、一瞬で切り倒されてしまったという結末は。

「……えっ？」

「よく出てきた……お前も……自分の陣地を海魔で包囲されちゃあ、打って出るしかなくなるだろう？たとえ、マスターに制止されても……マスター自身に被害が行くなら、出てこざるを得なくなるからな……」

海魔の吹き飛んだ跡に、一人の少女が立っていた。

この凄惨で醜悪な場にはふさわしくないほどの神々しさをもって、その少女は目には見えざる剣を構える。

視線はキヤスターからそらさずに、少女はため息をついてバーサーカーに話しかける。

「……あの無垢なる子供たちを救ってくれたことには感謝しますが、貴方の手のひらで踊らされていると思うと釈然としませんね」

「そんなものお互い様だろ？そつちのマスターだって、『僕が消耗してくれば』とでも思ってたんじゃないのか？」

「否定はしませんよ。それに、ある意味で私は貴方に感謝しなくてはならない」

「そりゃあ、また何でだい？」

「キヤスターのような、戦いの意義を汚すようなものを私は捨て置くことはできないからです。あいにくとマスターはその意図を理解してはくれませんでした」

「……さすがは騎士様ってところだね、セイバー騎士王」

魍魎達をその一太刀で屠ったのは、目の前の壁——正確にはアインツベルンの城から飛び出してきたセイバーだった。

あのまま城から離れた場所で戦っていても、セイバーは恐らく助けに来なかっただろう。

いや、セイバーならば助けに来てくれたかもしれないが、マスターもセイバーのような高潔な精神をしているとは限らない。

マスターからすれば、面倒な陣営が勝手につぶれ合ってくれているのだ。共倒れを待つに違いない。

しかし、その脅威が我が身の傍で起こったらどうなるか。

キヤスターは見てのとおり、本があれば無限に異形の怪物を呼び出せる。

セイバーならば敵ではないだろうが、マスターはあくまで人間だ。この数の暴力には勝てるわけがない。

いまやキャスターは、この城を中心に海魔で包囲網を作っている。白兵戦に優れたセイバーとさえど、片手だけでマスターをかばいながら戦うのは不可能だ。

だから、このタイミングならば、セイバーはバーサーカーの援軍として来てくれる。

セイバーのマスターにとつても、キャスターをこのままのさばらせるわけにはいかないのだから。

「おおおジャンヌ！なんと気高い……なんと雄々しい……聖処女よ、貴方の前では神すら霞む！我が愛にて穢れよっ！我が愛にて堕ちよっ！聖なる乙女よっ！」

セイバーの威圧にあてられたキャスターは、恐怖も動揺もなく、ただひたすら恍惚の笑みを浮かべて涙を流す。

相も変わらず躁と鬱の差が激しいサーヴァントだ。……この場合は常に躁だというべきだろうか？

それに呼応してか海魔達がセイバーらに殺到する。

しかしそこは最優のサーヴァント、バーサーカーがあればほど苦戦した異形の怪物を次々にへと蹴散らしていき、それを援護するようにバーサーカーも『爪』で斬り漏らした敵の軍勢を貫き穿つ。

セイバーの力を借りることができるといふのは、まさに百人力と言ったところか。

「く……分かってはいたのですが、なんとも不毛な戦いですね……！」

それでも倒しても倒してもキリはない。

いくら百人力になろうが、相手の兵力は桁が違う。

千でも万でも召喚できる無限の軍勢では、いずれはこちら側が飲まれてしまう。

明らかに先ほどよりはこちらが優勢ではある。

ただ、優勢と言うだけで相手を倒すには至らない。

しかもその優劣も一時的なもの、時間が経つにつれてひっくり返されてしまうのは目に見えている。

「セイバー、あいつはあの本がある限りこの魍魎達を召喚し続けられる。このままではジリ貧だ」

「ええ、実際にその厄介さが身にしみて分かります。バーサーカー、貴方に勝算はありますか？」

「あつたら君の手を借りずに倒してるよ。僕に妙な期待をしないでくれ、これでもただの人間だったんだから」

バーサーカーの言うことに偽りはない。

ちよつと特殊な力を使えるというだけで、バーサーカー自身は一般人と何ら変わりはない。

無双の力を持つてるわけではないし、魔術が得意と言うわけでもない。

セイバーと戦ったら、万が一にも勝てやしないだろう。

「……貴方のような人が『ただの人間』であるなら、我々騎士は必要ないんでしようけどね」

「……いきなり何を言ってるんだ……お前？」

「いえ、自分の身の危険も顧みず、子供たちを救うような人間が『ただの人間』だとは到底思えないと。ただそれだけです」

「はあ……君まで僕のことをそういう風に扱うのはやめてくれよ。あれだって令呪のせいだからな？」

聖杯戦争に参加してからと言うもののバーサーカーは調子が狂いつぱなしだ。

さんざん生前はその人間性を否定され続けたのに、キャスター以外から人間性を否定された覚えがない。

どうもやりづらくってしようがない。



「だとしても、ですよ。……それはともかくキャスターまでの距離が遠い。どうにかならないものか……」

「手を貸した方がいいかね、高名な騎士王殿」

何処からか声がしたかと思ったら、赤と黄の稲妻が閃き海魔の一部を薙ぎ払われた。

あまりに突然の出来事に、セイバーとバーサーカーは呆気にとられる。

「……これも計算の内ですか、バーサーカー？」

「いやまさか……ある意味僕のせいかもしれないけど……」

自分の奇運は、何を引き起こすか分からない。

それは悪い方にも、良い方にも流されていく。

だが、この巡りあわせは間違いなく『吉良』だ。

「無様だぞ、セイバーにバーサーカー。あの倉庫街での戦いぶりはどうしたというのだ？」

戦場に乱入してきた美丈夫が、セイバーらに艶やかなウインクを送る。

よほどの美形でなければ似合わないであろう仕草は、かえって彼の魅力を引き立てるものになっていた。

その余裕さえ感じられる微笑をもって、デイルムッド・オディナが二人の前に現れた。

「これはこれは、私に難癖をつけてくれた狂戦士までいるではないか。本来ならば誅伐をするところだが、私にも目的があるのでな。この場では大目に見てやろう」

——その背中に、彼のマスターであるケイネス・エルメロイ・アー

チボルトを背負いながら。

「ランサー、お前はあの汚らわしい怪物共を処理しておけ。間違ってもこの城に指一本触れさせるな」

「了解しました。我が誇りにかけてその命令を全う致しましょう、我が主よ」

地面に降り立つとケイネスはそのまま自分のサーヴァントに指示を出す。

己がマスターの命を受け、ディルムツドは双槍を主に掲げ、不敵な笑みでもって返答する。

それを見届けると、ケイネスはおもむろにキャスターらに背を向け、アインツベルンの城へと歩みを進めた。

「……ランサーのマスター、お前は何をするつもりだ？」

「決まっている。セイバーのマスターに決闘を挑みに来た。聖杯戦争なのだから当然だろう？」

「……私が、そのような真似を見逃すとても？」

バーサーカーの問いに、ケイネスは振り返りもせず何のこともなげに言葉を返す。

そんなことを目の前で言われてセイバーが黙っていられるはずがない。

何かと気に食わないマスターではあるが、騎士としてセイバーは自らの主を見捨てるわけにはいかない。

「ふむ……ならば、これではどうかね？」

だが、セイバーがそのように言うことも予想の範疇だったのだろう。

ケイネスは令呪のある右手を掲げながら、厳かに声を発する。

「我が令呪を持つて命ずる。『ランサーよ、セイバーとバーサーカーと協力し、キャスターの魔の手からこの城を守れ』  
『なっ!?!』」

一瞬、二人にはランサーのマスターが何を言っているのか分からなかった。

奇跡を三度起こせる『令呪』を、明確に他の陣営が得する形で使うなど、誰が予想できるだろうか。

——そのありえない命令を受けた当のランサーは、何故か納得したかのような表情でケイネスの背中を見つめている。

「忝い、我が主よ。貴方の決闘の邪魔をする者は、その全てを我が槍で屠って見せましょう」

「……悪いが、私は貴様の雄姿を見ることはできん。『守り通した』という、その結果を持つてこい」

「承知っ！」

言い切るや否や、ランサーは海魔の群れへと一直線に突進する。

なおもまだ城の入り口を見つめながら、ケイネスはセイバーに告げる。

「私は、このまま貴様たちが蹂躪されるのを見届けてもいいところを、貴重な令呪を使ってまで援護してやっていいるのだぞ。それに比べれば私一人が侵入するくらいいわけはないだろう?」

「し、しかし……」

「どうしても貴様の主を助けたくば、あの見るに堪えない醜悪な光景を消し去ってから来るがいい。それともあれかね、高名な騎士王殿は助っ人に来た人間の頼み一つも聞けないほど心が狭いとでも?」

確かにランサーの助太刀は非常に心強い。

もしも彼らが静観していたなら、キャスターの手によってこの城は陥落していたのかもしれない。

そう考えると、ここでケイネスの背を切るのはセイバーの主義に反するが……。

「それに、その方が都合が良いのだろう。『魔術師殺し』である貴様のマスターにはな」

「貴殿は私のマスターのことを知っているのか？」

「下調べをすれば分かることだ。私は貴様らが有利な条件で挑んでやると言っているのだ、黙って行かせたまえ」

「……良かろう。行くがいい、その後の責任は持たぬぞ」

セイバーの了承を得たケイネスは、コツコツと靴を鳴らしながら進み、悠然と城内へと入っていった。

それを見届けると、セイバーは再び異形の怪物たちへと向かい合い、傍らに立っているバーサーカーに声をかける。

「行きますよ、バーサーカー。早急にあの雑魚どもを始末しなくてはならない理由が増えましたから」

「……侮辱するようで悪いけど、騎士道って面倒なんだなあ」

「いずれ貴方にも分かるようになりますよ」

頭を掻きながら呟いたバーサーカーの言葉に、少しセイバーは笑みをこぼして返した。

本人は気づいていないのだろうが、彼もまた正しい道を歩んでいるようにセイバーには見える。

きっとバーサーカーも、輝かしい精神を秘めているに違いないと彼女は確信しているのだ。

「待たせたなランサー。詫びと言っては何だが、この有象無象を貴方の倍は屠って見せよう」

「左手が動かぬのに無理をするな。その分この俺が戦果を挙げてやる、存分に休んでおけ」

「……どーでもいいけどさア。調子に乗って、倒されたりするなよ?」

何やら対抗意識を燃やし始めた騎士二人に対し、冷静なツツコミを入れるバーサーカーであった。

信念と誇りはぶつかり合う。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは、セイバーに見送られながらもアインツベルンの城へと乗り込んだ。

その彼の足元に、球状になった水銀の塊が転がってついていく。

この水銀こそがケイネスの魔術礼装——『ヴォールメン・ハイドラグラム月 靈 髓 液』だ。

ケイネスが持つ数多の礼装の中でも最強の一品で、水銀をその性質と質量を生かした武器兼防具として自由自在に扱うことができ、攻撃・防御・索敵の三つの要素を兼ね備えた万能武器である。

「アーチボルト家九代目当主、ケイネス・エルメロイがここに推参仕つた。求める聖杯に命と誇りを賭して、尋常に勝負願いたい」

ケイネスの挑発に応じる者は皆無だった。

そう単純に応じてくるとは端から思っていなかったケイネスは軽く嘆息すると、ホールの中央へと足を運んでいく。

そして、まさに中央に到達した瞬間、ホールの四隅に配置されていた花瓶が爆発音とともに破裂した。

だがそれで終わらない。衛宮切嗣という人間は、そんな子供だましのような罠を設置したりはしない。

その証拠に、花瓶の破片だけでなく、無数の小さな金属のつぶてが銃弾と見間違えほどの速力をもってケイネスの元へと殺到したのだ。

この場に切嗣が用意した罠はクレイモア対人地雷。爆発ではなく、その中に仕込まれている微細な鉄球でもって人間を殺傷する兵器。

そんなものを四方に置かれては逃げ場などない。特殊な装備でもしていない限り、人間の肉体は原形を留めることができないだろう。

——だが、ケイネスはその『特殊な装備』をしている側の人間だ。数多の鉄球がケイネスの体に到達しようというその刹那、ケイネスの足元に転がっていた水銀がドーム状に広がり、その全ての攻撃をはじき返したのだ。

ケイネスの礼装である『ヴォールメン・ハイドラグラム月 靈 髓 液』は、銃弾程度の攻撃ならば

自動で防御してくれる。

防御膜が解かれた後、周りを眺めたケイネスは、今の攻撃が魔術的なものではなく、科学によって生み出された兵器によるものだと理解する。

「……ほう、これが『地雷』とやらの威力か。実物を拝んだことはなかったが、なかなかの破壊力だ」

彼は自らの道である『魔術』に誇りを持っている。

彼はこの戦争で魔術だけで戦い抜くつもりであったし、少なくとも兵器に頼るなどということは彼の誇りが許さない。

そんな彼が、まさにその兵器を用いた敵の罠に、ただただ感心していた。

本来の彼なら、このような下劣な手段に訴える人間に対し憤りを通り越して落胆していたことだろう。

だが、今のケイネスは他の道を歩むものの誇りと言うものを認めている。魔術だろうが、科学だろうが、その道を究めようとしているものへの敬意を払っている。

だからケイネスは、この光景を冷静に分析するほどの余裕を持つことができたのだ。

「なるほど、『充分に発達した科学技術は、魔法と見分けが付かない』と言う言葉があつたが、これを見ると納得せざるを得んな。これならば、一般的な魔術師による攻撃よりもなお、誰でも簡単に効率よく敵を殺すことができるだろう」

自分の分析を口にしてケイネスの言葉には、怒りや嘆きなどはなく、どこか期待に満ちているものがあつた。

(……そういえば、魔術の道には『壁』はなかったが、『科学の世界』を覗いたことがなかったではないか。これは面白い、私の『魔術』が勝

つのか敵の『科学』が勝つのか勝負と言うところかね?)

ケイネスの聖杯戦争の目的は『自分の障害となる物を見つけ出し、それをのりこえること』だ。

あのまま時計塔にこもっていても、このような体験をすることもできなかったに違いない。

やはり、聖杯戦争に参加してよかった。そうケイネスは心の底から歓喜した。

世界にはまだまだ未知なるものが存在する。まだ自分の希望は失われてはいない。そのことを体で感じることもできた。それだけでもケイネスには時計塔で貰える幾万の称号よりも価値があるものだったのだ。

そして、生まれて初めて味わった喜びの次にケイネスの心に浮かんだ感情もまた初めて覚えるものだった。

魔術師である自分に最初に立ちはだかるものが『科学』とはなんと  
いう皮肉だろうか。

それだけ科学と言うものはバカにしておけるほどのものではない。  
……確かに科学の力はすさまじい。だが、だからと言って魔術が劣るとは限らない。

そのようなことはケイネスの誇りが許さない。魔術に誇りを見出しているケイネスには容赦することができない。

今ケイネスの心にある感情は『闘志』。ケイネスは科学に対して『闘志』を燃やしている。

『闘志』と言う感情も、ケイネスにはなかったものだ。なぜなら、彼にとって対等以上の敵などケイネスの前に現れたことがないのだから。

「——宜しい。ならばこれは『決闘』ではなく『試練』だと私は受け取った！」

闘志を燃え上がらせながら、ケイネスは敵陣の奥深くへと踏み込ん



でいった。

.....

「……本当に奴は魔術師なのか？」

ホールに隠してあったカメラからの映像を見て、衛宮切嗣は困惑していた。

本来の魔術師ならば、あのような迎撃をされれば『魔術の道を汚す不届き者』だと激怒してもおかしくないはずなのに、ケイネスは穏やかな表情を浮かべていたのだ。

訳が分からない。なぜそのような表情ができる？無感情ならまだしも、攻撃されておいて微笑むなど常人ではない。

「今思えば、あちこちで予想外のことが起こりすぎる。バーサーカーとライダーが組んだことといい、キャスターが召喚される英霊としておかしかったことといい、ハイアットホテルの爆破ができなかったことといい、ここまで何かがうまくいった例がない」

自分の不運さを軽く呪うが、そうしている暇はない。

ケイネスは切嗣にとって面倒な相手になっている。

魔術師としての腕は一流、科学に対して忌避感もない、なにより油断しない。

銃弾が通用しない礼装を持ち、挑発するのも難しく、こちらにスキを見せないなど、切嗣にはやりにくいことこの上ない。

それでも、今即座に動けば迎撃しやすい場所を確保するのも可能だ。

頭に叩き込んだのである地図を思い出しつつ自分のいる部屋から出ようとドアに向かい——そこで立ち止まる。

向かおうとしていた扉のカギ穴から、銀色の筋が垂れている。

それが何を意味するのかを切嗣が理解したと同時に、部屋の中央を銀色の刃が貫いた。

「……自動索敵か」

「ご名答だ」

切嗣が苦々しく吐いた呟きに、『ヴォールメン・ハイドラグラム月 靈 髓 液』に乗って床の開口部から現れたケイネスが口の端に笑みを浮かべて返す。

その姿を視認すると、切嗣はとっさにホルスターからキャレコを引き抜いて発砲する。

切嗣によつて広範囲に弾幕が張られるが、ケイネスの足元の水銀が地雷を防いだ時のように防御膜を展開しすべての弾丸を防ぎきる。

だがもちろん、切嗣は何の考えもなしに効き目のないと分かっている攻撃をしたわけではない。

あくまでもこれは時間稼ぎ、本命は別にある。

「固有時Time 制御Alter—二倍double 速accel!」

ケイネスが自身の礼装で攻撃する直前に切嗣が詠唱を完成させると、ケイネスの視界から切嗣の姿が消えた。

だからと言って瞬間移動をしたわけではない。切嗣はただ単にとんでもないスピードで動いただけだ。

そのスピードが、魔術師であることを考慮したとしても明らかに常軌を逸しているということを除けば、の話ではあるが。

「む!?!」

不意を突かれたケイネスは、そのまま切嗣が今しがたできた開口部へと逃走することを許してしまう。

ケイネスは、今切嗣が何をしたのかは分かっている。事前の調査で得た情報が正しければ、今の超強化は体内時間の流れを操作する『固有時制御』によるものだと同定できた。

だからといって、いざ目の前で行使されては対処するのは難しい。ケイネスは魔術師ではあるのだが、決して戦士ではないのだから。

もしもケイネスが実戦慣れした人間ならそのような隙を見せることはなかっただろうが、今この場面では切嗣の実戦経験の豊富さに軍配が上がった。

「……………取り逃がしてしまったか」

切嗣の逃げ出した穴を見つめながら、ケイネスは薄く笑った。

稀代の天才と言われる魔術師にとって切嗣の魔術の扱い方にはいくらか小言を言いたくもなったが、こと戦闘にかけては利用できるものは何でも使うその姿勢には素直に感服する。

それと同時に、彼は自分の失態に内心で舌打ちをする。『魔術師殺し』に礼装を見せて考察する時間を与えてしまったのは大きな痛手となることは容易に想像できる。

体内の時間経過を操作できるということは、逆に遅くすることもできるといふこと。そうなると熱源や空気の振動で相手を捕捉するヴォールメン・ハイドラグラム『月 霊 髓 液』による感知は難しいものになる。

あれでは自らの自動探索ももう役に立たないだろうと割り切ったケイネスは、いつどこから攻撃されても対処できるように水銀を自分の周りに集中させる。

（相手は魔術師殺し…………その上ランサーによるセイバーの負傷のことを考えると、自らの陣地に潜り込んだ私を前に逃げ出すとは考えにくい。こちらから出向かずとも向こうから奇襲を仕掛けてくるだろう。

今は自分への攻撃だけに意識を集中させればいい)

切嗣からすれば、ケイネスは自分の領域に入り込んだネズミも同然。

この絶好の機会に『魔術師殺し』が逃げ出すという選択肢をとることはまずありえない。

キャスターが城の外で暴れているが、必ずケイネスの命を狙ってくるに違いない。と断定したケイネスはわざと靴音を大きく鳴らしながら城内を駆け始める。

(さあ、どこから仕掛けてくる？ 生半可な銃では私の防壁は突破できない。となれば――)

「Release alter!」

水銀の探知から逃れるためか、『固有時制御』を解除する宣言と共にケイネスの背後に切嗣が躍り出てきた。

攻撃されると覚悟していたケイネスは驚くことはなく切嗣を視界にとらえるが、数瞬後には、『月 霊 髓 液』ヴァーホルメン・ハイドログラムによる自動防御で隠れてしまう。

先ほど逃げた時と同様に機関銃を発砲しているのだろう。無駄だと分かっているはずなのになぜそのような攻撃をするのか？

(決まっている。さらに高威力の銃でこの防御を貫くためだ。そのためこの防御膜を広げるように弾幕を張っているのである……)

そう分かっているとしても、ケイネスにはどうすることもできない。

自動防御で防いでいるのはいいが、そのせいで切嗣がどのような銃を使っているのか見えないため、いつその銃を使われるか分からないのだ。

防御する手段はあるにはあるが、この場面で使っているものではない

い。あくまであれは衛宮切嗣の『切り札』を封じるためのものだ。ここで使うとすべてが水の泡になる。

「うぐっ!？」

不意にケイネスの右肩に激痛が走る。

防御膜を見ると、そこには鉄壁であったはずの守りに黒い大穴が空いている。

やはり、切嗣はこの『ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液』を突破するだけの火力を持つ銃を持っている。ケイネスの予想は的中していた。

が、この『痛み』だけは予想できなかった。

銃で撃たれる痛みなど、魔術師でも一般人でも想像できないものだが、ケイネスはこの形容しがたい痛みによって一瞬我を忘れた。

「Scalp」斬ッ

単純に殺意に満ちた攻撃が、切嗣に襲い掛かる。

だが、その水銀の鞭は切嗣には届かない。すべて見切られているうえで躲される。

なにせ攻撃は『鞭』なのだ。その軌道を読み切ることなど、切嗣には朝飯前と言うもの。

ケイネスの本格的な攻撃が始まる前に、切嗣は再び逃走に移る。

その姑息な行動をとる姿にプライドが刺激され、ケイネスは癩癩を起こしそうになった。

——そして、その内側の激情を隠そうともせず、ケイネスは絶叫する。

「こ、この鼠がアアアアアア!!絶対に殺してやるっ!この私を傷つけるとは、神をも恐れぬ行為だッ!!許しては置かぬぞっ!」

離れていく切嗣の背中に、ケイネスは罵声を投げるしかできなかった

た。

.....

「所詮はただの魔術師。化けの皮が外ればこの程度か」

三階の廊下に立ち、切嗣はごちる。

離脱するときの怨嗟のような叫び声、その後階下から聞こえてくる破壊音。どうやら挑発は上手くいっているらしい。と判断した切嗣は、コテンダーに『魔弾』を装填する。

想定通りのセッティングで、切嗣はケイネスとの最後の対峙を迎えることができた。

あとはここまでケイネスが踏み込んでくるのを待つだけだ。

「あの態度も、科学を見下していたことからくる余裕だったんだろう。あとは詰めるだけ——」

「.....ようやく見つけたぞ、下衆めが」

そう言ってる間に、ケイネスが目の前に現れる。

落ち着いた様子を装っているが、その表情には切嗣への憎しみが見て取れる。

「もはや楽には殺さぬ……悔みながら、苦しみながら、絶望しながら死んでいくがいいッ！」

とたんに、ケイネスは切嗣へと走り出す。

その敵に向けて、先ほどのように切嗣はキャレコで弾幕を張る。こちらが全く同じ攻撃をすると、そう思い込ませるためにわざと似たような攻撃を仕掛ける。

「先と同じ手が通用すると……思うなっ！ F e r v o r , m e i s a n g u i s !」

即座に水銀が密集した竹林のように逆棘を林立させる。

逆棘一本一本に銃弾をはじくほどの強度を持たせたこの防御形態。ケイネスの肩を穿った30—06スプリングフィールド弾とて突破することはできない。

完全なる防御だが、それを維持する魔力はそれに応じて莫大だ。ケイネスの魔力のほぼすべてを用いないとこれは成し遂げられない。

——だがそれが切嗣の狙いだ。  
極限まで魔術回路を酷使して疲弊しているケイネスの顔をよそに、切嗣は右手のコテンダーを鉄壁の防御をもつ剣山に照準を合わせる。衛宮切嗣の切り札たる魔弾——『起源弾』は相手が魔術で干渉したときに真価を發揮する。

弾丸の効果は魔術回路にまで及び、魔術回路は出鱈目に『切断』『結合』される。

魔術回路に走っていた魔力は暴走し、術者自身を傷つける。その仕様上相手が強力な魔術を使っていればいるほど殺傷力が上がるのだ。ケイネスを挑発して、相手に最大限の魔力で起源弾を防御させることが切嗣の狙い。

先の対峙でのダメージなど、これにつなぐための布石でしかない。そして今、37人の魔術師を破壊してきた『起源弾』が、新たな犠

犠者に襲い掛かる。

「……っ!？」

ケイネスの喉は何かを発する前に血反吐を吐いていた。

ヴォールメン・ハイドラグラム

『月 霊 髓 液』も『起源弾』と接した瞬間に元の液状に戻り、その中にケイネスは倒れ伏す。

妙な痙攣をおこしながら、水銀の海を全身から流れる血液で赤色に染めていく。

『起源弾』が炸裂した何よりの証拠がそこにあった。

おそらく、ケイネスの心肺機能や神経は彼自身の魔力によってズタズタに引き裂かれているだろう。

「…………」

そんな凄惨な状況を作り出した当の本人は、ただ無感情にケイネスを見やるだけ。

自らの策がうまくいったことについては切嗣は何の感慨もわからない。

今まで同じように計算通りの結果を生み出しただけの話。

ただそれだけのことだ。

こうなってしまうえばケイネスは何の脅威にもならない。

捨て置いても直に死ぬだろうが、切嗣は敵には必ずとどめを刺す。

至近距離から頭に一発撃つという確実な方法で殺すため、キャレコを構えケイネスに近づいていく。

セミオートに切り替え、今度こそケイネスの命を奪う凶弾が発射された。

「……っ!？」

そして鈍い金属音が鳴り響き、切嗣はとっさに飛びのいた。



そこでようやく切嗣は表情をだした。『驚愕』と言う表情を。

「バカな……『起源弾』を食らったのに、なぜ水銀が動いた………?!」

切嗣の銃弾を、ケイネスの体の下に広がる『ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液』が受け止めたのだ。

そんなはずがない。もはやケイネスは『起源弾』を受けて魔術師としての力を失ったはず。

だが、現実には水銀は主を守るために防御膜を張った。なぜ、そのようないことが――

「……『起源弾』か……これしか防御する『方法』がないとはな……しかし勝利には犠牲が付きものでもあるわけだ……」

口から血を吐きながら、動けないはずのケイネスが両手について起き上がろうとする。

そうはさせまいと切嗣はキャレコを撃つが、水銀の防御壁に阻まれて届かない。

そして、少しよろけながらもケイネスは再び立ち上がった。

「どうやって……おまえはもう魔術が……」

「貴様の『魔弾』が当たる直前に魔力を切った………もともと、魔術回路が数本使い物にならなくなったがな………!!」

ケイネスは、切嗣がコテンダーを発砲したその瞬間に、『ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液』への魔術回路を切っていたのだ。

わざわざ互いに顔が見えやすい防御膜を張って、そのタイミングを見計らってもいた。

少し反応が遅れて数本は持っていかれたが、多少不便さを感じはするものの魔術を行使する分には問題ない被害で済んだというわけだ。

「……『起源弾』のことを知っているのか？」

「……貴様に殺された魔術師は皆、魔術回路が暴走していたぞ。そこから割り出すのなら訳はないのだよ。私を誰だと思っている……私ほどになれば、その程度の情報を集めるのは簡単と言うものだ」

聖杯戦争が始まる前に、ケイネスは切嗣によって始末された魔術師について調べて回っていた。

その被害にあつたものの特徴を並べると、全員に魔術回路の暴走があつたということが判明している。

普通の魔術師ならばこのような情報を集めるには苦労するだろうが、ケイネスはそれを可能にするだけの力があつた。

だから、切嗣への対処法を思いついていたということだ。

「あのように私を挑発して、全力で魔術を使ったところをその『起源弾』とやらで破壊する。その挑発に私も少しばかりつられてしまったものだ。だからそれに乗じて挑発に乗った演技を試してみたのだが……いかがだったかな？」

「……………」

ケイネスは、怒りや憎しみを表情に出す人間ではない。

本当に憤怒しているのなら、能面のように無表情になっていただろう。

実際、切嗣の挑発じみた行動に苛立ちはした。それでも、そこから先は全て激情にかられた『フリ』をしていただけに過ぎない。

そうすることで切嗣に『起源弾』を使わせるように仕向けるために。しかし、こんなもの正気の沙汰ではない。『起源弾』の効果はもちろんのことながら、弾丸としての威力は先ほどのものと変わらない。

実際に『起源弾』による魔術回路の破壊は免れたものの、ケイネスの腹部には弾自身の単純な破壊力によって大きな風穴があいている。

そのうえ、この防御膜を使えばいいのに二回目の対峙ではあえてスプリングフィールド弾を右肩で受けているのだ。

このような行動は、戦場を知らない人間が取れるようなものではない。

そこに切嗣は違和感を覚えた。

「……なぜ、おまえはそこまでできる？」

「聖杯戦争に参加しているのだ。それ相応の覚悟は必要だろう？ 貴様とて、何かしら『誇り』をもつてここに立っているのだから聞くまでもないことだと思うが？」

『『誇り』……だと？』

「そうとも、『誇り』だ。貴様には魔術師としての誇りはかけらもないようだが、別の何かがあるのだろう。聖杯を手にして、達成しようとする願いを持っているならな」

ケイネスのその言葉に、切嗣は頭の中にある何かのスイッチが切り替わったような気がした。

気のせいだと頭の隅に押しつけ、言葉を返す。

『『誇り』だなんて高尚なものを持っていない。戦場で誇りを謳えるような英雄サマじゃないんでね』

「……誇りも持たぬつまらない人間であったか。ならば早く教会に行つて保護でもしてもらうがいい。どうせ、その願いとやらもくだらないものに決まってる」

また、切嗣の頭の中で何かが切り替わる気がした。

最初のものよりも明確に、気のせいだと思えないような何かが。

「僕からすれば、お前みたいに戦場に誇りを持ち込む人間の方がくだらなく見えるぞ。……そういうお前こそ、どういう願いを持っているんだ？」

「聖杯にかける願いはない。どのような願いであろうと、私自身が達成させるからな。私が参加しているのも、私の障害となる壁を探しに来ただけに過ぎない。私のつまらない人生にあるはずの意味を探求している。いわば自分の『信念』を見つuckerためか」

三度、切嗣の頭の中の何かが変わる。

普段の切嗣ならこのような行動に出ること自体がおかしかったのだ。

敵であるはずの人間と会話をしようとするのが、冷酷無比な『魔術師殺し』である彼には異常なことだ。

「お前は『信念』もないのに、この聖杯戦争に参加したってことか？それこそ笑い話だ。闘争なんていうバカげた悪性の中に『信念』なんかがあるわけがない。おまえこそさっさと退場したらどうだ？」

「人間を人間たらしめているものは『誇り』だ。それを捨てている貴様のような人間など、ただの畜生と変わらない。下等生物ごときが人間に命令するとは度し難い。もう少し身の程を知るがいい」

「どうだか。殺し合いの中でないと見つけ出せない『信念』なんて犬にでも食わせればいい。そのくらいにしか役に立たないさ」

言葉に、感情が乗ってしまう。

無感情の殺人機械であるはずの衛宮切嗣の言葉に、感情が出てきてしまう。

今の切嗣は『魔術師殺し』ではなく、『衛宮切嗣』として喋っている。

「『信念』無き自分の人生を『誇り』あるものにしたいという当然の感情までも愚弄する気か？貴様には分かるまい、どんなものにも手が届いてしまうくだららない世界を。目指そうと思っただ時には到達してしまうつまらない人生を。『信念』をもって成長することができない、演劇のような現実をつ！」

「『信念』もない人間が『誇り』を保つためだけに殺人を犯すつもりか

!?『誇り』という幻想を盾に、血を流すという邪悪さから目を背けて、敗者を踏みにじっていく罪を背負うことに気づかず、殺人者を嬉々として持て囃す戦場と言う名の地獄に、軽々しく足を踏み入れるだなんて反吐が出るっ！」

この二人は互いに相いれない。

切嗣の『信念』は、戦いの中で『信念』を見出そうとするケイネスを認めることができない。

ケイネスの『誇り』は、戦いの中の『誇り』を無価値なものと断ずる切嗣を認めることができない。

致命的にこの二人は相性が悪すぎる。

「貴様のような『誇り』なき畜生がこの聖戦を汚すな！」

「お前みたいなの『信念』のない殺人者が戦争を語るな！」

狭い廊下で、再び両者はぶつかり合う。

人間は英雄になれない。

「獲ったり、キャスターっ！ 抉れ、『破魔の紅薔薇』！」  
「ひいっ!?!」

キャスターとの戦いは呆気なく終わった。

セイバーの宝具である『風王鉄槌』により放たれた超高压の疾風で怪魔の軍勢を着散らしながら『スリップストリーム』なる現象でランサーをキャスターの間合いまで送り、デイルムツドがあらゆる魔力の顕現を断ち切る『破魔の紅薔薇』で『螺旋湮城教本』からの魔力供給を絶つことにより、召喚された異形の化け物達を元の血肉へと戻したのだ。

(……セイバー達とマジに敵対しなくてよかった……僕だったら一瞬で倒されてた……)

セイバーの『風王鉄槌』は、威力などを考えれば明らかにバーサーカーの『爪』の上位互換であるし、その上、風に乗って移動するというランサーの超人的な運動能力をまざまざと見せつけられては、一対一で戦うことは絶対に避けたいと思ってしまう。

パラメーターもバーサーカーとさほど変わらず、むしろ宝具の強さで言えば向こうの方が明らかに上であるキャスターが、苦戦させたとはいえ一瞬で形勢を逆転されている。

やはりこの二人は、バーサーカーにとって天敵だ。

「貴様ツ！キサマ貴様キサマ貴様キサマキサマキサマアアアツ!!」  
「……覚悟はいいな、外道」

最後のあがきなのか、ただ逆上するだけのキャスターにセイバーは冷たい眼差しで返す。

黄金に輝く聖剣を振りかざし、いままさにキャスターを討たんとし

たその時――

「――ランサー！ランサーはどこにいるッ!？」

「な――っ!？」

アインツベルンの城から、必死の形相でランサーのマスターであるケイネスが飛び出してきたのだ。

突然呼びかけられたランサーは、ケイネスの方に気をとられ、キャスターから目を離してしまう。

そのランサーの隙を狙って、キャスターは『フレラータイス・スベルブック螺湮城教本』に魔力を込め始めた。

「無駄な足掻きをつ！」

キャスターが何かする前に斬り伏せようと一瞬で間合いを詰めようと駆ける。

が、幾ばくかキャスターの方が早かった。彼は召喚魔術では間に合わないと理解しているがゆえに。魔術を完成させる前にわざと失敗させることで辺りの血肉を煙幕代わりに拡散させた。

こうされてはうかつな行動がとれず、三人のサーヴァントは立ち止まるしかなくなる。

「……霊体化して逃げた……か……」

バーサーカーの言葉の通り、霧が収まるころにはキャスターの姿が消え、追跡が不可能なほどに遠くまで逃げてしまっていた。

こうなってしまったら、どうすることもできない。

何としても倒したいという気持ちもあるが、それよりもようやくこの戦いが終わったという安堵感にバーサーカーは浸っていた。

(……こうなると本格的にまずいんじゃないか？僕が単体で勝負し

て勝てる相手が見当たらないぞ)

最弱と呼ばれるキャスターでさえこのありさまなのだ。二人の手を借りてようやく追い詰めることができたキャスターと対等とは思えない。

むしろ、今の交戦ではバーサーカーはほとんど役には立っていない。邪魔にはなっていないだけで、勝利に貢献したとは思えない。

もしもライダーと組んでいなかったら、真っ先に脱落してもおかしくなかった。ということにバーサーカーは身震いした。

「ケイネス殿、一体どうしたというのですか？セイバーのマスターとの決着は……」

「どうしたもこうしたもない！我が工房が何者かによって半ばまで突破されかけているのだっ！」

「そんな……っ!?!」

「こうしていられる場合ではない！今すぐホテルに戻るぞ！」

どうやら、ケイネスが慌てて飛び出してきたのは、彼の陣地が第三者の手によって踏破されかけているからのようだ。

それはすなわち、このままではケイネスの婚約者であるソラウの身に何があるか分からないということ。

それを容赦出来るケイネスではない。自分の命よりも大事な婚約者を見捨てることはできない。

たとえば、見捨てた方が聖杯戦争において自分が有利になると分かっているとしても、ケイネスには戻らないという選択肢をとることができない。

「し、しかし、拠点まで戻るにはどう見積もっても私の足でも30分はかかってしまいます！それまで間に合うかどうか……」

「構わん！どれほど優秀な人間であろうと、あの地点から15分はかかる！口を動かす前に足を動かせ！それとも貴様は私の妻を見殺し



にするつもりかね!？」

「そ、そのようなことは決してっ！申し訳ございませんケイネス殿！」

「おおよその地点からホテルまでの距離はおおよそ『一般的な自動車の速度』で小一時間かかる距離だ。」

「地形を無視して一直線で駆け抜けられるサーヴァントと言えど時間はおかかってしまう。」

「セイバーでさえ2・5 kmほど離れているアインツベルンの結界の外輪まで到達するのに数分は必要となる以上、基本の敏捷が同じであるランサーでも即座に帰還するのは不可能だ。」

「たとえ全力で戻っても15分はソラウを危険な目に合わせてしまう、という事実にも焦りながらもランサーに叱責するケイネスに、背後から何者かが手を置いた。」

「……なあ、15分でそこに着けばいいんだな？」

「ああそうだ！だから私の邪魔を——」

「分かった。じゃあセイバー、車を貸してくれ。こいつらを送ってくる」

「……何？」

背後からかけられたバーサーカーの言葉に、ケイネスは訝しんだ。

「このサーヴァントは何を言っているのか理解ができない。そう言った顔をしている。」

「『全速力を出した車』ならホテルまでそんなに時間はかからないだろう？ 現代の馬と言っても良いくらいのスピードを出せるあれなら間に合うんじゃないか？」

「それは……そうだが……」

「安心しろ、僕には『騎乗』スキルがある。ミスって事故ったりはしないと約束するよ」

「ちよつと待ってくださいバーサーカー！そう簡単に車を貸せと言わ

れても……」

話の流れにようやく追いついたセイバーが抗議する。

何か自分が了承しないうちに車を貸し出すことが決定しているような流れにストップをかけた。

「……君は僕らの危機に駆けつけてくれたランサー達の頼みが聞けないのかい？いくら僕でも恩を仇で返す様なことはしたくないんだけど」

「それは、そうなんです……」

ランサーは自分たちがキャスターを相手に手間取っていた時に助けてくれたのに、それを踏みにじろうなどはセイバーも思っていない。

それでも他人のものを勝手に取引の材料にするのは躊躇われる。

かといってマスターである切嗣に聞いたとしても、まともな返事が返ってくるわけがないし、万が一返ってきたとしてもランサー達を足止めするように指示するだろう。

どうやっても切嗣たちを納得させることができないと、簡単に貸し出すわけにはいかない。

「……それとも、『脅されて無理やり車を強奪された』の方が都合がいいのか？だったらランサーと僕を同時に相手すると、車一台の損失、どっちか選ぶんだな」

「……そういうことなら、仕方がありませんね。分かりました、車ならあそこにあります。ご自由にどうぞ」

その逡巡を見破ったのか、セイバーに指を突き付けながらバーサーカーは問い詰める。

向こうから大義名分を作ってくれるのなら、セイバーもためらう必要はない。あっさりと前言を翻し、車のある方向に指を向けた。

三人は一斉にセイバーに背を向けて、その方向に駆け出していく。彼らの頭には、すでにホテルに戻ることにしかなく、こちらを警戒している様子もない。

今なら、不意打ちでもこの二組を落とすことがセイバーにはできる。

(……できますが、それは騎士として以前に、人間として犯してはいけない領分ですね)

本来ならマスターがすぐそばにいるランサーと、単純な地力の勝負では圧倒出来るバーサーカーが二人でかかってきてもセイバーなら高確率で勝てるだろうが、この二組を相手に卑劣な戦いはしたくなかった。

ランサーのマスターは、正々堂々たる戦いで切嗣に挑み、そのためにセイバーらの戦いに令呪を切つてサポートしてくれた。

その上、そこまでして挑んだ戦いを投げ捨ててもケイネスはソラウのもとに一刻でも戻りたかったから、彼は外聞も何もなく飛び出してきた。

ランサーもまた、騎士であらんとするその姿勢はセイバーも共感できたし、何よりも自らの主のためにその心血を捧げるさまは尊く映る。

自分たちの窮地の場面に颯爽と援軍として駆け付け、短い会話ながらも互いに確かな信頼関係を結んでいるこの陣営を卑怯な手でけりをつけたくはない。

バーサーカーも、確かにその性格や行動は騎士とはかけ離れているものだろう。

言ってしまうえば『どこにでもいるような人間』だ。自分の都合を優先し、目的を達成させるためなら他人だって利用するし、誰の下につくことも躊躇わない普通の人間だ。

戦闘能力も他のサーヴァントに比べると見劣りするし、宝具らしきものも持っていない。はつきり言って全サーヴァントで一番弱い可

能性すらある。

だが、その『人間らしい性格』だからこそバーサーカーに敬意を払える。

バーサーカーは人間らしくキャスターの魔の手にかかった子供たちを助けたし、人間らしく今もランサー達の手助けをしようとしている。

前者は『殺されそうな人間を助けたい』という人間なら当たり前の感情を元に動いているだけ。

後者は『助けられたから手助けする』という人間として当たり前の倫理を元に動いているだけ。

しかし、その当たり前をできる人間が、どれほどこの世にいるだろうか。

その強さは『英雄』とは程遠い。彼は『英雄』とは縁のない人間だろう。

そしてそれは同時に、彼は『英雄』を必要としないことを意味しているのかもしれない。

きつと彼は、どんな目的でも決してあきらめることはない強い人間だ。

『英雄』として尊敬しているランサー達と、『ただの人間』として尊敬しているバーサーカーに、卑劣な方法で勝利したならば、かの『勝利すべき黄金の剣』と同じように、この聖剣も折れてしまうだろう。

「それでは月並みな言葉ですが、お気をつけて行ってください」

「ああ、ありがとうセイバー。この車、すぐに返すよ」

そう言い残して去っていくバーサーカーの運転する車の後姿を、見えなくなるまでセイバーは見送った。

この選択に対して、後悔などあるはずもない。例え切嗣にどのようになじられ、非難されようと、この行動には誇りを持てる。

「……さて、切嗣の元に戻りますか。もしかしたらいくらか負傷しているかもしれませんがね」

少し沈む気もしたが、それでもセイバーは悪い気分ではなかった。

.....

「ランサーのマスター、しっかり認識疎外の魔術はかけてるなッ？少し飛ばすからどこかにしがみついておけッ！」

セイバーから借りたメルセデス・ベンツ300SLクーペのハンドルを握り、バーサーカーは深夜の国道を駆け抜けていく。

バーサーカーの知るところではないが、同じ道を昨晚アイリスファイルがこの車で運転していたが、彼女の荒々しい運転とは対照的にスマートな走りを見せていた。

しかも今のバーサーカーの方が260km/hというこの車の最高速度を出しているにもかかわらずである。

「むう……まさか私がバーサーカーの運転する車に乗る羽目になるとはな……」

「せめて俺に『騎乗』スキルがあつたなら……！」

「それ以上芸達者になるなら、ランサーとは別のクラスにでもなつた

方が早いんじゃないか？」

「こう助けてもらって置いてなんだが、妙な回転をかけた鉄球を投げたり、今のように車を運転している狂戦士には言われたくなかったな……」

ランサーの言う通りである。

かつて、ここまで多芸なバーサーカーが他にいただろうか？

もう彼以上に器用なバーサーカーとなると、敵の宝具を奪って自分のものとし、十全に使いこなすくらいはしないといけないだろう。

「この速度なら15分までには着けるはずだ。深夜だし人であふれかえってる歩道を走る必要もないくらい車道はガラガラだから、まあ間違いないかな」

「……忝いバーサーカー。お前には関係ないはずなのに、ここまでしてくれたことに感謝する」

「気にしないでくれ。お前のマスターの嫁がどうなろうが僕達にはほとんど影響がないから助けるだけだ。むしろ、その侵入者をお前から倒してくれた方が僕にとって都合がいい」

「打算があるとしても、助かることには変わらない。素直に受け取ってくれ」

「……本当に騎士道って面倒くさいな」

セイバーもランサーも硬すぎる。

そう思うと、騎士道というのはやはり自分の性格にはあっていないんだろう。

少なくとも、騎士然とする自分の姿は想像できない。

「……なぜ貴様は私の手助けをする？」

そんな中、ケイネスが訝し気にバーサーカーに問う。

はつきりいってこの質問をされることは、バーサーカーにとって非

常に居心地が悪いものだったので、若干うんざりしつつも、律儀に先ほどと同じ回答を口にしようとする。

「……言っただろう？ 侵入者を倒してくれた方が僕にとって——」

「ならば正直に打ち明けよう。私の妻であるソラウはランサーの魔力供給源になっている。彼女を見殺しにすると、私達は大いに優位性を失うぞ」

「ケイネス殿?!？」

「ランサー、貴様は黙っている」

そんなバーサーカーに、自らケイネスは自分たちの弱点を晒した。

本来なら、魔力供給のパスと令呪のパスを別々にすることなど不可能に近いのだが、ケイネスはそれを実現できるだけの才能があった。

このことは他のどの陣営にも知られていないし、暴露させる気も全くなかった。

だというのに、その突飛な行動をしたケイネスにランサーは驚愕の声を出す。ケイネスは手を突き出し制止させる。

「……それでどうかね。貴様はまだ私をソラウの元に送り届けるのか？ さつさとこの車から私達を突き落とした方が、貴様の優勝が近づいてくると思うが？」

「……いくら何でも僕をそこまで人でなしにするのは止めてくれ。お前らには助けてもらったっていう恩がある。さすがにそこまで落ちぶれたくないよ」

「何を言っている。この聖杯戦争においては弱みを見せるほうが悪い。そこに付け込まずにどうするつもりだ？」

「それじゃあ何か？ お前らをここから突き落としても、僕に報復しないって約束でもできるのか？ ランサーを敵に回すなんて僕は嫌だぞッー」

「そうでなくとも、貴様の攻撃なら私を抹殺することぐらいはできるはずだ。なぜそれをしない？ なぜそこまでして私の助けになろうと





文句あるかッ！」

「……そうか、それが貴様の本音か。いや、すまなかつた。失礼な詮索をしてしまった」

「全くだよっ！くっくッソッ！なんだよ！何で僕はこんな人助けをしてんだッ！もう自分で自分が分からなくなってきたッ！」

もしかしたら、ここまで感情をむき出しにしたのは現界してから初めてかもしれない。

バーサーカーは確かに目的のためなら手段は選ばないという『漆黒の意志』がある。

もしも自分の親友に再び会えるなら、他のことなんかどうでもいいはずなのだ。

だというのに、この体たらくは何だ？

桜や雁夜の体調を気遣ったり、無関係な子供を助けるために貴重な令呪を切ったり、拳句の果てにはランサーを始末する絶好の機会を不意にするだなんて、バーサーカーらしくない。

『自分に不都合が起こらない範囲で可能だから』ではすまないレベルにまで達している。

自分のようなクズが、今更『英雄』のような振る舞いをしようだなんて反吐が出る。

聖杯にかける願いよりも、無関係な他人の方が大事だなんてそんなことはありえないはずなのに。

「ならば私からも、礼を言おう。——本当に助かった。貴様の協力には心から感謝する……っ！」

自分の心の内に意識を向けていると、震えながら礼を言うケイネスの声が届いた。

今バーサーカーは運転をしている真っ最中だ、振り返るわけにはいかない。だが、それでもその声だけでケイネスが涙ぐんでいるのが分かった。

あのプライドの高いであろうケイネスが涙を流して感謝するとは、  
どれほど彼はソラウを大切に思っているのかがうかがえる。

バーサーカーの本心を暴くためにその命を駆け引きに使ったが、本  
心ではそのようなことは言いたくはなかったのだろう。

それでも彼は心からバーサーカーの行動に礼を言うために、その苦  
痛を飲み込んで問いただしていたと――

「……なんでそこまでして僕に質問なんか……」

「打算にまみれた人間に礼を言うのは、私の『誇り』が許さないからだ。  
まあおそらくは、貴様にも気高い『意思』があるのだろうと推測はし  
ていたがね」

「……そりゃあ買いかぶりすぎってやつさ。……そろそろ着くぞ。仕  
度は十分かい？」

「ああ。……そうだ、失礼を承知で頼むが、もう一つ質問をしてもいい  
かね？」

「……この際だ、もう何でも聞いてくれ。なるべく答えるつもりでは  
あるけどさ」

さきほどまでの激情はどこに行ったのか、今のバーサーカーの心は  
どこか穏やかだ。

ケイネスも、元と同じように仏頂面に戻っている。

それでも、二人の間には険悪な雰囲気はない。最後の質問くらいは  
気軽に答えられそうだった。

「……貴様の真名――いや、貴様の名前を伺いたい。聖杯戦争とは関  
係なく、恩人の名前を知っておきたいのだ」

本来なら、このような質問をサーヴァント相手に尋ねること自体が  
間違っている。

真名を知られるということは、そのまま弱点を知られるようなも  
の。

それでも、ケイネスは恩人の名前を知っておきたかった。バーサーカーに対して敬意を払っているから。

「……それくらいならお安い御用さ。知られて困るような名前でもないしね」

「それはありがたい。それで、名前は？」

「ああ、僕の名前は——」

—————

「……ジヨナサン・ジョースター……か。これまた奇妙な縁ではあるな」

「ケイネス殿がおっしゃっていた人物像とは離れますが、彼もまた気高い人間であると私は思います」

「貴様がそういうのならそうなのだろう。……おおかた、可能性のうちの一つと言うものであろう」

「可能性の一つですか？」

「そうとも、奴もまた、根の部分は彼と同様に——」

太陽の下で生まれた者たちは黄金に出会う。

その家に住んでいる夫婦は悲嘆に暮れていた。

彼らは共に悲しそうな表情を浮かべ、時折女性の方が泣き出したかと思うと男の胸に縋りつく、と言った行動を繰り返している。

それもそのはず、彼らは先日から我が子——コトネが行方不明になっってしまったからだ。

ただ行方が分からないだけならいい。それでも十分不安に思うのに足る理由にはなるが、もしかしたら生きているかもしれない。という希望を見ることができる。

しかしそれは、最近この冬木市を騒がせている『連続殺人および連続誘拐事件』という悪夢がなければの話だ。

いまだに警察も事件の犯人を見つけられることもできず、その犯行はどんどん広がっていくばかり。

その上、殺された遺体はどれもが猟奇的な状態で発見されるのがほとんど。そのような事件が起きているこの街で子供がいなくなったというのは、それはもはや死を意味するのと同義である。

警察には届けたが、いまだに見つかったという通達は来ず、もはや生存していることが疑わしくなってきた。

そのせいで、二人は深い絶望感を味わっているというわけだ。

まだまだ幼い我が子は、きつともうこの世にはいないのだろう。ならばせめて、どんな姿でも構わないから最後はこの家に帰ってきてほしい。死んだ後も犯人に好きなようにされるのは耐えられない。自分たちのかけがえのない宝であるコトネを、どうか自分たちの手で埋葬させてくれ。もはや、彼らにはそれしか希望は残されていないかった。

殺人鬼に弄ばれ、その尊厳を踏みにじられていく子供の姿を再び想像してしまい、妻が痛哭しそうになる。

まさにその瞬間、ここ数日鳴りもしなかったインターホンが来客を二人に知らせた。

今日彼らを訪ねる予定の知人はいない。ならば警察か。

男性がカメラを覗き込むと、想像の通り警察の制服に身を包んだ青年がそこに立っていた。

『——申し訳ありません。コトネちゃんについてお伝えしたいことがあつてこちらに参りました。お手数とは思いますが出てきてもらえないでしょうか?』

「……はい、分かりました。今すぐ伺います」

おそらく、娘の死体が見つかった、というようなことだろう。と男は思う。

警察が自分たちに用があるとしたら、そのくらいしかないのだから。

今泣きじやくっている妻が出るわけにもいかない、そのまま男は幽鬼のような足取りのまま玄関に向かい、扉を開ける。

「わざわざすみません。コトネちゃんのお父さんでしょうか?」

そこに立っていた警察官は、外国人だった。

さきほどは胡乱気に見えていなかったが、その帽子からは少しばかり金色の髪がはみ出ている。

男は、なぜ外人が日本の警察に、とも思ったが、そんなことよりコトネのことの方が重要だ。

「コトネは……あの子は、どうなったんですか……?」

「……そのことなんです」

警察官から伝えられるだろう事実を受け入れるため、男は覚悟を決めた。

自分たちの愛娘の死を現実のものとして直視する、その時が来たのだと。

どのような結果を伝えられても耐えるために、最後の気力を振り

絞って歯を食いしばり、警官の次の言葉を待っていると――

「――お父さんっ!!」

どこかで聞いたような声と共に、腹部に何かがぶつかってくる衝撃が感じられた。

その衝撃もまた、彼が常日頃から味わっているものだ。

仕事から帰ってきたとき、いつもいつも彼に襲い掛かるこの衝撃に癒されてきたのだから。

そして次第に感じられるぬくもり。もう二度と、この温かさを感じることができないだろうと悲しんでいたはずの、そのぬくもり。

信じられずに呆けてしまったその表情のまま、男は抱き着いてきた少女に目を向けた。

「……………えっ? コト……………ネ……………?」

「うん…………… 私だよ、お父さん……………っ!」

そこには確かに、もう死んだと思っていた自分の娘の姿があった。いなくなる前の姿と何ら変わることなく、コトネは父親の目の前に確かにいる。

唐突に突き付けられた現実にはコトネの父は茫然となったが、次第に涙が目の内にはじんでくるのを感じずにいられなくなってきた。

「コトネ……………っ! ああ、コトネっ! 生きてる……………コトネが生きてるっ!!」

「お父さん……………お父さんっ!」

互いに嗚咽を漏らしながら呼び合い、もう決して離さないかのように父親がコトネを抱きしめ返す。

その声が耳に届いたのか、家の中からコトネの母親が飛び出しコトネの姿を認めると、父親と同様にコトネに抱き付いて一緒になって涙

を流した。

肩を寄せ合い涙まじりで望外の喜びに浸る三人に、ばつが悪そうに警察官が声をかける。

「その様子だと間違いないようですが、その子がコトネちゃんです合ってますよね?」

「はい……っ! この子は私達の娘で間違いないです!」

「それは良かった。……それと、誘拐されていたのもあって衰弱しているようなので、病院に連れて行った方がいいと思います。一応こちらでもある程度は検査してありますが、専門家に任せただ方がいいので」  
「分かりました……! 本当に……本当にありがとうございますっ!  
! コトネを助けてくださって、本当にありがとうございますっ!  
「……いえ、ある意味僕達のせいでもあるんですから、お礼なんて受け取れませんよ」  
「そんなことはありません! 貴方がいたから、私はこうやって我が子を抱きしめられるんです! どうか、礼だけでも受け取ってください!」

「……分かりました。その気持ちは確かに受け取りましょう」

警察官はそう言うと、しゃがみこんでコトネの目線を合わせると、懐から金属のようなものを取り出し、コトネの手に握らせた。

あまり見慣れない形の金属に、コトネは首をかしげる。

「お兄ちゃん、これなんなの?」

『蹄鉄』って言って、馬の爪につける金属だよ」

「でも、私の家にお馬さんはいないよ?」

「それはおまじないさ。それを飾っていると、魔除けになったり幸運を呼び込んだりできるんだ。これをコトネちゃんにあげるよ」

「そうなの!? じゃあ大事に飾っておくね!」

「これからは、知らない人について行ったらだめだからね?」

「はいっ!」

「ああ、いい返事だ」

コトネの元気のいい返事を聞いて、警官は目を細めながら頭を軽くなでた。

そして一度コトネの家族全員の顔を見回し、立ち上がる。

「今回は助けられましたけど、まだ犯人は逃走中です。くれぐれもコトネちゃんからは目を離さないようお願いします」

「もちろんです。もう二度と、コトネを危険な目には合わせません」

「それでは、他の子供たちを送り届ける仕事があるのでこれで失礼します」

「分かりました。お仕事が大変だとは思いますが、どうかお気をつけて」

「……ありがとうございます」

警官は軽く頭を下げると、傍に立てかけてあったバイクに跨りエンジンをつける。

そしてそのまま、コトネ達の家を振り返りもせず走り去っていくさまを、コトネの父親はその姿が見えなくなるまで頭を下げ続けた。

「今度警察署の方にもう一度お礼しに行かないといけないな」

今は仕事で忙しいとのことだからろくにお礼をすることができなかったが、あの程度でこの恩を返せたとは思えない。

あの警官の名前を聞きそびれてしまったが、外国人の警官なんて珍しいだろうからすぐにわかるだろう。

そんなことを考えていた父親に、コトネは不思議そうな顔をする。

「え？ あのお兄ちゃんお巡りさんじゃないよ？」

「何を言ってるんだいコトネ。そんなわけ——」



待てよ。そういえば今彼の乗っていたバイクの色は何だった？

普通警察官なら白バイであるはずなのに、今の彼のバイクは市販されているものと変わらないものではなかったか？

それに、彼は一度たりとも『自分が警察官だ』とは言っていない……。

「だって私が助けられた時も普通のお洋服だったし、お泊りしたのもおっきなお家だったもん」

「いや、でもあの服は……」

「あれは近くに来たから着替えてただけだよ？ それまでは別の服だったんだ」

それはいわゆる変装と言うやつではないだろうか。

だとしたら、正体を隠して子供を助けたということになってしま  
う。

なぜそのような必要が？

「お兄ちゃんすごかったんだよ！ 悪いお化けを一人でやつつけ  
ちやっただから！」

「……………コトネ、お前を助けたあの人はバイクに乗って戦うヒー  
ローか何かだったのか？」

——これは余談ではあるが、冬木市のあちこちで『行方不明になっ  
ていた子供たちがバイクに乗った青年によって親の元に送り届けら  
れた』と言う事態が起きた。

しかし誰もが子供を帰してきたバイクに乗った青年の顔をはつき  
りと覚えておらず、子供たちはそろって『お兄ちゃんが悪者を倒して  
助けてくれた』と証言していることから、しばらくの間、冬木市では、  
『あの有名なマスクドヒーローが冬木市に実在した』という噂が流れ  
ることになる。

.....

「.....これで全員帰らせることができたかな」

件の警察官――バーサーカーは警官の制服から元の服に着替えながら一人ごちる。

ウェイバーに認識疎外の魔術をかけてもらってはいたが、昨夜かけてもらったケイネスのものと比べるとその効果は弱く、せいぜい『臃げな特徴は覚えているけど、なんとなく顔を忘れてしまった』くらいにしかならなかった。

そこで子供を親御さんの元に帰しても違和感のない格好である警察官の衣装を身にまとって行動していたというわけだ。

昨日の今日でパトカーや白バイも調達することもできず、元からあったXJR400Rで出前さながら子供たちを送り届けたのだが.....。

「なんとというか.....疲れた.....」

サーヴァントは肉体的に疲れることはない。魔力が続く限りは動き続けられるし、そうでなくても十軒ほどの家を回るくらいならばサーカーにはどうってことはない。

ただ偏に彼が疲労感を味わっているのは、帰した子供の親から誰一

人例外なく涙ながらの感謝をされてきたからだ。

助けたと言えば助けたがバーサーカーの本意ではないし、ライダーと組んでいることからくる余裕がなければ令呪を切つてまで助けるように雁夜には言わなかっただろう。

幾度となく感じた居心地の悪さ。だけど、それでも――

『それでも、気分は悪くないだろう？』

『……否定はしないよ』

昨日のケイネスとの会話で思わず本音を吐露してしまった影響か、どこか晴れ晴れとした表情でバーサーカーは雁夜との念話に応じる。

これまでは、自分が善人ぶつた行動をとっていることを指摘されたら、すかさず否定し自己嫌悪に陥るバーサーカーであったが、一度口に出してしまえば吹っ切れてしまった。

そもそもそんなに悪ぶろうとするつもりはないのだし、偽善だろうと何だろうと、やりたかったからしただけのことなのだから、他人にとやかく言われる筋合いもないか。とバーサーカーは折り合いをつけた。

『なんだかお前、感謝されることに対してアナフィラキシーショックみたいな反応してたもんな』

『まあ、前世が前世だったからなあ』

そう言つて、バーサーカーは自分の人生を振り返る。

父親からは兄の身代わりになればよかったなどと言われ、騎手としての栄光を失った時にはバーサーカーの周りから持て囃していた人間がことごとく居なくなり、入院していた時なんか誰一人として見舞いに来る知人さえもいなかった。

そのせいで、バーサーカーは軽く自分の価値を低く見てしまっていたのかも知れない。

自分は存在する価値もないような人間ではないのか、と心のどこか

で思っていたのかもしれない。

誰もが、バーサーカーそのものを見てはくれなかったから……。

『ああ……うん、そうだな。感謝されるっていうのは、こんなに嬉しいものだってようやく身に染みて理解できたよ』

『それは……良かったな』

でも、この聖杯戦争で出会った人たちは、バーサーカーの行動を評価してくれている。

それを最初は恥ずかしがっていたが、彼らの感謝を素直に受け入れてみたら、心が温かくなるような気分になる。

初めて味わう感覚にバーサーカーは軽く綻び、そんなバーサーカーを見て雁夜は、自分たちの恩人が穏やかな気持ちになっているのを嬉しく思った。

『それはさておき、ウェイバー君がキャスターの根城を突き止めたらしい。場所は未遠川へ流される用水路の注ぎ口だっけ』

『へエ、たった一晩でも見つけたのか。早いじゃあないか』

『ライダー達はもう目的地に向かってるけど、バーサーカーはどうする？』

『もちろん行くさ。僕のこの目でキャスター達を倒すのを確認しないと安心できないからね』

キャスターは早めに始末しておかないと、バーサーカーに何をしでかすか分からない。

後顧の憂いを払拭するためにも、バーサーカーはキャスターの陣地に強襲することにした。

それに、あのキャスターのことだ。ライダー達に追い詰められても、姑息な手段を使って逃げ出す可能性の方が高い。

事実、昨晩は三騎を相手にして、まんまと逃げおおせたのだし。

『じゃあ、何かあったらまた念話で伝えるよ。サクラをちゃんと見守っておけよ』

『そんなの、言われなくたって当たり前さ』

そうやって軽口をたたき雁夜との会話を中断すると、バーサーカーは周りを見渡した。

今バーサーカーがいるのは児童公園。キャスター達の犯行のおかげで、今ここで遊んでいる子供たちの姿はない。

むしろその方がバーサーカーには都合がいいものではあったが、本来なら少しは幼い子供たちが遊んでいるであろう場所が静けさに包まれているのはどこことなく違和感を覚える。

こうなったのも聖杯戦争のせいだと思うと、自分が関与していることながら、この戦争を思いついた奴はもう少し一般市民を巻き込まないようにする配慮はなかったのだろうかとバーサーカーは嘆息する。

ここが霊地として優秀であることは話に聞いてはいるが、彼と敵対したあの大統領でも人的被害は少なくしようとしてはいたのに……。

「考えていても仕方ないな。さっさと移動しよう」

一休みのつもりでここに立ち寄ったが、ライダー達を待たせるわけにもいかないと、数分前に下ろしたばかりの重い腰を上げようとし――

「――そこのお前、少し話を聞かせてもらおうぜ」

突如背後からかけられた若い男性の声に呼び止められた。

声の感じからすると20代半ばほどだろうか。しかし、その低い声には、どこか壮絶な人生を歩んできたような雰囲気を感じ取られる。

バーサーカーが振り返ると、そこには白い帽子に白いコートを纏った2m近い青年が立っていた。

黄色人種と白人の間に生まれたハーフのような容姿をしており、長

身であることと相まってただならぬ威圧感を放っている。

このような人物にバーサーカーは出会ったことがない。間違いなく初対面の人間だ。

「……いったい何の用だ？ 僕はこれから行かなくっちゃあいけないところがあるんだ。邪魔をしないでくれ」

「なあーに、そんなに時間はとらせねえさ。もつとも、俺達の質問にてめーが素直に答えるっていうのならの話ではあるが……」

「そう言うなら、少しはその高圧的な喋り方をどうかしてくれないか？」

いきなり話しかけてきた生意気そうな青年に対し、バーサーカーは冷たい視線で答える。

明らかに目の前の人間はバーサーカーに『質問』しようとしているのではなく、『尋問』しようとしている。

ということはつまり、目の前のこの青年は、人にもものを尋ねるとき態度を知らない人間なのかあるいは、バーサーカーが青年の欲しがっている情報を持っていることを確信しているかのどちらかだ。

前者であるならさっさと無視してこの場から退散すればいいのだが、後者だとすればそうもいかない。

なぜなら、バーサーカーが知っている情報を求めていると言うことはすなわち、それは『聖杯戦争に関して何かしようとしている』人物であることに他ならない。バーサーカーの持っている情報で、現代に生きる人間が欲するものと言えばそれしかないのだから。

そのような人間を放置していたら、この男の行動が自分にどのような影響があるのか分かったものではない。

「それに、俺達ってのはなんだ？ 僕の見る限り、ここにはお前しかないように見えるんだけど……」

「てめーがヤケを起こして襲い掛かってくるかもしれねーんでな、大人しくすると約束するならすぐにだつて出てくるさ」

「そもそもお前は僕に何を聞きたいんだ？ そんなに必死そうな態度なんかとって、僕に聞きたいことってというのは？」

「だったら、率直に聞けぜ」

サーヴァントであるバーサーカーならば、魔術に関係ないような人間に対して戦闘になろうと負けることはないはずなのだが、ポーカーフェイスを装っている表情の裏で、背中に冷や汗が流れるのを感じた。

なぜだか分からないが、この青年と戦うことになるのは避けた方がいいと彼の『直感』が頭の中でささやいている。

この『直感』はスキルのものではない。また別の宿命づけられた何かを感じ取った直感だ。

おそらく隠れているというもう一人の人物も、一筋縄ではいかないのだろう。

ならば、変に意地を張らずに青年の言う質問とやらに答えてやった方がいいとバーサーカーは判断した。

どうしても答えられない質問であるならば、たとえ殺し合いになったとしても答えるつもりは一切ないが。

その意図を察したのかはわからないが、青年は軽く帽子を被りなおしながら言葉が続けた。

「この冬木市での誘拐事件について知っていること全てを話せ、洗いだらい全部だ。どうにも、こいつは普通の連続誘拐とは違って、奇妙な異変と言うやつらしい」

「……それについて話すかどうかを決める前に、もう一つだけこっちから聞きたいことがある。いいか？」

「安心しな、『聖杯戦争』については知ってるぜ。俺の連れが聞きだしてきたんでな。俺達に隠す必要のあるものは一切ないと思ってくれて構わねえ」

「……オーケー、だったら話そう。別にこのことが他人に知られても僕には不利益にはならないからな」

「そいつはよかった……おいじじい、出てきても問題ねえぜ」

呼びかけられ、青年の背後の壁からまた一人男性が姿を見せた。

しかし、『じじい』と言われたはずの男性だが、髭のせいで年を食っているようには見えるが、老人扱いするには十年は早い風貌で、体付きもなかなかに逞しい。

もしも髭をそっていたなら40歳と言っても通じるほどに若々しいその男は、ちらりとバーサーカーの方を眺めると、青年に対して少しあきれたように自分の頭に手を置いた。

「ハア……おまえなあ、もう少し人に聞く態度っていうものを学んだほうがええんじやあないか？ あんな尋ね方をしたら、よつぽど親切な人間でない限り第一印象が最悪になってしまうじやろうが」

「説教垂れる暇があるんだつたらさつさここいつに質問するんだな。どうにも、こいつにはこの後用事があるそうだけ」

「まったく、数年経とうが子供ができようが、お前の性格は治らんようじやな……」

言っても聞かない様子の青年の様子に、男性は心底虚しさを覚えたようだ。

この知らない内に人を威圧してしまう青年の態度は、どうにもならないらしい。

そんな様子に、バーサーカーは子供ができたのに落ち着かないのはどうなんだろうかと疑問に思い、なんとも目の前にいるこの男に対して懐かしさを感じてしまう。

召喚されてからこのかた、かつての自分の人生に現れるような人間には遭遇しなかったが、どことなくこの青年はバーサーカーの生きていた世界にいても違和感がないほどに、不思議なシンパシーを感じた。

「……質問に答えるのはいいけど、せめてお前らの身元ぐらいは教え



てくれないか？ 何も知らない人間に秘匿にすべき情報を教えるのは抵抗がある」

「むっ……それもそうだな。それでは自己紹介といくかのう。お前さんは何から聞きたい？ 趣味か？ ちなみにわしの趣味はコミック本集めじやッ！」

「やれやれ……そのためーのふざけた性格も治ってないようだぜ、じい」

バーサーカーの要望に軽いノリで返してくる男性に、仕返しと言わんばかりに青年があきれ果てる。

おそらくではあるが、この男性とライダーを会わせたらものすごく意気投合しそうな気がするのはバーサーカーの気のせいではないだろう。

この二人を足して二で割ったらちようどよさそうな人格になるのではなからうかとバーサーカーは途方にくれながら益体もないことを考える。

「ああ……うん……とりあえず名前だけでいいから聞かせてくれないか？ もうこの場はそれだけでいいよ」

「なんじゃ、つれないのう」

おそらくバーサーカーがこの男性のノリに合わせていたら色々手遅れになりそうだ。

この二人組、互いが真逆の方向でバーサーカーにとってやりにくい人物だ。

「まあいいか、わしの名前はジョセフ・ジョースターじや。昔はジョジョと呼ばれとったわい」

「……俺の名は空条承太郎だ。協力してくれるのには感謝するぜ」

「……………嘘だろ？」

あまりに聞き覚えのありすぎる名字を名乗られ、呆けてしまった  
バーサーカーは、かろうじてその一言を絞り出すので精いっぱいだっ  
た。

醜悪な創造は破壊される。

「ふむ……大体は事前に話に聞いておったのと同じじゃのう」  
「悪いな、そっちの力になれなくて」

ジョースター同士の会話は、互いに聖杯戦争に関してはあまり情報が増えたとは言い難い結果に終わった。

ジョセフ達からすると、バーサーカーに話してもらったことは聖杯戦争について聞き出した相手から得た情報と何ら遜色はなく、バーサーカーからしても、この二人はただこの連続誘拐事件について調べまわっている聖杯戦争の部外者と言うことしかわからなかった。

ただ、聖杯戦争について以外のことでは共通点があった。

「……それにしても、バーサーカーもスタンド使いとはな。過去の英霊のなかにはお前みたいなのやつがいるってことか？」

「僕からすると、君らがスタンド使いつてことの方が驚きだよ」

スタンド使いはたがいに引かれ合う。

まるで運命の赤い糸で結ばれた恋人たちのように、互いに正体を知らなくてもいつかどこかで遭遇してしまう。

むしろ、こうしてバーサーカーが召喚されてから数日の間にスタンド使いと出会わなかったことが不自然だと思えるほどに、その引き合う力は強いものだ。

とはいえ、互いにスタンド使いであり、名前が似通っていることと  
言い、とてつもない因縁を感じてしまう。

「そういえばジョータロー、少しばかり口調が柔らかくなってるのか？  
ずいぶん落ち着いた感じじゃあないか」

「……あれに関しちゃあ悪いと思ってる。ちと聖杯戦争の関係者に対していいイメージがないんで……」

「お前、何かあったのか？」

「……俺達が泊まってるホテルを爆破しようとするわ、子供たちを誘拐しては快樂のために殺害するわ、どうしようもねー奴らばつかだつてのに、警戒せずにいられるのかお前は？」

「……ちよつと待て、ホテルを爆破しようとした奴がいたって言ったか？　なんだその非常識な奴は？　魔術がどうこうとかじゃあなくて、普通にやばいだろそれ」

「まあな……だが実際にいるんだ。なんとかジジイのスタンド能力で爆破される前に発見できたが……あのままだとハイアットホテルは瓦礫の山に早変わりと言う奴だったぜ」

「……なんというか、申し訳ない」

ほとんど関係ないはずのバーサーカーだが、自分たちの勝手な都合でテロリストまがいな人間をこの街に解き放つてしまっていることに罪悪感を覚えてしまった。

昨日から本当にずいぶん甘くなったものだどバーサーカーは自嘲しながらも、今までに出会った人間の中でそんな外道な手段に訴える奴がいたかどうかを思い出す。

……そんな奴いただろうか？　少なくとも、バーサーカー自身はそういう風な凶行に出そうな人間に出会ったことはないが。

「いや、別にお前らのせいじゃあねえ。こつちこそ聖杯戦争参加者だからって同一視してしまつて悪かったな」

「全く、昨日訪ねた奴はずいぶんと礼儀正しい奴だったというのに、疑いすぎなんじゃよ承太郎は」

「礼儀正しい……？　誰に会つたんだ？」

「えーつと、たしかケイネスと言つたか。同じホテルに泊まつておつての、昨晚ちよいと会いに行つたんじゃないよ」

ジョセフの言葉を聞き、吹き出しそうになったのをすんで堪える。

もしかしなくても、昨日のケイネスの工房への侵入者はこいつらに

違いない。

話を聞く限り、ジョセフのスタンドは探索や調査する能力に優れている。それを駆使してケイネスの魔術工房の数々の罠を潜り抜けてきたのだろう。

そもそも、こうしてこの二人がバーサーカーに会いに来たのも、ケイネスの口からバーサーカーの名前が出たからと言う可能性すらある。

「なにせホテルに爆弾があつたもんだから、屋上を陣取ってるやつが企んだものかと思つてのう。しかも部屋にたどり着くまでに仕掛けられたトラップの数と言つたら疑つてくれと言つてるようなもんじゃわい」

「……実際には、奴も被害者だつたわけだがな」

「それを言うなそれを！ あんなもん誰だつて勘違いするじゃろうが！ 訳の分からん世界に繋がってる扉だったり、奇怪なモンスターがうろついておつたり、何の前触れもなく爆発したり、あの数々の罠と言つたら、まるでインディ・ジョーンズになつたような気分だつたんじゃないぞ！」

それを魔術の知識など皆無の人間が難なく突破したとは、ジョセフのスタンド能力がすごいのだろうか。それともこのジョセフ自体が人知を超えた存在であるからなのか、どちらか判断するのが難しい。

もしもそのスタンドがあれば『聖人の遺体』を集めるのも少しは楽なものになつたのかもしれない。

「とにかく、わしらはこれで一旦引き上げるが、何か変化があつたら教えてくれ。一刻も早くこの事件を解決せねばならんからの」

「……了解。ホテル辺りにでも連絡すりやあいいのかい？」

「そうしてくれると助かる。じゃあな」

バーサーカーが思っていたよりもあつさり二人は引き下がった。

もう少し踏み込んで聞かれるものと構えていたが、良い意味で拍子抜けだ。

離れていく二人の後ろ影を見送りながら、バーサーカーは口端をゆがませた。

(……ああ、よかったキャスターの根城について喋らずに済んで)

実はキャスターの陣地のことについて、バーサーカーは二人に何も喋っていないかったのだ。

喋っていないのだから嘘はついていない。でもバーサーカーは意図的に承太郎達に伝えるべき情報を隠した。

(一般人にキャスターを討伐されてしまったては僕らが報酬の令呪を手に入れられなくなる。それは何としても避けなくつちやあならないんだ。悪く思うなよ)

自分らのあずかり知らぬところでキャスターがやられれば、嬉々として監督役は令呪の配布を無効にするだろう。

言峰神父にとって、一番いいのはアーチャーが令呪を手に入れることだが、次善としては悪くない結果だ。

それをされるとバーサーカーの旗色が一気に悪くなる。ただでさえ勝利にはあまり影響のない令呪の使い方をしてしまったのだから、そう考えてしまうのは仕方がない。

(それに……まあいいや、さっさとライダー達の元に急ごう。なんだからんで15分は過ぎてる)

ふと公園にある時計を見ると、結構な時間が経っていた。

まだ誤差の範囲内ではあるが、あまり待たせすぎるのもよくない。

今度こそバーサーカーは公園の壁に立てかけたバイクに跨り、目的地へと走らせ始める。

こうやって、あくどいことを考えていると、いつの日にか天罰が下ってしまうんだろうなと自虐しながら。

.....

そして、その天罰は意外なほど早くに下ってしまった。

「A A A A L a L a L a L a L a L a i e !!」

「本当にいい加減にしろよライダーーーーーーッ!!」

キャスターの工房への下水道をいざゆかんとしたとき、バーサーカーは再び『ゴルディアス・ホイール神威の車輪』に投げ込まれた。

昨日も体験したのだから多少は耐性ができているだろう、と少しばかり楽観的ではあったが、その希望はことごとく打ち砕かれた。

轢殺されていく怪魔達の絶叫が狭い下水道に響き渡り、それらの飛び出してくる臓物や体液が目の前に広がっているうえに、散乱する化け物共の内容物から漂ってくる腐敗したような悪臭。

ウェイバーは自身の魔術で事なきを得ているが、バーサーカーにできることと言ったら鼻と口を押えるくらい。

バーサーカーは殺人鬼とは違った意味で人殺しに抵抗はないが、何

も好き好んで殺人を犯すような神経を持ち合わせてはいない。こんなグロテスクな光景を間近で見せられても、ただひたすら気持ち悪くなるだけだ。

『ゴルドエイアス・ホイール神威の車輪』の御者台が防護力場の覆われていなければ、辺りに肉片が襲い掛かり、バーサーカーがこうして怒鳴ることもできなかっただろう。

「なんだ騒々しい。この見事な蹂躞劇を前に何が不服なことがある？」

「ああ確かに効率的だろうさ！ 時間をかけずに確実な方法で工房に行くには間違いない手法だろうよ！ でもだからと言ってこんなむちやくちやな作戦があるかつ！」

「だったら、お前さんは何か別の方法でも考え付いたとでも言うのか？」

「考え付いたとかそれ以前に、魔術師の拠点だつてのに無策に突撃するバカがどこにいるつてんだよっ!? こうして結果的に良かったもの、とんでもないトラップが仕掛けられていたら……」

「そうさな、そこが余も気になっておったところなのだがな、こんなにも魔術師の工房攻めっていうのは他愛もないものだったのか？」

その言葉を聞き、バーサーカーはつい先ほどジョセフから聞いたケイネスの工房について思い出す。

昔の魔術よりも数段劣るであろう現代の魔術師であるケイネスのほうが、このキャスターのひたすらに怪魔を並べているだけの防備などよりも複雑な工房を作り出すことができている。

こんな有象無象を並べたところで、対軍宝具を持ったライダーにとつては突破するのにさほど問題がない。

昨日ライダーの姿を見ているキャスターが、ライダーのことを意識せずにこの布陣にしたとは思えない。

ということはつまり、キャスターはあえてこのように単調な守りにしたわけではなく、ライダーに対する防備を『作りたくても作れない』



ということなのだろう。

「単に、キャスターの力じゃあライダーの宝具を防ぐことができないって話だろう。ジル・ド・レエは正式な魔術師ではないから、大した魔術も使えないってことさ」

「なんだ、であれば余のこの方法は何ら間違っただけではないからというわけではないか？」

「……本当に癩だが、その通りだな。心の底から癩に思うけど」

ライダーは強い。

遠距離攻撃ができるとか、厄介な魔術を使ってくるとか、嫌らしい戦法を使ってくるとかではなく、ただただ強い。

小手先に頼るのは軟弱と言わんばかりに正面突破をしてくる。しかもそれでいて、目的を達成するだけの能力があるのだから手に負えない。

こういう手合いが、あらゆる敵の中で最も厄介だということをバーサーカーは身に染みて理解している。

彼の天敵である人物のうちの一人が発現したスタンド能力も、他の能力もあるとはいえ、言ってしまうえば『極端に自身の身体能力を強化する』ようなものだ。

まともに相対したことは少ないが、最初にその彼に襲われたとき、ただひたすら逃げることにしかできなかった。

それほどまでに、単純な能力ほど対処するのが難しい。

『柔よく剛を制す』などと言う言葉はライダーには通用しないのではないのだろう。なんせライダーの戦い方自体が『剛よく柔を断つ』を体現しているようなものなのだから。

「おい、そろそろ終着点につくぞ。坊主もバーサーカーも構えよ」

その言葉の通り、あれだけ通路に満ち溢れていた異形の生命体達の数が格段に減少し、今しがた通路のどこにも肉塊と思しきものも無く

なっていた。

もしも工房にキャスターが待ち構えているのなら、即座に戦闘に入ることになる。そのためにもバーサーカーは『ゴルディアス・ホイール神威の車輪』を牽引する牛を見ながら『タスク爪』を回転させる。

やはりバーサーカーがライダーと組めたのは幸運だったのだろう。この自然の産物が少ない場所であっても、ライダーは宝具として生物を召喚してくれるから『黄金の回転』がやりやすい。

「——キャスターはいない……か……」

「ああ、そのようだな」

だが、キャスターの拠点であろう開けた場所に出た時、キャスターが不在と言うことが確認できたため、その準備は無駄になった。

サーヴァントになったことで、このような暗闇でも辺りを見渡すことができる視力になっているのか、何の支障もなくその場を平常時と変わらず視界は良好だ。

そして目の前の暗闇に視線を向けてすぐにバーサーカーとライダーが両者ともに低い声音になったが、ウェイバーはそんなことには気づかない。

「貯水槽か何かか、ここ？」

「……あー、坊主。こりゃあ見ないでおいた方がいいと思うぞ？」

「何言ってるんだ！ キャスターがいらないなら、せめて何か奴らについての手がかりでも探さなきゃいけないだろ！」

「ウェイバー、ここはライダーの言う通りだ。それに関しては僕らでやるから、君は御者台——いや、やっぱりライダーと一緒にそこで待っていてくれ。僕一人でやる」

「うるさいー」

この時ウェイバーは自分も何かしなくてはと言う強迫観念のようなものを心の内に抱いていた。

彼のサーヴァントであるライダーはもちろんのこと、同盟相手であるバーサーカーさえも戦果を挙げてきたというのに、自分の名誉のために参戦したはずのウェイバー自身は何もできていないと思いつている。

実際にはこの工房の場所を探り当てたという功績があるのだが、ウェイバーは屈辱的なことと思っておりそういうものだと思いつていない。

ムキになつて、サーヴァント二人の制止の声も聞かずにウェイバーは暗視の術を発動させた。

「——な、ッ——」

そしてその網膜に飛び込んできた光景によって、なぜ二人が自分を止めたのかを嫌と言うほど理解した。

ウェイバーは聖杯戦争に参加するにあたり、様々な覚悟をしていたつもりだった。

その中でも、人間の生き死にはどうしても逃れることのできない現象として、まざまざとウェイバーの前に映し出されることは承知していたはずだ。

だというのに、そんな少年の覚悟などただの強がりだと嘲笑するかの如く、目の前の惨劇がウェイバーにリアルな衝撃を与えてきたのだった。

「…………こりゃあ、ひどいな。これを『作った』奴はマジにやばいぞ」

『死体』と言うものは、本来ならば破壊された人体の成れの果てのことを指す。

人を殺すのが趣味だという人間も、死んでいく様を眺めるのが好きだとか、生きている人間よりも死んだ人体に魅力を感じるだとか、人間を破壊することが目的であるはずなのだ。

だが、これは違う。この薄暗く陰気な空間に鎮座しているこれらは

明らかに毛色が違う。

おそらくこのオブジェたちは、それぞれで様々な雑貨として丹念に構築されていったのだろう。

これほどの情熱をかけて製作できるのであれば、この光景を作り出した人間は職人として大成すると感じさせるほどに、この空間には製作者の愛があふれていた。

——もちろんのことながら、その材料が『人間』であるという点に目をつむればの話ではあるが。

ここには『壊された』人間などはない。ただひたすら『作り変えられた』人間がいるだけだ。

「殺人鬼と言うよりも、死体愛好者<sup>ネクロフィリア</sup>ってやつの方が近いな。殺すことじゃあなく、『死』そのものが好きなんだろう」

「畜生！ バカにしやがって、畜生ッ！」

冷静に状況を分析するバーサーカーの横で、胃の内容物を逆流させ切ったウェイバーが叫ぶ。

そんな彼を、ため息とともにライダーが諫めた。

「意地の張りどころが違うわ馬鹿者。こんなものを見せられて眉一つ動かないやつがいたら、余がぶん殴っておるわい」

「……功に逸る気持ちは分かるけど、もう少し落ち着いた方がいい。なにせここにはサーヴァントが二人もいるんだ。ウェイバーは僕達に頼ってくれないかな」

ライダーとバーサーカーがともに諭すが、ライダーは普段の豪胆さが嘘かのように静かに眩き、バーサーカーはどこかウェイバーだけでなく周りに話すかのように落ち着いて語る。

その様子がウェイバーには、自分だけこの状況に適應できていない未熟者だと言外に言われているような気がして腹立たしくなる。

嘔吐し、自らの感情の激流に溺れそうになりながらも、なけなしの

プライドを振り絞って少年はサーヴァントらにかみついた。

「そんなこと言っつて、お前らなんか平気そうじゃないかつ！　ボクだけ無様じゃないかつ！」

「悪いんだけど、そうも言っつてられないんだ。なあライダー」

「そうさな。何せ、余のマスターが殺されるかもしれん瀬戸際にいるんだからな」

「――へ？」

ライダーが何を言ったのか理解できないままにいるウェイバーによそに、何かがこの空間から飛び出していくような気配がした。しかも一人ではなく、複数の。

たった今逃げ出していったのは、キャスターの陣地を見張っていたアサシンたち。

キャスターの工房と言うことで慎重に探りを入れている中、ライダー達が突入するのを見て追跡していたのだ。

そして、ライダーが呆気ないにもほどがある蹂躪劇を披露し、それに便乗する形ではあるが易々と工房内に侵入を果たせたアサシンたちは、目の前にいる無防備なライダーのマスターを見て、さらなる成果を上げようかと手ぐすねを引いていたわけだ。

だがしかし、いざ実行しようとしたところにバーサーカーの声が暗殺者たちの逸る心を一気に沈静化させてしまった。

あのセリフは自分たちに向けられたものだと感じけないほど愚鈍な彼らではない。

向こうは明らかにこちらに気づいていて、マスターの周りにはサーヴァントが二人。このような状況下で暗殺が成功できるとうぬぼれることはとても不可能だと判断したアサシンたちは、とっさに逃げるかの如くその場から脱出したのであった。

「ふむ……やはりアサシンの奴ら、生きておったか。バーサーカーの推理通りだの」

「そんなことは後回しにしろ。とにかくこの場から離れなくつちやあ  
マズイ」

「それもそうだ。おい、坊主、戦車に戻れ。退散するぞ」

アサシンたちは逃げ出したように見えたが、もしかすると再び奇襲  
をかけてくるかもしれない。

そのようなフィールドで調査なんかしていたら、サーヴァントであ  
るバーサーカー達はともかく、ウェイバーの命が危ない。

両者の意見は互いに一致し、一刻も早く離脱するように行動し始め  
る。

「生き残りは……」

「……ああ、生きてはいる人間はいるよ……僕だったら殺してくれた  
方がマシだって思う状態で生きてはね」

「こうなったら殺してやった方が情けつてもんだ。安心しろ、一瞬で  
楽にはしてやる」

三人が戦車に乗り込み、ライダーが手綱を握ると、主の感情を代弁  
するかのようにつけたたましく啼いて雷を辺りに散らし始める。

「念入りに頼むぞ、ゼウスの仔らよ。灰も残さず焼き尽くせ！」

叱咤を受け、猛然と神牛たちは醜悪な工房の中を踏み散らかす。

異形の化け物達でも一撃たりとて耐えられない破壊力でもって、悪  
魔のような工芸品たちを一掃していく。

何度か戦車が踏みつぶしていった後には、そこに何かあったと判別  
できるものが鼻につく悪臭以外残されなかった。

その光景を眺めるしかできないウェイバーは、やるせない気持ちで  
いっぱいになる。

生きてはいた人間を助けられなかったという罪悪感と、ここを破壊  
しても結局はキャスター達を止めることはできないという無力感で、

見えない鎖に縛られているかのように少年は体に入力することができないでいた。

「こうして根城をぶっ潰せば、キャスターらは隠れることもできん。あとはそれを追い詰めていけばいいだけの事よ。彼奴らに引導を渡す日もそう遠くはないさ」

「ちよ、判ったか——ら、離せバカ！」

そんなウェイバーの憂いを吹っ飛ばすように、ライダーが彼の頭を乱暴に掴み撫でる。

その屈辱的かつ結構物理的に痛い扱いに、ウェイバーの暗鬱とした感情よりも激昂が勝ったのか、元の調子に戻ってライダーを怒鳴り散らす。

そしてふと気づく。御者台の後ろに座っているはずのバーサーカーがなぜか顔を背けていることに。

「おい、どうしたんだバーサーカー？ アサシンに何かされたか？」

「いや……少し恥ずかしい話なんだけど、さっきのアレを思い出して、すごく気持ちが悪くなってきただけだよ……」

「……お前、平気だったんじゃないのか？」

「殺されるかもって思ってたなら、そんなこと気にしてられないってだけで……あ、ダメだこれ、結構来てる」

案外バーサーカーはメンタルが弱い。戦闘中ならば『漆黒の意志』のおかげで精神的動揺はカットされるが、それ以外では割と打たれ弱い。

そもそも彼の人格は一般人だ。追い詰められたり親友が殺されたりしたら号泣するし、美味しそうなものを見てよだれを出したりするほどに。

感性自体はサーヴァントたちより、ウェイバーの方が近い節すらある。

さつきも調査はしようとしていたが、あれは『調査対象』だから落ち着いて観察できたのであって、一度『人間の死体』と認識したら拒否反応だつてしてしまう。

しかもその直後にライダーの『ゴルディアス・ホイール神威の車輪』による激しい揺れ。ウェイバーが先ほどしたように、嘔吐しそうになつても不思議ではない。

「サーヴァントつて吐いたりするの？ 食べ物だつて全部魔力に変えてるとかじゃ……」

「……サーヴァントだつて傷付いたら血が出たりするだろう？ それと同じ……悪いライダー、もう少しゆっくり頼む……」

「なんだだらしない。……とはいえ、事実辛気臭いところだつたわい。今夜は一つ盛大に飲み明かして鬱憤を晴らしたいのう」

「……言つとくけど、ボクはお前の酒には付き合わないからな」

「ライダーの飲む量による……けど、やるとしても時間をおいてくれ。今すぐだとキツイ……」

ライダーの一人酒を見ているだけで気分が悪くなるウェイバーに、それなりには飲むがザルではないバーサーカーでは、ライダーの全力に付き合えるか非常に怪しい。

それは分かっているが、どうしても酒で気分転換がしたいライダーはしばし思案顔になる。

「どこかに余を心地よく酔わせる河岸はおらんか……おお、そうだ！」

そして一転、妙案を思いついたと誰が見ても分かる表情で手を打ち鳴らす。

その笑顔を見て、二人はそろって嫌な予感に駆られた。



バーサーカーは困惑する。

「おおい、騎士王！ わざわざ出向いてやったぞお。さっさと顔を出さぬか、あん？」

バーサーカーは、ライダーのことを今回ほど馬鹿な奴だと思ったことはなかった。

同盟を組んでから——いや同盟を組む直前から何かとおかしな行動をとる人間だと認識はしていたが、一体どこの世界に戦争の真つただ中であるにもかかわらず、大本命の敵と酒盛りをしようなどと言う王がいたのだろうか。

いや、多分いるのではあるが、自ら押し掛けておいて押しつけがましく誘う奴はそうそう居ないと信じたかった。

しかもただ押し掛けるのではなく、セイバーの陣営が苦勞して再構築したであろう結界を破壊し、無断でホールに乗り込むなんて、もはや襲撃と何が違うのか分からない振る舞いにはただただ辟易するばかりである。

「……カリヤ、サクラ大丈夫か？ もう遠慮なしでライダーに文句を言ってもいいぞ」

「あ、あはは……俺は何か大丈夫だ。それよりも桜ちゃんは平気かい？」

「うん、何ともないよ」

今回の御者台は過去最大級で満員だった。

ウェイバーとバーサーカーが乗っているだけで結構な人口密度であったのに、その上で雁夜と桜まで乗っているのだ。

これに関しては、バーサーカーも渋々ながら納得した結果ではある。

連日でサーヴァントの守りが無い間桐家に彼らを放置しては、キャスターやアサシンらに誘拐ないしは殺害されてしまう危険性が

上がる。

昨日ならキャスターがこのセイバーの陣地に襲撃していて、アサシンが脱落していないと確信できなかったこともあって、家に引きこもっていた方が安全だと判断したからだが、今晩はキャスターがどこにいるのか分からず、アサシンがライダーらの前に姿を現したこともあって、いつそのことこうして固まっていた方がいざと言うときに助けやすい。

そうライダーに説得されて、否定する材料もなかったバーサーカーは、こうして同行することを許可したという次第だ。

……ただ、この状況を見るに、単にライダーが酒飲み仲間を増やしたかっただけのような気がして仕方ないが。

「……」

「いよお、セイバー。昨日来た時から思っておったんだが、何ともシケたところに城を構えておるのう」

テラスから向けられるセイバーとアイリスフィールの何とも言えない視線をもともせず、相も変わらず快活にライダーは失礼なセリフと共に呼びかける。

なんとというか一緒に居るだけで恥ずかしい。噂とかになつたら恥ずかしいとかそういうレベルではないだろう。

バーサーカーもライダー同様にセイバーらを見上げるが、その目の中にはありありと『本当に僕の連れがどうしようもない奴で申し訳ない』と書かれていた。

「……バーサーカー、あの、これはいったいどういうことなんででしょうか？ ラフな服装にワイン樽を持っていて、ライダーの出で立ちがまるで酒盛りでもしに来たかのようなのですが……」

「……誠に遺憾ながら、それで正解なんだ。信じてくれとは言えないけど、襲撃とかじゃあ断じてないってことだけは言っておくよ」

「……貴方も苦勞しているのですね。分かりました、その言葉を信じ

ましよう」

ライダーに直接聞くよりは、バーサーカーに聞いた方がマシだと判断したセイバーは、自分と同様にうんざりとした表情をしている彼に問いかける。

そしてバーサーカーの返答を聞いた彼女は、あまりに雑すぎる訪問にライダーが戦いを挑みに来たかと勘違いし、体中にみなぎらせていた戦意が急速にしぼんでいくのが感じられた。

一瞬ライダーの蛮行に怒髪天を突きそうになったが、その当の本人の毒気のない笑顔と、それに振り回されているバーサーカーのやるせない顔を見ていると、感情を爆発させるのもばからしくなってくる。

「アイリスフィール、どうしましょう?」

「毘とか、そういうタイプじゃないものね。……本当に酒盛りがしたいだけ?」

「いやー、こんな夜分遅くにすみませんアイリスフィールさん。お詫びと言っては何ですが、どうぞ」

「あ、これはどうもご丁寧に……」

「それでなんです、あの森の惨劇は聖杯戦争中の破壊活動と思って諦めてもらえないでしょうか? その代わりこちらでもバーサーカーの真名をお教えいたしますので」

「……ええ、構わないわ」

「寛大な処置に感謝いたします、アイリスフィールさん」

二人で相談していると、これまた純朴そうな笑顔をしながら雁夜が何か小さな包みをテラスに向かって差し出してくる。

こちらの品、急に押し掛けるのも相手に悪いと思ってライダーが酒を選んでいる間に雁夜が買っておいた、高級菓子の詰め合わせである。

しかし、まさか破壊活動を行いながらの訪問とは露ほどにも思っていなかった彼の背中、少しばかり冷や汗で湿っていた。

それでも、ライダーの行動の報復に来られることを恐れた雁夜は、こちらにとつてはそれほどの痛手ではないが、相手からするとどうしても手に入れた情報を取引材料に使って沈静化を試みる。

相手に動揺を悟られず、最善の行動をとる。雁夜はできた社会人であつた。

「バーサーカーさん、私達これから何をやるの？」

「ちよつと遅めの夕食かな？ 僕達はお酒も飲むけど、サクラはカリヤ達と一緒に晩飯を食べておくといい」

キャスターの工房に突撃した時間も結構早かつたからか、こうして誘いを掛けに来られた時間もそう遅いものではない。

それならどうせウェイバーも雁夜もお酒が飲めないのであるなら、一緒に夕飯にしようということだ。

……残念ながら、この中で温かい手作り料理を一番美味しく作れるのが、野営料理ができるだけのバーサーカーというのがなんとも言えないが。

「分かつた、じゃあ大人しくしておくね」

「眠たかつたら寝てもいいぞ。子供が無理しちやあいけない」

「大丈夫、おじさんがついてるから。その時はよろしくね、おじさん」

「ああ、もちろんさ。おじさんでよければいくらでも頼ってくれていいからね」

この二人、互いの呼び方さえ変えてしまえば、もはやどこにでもいるような親子にしか見えなくなっていた。

それぞれが相手を信頼しているのが一目で分かるほど和気藹々している様は、元は縁もゆかりもないただの他人だと言われても信じる事ができないほどに。

あの忌まわしい蟲蔵から数日経った今、この二人は失つたはずの日常を取り戻しつつある。

こうしていられるのも、自分がわずかながらも力になれたと思うとバーサーカーはどこか嬉しいと感じる。

「おいバーサーカー、早くこっちに来んか。こっちの庭園で宴をするぞ」

「ああ、分かったよ。……そもそも、僕がそこに参加してもいいのかい？　なんだかよく分からないけど、杯を交えて王としての格を競うとか言っただけだったか」

本気なのか余興なのかは判別ができないが、ライダーはセイバーと酒を飲みつつ問答をもって勝負すると言っていた。

その内容は、『王としてどちらが優れているか』と言うものであるが、その中に王様とは程遠い存在のバーサーカーが近くにいてもいいものなのか。

その上、形式の上ではバーサーカーはライダーの配下になっているのだから、明らかに場違いである。

「何、宴の客を遇する態度でも王としての格は問われるというもの。何より、お前さんの聖杯への望みと言うものを、余は聞いておらんのだ。これもいい機会と思って共に語り合おうではないか」

そういえば、バーサーカーは自らの望みを雁夜以外に喋ったことがない。

聖杯を使わせてもらうという契約でライダーの下についたのだから、その内容も伝えておいてしかるべきだろう。

とはいえ、これだけの人数がいる中で自分のささやかだが絶対に譲れない願いを暴露するのはどこか気恥ずかしいものがあるが。

「そして騎士王よ、今宵は貴様の王の器を問いただしてやるから覚悟しろ」

「面白い。受けて立つ」

さきほどまでライダーの襲撃に眉をひそめていたセイバーが、毅然とした面持ちで応じている。

王としての戦いを全くバーサーカーは知らないが、そこから漂う雰囲気から『ふざけではなくマジなのか』とようやく受け入れることができたことは口にしなかった。

.....

「いささか珍妙な形だが、これがこの国の由緒正しい酒器だそうだ」

ライダーが拳で樽を叩き割ると、そう言いながら竹製の柄杓で中に詰まっているワインを掬い取り、一息に飲み干す。

柄杓を酒器扱いすることについて、日本に移り住んでいたバーサーカーや生粋の日本人である雁夜は、一言モノ申したくはなかったが、こういう使い方もしくはないし、それでいちいち突っ込んでいたら場の空気がしらけるだろうと何も言わずに見守ることにした。

「聖杯は、この冬木による鬪争によって見定められ、それにふさわしき者の手に渡る定めにあるという。そうであるなら、何も血を流す必要はない。英霊同士、お互いの格に納得がいったのなら、それでのおのずと答えは出る」

そのまま差し出された柄杓を、セイバーは毅然と受け取り、ライダーと同様に樽の中身を掬い取る。

見た目が見た目なので、セイバーと酒と言うのがどうもちぐはぐなものに見えるのだが、そんな違和感など知ったことかと言わんばかりに騎士王はライダーと遜色がない飲みっぷりを披露した。

それを見てライダーは楽しげに軽く笑む。

「それで、まずは私と格を競い合おうというわけか？」

「その通り。いわばこれは『聖杯戦争』ならぬ『聖杯問答』……はたして騎士王と征服王、どちらが聖杯の王にふさわしいか、酒杯に問えば明らかになるというもの」

そこまでを厳かに言うのと、不意に悪戯っぽいいつもの表情を浮かべると、どこかすつとぼけた様子で言い捨てる。

「ああ、そういえば我らの他にも一人ばかり王だと言い張る輩がいたな」

「——戯れはそこまでしておけよ、雑種」

苛立ちまじりに響く声、それを聞いてバーサーカーは苦虫をつぶしたような顔をした。

ライダーのことだから、どこかでこいつを見かけたら間違いなくこの宴に誘うとは思っていたが、バーサーカーからしたらたまったものじゃない。

最初の邂逅の時点でそうとう相手にいい印象は持たれていないだろうし、こつちとしてもあんな癩癪もちな人間の相手なんかしたくない。

下手するとこの場で殺しにかかってくるかもしれない相手と酒を飲めだなんて、無茶ぶりにもほどがある。

「アーチャー、何故ここに……」

「余が誘ったのだよ、街の方でこいつを見かけたものだからな」

「よもやこんな鬱陶しい場所を『王の宴』に選ぶとは。それだけで王の器が知れるというものだ。我オレにわざわざ足を運ばせた非礼をどう詫びる？」

セイバーが呆然とつぶやく中、傲岸不遜ここに極まれりといった態度でアーチャーがライダーを睨む。

どうでもいいことなのだが、王と言うものは、招かれた宴の場所——正確には押しかけて、無理やり開かせたも同然だが——に対して文句を言わずにはいられない性質なのだろうか。そう本気で考え始めるほどにバーサーカーは王に対する評価が変化していきそうになる。全くの一般人からの視点でライダーの配下であるということ抜きにすれば、王としての器はよく分からないにしても人間としての器が一番大きいのは、これほど好き放題されても無礼討ちにしていないうセイバーではなからうかとも思ってしまう。

「まあ固いことを言うでない。ほれ、駆けつけ一杯」

普通の人間なら怯え竦むほどの剣幕のアーチャーに対し、ライダーは朗らかな笑みを浮かべながらワインを汲んだ柄杓を渡す。

この雰囲気ではそのまま渡された柄杓を地面に叩きつけて、例の宝具でも展開するのではとバーサーカーは警戒したが、意外にもアーチャーは素直にそれを飲み干した。

酒による王の勝負と言うものは、時代や場所が違っていても共通なのだろうか。

「なんだこの安酒は。こんなもので王としての器を量れると思っていたのか？」

「そうか？ この土地で仕入れたものの中ではなかなかの逸品だぞ」

「そう思うのは、お前が本当の酒を知らぬからだ」



ライダーの言っていることは間違いではない。

この冬木で手に入れられるワインの中では大分上等なものであるのは間違いないし、バーサーカー自身も試飲したときにはかなり美味しいものだと感じた。

だが、この金色の王様の口には合わなかったらしく、眉をひそめて言い捨てる。

「見るがいい。そして思い知れ。これが『王の酒』というものだ」

アーチャーの傍らの空間がゆがむ。

それがあの倉庫街でアーチャーが見せた超ド級の宝具の前兆だと知っているバーサーカーは身構えたが、そこから現れたのは無数の宝具ではなく、一揃いの酒器だった。

その瓶の中には、澄んだ液体がなみなみと注がれている。

どうも、これがアーチャーの言う『王の酒』らしい。

そんなアーチャーの言葉も気にかげず、ライダーは嬉々としてその酒を四つの杯に酌み分けようとする。

「ああ、待ったライダー。僕はそのお酒は断っておくよ」

「なんだバーサーカー。一人だけ別の酒を飲むなどと言う水を差すようなことをするでないわ」

「僕は王じゃあない。だったら別に王の酒とやらを味わう必要もないだろう？　僕はこっちのワインで十分さ」

別にそんなこと心からそう思っているわけではない。

単に『自分のことを嫌っている相手が出す酒なんか危なくて飲めるか』と言うだけだ。

あの時の戦いでそれはもう憎々しげに自分を睨んできたアーチャーが、自分がその酒を飲むことを許すはずがない。

もしかしたら、この酒を飲んだことにアーチャーが激怒して自分を

始末してくるかもしれないし、瓶から注がれてはいるが、自分だけに何か影響を及ぼすものを混ぜているという可能性が否定できない。

そうやって警戒するのは、アーチャーが汚い真似をするサーヴァントだからではない。

アーチャーが何かの戯れでバーサーカーに何をしてもおかしくないような捉えどころのないサーヴァントだからだ。

だからこうしてなるべく不興を買わないセリフを選んで断っているのだが、そう言われたアーチャーには面白くなかったようで、先ほどのライダーへの剣幕をそのままバーサーカーに向けてきた。

「おい、その狂犬。よもや貴様、<sup>オレ</sup>我の出す酒が飲めぬと抜かすつもりか？」

「……何酔っぱらった上司みたいなことを言ってるんだお前は」

「<sup>オレ</sup>我が寛大な慈悲の心で、万死に値する咎を背負った貴様に酒を下賜してやったというのに、それを断るとは何たる不敬か！」

「ああ〜!! 分かった! OK! 飲んでやるからその宝具をしまつてくれッ! 飲めばいいんだろ、飲めばッ!」

まさか『気に食わないやつに飲まれるのは癪だろうから断ろう』としたというのに、そのことに憤怒してあの規格外の宝具を出そうとするとは予想もできなかった。

というより、このサーヴァントの行動を徹頭徹尾予測出来る奴なんかいるのだろうか。

目の前のアーチャーに押し出された黄金の杯を渋々受け取りながら心の中で愚痴を言う。

「むほオ、美味いっ!!」

先に呷ったライダーが、目を丸くして喝采する。

確かに注がれた酒からはとても芳醇な香りが漂ってくる。それでもバーサーカーは依然として警戒している。

結局飲まないとアーチャーの逆鱗に触れることになるのは分かるが、なるべくなら後回しにしたい。

そうこう悩んでいるうちに、好奇心の方が勝ったのかセイバーまでも酒を呷ってしまい、もう飲んでいないサーヴァントはバーサーカーだけになっていた。

「……アーチャー、これを飲む前に確認しておきたいんだが……。本当に僕はこれを飲んでいいんだな？」

この酒を心の底から味わってもいいんだよな？」

言外に『この酒を飲んでもなにか支障をきたしたりはしないよな？』と尋ねるが、それを理解しているのかいないのかアーチャーは鼻で笑いながら続ける。

「貴様……自らの分を弁えているのは良いが、度が過ぎると醜悪だぞ。この我が飲めと言ったのだから、素直に享受されておくのが礼儀であろうが」

「……すまないアーチャー。確かにくどかったよ。それじゃあ——」

杯を口に傾けた瞬間、味覚以外の感覚が消えうせた。

バーサーカーの舌が、この酒を味わおうとすべての神経を集中させているのだ。

まるで麻薬のような多幸感が体中にみなぎってくるが、それが過ぎた後の余韻すらも快感に思えるほどの味わい深さ。

あれほど暴れまわった味覚も、酒が喉を過ぎると非常に清らかな気分になれる。

このような代物は人間が作り出せるものではない。もっと上位の存在が作り出した、酒の形をしたナニカだ。

「なんだこれっ!? 脳を直接ぶん殴られたかのような衝撃があるのに、体中に穏やかに染み渡っていく! この酒が舌や喉に触れるたび

に幸せを感じてしまうっ！　こんな酒がこの世にあつたなんてっ!？」  
「凄えなおい！　こりゃあ人間による醸造じやあるまい。神代の代物  
じやないか？」

最初に抱いていた警戒心はどこへやら、軽く飲むふりをしてやめて  
おこうとしていたバーサーカーは、その酒を飲むことがやめられなく  
なっていた。

飲みながら惜しみなく絶賛するライダー組へ、アーチャーはその反  
応に満足したのか微笑を浮かべる。

「当然であろう。酒も剣も、我が宝物庫には至高の財しかありえない。  
これで王としての格付けは決まったようなものだろう」

「ふざけるなアーチャー、酒造自慢で語る王道なぞ聞いてあきれる。  
戯言は王ではなく道化の役割だ」

どこか男同士のなれ合いのような宴にへと変化しつつある空気を  
一喝したのはセイバーだった。

根から真面目なセイバーには、この浮ついた状況で聖杯問答をする  
のは許しがたいことらしい。

そんなセイバーを、先ほどのバーサーカーへのもとは違うものを  
孕んだ嘲りと共にアーチャーは鼻で笑う。

「はっ。宴席に酒も供せぬ輩こそ、王には程遠いではないか」

「こらこら。双方とも言い分がつまらんぞ」

何やらヒートアップしそうな二人を、ライダーが間に割って入り止  
めた。

酒がどうのこうので王としての格が決まるわけもないのだから、実  
際に正論ではある。

「聖杯が誰にふさわしいかを競い合う聖杯問答ではあるが、まずは王

以外の人間の望みを聞くというのはどうだろうか？ いきなり我が話が話し始めるとこやつも喋り辛かろうからな」

ライダーはそう言つて、遠慮もなしにバーサーカーの背中を平手で叩く。

その衝撃と言つたら、一瞬呼吸することが困難になり、前のめりになって転倒するのをかろうじて堪えられるほどのものだった。

そんなものを不意打ちも同然で背後から食らわせられたバーサーカーは目を白黒しながら辺りを見回す。

「ライダー、いきなり何をするんだっ！ ちょっとは手加減つていうものをしろっ！ ……ああ、いい、そうだったな、お前の場合は手加減をしてそれだったな！」

「お前さん、本当に軟弱よな。狂戦士だバーサーカーというのにこれほどひ弱とは、今までの聖杯戦争でも前例があるのか？」

ライダーの呆れた声に少しばかりむっとしたのか、バーサーカーは反論する。

「バーサーカーは、弱いサーヴァントを無理やり『狂化』で底上げするのが普通だから、どっちかと言うと僕の方が正常だよ。強い英霊だつてのに、魔力の燃費の悪い上、宝具もまともに使えないバーサーカーで召喚する奴なんか馬鹿か、それこそ狂人かのどっちかだ」

「まあそれも一理あるか。……いや待て、お前さんを正常なバーサーカーだつていうのはちと無理がある気がするぞ。どこの世界にペラペラしゃべるバーサーカーがいるというのだ」

「案外いるかもよ。喋れはするけどマスターとの話がかみ合つてなかったり、思考がある一点にしか向かつていかないから会話自体が意味のない奴だつたりな」

なにやら具体的な例を挙げている気がするが、なぜかそんな奴がい

ると錯覚してしまう。今までにあったこともないのに、なぜだろうか。

自分の中から生まれた疑問だが、その明確な回答を得ることはできなかつた。

いつまでたつても話が進まないことに苛立ち始めたアーチャーが、思考の渦に飲まれかけたバーサーカーに促したからだ。

「茶番はいい。そんな狂犬よ、貴様は聖杯に何を望む？ 条理を捻じ曲げ、奇跡に縋つてまで成し遂げたい願望とは何だ？」

「……言っておくけど、君らのものとは比較できないほど普通の願いだろうから、そんなに期待しても無駄だと思うよ」

「構わぬ、話せ。人の業こそ我の愛オシであるものよ。多少はこの酒の肴程度にはなるだろう」

アーチャーに妙な期待をされているような気がして仕方がないが、言つたところで減るものではないし、この世に災厄をもたらすものでもないのだから、堂々と言つてしまおう。

そう結論付けたバーサーカーは、杯に残つた酒を飲み干して自らの願望のぞみを語る。

「——死んだ友人に会いたい」

それを聞いた途端、微笑を浮かべていたアーチャーはそれを消した。

つまらぬ願いだと呆れ、興味を失ってしまったのか、このような些事で聖杯を使うのかと憤怒し、それを抑えているのかはバーサーカーには分からないが、そのまま続ける。

「ほんの数分だけでもいいから、話がしたい。謝って、感謝して……今度こそ、ちゃんと別れの言葉を伝えたい。ただそれだけだよ」

これでこの話は終わりだということか、バーサーカーは三人から顔を背け、空になった杯に新たな酒を注ぎ始める。

王様達からしたら、自分のこんな望みなんか歯牙にかけるわけがない。せいぜい笑われるくらいが関の山。

そう思つて、少しばかりやけ酒気味になつているのかもしれない。笑われたくらいで怒りはしないが、気分が悪いのは確かなのだから。そうやって覚悟を決めていたのに、再び杯を呷ろうとする段階に至つても何も聞こえない。

セイバーはまだしも、ライダーやアーチャー辺りには反応があつてもおかしくはないのにと、違和感を覚えたバーサーカーは少しばかり緊張して三人の顔を見やる。

そこに、バーサーカーが予期していた嘲笑や非難の表情はなかった。

セイバーも、ライダーも、アーチャーまでもが、真剣な面持ちでバーサーカーの顔を見ている。

何も言わず、感じ入るかのように、宴の場は静寂に包まれていた。

「……なるほどなあ。分からんでもないぞ、その望み」

その静寂を破つたのはライダーだった。

腕を組み、しきりに首を振つて、バーサーカーの望みに共感する。

「お前さんとその友人の間には、確かな『絆』と言うものが存在するのだろう。そういうものは余は好ましく映る。何事にも代えがたい友というものは、一つの財産よりも尊いものだからな」

「その望みは間違っているものではありません。もっと胸を張ってしかるべきです」

それに同調するかのように、セイバーが口を開く。

彼らの反応が、バーサーカーには理解できなかつた。

なぜ、こんな普通の願いで、これほどまでに二人が感心しきつてい

るのか。

だが、彼の混乱はさらに深まることになる。

「おい狂犬、この酒も飲め」

「え……いや待て、まだこっちの酒が……」

「飲めと言うのが分からんのか。中々に面白味のある余興を演じた褒美だ。今宵ばかりはあの無礼を許す。存分に我が財を楽しめ」

中でも、アーチャーの態度がおかしい。

何が気に入ったのか分からないが、わざわざ新しい酒を出してバーサーカーに渡してくる。

しかもあれほど憤怒していた事実を一時とはいえ忘れてくれるというサービス付きだ。

いよいよバーサーカーには王と言うものが理解できなくなってきた。

(……何が彼らの琴線に触れたんだろう)

ただバーサーカーは困惑するだけだった。



## 王達は譲らない

「駆け出しからなかなかの大望が飛び出たなあ。王としての道とは色の異なった望みではあるが、さりとて見くびれるものでもない。こやつには負けてはおれん。今度は我らが望みを示そうではないか」

予想外に王達の感心を得られたことに凄まじい居心地の悪さをバーサーカーは感じる。

何か特別なことを言ったつもりはない。というか、大いなる野望を持つていない人間ならば、聖杯にかける願いなんてこんな程度のものだと思っていた。

英霊は死んだ人間だ。この時代の人間ではない。であれば、世界をどうこうする願いはまずありえないし、だったら自分に何かしら還元する願いになってしかるべきだろう。

じゃあ、どうしてこんなに感心されるのか。

ライダーが話を進めている間も、バーサーカーはそのことを考え続ける。

「アーチャーよ、貴様の先ほどの酒は至宝の杯に注ぐのにふさわしいが、聖杯は酒器ではない。貴様はひとかどの王として、我らを魅せるほどの大言が吐けるか？」

「仕切るな雑種。そもそも前提からして理を外しているのだぞ」

「ん？」

「聖杯は我の所有物だ。時が経ちすぎて散逸したきらいはあるが、世界中の宝物はその起源は我が蔵にさかのぼるのだからな」

呆れたようにアーチャーは言い放つが、それを聞いてバーサーカーの方が嘆息したくなった。

この黄金のサーヴァントは傍若無人な奴だとは理解していたが、ここまでのもとはバーサーカーには予想だに出来なかった。

「じゃあ何か？ 聖杯っていうのはアーチャーの失くし物であって、たまたま回収する機会があるから戦つてると、そう言いたいわけか？」

「訂正するほど間違つてはおらぬな。『宝』というだけで我が財であることは明白だ。それを勝手に持ち去ろうなど、盗人猛々しいにもほどがある」

本格的にバーサーカーはアーチャーが正気なのかを疑い始める。宝と言うだけでアーチャーのものになるといふなんて、そんな常識の埒外なこと――

「っ!？」

いや待て、だとしたら説明がつくではないか。

あの規格外の宝具も、今しがた飲んだ酒も、まさにこれらは『宝』そのものだ。

アーチャーがもしも、古今東西の財宝を集めたという謂れがあるなら、それらに何ら不自然なことはない。

だとするなら――

「……アーチャー、お前もしかして」

「何を世迷いごとを。キャスターばかりかと思つていたが、錯乱しているサーヴァントがここにもいたとはな」

ふと思いついた疑問を聞こうとした瞬間、セイバーがあきれ果てた様子で言い捨てる。

でもそれも無理はない。というより、そんなことを臆面もなく言い放てる人間なんか、そのように言われたって仕方がない。

むしろバーサーカーの方が異質だ。アーチャーのとても信じるこゝとができない言い分を、『信じるこゝとができる』ことがおかしいはずなのだ。

「それはどうだかな。何となくだが余はこの金ぴかの正体に心当たりがあるぞ」

バーサーカー同様、アーチャーの真名を暴いたらしいライダーは、そのまま素知らぬ顔をして続ける。

「貴様の言い分からすると、貴様は別に聖杯なんぞ欲していないという事ではないか。だったらあれだけある財のうちの一つくらい、くれたってええじゃないか」

「たわけが。我の恩情を賜うことができるのは我が配下のみ。貴様にやる道理なぞない。筋道を違えて聖杯を奪うというのであれば、我が直々に裁きを下すまでよ」

「それにはどんな道理がある？ 何をもってお前は裁きを下す？」

「法だ。我が王として敷いた、我の法だ」

ライダーの問いかけの全てに、間髪入れず返答するアーチャー。

よほど自分の中にあるルールに自信があるようで、その様子にぶれはない。

それもあつてか、ライダーは観念したようにため息をついた。

「完璧だな。自らの法を貫いてこそその王。だが、余は聖杯がほしくて仕方がない。そう言われても奪わずにはおれんのだ」

「それになんの問題がある。お前が犯し、我が裁く。ただそれだけよ」  
「うむ、そうなるかととは剣を交えるのみだ」

明らかに会話の内容は敵対することを明言しているのだが、その雰囲気はどこか親交を深めたようなものがある。

そんな二人を憚然と眺めていたセイバーだが、そこでようやくライダーに問いかけた。

「征服王よ。聖杯がアーチャーの所有物であると認めてもなお、それを力で奪うというのか？」

「そりやそうだろう。余の王道は『征服』なのだからな」

「そこまでして聖杯に何を求める？」

バーサーカーには分かってしまった。セイバーが怒りをこらえていることに。セイバーの言葉の端々に怒気が込められていることを感づいてしまった。

清廉潔白な騎士王と、踏破蹂躪の征服王では無理もないことか。と納得はするものの、なるべくならこれ以上刺激しないでほしいというのがバーサーカーの願望だ。

今でこそ酒を飲んで言い合ってるだけだが、この聖杯問答に集まっているのはデタラメ英霊の万国ビックリショーだ。誰かが武力に訴えて、それに巻き込まれたらバーサーカーの命はまずないだろう。

特にライダーなんか酒に酔って部下の一人を殺した経歴さえある。さつきから気が気じゃない。

そんなバーサーカーの心配もよそに、軽く照れ笑いをしながら、ライダーは答えた。

「受肉、だ」

その答えを聞いて、一人以外は騒然とした。

ウェイバーなんかは、それまで口出ししなかったのに、妙な声を上げてライダーに詰め寄る始末。

「お、お前っ!? 世界征服を望むんじや——ぎやわぶっ!」

まあ、毎度おなじみのデコピンで黙らされたが。

「聖杯なんぞに世界をとらせても意味がないだろう。征服と言うのは己自身に課すものであって、断じて聖杯ではない」

「雑種……よもやそのような瑣事のために、この我オレに挑もうというのか？」

アーチャーさえ呆れ顔にするあたり、ライダーはある意味とんでもない存在なのだろうが、一人だけ何の変哲もなく酒を飲んでいられる者がいる。

「バーサーカー、貴方は何も思わないのですか？ 仮にも貴方はライダーの配下なのでしょう？」

その人物——バーサーカーにセイバーは呆れた表情もそのままに問いかける。

セイバーは別にライダーを貶めようというわけではなく、ただ単に全員驚いている中、一人だけ黙々と酒を飲んでいたので声を掛けただけだ。

セイバーに話しかけられ、一瞬で全員の視線が集まったが、バーサーカーは杯を傾けながら、何でもないように返事する。

「いや、僕はそうだろうと思っていたよ？ 確信はしてなかったけど、近いものではあるだろうなアッてくらいには、予想はできてた」

バーサーカーの言葉に、再び全員が驚いた。

ライダーだけは、自分の考えが理解してもらえて嬉しそうに破顔しているのだが。

「……そうなのですか？」

「そりゃあそうだろう。もしも聖杯に世界征服を望むんだったら、腕っぷし自慢の英霊を配下に集めたりしないじゃあないか。それに、世界征服した後も霊体でいるって、僕ならまだしもイスカンダル大王であるライダーじゃあ無理があるだろう」

キャスターのようなクラスならまだしも、征服した世界にセイバーやランサーと言った武官を集めてもそれほど役には立たない。なんせ世界征服をしたら敵がいらない——すなわち戦う必要がないということなのだから。

聖杯に世界征服を望むのなら、文官の方がライダーにとって必要な人材になるわけだ。

それに、ライダーのもともとの予定ではバーサーカーを受肉させる気でもあったのだから、ライダー自身が望まないわけがない。

「それは……そうですが……」

「だから、望みの中には絶対に受肉とかは入ってるって思ってた。それに……普段のライダーを見ていれば、自分で世界征服する気だろうって感じはしてたし、今更驚くことでもないよ」

この辺りは共に生活していないと分かりづらいところではある。ウェイバーも、そういえばと思い当たるところがあつたのか、はつとした表情を浮かべている。

「征服するには、このイस्कन्दルただ一人の肉体がなければいかん。身体一つの我を張って、世界に向き合う。それが征服という行いの総て——我が霸道だ」

ライダーのその答えに、アーチャーとセイバーは真逆の表情を浮かべていた。

これまで笑みと言えば嘲笑しか浮かべていなかったアーチャーが、それとは異なる笑みを浮かべている。

いや、むしろこれは笑みと言うべきなのか。形こそそれに近くはあるが、それはあまりにも陰惨で、見ている者に不安を呼び起こすものだ。

「決めたぞ。——ライダー、貴様はこの我が手<sup>オレ</sup>ずから殺す」

「そちらこそ覚悟しておけ。貴様の宝物庫とやらを奪いつくすつもりでいるからな」

勘弁してくれ。

バーサーカーの脳内はそれで埋め尽くされていた。

アーチャーがライダーを標的にしたということは、仲間であるバーサーカーも狙われるということだ。

ある程度は防ぐことはできるが、もしもアーチャーの真名がバーサーカーの想像しているものと一致するならば、絶対に戦いたくはなかった。

こいつらをなんとかしてくれと、バーサーカーは不意にセイバーの方に視線を移した。

だがそこにいたのは敵意をむき出しにして二人を睨んでいるセイバーの姿。

もしや今の会話でセイバーまでもがライダーを敵と認めたのかとバーサーカーが危惧しはじめたと同時にライダーがセイバーに声をかける。

「ところでセイバー。貴様の懐の内を聞かせてもらっていないが」

待ってましたと言わんばかりに、セイバーは毅然とした態度で二人の王達を見据えて、自らの望みを打ち明けた。

「私は、我が故郷の救済を願う。聖杯をもってして、ブリテンの滅びの運命を変える」

——場が静まり返った。

先ほどのバーサーカーの感じ入る静寂とは明らかに違う。

この静まりは、白けていると言うのが正しいものだ。

それに戸惑いを覚えたのはセイバーだ。

同意や反論があるものと身構えていたというのに、まるで理解できない言葉で語られたかのように二人の反応がない。

「……すまん、余の聞き間違いかもしれないのだが、今運命を変えようと貴様は言ったのか？ 過去に起きたことを覆すと？」

ようやく口を開いたライダーも、困惑した顔で尋ねている。

「そうだ。例え奇跡をもつてしても叶わない願いでも、聖杯が万能であれば必ず——」

「確かめておくが……ブリテンと言う国が滅んだのは貴様の治世だったのだろうか？」

「そうだ！ だからこそ悔やむのだ。あの結末を変えたいのだ！ 私自らの責を果たすために！」

不意に、哄笑が轟いた。

まるで、サーカスのピエロがお道化ているのをみて楽しむ子供のような笑い。

それを、さきほどまで表情をさほど変えてこなかったアーチャーが発している。

「何がおかしい!？」

自分の切なる祈りを足蹴にされ、セイバーは怒気に染まった。

しかしアーチャーはその剣幕を意に介さず、ただただ笑い転げ、息切れまじりに言葉を漏らす。

「自ら王を名乗り！ 皆から王と称えられて！ そんな輩が悔やむだど!？ これが笑わずにいられるか！ お前は最高の道化だな！」

そうやって笑い続けるアーチャーの横で、あからさまに不機嫌そう



な様子のライダーがセイバーを見据えている。

「貴様、自らが歴史に刻んだ行為を否定するということのか？」

「そうとも。なぜ訝る？　なぜ笑う？　王として身命を捧げた故国が滅んだのだ。その結末を変えたいと思うことの何がおかしい？　王たるものなら我が身を賭して、その国の繁栄を願うはずだ！」

「いいや違う」

断固としてライダーはセイバーを否定する。

「王が捧げるのではない。国が、民草が、王に捧げるのだ。決してその逆ではない」

「何を……」

怒りのあまり、セイバーの言葉が途切れた。

「それは暴君の治世ではないか！　そんなもの、王として正しいわけがない！」

「そうだ。我らは暴君であるがゆえに英雄だ。だが、自らの行いを、その結末を悔やむ者はただの暗君だ。暴君よりもなお始末が悪い」

そこまで言って、セイバーは一旦怒気をおさめた。

笑い転げているアーチャーとは違って、ライダーは問答の形でセイバーを否定しようとしている。

ならばそれに応じなければ、王として負けたも同然だ。

「……では貴様は全く悔やまなかったと言うのか？　貴様とて、世継ぎを葬られ、築き上げた帝国が三つに引き裂かれたではないか。今一度やり直せたらと、そうは思わないのか？」

「ない」

即答だった。

ライダーはセイバーの問いかけに堂々と切り返した。

「余の決断、余に従った臣下たちの夢の果てであるならば、その滅びは必定だ。悼みはしよう。涙も流そう。だが、その滅びは決して悔やみはしない」

「そんな——」

「ましてそれを覆すなど！ そんな愚行は、余と共に時代を築いた者達に対する侮辱である！」

ライダーに傲然と言いつ放たれたが、セイバーは押し黙るつもりはない。

今度はこちらから問い詰める番だ。

「滅びを良しとするのは武人だけだ。民はそんなものを望まない。救済こそが彼らの望みだ」

「救済だと？」

「正しき統制、正しき治世こそ彼ら民が待ち望むものだ」

「で、貴様はその正しきの奴隷か？」

「それでいい。理想に殉じてこそ王だ。人は王を通して正しきを知る。国は王と共に滅ぶべきものではない。より不滅であるべきだ」

今しがたのライダーと同様にセイバーは即座に答えた。

しかしライダーはそんな彼女を憐れみを持ってただため息をつくだけ。

「そんな生き方はヒトではない」

「そうとも、王であるならばヒトとしての生き方は捨てなければいけない。貴様のような者には分かるまい。自らの欲望のためだけに霸王になった貴様には！」

とどめとばかりに言い放ったセイバーの言葉を聞き、ライダーは形相を変えて怒声を放つ。

「無欲な王など飾り物にも劣るわい！」

「何を言うか！」

「貴様のそれは聖人としての生き方だ！ 王の生き方では断じてない！ 聖人では民草を慰撫することは出来ても、導くことなどできない！ 王が確固たる欲望を示してこそ、民は導かれるのだ！ 王と言うのはヒトとしての臨界を極めた者のことだ！」

「そんな治世の……いったいどこに正義がある？」

「王道に正義なぞ不要。だからこそ悔恨もない」

あまりにきつぱり言われてセイバーは茫然とする。

両者の認識にはズレがある。だからこそ互いの主張が認められないのだ。

さらなる繁栄のために霸王になったか、平穩のために聖人になったかの違いが大きく出た。

「ただ救われただけの人間が、どういう末路を辿ったのか知らない貴様ではあるまい。貴様は民を救いはしたが導くことをしなかった。導かれずに路頭に迷う民を顧みず、貴様は己の理想を追い求めていただけだ。故に貴様は生粋の『王』ではない。王と言う偶像に縛られていた小娘にすぎん」

「私は……そんな……」

言い返したい言葉はいくらでもある。だがセイバーは句を継ぐことができなかった。

反論しようとするたびに、セイバーの脳裏には血に染まる落日の丘が蘇る。

カムランの丘に築かれた屍の山が、セイバーの気力を奪っていく。まるで、自分の選んだ道自体が間違っていたかのような錯覚にセイ

バーが陥りそうになった――

「いや、別にセイバーのやり方もそんなに悪くないんじゃないかな」

――まさにその時、今の今まで介入してこなかったバーサーカーがポツリとつぶやいた。

征服王は蹂躪する。

予想だにしない人物の発言に、一同の視線はバーサーカーに注がれる。

「いきなり口を挟むとは、どうしたというのだバーサーカー」

「……ああ、悪いな、つい口が滑った。構わず続けてくれ」

「そももいくか。我らの話を聞いて、何かしら思うところがあつたの  
だろう？ それを聞かねば余がすつきりせんではないか」

「いや、遠慮しておく。問答であつても勝負だろ？ そこに割り込む  
なんて失礼つてもんさ」

「固いことを言うでないわ。勝負であるからこそ、他人に遠慮する必  
要などどこにもない。貴様が思ったことを言えば良い」

「……お前本当に良い性格してるよな。………分かったよ、そうい  
うなら言わせてもらおうさ」

今のバーサーカーの発言は明らかにセイバーの肩を持つものだつ  
たのに、それをライダーは気にせず受け入れた。

別にこうなることを予見してバーサーカーは言葉を漏らしたわけ  
ではない。

なぜか、ふと、口に出さずにはいられなかったただけなのに。

しかし、この状況の中で言い洩ることは、バーサーカーにはできな  
かった。

少し皮肉を口にしながら、バーサーカーは意図していなかった聖杯  
問答への乱入を果たした。

「さてバーサーカー。今貴様は、『セイバーのやり方も悪くない』と  
言ったな。王でもない貴様がどうしてそのように評価できる？」

「逆だよ逆。僕は王じゃあないからそう言えるのさ」

バーサーカーの発言に、ライダーは少しばかり眉をひそめた。

王としての在り方を、王ではないからこそ肯定できるとはどういうことなのか。

一瞬ライダーは呆気にとられた。

「して、それはなぜだ？」

「セイバーが統治した国で僕が暮らせるかと聞かれたら、まあやってけるだろうって思ったからだよ。聞いたところ、むやみに税を課せるわけでもないみたいだし、それなりに自由にさせてくれそうだしね」  
「……それだけでああ言ったのか？」

「それだけってことはないけど、大きな理由の一つかな。僕みたいな小市民は自分の生活だけで頭がいっぱいなんだから、王様の方針なんてよっぽどひどくなくなったら反対しないよ」

今までの問答をぶち壊すような発言をするバーサーカー。しかし、それが彼の本音だ。

民と言うのは常日頃から王と言う存在を意識することは少ない。理不尽な法律ができたり、無茶苦茶な政治をしていれば反発はするだろうが、必要最低限の生活ができれば王の意向なんか気に掛けることはない。

「僕が言いたいのは、王としての格の話じゃあなくて、セイバーの願いについてだ。どうしてセイバーの願いは間違っているんだ？ 自分の国の滅びを回避して、繁栄させたいって思うことはそんなに悪いことなのか？」

「王が、自分の行いを悔やむこと自体が間違っているのだ。それは自分を信じ、付き従ってきた者への侮辱であろう」

先ほどと同じ言葉を繰り返すライダーだが、それを聞いてもバーサーカーはただ困ったように苦笑するばかり。

それほど難解な言葉を言ったつもりはないのだが、それでもバーサーカーには何かが引つかかるようだ。

まるで先ほど、セイバーの胸の内を聞かされたライダーのように――

「確かにそうだな、侮辱してはいるんだろうさ。で、その何が悪いだ？」

本当に理解できていないような顔をして、ライダーに問い返した。

「……なんだと？」

「他人を侮辱する願いは叶えてはいけないなんてことはないだろ？ そんなことを言い出したら、ライダーの受肉だって、僕の願いだって、本来、普通の人間は死んだら生き返らないのに、その理を破ろうとしている。言ってみれば、死者を侮辱している願いだと言えないかい？」

バーサーカーは、ライダーがなぜセイバーを否定しているのかが理解できていなかった。

セイバーの願いも、ライダーの願いも、バーサーカーには似たようなものだと思えなかったのだ。

ライダーは、セイバーの歴史を改変するという願いは当時の人々への侮辱だと言っていたが、本来この世界に居てはいけないはずのイスカンドル大王が現世に復活することだって、あつた筈の歴史を改変しているようなものだ。

それが過去のものか未来のものかの違いしかない。どちらも時間の流れをゆがめているということには変わりない。

「そりゃあ、セイバーについてきた人たちの頑張りを無下にすることなのかもしれないさ。セイバーの願いは、自分や民だけではどうあがいても無理だから、聖杯と言う奇跡に頼って運命を捻じ曲げると言ってるようなものなんだろうよ。でも、それは本当に間違っているのか？ 自分の救えなかつた命を元通りにしたいと渴望して何が悪

い？」

バーサーカーは、それをした人間だ。

過去の過ちで下半身の自由が奪われ、遺体によって元に戻したいと心の底から願い、そのためならば自らの命も、他人の事情さえも勘定に入れずに戦ってきたバーサーカーがセイバーを否定することは、自分を否定するようなものだ。

そんなバーサーカーの様子に、ライダーは先ほどのセイバーの時とは異なった困惑に陥る。

「ちよつと待て。貴様、それが正しいことだと言うつもりか？ 己が成した過去を覆すことが王としてあつていいと言うのか？」

「正しくはないよ。ただ、間違つてもいい。僕だつて親友と死に別れた当時に聖杯があつたなら、絶対にそう願つていた。誰でも、『過去に戻つてやり直したい』ことが一つくらいはあつてもおかしくないじゃあないか。規模の大小があつたとしても、そう思わずにはいられないはずなんだ。僕から言わせて見れば、『過去を変えることは間違つている』だなんて素で言える奴は、自分の人生に『納得』が出来ないやつ之苦しみが分かつていないとさえ思うよ」

「だが、今の貴様はそれを願つていないのであろう？ 親友との別れは必定であつて、それをやり直したいとは思っていないのではないのか？」

「ああ、僕は『納得』しているからね。心のどこかではその願いが燻つてはいるけど、『あれはあれでいいんだ』つて僕は『納得』している。だからやり直そうとは思わない」

でも、と区切つて、バーサーカーはセイバーの方に振り向き、続ける。

「セイバー、君は『納得』していないんだろう？ 君は王であることを誇りにしているし、その国が亡ぶことは宿命何だろうけど、その結末



が『納得』出来ない……違うか？」

「……ああ、そうだ。私は納得が出来ていない。我がブリテンが救済できなかったことに納得が出来ない。そう言われていたとしても、そうであることが正しいのであっても、私は我が身を捧げた故国が滅んでいくことには納得が出来ない！」

ライダーの言葉によって思考の迷路を彷徨っていたセイバーに気が戻っていく。

そうだ。自分の祈りは価値があるものだ、胸を張って言い切れるものだったではないか。

ライダーのように覇道を進めば異なった結末を導けるかもしれない、けれど、セイバーは何度やりなおそうと、その道を歩むことは決してできない。

結局のところ、セイバーはこの道しか選ぶことができないのだ。

「だったら、それでいいじゃないか。他人を侮辱するからといって、他人から侮辱されたからといって、『納得』が出来ないならその道を曲げる必要なんかないよ。『納得』はすべてに優先する。そうでないとどこにも行くことはできないんだから」

まあ、僕のじゃあなくて、親友のセリフなんだけども。

そう軽く笑いながらバーサーカーは再びライダーの方へと振り返る。

「お前に否定されようが、アーチャーに馬鹿にされようが、僕はセイバーの願いを間違ってるだなんて思えない。セイバーの願いはその時代に生きる人たちへの侮辱だと言うが、そんなもの誰の願いだって違いはない。誰かがプラスを掴めば、他の誰かがマイナスを掴むのは覆しようのない事実だ」

そこでバーサーカーは軽くうつむき、絞り出すかのような声で締め

くくりの言葉を発した。

「だから、せめてセイバーを王として間違っているだなんて言わないでほしい。そうされたら……僕はどうしていいのか分からなくなってしまう……」

バーサーカーの悲壮そうな表情に、ライダーは息をのんだ。

その顔にライダーは見覚えがあった。あの、自分は狂った人間だと自嘲気味に語ったときのあの顔だ。

正しい道を歩むことができない自分を、どこかで悔やんでいるような……。

「……バーサーカー、貴方はどうして私の願いに賛同してくれたのですか？」

そんなバーサーカーに、セイバーが尋ねる。

両者の間の関係性と言うのは薄い。何かと顔を合わせることは多いが、バーサーカーがセイバーに肩入れをする理由が希薄すぎるのだ。

あのままではライダーに好き放題に扱き下ろされたままやり込められていたであろうことは想像に難くない。そんな状況から救ってくれる動機がセイバーには見えなかった。

「……君が、似ているからかな」

「似ている……？」

「ああ……僕の運命を大きく変えた二人の人間にな。僕が歩き出すきっかけになった奴と……そして、僕が『正しい道を行く人間だ』と思った奴……その二人によく似ている……」

先ほどからバーサーカー自身も疑問に思っていた。なぜ、ついつい口が出てしまったのか。

宴の間、ずっと周りを警戒し続けていたバーサーカーが、『思わず失言する』ことなんかあり得ないはずだというのに、反射的に反論してしまった。

それがなぜなのか、喋り続けていて理解できた。

セイバーは親友に似ている。

自分の歴史を捻じ曲げてでも自らの国を、民を救い上げたいと、自分の国の結末に『納得』したがっているところ。

選定の聖剣や滅びの予言、そして故国を救わなければいけないという追い詰められた状況、それらを『受け継いで』ここに立っているところ。

そんなところが、かけがえのない親友に似ている。

そして、力がほしいとか誰かを支配したいといったような我意ではなく、自国の安全を保障するために動いているところ。

人間としての生き方を捨てて、ただひたすらに自らの統治する国に対する『愛国心』をもった王であるところ。

そんなところが、因縁の宿敵に似ている。

バーサーカーの価値観に大いに働きかけた二人との共通点を持つセイバーが否定されているから、バーサーカーはその光景に我慢できなかったのだと、思い至った。

「……もう、君の王道に疑いを持たないでくれ……誰かから受け継いだことを後悔しないでくれ。君が折れる姿を僕は見たくない……」

「バーサーカー……あなたは……」

セイバーが新たに問いかけようとした瞬間、その場の人間すべてが顔を引き締めた。

少しばかり遅れて、雁夜が桜の体をかばい終わったあたりで、闇の中に次々と白い髑髏の仮面が浮かび上がっていく。

その顔は宴会に参加している者なら誰もが知っているものである。アサシンだ。

「……これは貴様の計らいか？ 金ピカ」

「さてな、雑種の考えることなど、いちいち知ったことではない」

無然とした態度で返答するアーチャーであったが、彼の周囲に漂う空気からして、これを仕掛けた人間に対し怒りを覚えていることがうかがえる。

おそらくは、宴会の場にこのような無粋な刺客を送ったことに対するものだろうか？

「……アサシンの奴、キャスターの工房で分身を生み出す能力を持ってるとは分かっていたけど、こんなにも分裂できたのか」

もはや『群れ』と言い換えてもいいくらいの数のアサシンを見て、バーサーカーは齒噛みする。

昼間にわずかながら邂逅した彼らを見て、ハサンの能力は一人であつて複数の存在になれるものと目星はつけていたが、ここまでの人数とは思っていなかった。

似たような能力を持つ人物をバーサーカーは知っているが、このアサシンほどの数ではなかったことから、つくづく英霊というのは規格外な奴らだと再認識する。

だが、そんな悪態をついている暇はない。

この場には三人のマスターが集結している。おそらくそこを狙つてアサシンたちはここにやってきたのだろう。

そうなると、サーヴァントである自分たちは何とかなるが、これだけの物量に押されるとマスターへの攻撃を全部防ぎきすることは不可能だ。

その上、マスター自身さえアイリスフィールを除いて二流どころではない魔術師なのだから、自分の身を守るなんて天地がひっくり返つたって無理である。

絶体絶命の窮地に立たされたバーサーカーは嫌な汗が流れるのを感じながら、自らの仲間の様子をうかがう。

——そこには、先ほどと変わらず杯を呷っているライダーの姿があった。

「……おいライダー、お前は何をやっている？ この状況で何で酒を飲んでるんだお前は？」

「ら、ライダー……なあ、おい……」

「二人とも落ち着かんか。宴の客を遇する態度でも、王の器は問われると言ったではないか」

『お前はあいつらが客に見えるつてのかわよ!?!』

バーサーカーは怒気をもって、ウエイバーは悲鳴まじりに同じセリフをライダーに叫んだ。

しかし、その二人のことなど意にも介さないように、ライダーはアサシンに向けて場違いな笑顔を浮かべ呼びかける。

「皆の衆、その剣呑な雰囲気を出すのは止めてはくれんか？ それより、貴様らも共に語り合わんか？ 語ろうという者はここにきて杯をとれ。この酒は貴様らの血と共にある」

そう言つてライダーが差し出した赤ワインの入った柄杓は、アサシンの誰かによって放たれた短刀ダークに寸断された。

アサシン達の忍び笑いが響く中、ライダーは辺りに飛び散った赤ワインを眺め——

「——この酒は貴様らの血と言つたはずだが？ それほどに地べたにぶちまけたいというのなら仕方がない……」

ライダーの何かが切り替わった。

そう感じ取れたのは、共に酒を飲んでいた者達だけだ。

今やその目には、温かさというものが感じられない。

だが、その眼差しとは打つて変わって、冷え切った冬の夜の空気に

はありえない熱風が吹き込んできた。

その風に運ばれて、焼け付いた砂塵までもが吹き荒れている。

いましがた彼らが宴会を開いていた場合は、深い森の中であつた筈なのに。

「セイバー、そしてアーチャーよ。これが宴の最後の問いだ。——王とは孤高なるや?」

いつの間にやら、戦支度の姿へと転じていたライダーが二人に問いかける。

アーチャーは『そんなことは当然だ』と言わんばかりに口端をゆがめ、セイバーも躊躇わず解答する。

「王ならば、孤独であるしかない!」

「ダメだな! まったくもって分かっておらん!」

ライダーは豪笑し、その答えをはねのける。

そうしている間にも、夜の森は別の世界に塗り替えられていくように変容していく。

「そんな貴様らには、今ここで余が、真の王たる者の姿を見せつけてやらねばあるまいて!」

……いや、『ように』ではない。事実として世界を塗り替えているのだ。

ライダーの力によって、寒空のアインツベルン城から、地平線までもが見える荒野へと変遷していく。

現実を侵食する幻影。奇跡と並び称される魔術の極限。ライダーが行ったそれに、魔術師であるマスターたちが驚愕の声を挙げる。

「これは——固有結界!?!」

「そんな……心象風景の具現化だなんて……魔術師でもないのに!?」  
「魔術師でなからうと関係ない。この世界を、景観をカタチにできるのは、これが我ら全員の心象であるがゆえな」

その『我ら全員』と言う言葉は本来なら正しくないものだ。

今アサシンらと向かい合っているのは、ライダーのみであるはずなのだから。

だが、今や一人ではない。

続々とイスカンドルの周囲に蜃気楼のような影が現出する。

数も一つや二つではなく、瞬く間に甚大な数へと変わり、臃げな姿形も徐々に色づいて、それぞれが精悍な戦士が実体化していく。

「こいつら……一騎一騎がサーヴァントだ……」

マスターであるウェイバーは、サーヴァントの霊格を見抜くことができる。

それゆえに理解できた。この突如現れた人の波が何であるかを。

「見よ、我が軍勢を！」

誇らしげに、先ほどの彼が発した言葉に違わず、自身の宝具を他の王達へと見せつける。

「英霊に召し上げられてもなお、余に忠誠を尽くす伝説の勇者たち！  
時を隔てても、余の下へと集う同胞たち！ 彼らとの絆が余の至宝

であり、我が王道！  
イスカンドルたる余が誇る最強宝具——  
アイオニオン・ヘタイロイ  
『王の軍勢』なり！」

宝具の域にまで達する臣下たちとの絆。

まさにライダーは今、自身の思う王道をここに具現させていた。

血のつながりは親子を意味しない。

それは凄まじいという言葉でさえも生ぬるく感じてしまえるものだった。

ハサンの群れなど、地平の彼方まで続くかのように見える無数の英雄たちの前では、障害でも何でもない。

イスカンドルの盟友たちの雄たけびにアサシンらの悲鳴はかき消され、ささやかな反撃さえも怒涛の波にのまれて、今ここに暗殺者のサーヴァントがいたという形跡は、ほんの一欠けらも残されなかった。

『ウオオオオオオオオオオッ!!』

王に勝利を捧げた英霊たちは、高らかに勝鬨を上げる。

そして、これで役目は終わったというかの如く、彼らの姿は虚ろ気なものへと変わり、雄大な荒野も全て幻と思えるように、ライダーの固有結界は解除された。

後に残るのは、元夜の森にそれぞれのサーヴァントとマスターたち。唯一変化があったことと言えば、魔術師たちの脅威となったであろう暗殺者の集団が消えてしまったことくらいだろうか。

「幕切れは興ざめだったな」

宝具を展開する前と何ら変わらない様子で、ライダーは杯に残っていた酒を一気に飲み干す。

その様子を見て、アーチャーは不機嫌そうな顔でイスカンドルを見やった。

「なるほどな、いかに雑種ばかりでも、あれだけの数を束ねれば王と息巻くようにもなるか。——やはりライダー、お前と言う男は目障りだ」



「言っておれ、どうせ余と貴様は直々に決着をつける羽目になろうて」

涼しく受け流し、ライダーは腰を上げる。

「これ以上問答を続けていても得られるものはないであろう。このあたりでお開きとするか」

「待てライダー！ 私はまだ——」

唐突に切り上げようとするライダーに、セイバーが待ったをかける。

バーサーカーに助けてもらったとはいえ、ライダーには反論しきれないのだから当然だ。

しかし、そのセイバーにライダーは掌を突きつけた。

「まあ落ち着かんか、騎士王。何も貴様の言い分を耳に入れたくないという意味ではないわ」

「……何？」

「どうも今の余は至上の酒を口にしたせいか、多少気が早くなっておる。貴様の信じる王の在り方をいくら語られても、意地になって納得しないやもしれんのでな。王を語るにふさわしい、その時に再び問いかけようぞ」

イスカンドルは酒癖が悪い。これはバーサーカーが常日頃から認識している事実だ。

生前でもその悪癖が出たせいで重用していた腹心をも殺してしまったことが知られるほどに、割と有名な話でもある。

幸いなことに、今この場では彼自身が自覚してくれている。酩酊しているために、道が違いすぎるセイバーの言葉を今の自分だと間違ひなく受け入れないであろうと。

だから、今回は一度保留にしておいて、次にまた見極めると言っているのだ。

「なにより、我が盟友の頼みとあらば、そう無下にもできんわい」  
「……それはどうも。まあ、感謝はしておくよ」

ライダーからそっぽを向いて、バーサーカーはつぶやく。

「ではなセイバー、次に相見える時はその迷いを振り切っていることを望むぞ」

「……良からう、この勝負は預けることとしよう」

バーサーカーに肯定されたとはいえ、いまだにセイバーの胸には迷いの感情が残っている。

なるほど、これではライダーが問答を続けていても無意味だと言ったことにもうなずける。

ライダーは酒に酔って、セイバーは迷いによって、それぞれ異なる理由で問答を続けられる状態ではなかったのだから。

「では坊主、バーサーカーからも引き揚げ——」  
「待て狂犬」

ライダーがバーサーカー達に呼びかけたと同時に、アーチャーの声が響き渡る。

それにバーサーカーが全力で嫌な予感がしたのは、『直感』とは関係のない、別のものだったかもしれない。

「……何の用だアーチャー」

「まずは一つ。貴様は約定も果たさずにこの場から退散するつもりであつたのか？」

「……約定……？ ……一体なんのことだ？」

「はっ！ ほんの数刻も経たぬうちの取り決めを忘却するとは、やはり貴様の脳髄は犬畜生と変わらないということか？」

先ほどのセイバーに向けたものに比べれば遥かにましなものではあるが、アーチャーが哄笑した。

ただど忘れしたただけにしては散々な言われ様だが、いきなりアーチャーに喧嘩を売られても勝ち目はないのでバーサーカーは適当に聞き流す。

「<sup>オレ</sup>私の耳が不調でなければ、貴様は確かに『自らの真名を名乗る』と言ったではないか」

「……ああ、そういえばそんなことも言ってたっけ。カリヤが」

そういえば、そんな約束をしていた気もする。

ただ自分の発言ではないから忘れていた。

そう思い返しているうちに、周りの雰囲気が変わった。

それもそのはず。宝具もなしにアーチャーの猛攻を耐え、ライダーと協力関係にあるという異質さ。

その上、正体に関して、それにたどり着く物を一切残さないというサーヴァント。それがバーサーカーだ。

正体不明な陣営の、まさに心臓と言うべき真名をバラすのだから、マスターたちにとっては手に入れておきたいものだろう。

「まあいいさ、だったら言っただけでやるよ。僕の名前はジョニイ・ジョースター……もしくはジョナサン・ジョースターだ。1872年のケンタッキー州生まれで、30歳になる手前くらいで死んだかな」  
「随分と聞かせるではないか。ライダーの名乗りに触発でもされたのか？」

「ばれたって困りはしない。むしろ、こうした方が都合がいくらいだ」

そう言い切ったバーサーカーに、面白がるようにアーチャーが笑みを浮かべる。

「ほう？ 正直になった方が貴様に利するとは、どのような絡繰りがあるのか楽しみだ」

「あんたには関係ない話だと思うけどな」

「まあ良い。では次だ」

まだあるのかとバーサーカーは内心溜息をつく。

しかも、『次』ということは、まだほかにも聞かれるのだろう。

アーチャーとの会話にはかなりの神経を使うバーサーカーにとって、さっさとこの場から退散したい気持ちばかりが逸る。

「貴様にとつては、セイバーの願いは間違っているものではないと言ったな？」

「ああ、他の誰が否定しようと、僕は彼女の願いが間違っているだなんて思わないよ」

「そう思うのならば、此度の聖杯はセイバーに譲ってやればいいではないか。貴様よりも正しい道を行く人間と似通っているのであるろう？ ならば貴様はセイバーに聖杯を献上するのが道理というものではないか」

一瞬、バーサーカーはアーチャーが何を言っているのか理解できなかった。

サーヴァントは自分の願いを叶えたいがために聖杯戦争に参加しているのだから、そのようなものは愚問に等しい。

そこでようやくバーサーカーは思い出す。此度のこの酒宴は『聖杯問答』であったということ。

相手の願いが自分より上だと思ったら、それは相手の方が聖杯にふさわしいと認めるということに繋がるのだ。

だからアーチャーがこうして尋ねているということだ。

「……はあ……あのなあアーチャー、僕は聖杯戦争には参加している

けれど、聖杯問答に参加したつもりはない。君らの勝手なルールで僕が聖杯を辞退するという理由にはならないじゃあないか」

「そう抜かすのであれば、この我が貴様<sup>オレ</sup>に引導を渡すと言ってもか？」

あの倉庫街の時と同様に、アーチャーが冷淡な殺意をバーサーカーに向ける。

下手な言葉を返せば、直ちに宝具の雨がバーサーカーに降り注ぐことになるだろう。

「関係ないね」

が、バーサーカーはさらりと返す。

まるで、アーチャーのことなど眼中にないかのように。

「誰が正しくて誰が間違っているかなんてどうでもいい。誰がどんな願いを持っているかなんて僕にはどうだっていいんだ。僕は『自分の望みをどうやってでも叶える』ためだけにこの聖杯戦争で戦っているんだから。あんたの中ではそうするのが道理だったとしても、それを僕に押し付けなくてくれ」

アーチャーの言葉を明確に拒絶する。

だが、そんなものは自然な成り行きに過ぎない。バーサーカーは『漆黒の意志』を持っているのだ。もとより説得や問答でその行動指針を変えさせることなどできはしない。

たとえば他の誰かがバーサーカーの願いよりも多くの人間を幸せにする願いであったとしても、彼よりも不幸な人生を歩みそれを覆したいと願っていても、バーサーカーはそんなものを歯牙にかけることはありえない。

自分の願いを叶えるのを妨げるもの全てを排除し、そこに他人の事情などはさみはしない。それがバーサーカーだ。

「我オレにそのような言い方をすると、貴様は恐れというものを知らぬ愚者か、もしくはそれをも飲み込める蛮勇を持っているかのどちらかであろうな」

「気に入らなかつたなら攻撃なりなんなりしてみたらどうだ。でも、そうされても絶対に聖杯を諦めはしない。何としてでもあんたを倒して、生き延びてやる」

あれほど立ち上っていた殺気は消失させ、アーチャーは口の端をゆがませる。

何やら子供が新しく買い与えられた玩具を見るかのように、バーサーカーを興味深そうに眺める。

この場は助かったのだろうが、後にさらに厄介なことになりそうな予感しかない。

「まさに狂犬といった言いぐさよな。己の欲望を満たすことしか考えていない様は畜生とよく似ておるわ」

「ほつとけよ。自覚はあるさ」

「良い。先ほどの余興で我オレがくれてやった褒美もある。許してやろう」

「それはどうもありがたいね。てつきり、このままあんたと矛を交えることになると思つたよ」

「たわけが。我オレは傲慢なる生を好む。己の器の卑小さを弁えず大望を抱く者は見ているだけで愉しいものよ。その愉悦を自らの手で台無しにしようなどと思わぬ」

「だったら勝手に見て嗤つてろ。で、話は終わりか？」

「そう急くな。次の問いかけで最後ではあるがな」

やっと解放されると胸をなでおろした瞬間、思いもよらない問いを投げられた。

「——貴様はいつまでライダーの尻馬に乗るつもりだ？」

「……はあ？」

思わず変な声が出てしまった。

まさか傍若無人の権化のような男から、他人の同盟関係にとやかく言われるとは思っていなかったのだ。

なんとか混乱から立ちなおして、それに返答する。

「そんなの、ライダーが聖杯を手に入れるまでに——」

「言い換えよう。いつになったら貴様は我に許しを請うようになるのだ？」

まるで言い換えになっていない。ライダーとの同盟と、アーチャーに謝罪することのどこに共通点があるのかがさっぱりだ。

アーチャーが突飛なことを言い出すのには慣れてきたが、常人の使う文章に翻訳するには手間がかかる。

ライダーのようにはつきり言ってくれば楽だと言うのに。

そして少し考え、ライダーとの共闘関係とアーチャーに命乞いをすることの共通点を理解できた。

ライダーと協力関係にあるということは、すなわちそれ以外の陣営を打倒するということ。

ならば、バーサーカーは早かれ遅かれアーチャーとも戦わなければならなくなる。

つまりアーチャーはこう言っているのだ。

『我と戦いたくないなら疾く裏切れ』と。

「……裏切る気なんてさらさらないよ。元々、僕は一人じゃあ碌に戦えもしないんだ。例えあんたと戦うことになったって、ライダーから離反することはない」

「では、今すぐそこで跪いて我に嘆願するならば、我が民として認め、その働きぶりによっては聖杯を下賜してやっても構わないと言つてもか？」

聖杯戦争が始まった当初では信じられない提案をされた。

あれほどこちらのことを敵視していたアーチャーに、破格すぎる条件で同盟を組むことを提示されるとは。

これが倉庫街の戦いがあつた日に言われていたならば、バーサーカーは間違いなくライダーを裏切つて、それに飛びついていたのである。うアーチャーの誘い。

「……本当に僕に聖杯をくれるつていうのか？」

「ああ、貴様が我<sup>オレ</sup>に忠節を誓い、その報奨に見合うだけの成果を出すことができたならくれてやろう」

「あれほどあんたに無礼を働いたつてのに、それを許容してあんたに付かせてくれるのか？」

「良い、許す。ありえん話だが、我が<sup>オレ</sup>この言葉を違えたならば、即座にその首を掻つ切つてやろう」

おそらく、アーチャーは本気だ。

この言葉に嘘はないし、本当に役に立てたなら聖杯だつてくれるに違いない。

バーサーカーの何をそこまで気に入ったのかが分からないが、そうしてくれるのだろう。

それを確信して、バーサーカーは黙り込んでしまった。

聖杯戦争を勝ち抜くには、今差し出された手を取る方が利口だ。

規格外の戦闘力を持つこのサーヴァントを味方につけることができれば、ほぼほぼ勝ち揺るがない。

その単純な結論が理解できてしまい、ウェイバーはバーサーカーに縋るような目を向ける。

あれほど自分に気をかけてくれた存在が、自分の敵になるなんて想像もしたくない。

しかし、だからこそ、バーサーカーのあの言葉が思い起こされる。



『……………ああ、僕は真正銘バーサーカーさ。目的のためなら、人間性を捨てても成し遂げようとする——狂<sup>ただの</sup>人間だよ』

ライダーを裏切らなかつたのは、味方になりそうな陣営がいなかつたから。

でも、現にこうして出てきてしまっている。

様々な意味で規格外である英霊が、バーサーカーを唆している。

これなら裏切ったとしても、仕方がない。

「……………魅力的な提案だな。ここであんたの手を取らないのは、あんたが敵になったとしても勝ち抜けるとうぬぼれている馬鹿野郎か、ヒロイックな自分に酔っているロマンチストくらいだ。ここであんたの下につけば僕は願いを叶えられるだろうよ」

バーサーカーの口から肯定的な意見が出る。

それを聞いてウェイバーは見えていられないとばかりに顔を手で覆い、アイリスファイルとセイバーは流転する状況を見届けようと緊張し始めた。

彼のマスターである雁夜は苦々しげに顔をゆがめ、桜は雁夜とバーサーカーの様子に戸惑うばかり。

ただ一人、ライダーだけは微動だにせずただ二人を眺めていた。

少しの逡巡の間ではつきりと出た答えにバーサーカーは覚悟を決めた。

自分は、勝つたためならば手段を択ばない、他の何を犠牲にしても目的に到達しようとする、そんな人間だったはずだ。

召喚された当時のバーサーカーなら即座に選んだ提案だろう。

裏切る罪悪感があれど、迷わずにアーチャーの言いなりになつたらう。

「——でも断る」

それで今『迷った』ということは、受け入れるつもりはバーサーカーにはなかったということに他ならないのだが。

「あんたのことは100%信じられるよ。きっと僕がそうしたなら、あんたはそうしてくれるんだろう。その瞬間に、あんたにとって僕が気に入らない存在に逆戻りするのだとしても、約束は守ってくれるだろう」

「……ほう」

アーチャーが感心したかのように微笑する。

目の前の狂犬に、自分の考えていることを言い当てられたからだろうか。

「だとしても、あと1%が信じられない。あんたがそれを履行するつもりだとしても、あんた以外の因子によって、僕の願いを叶えられない可能性がある以上、あんたに恭順することは僕にはできない」

「何を知れたことを。我が、<sup>オレ</sup>誰かの手によって自らの道を阻まれるとでも?」

「いくらでも思いつくさ。あんたのマスターが令呪を使うだとか、僕以上に興味を引く存在がいたりしたら、僕なんかあつという間に脱落じゃあないか」

そこでちらりと、騎士王の方へと視線をやる。

バーサーカーは気づいていた。アーチャーが真に口説き落としたのは、自分などではなくセイバーであると。

もしここで二人ともがアーチャーに従うようになれば、セイバーとバーサーカーで聖杯を奪い合うことになることは予想するのも簡単だ。

そうなれば、100%願いはかなえられないことになる。

一騎打ちなんて、バーサーカーにはどだい無理なのだから。

「それに、元々僕らはあんたのマスターのことを毛嫌いしているしな。あんたらと組んだら十中八九内部分裂を起こすね」

「貴様も時臣を嫌っていたとは、その理由が思い至らん」

「ああ、なにせたった今、死ぬほど嫌いになったんだ。あんたが知る由もないさ」

バーサーカーは雁夜のサーヴァントである以上、雁夜にとっての宿敵である時臣を快く思わないのは無理もないことだが、今しがた嫌いになったとはどういうことだ？

彼らの事情を知る周りの者たちは、そう思った。

……いや、バーサーカーの内心を理解できるものが一人いる。

間桐雁夜本人だ。

「……ああ、そうだなバーサーカー。時臣のやったことは許せないな。釈明くらいは聞いてやるが、それまでは絶対にアーチャーとは組めないな」

「僕以上に、お前の方が怒り心頭って奴だろう？ まあ、否定はしないけどさ」

それなりに温厚な雁夜にとっても、他人にさほど興味がないバーサーカーにとつても、どうしても許せないことなんて、そんなものは数が限られる。――桜だ。

二人とも、子供が大切であるという点において共通している。

そんな彼らの前で、時臣は今何をした？

たつた今、時臣はアサシンに命じて、この場にいるものを皆殺しにしようとしたではないか。そこに彼の娘である桜がいるのにも関わらずに。

「……アーチャー、明日そっちに伺うことにする。言っておくが、軍門

に下るとかそういうんじゃあないぞ。一度、あんたのマスターと話がしたい」

「いいだろう。我も奴には面白さを微塵オレも感じぬ。貴様が来ることで何らかのきっかけになるやもしれんからな」

「感謝するよ。……で、話は終わりか？　これで用が済んだなら僕たちは帰らせてもらおうけど」

「そうさな。せいぜい言っておくとすれば——」

そこで改めてアーチャーは獰猛な笑みをバーサーカーに浮かべる。

「——翌日の邂逅は、それなりに覚悟しておけ。といったところか？」

漆黒は黄金に挑む。

遠坂時臣は困惑していた。

いや、この聖杯戦争が始まってから困惑しなかった瞬間など一度たりとてないのだが、今回の案件は群を抜いて不可解に過ぎる。

雁夜の喚び出したサーヴァントの正体が全く分からないのだ。

真名もすでに割れているというのにも関わらず、バーサーカーがどんなサーヴァントであるのかが理解できないでいる。

「……本当にあのサーヴァントは『ジョナサン・ジョースター』なのか？」

なにせ、伝え聞いてきたイギリス貴族である『ジョナサン・ジョースター』と、彼の敵として現界しているバーサーカーのイメージが、まるで一致しないのだから。

時臣が知っているジョナサン・ジョースターは、心身共に紳士であることを旨としており、心優しく思いやりがある、まさに貴族としての風格を備えた好青年であるはずなのだ。

それがどうだ、今こうして誇り高き貴族の名を騙ったサーヴァントは、貴族の誇りなどどこへ投げ捨てたのか分からないような利己的な人物だ。

貴族であろうとしている時臣には、粗暴者のバーサーカーがジョナサン・ジョースターであるとは到底信じがたい。

さらに、バーサーカーとジョナサン・ジョースターの生誕した際の情報不一致しないというのも混乱に輪をかけている原因だ。

彼とバーサーカーでは四年もずれているし、そもそもジョナサン・ジョースターはイギリス生まれであって、アメリカが生誕の地であるという記載はどこにもない。

だというのにバーサーカーは『自分はケンタッキー州生まれだ』と言っている。

あからさまに情報の齟齬がある。であるならば、バーサーカーの

言っていることは虚言で、最初から彼は真名を明かす気などなかったと考えるのが普通だ。

だが、そうになると、新たな疑問が浮かんでしまうのだ。

昨日バーサーカーは雁夜と共に時臣の家に訪れるとあらかじめアーチャーに告げている。

間違いなく彼らは数時間もしないうちにここにやってくる。あのサーヴァントを相手に吐いた言葉を撤回するなど、自殺願望がある人間しかしないだろう。

彼らは、時臣らがバーサーカーの告げた真名が嘘であると知っている状況下で、時臣の屋敷に訪問すると言った。

時臣でなくとも、ジョナサン・ジョースターについて調べれば誰でもあれ、どのような人物であるかは見当がついてしまうというのに、来ると告げてしまっている。

——つまりは、あの傲岸不遜の弓兵に嘘がばれているにも関わらずやってくるということになってしまう。

それこそ聖杯戦争から真っ先に脱落したいのかと言えるような行動だ。

……そんなことをあのバーサーカーがするとは到底思えない。

故に、バーサーカーの開示した情報は真であると受け取らざるを得ないのだ。

「……これがバーサーカーの『ばれた方が都合がいい』と言ったことの根拠か」

信用できない真名だが、嘘をついているとは考えにくい。

矛盾している証拠はあるのに、正直に話していると保証できる状況ができています。

考え込んでいくうちに、頭の中が混乱しそうになる。

こういう風に貶めるのが、バーサーカーの狙いなのだろうか。

「仕方ない。わざわざ向こうから出向いてくれるというのであれば、事の真偽を彼らから直接聞き出すまで。何ら問題はないな」

常に余裕をもって優雅たれ。

遠坂家の家訓を脳裏に浮かべ、時臣は袋小路に陥りかけた思考を停止させる。

この程度で時臣をかき乱すことなど不可能だ。

「……………どうやら来たようだな」

ちようどよく、バーサーカーらがここにやってきたようだ。

一度魔術継承を拒んだ怠慢な男にも聞きたいことがある。こちらも本腰を入れなくてはいけないと判断し、時臣は気力を体に巡らせながら、二人の客を迎えに行く。

……………

ようやくここまで来ることができた。

この『完璧』である男の前について立つことができた。

「久しぶり……………と言っておこうか、時臣」

かつて雁夜の前に現れた時から格の違いを見せつけられてきた、遠

坂時臣に並ぶことができた。

いままでの積もりに積もった時臣への怒りはあれど、些か歪ではあるが同格の相手として相対することができた。

不謹慎ではあるものの、どうあつても歯が立たなかった時臣と対等になれたことが、雁夜には嬉しかった。

その達成感からか、雁夜は自分でも驚くほどの穏やかさで時臣に語り掛けられた。

ここに来るまでは、自分の内に燃え滾る憤怒の情が迸るかもしれないと警戒すらしていたのに。

「ああ、まさか魔導を諦めたはずの君に、聖杯への未練があつたとは予想だにしてなかつたものでね。君に羞恥心というものがあれば、正直二度と会うこともないと思つていたよ」

一方で時臣は、雁夜への侮蔑を隠そうともせず挑発する。

雁夜の魔導から逃げた責任感のなさや、醜態をさらしてなお負い目を感じない恥知らずぶりには、魔術師として到底許容できるものではなかつたからだ。

その時臣の言葉を聞いて、雁夜は『まあ、そういう風に言われるだろうな』と内心苦笑していた。

時臣——いや、魔術師という人間は、魔術をさらなる力へと昇華させること以外興味がないのだ。

それ以外のことは大した問題ではなく、そんな誇り高き魔術の道から逃げ出した雁夜など、時臣には見苦しいと感じるだろうことは予測できた。

まあ、その思考にまでたどり着けたのには、『どうして時臣がアサシンを使ってキャスターの事件を解決しないのか』という疑問に、バーサーカーが答えてくれたからに他ならないのだが。

あの時に、自分と時臣は、常識や倫理観がまるで違うということを受け入れることが出来なければ、あつさり雁夜は目の前の男の挑発に乗って、心の内に燻っている憎しみをぶちまけていただろう。



「いやあ、全くもって俺は運が良かったらしい。そんな落伍者の俺が、こうやって聖杯戦争に参加できたんだからな」

本当に運がいい。

当初の予定通りのサーヴァントを召喚していれば、もしかしたら破壊への道を進んでいたかもしれないというのに、ここまで自分にとって都合よく事が動いているのだから。

そもその魔術師としての格が雁夜よりも数段勝っているはずの目の前の敵が、いつ、何を仕掛けてくるかもわからないこの状況下においても、相手の皮肉を自然と受け流すことができる程度には心の余裕が持てるほどに、雁夜は落ち着いていられている。

「……それで、君は私に聞きたいことがあるそうじゃないか。その要件を言ってみたまえ」

「そうさせてもらうよ。……まず一つ目だ。どうして昨晚、アサシンをあの方に差し向けた？」

「……君の言っていることが理解できないな。アサシンは脱落したはずだし、そのマスターも私ではない。そのことについて追及したいなら、綺礼君にでも言いたまえよ」

とぼけやがって、と歯噛みする。

時臣としては、言峰綺礼と裏で繋がっていることを察知されたくないのだから、白を切るのも当然と言える。

だが、そうなると雁夜の質問の目的が達成されなくなる。

いつそのことこの場で『お前らがひそかに同盟を組んでいたことはどうでもいいから、質問に正確に答えてくれ』とでもぶちまけようかと雁夜が口を開く直前――

「――カリヤ、質問の内容が間違ってるぞ」

霊体化していたバーサーカーが雁夜の背後から姿を現す。

突然訳の分からない指摘をされ、とつさに反論しようとした雁夜を差し置いてバーサーカーは時臣に顔を向けた。

「すまないな、僕のマスターがぶしつけな質問をして。つまり彼はこう聞いたかったんだ。仮の話として、『もしもお前がアサシンのマスターだったら、昨夜の宴会の最中にマスターたちを皆殺しにしようとしたか』ってね」

バーサーカーはこういった面倒な手合いを良く知っている。

明らかにばれているのに、それをそ知らぬふりして流そうとしたり、それどころか逆にこちらの手札を無意味なものにしようとさえしてくる、言ってしまえば『面倒なやり方』をする人間を。

彼らのような人間は、率直に聞いたところでまともに答えを返してきやしない。

それゆえ、バーサーカーは『あくまで仮定の話として』質問をした。

こうすれば、実際に目の前のマスターがやっているかどうかに関係なく答えられるのだ。

「ふむ、逆に聞きたいのだが、その仮定をどうして私に聞くのかね？

私は実行犯でも何でも無いというのに」

「それがね、アサシンの本来のマスターに聞こうと思っても監督役と親子だつていうなら匿う可能性が高いだろ？ その点あんたは生粋の魔術師な上に、キレイとも交友関係がある。だから、昨夜のあの行動の意図を、あんたの視点から見るとどうなるのか知りたいってだけさ」

こうは言っているが、こんなものが茶番であることはバーサーカーも時臣も分かっている。

こういう建前で尋ねないと、時臣は自らの弱点になりうることに關して答えてくれないというだけだ。

「そういうことなら答えよう。私ならば、アサシンを仕向けたであろうな。他のマスターを脱落させる絶好の機会なのだからな」

「あの場には、あんたの娘だったサクラもいたはずだが？」

「もちろんだとも。我々魔術師は『根源』に至るためにこの世に生を受けてきた。であるなら、何を差し置いてもその可能性を手にしたと思うのは当然だろう？」

思わず、バーサーカーは握っていた拳に力が入ってしまう。

顔を見なくても分かる。おそらく雁夜も似たような反応をしているに違いない。

生前から魔術師などというものに関係のない生活を送っていたため、常人とは異なる感性を持つ人間がどのような思考回路をしているかは理解できなかったが、時臣の話を聞いて、バーサーカーは理解できてしまった。

魔術師と言うのは、本当に人の道から外れた存在——すなわち、外道であるということに。

「……あんたには、親の情というものが無いのか？ 自分の子供を手にかけて、何とも思わないのか？」

「あるとも。あるからこそ、私は間桐に桜を養子に出したのだよ。聖杯の存在を知っている一族の数が増えれば、それだけ根源に近づくことができる。私で果たせなかったのであれば凛が、それでも至れなかったなら桜が、遠坂の悲願を受け継いでくれることだろう」

そこまで時臣が語ったところで、雁夜が目の前の机に拳を振り落とした。

「時臣ッ！ お前は今何を言っているのか理解しているのか!? 聖杯を使って姉妹がともに『根源』を目指すことの意味を分かって言っているのか!?!」

我慢ならなかった。

遠い過去の記憶を——凜と桜が仲睦まじそうに遊んでいる光景を知っている雁夜には、時臣の意図していることに吐き気すら催した。

「それはつまり、姉妹で殺し合えと、お前はそう言いたいのかつ!」「そうなれば、むしろ幸福じゃないか。勝てば栄光を手にでき、負けても先祖の家名にもたらされる。これほどに憂いなき戦いもあるまいよ」

何でもないことのように涼し気に返す時臣の様子に、雁夜もバーサーカーも脱力した。

もはや怒りさえも湧いてこない。目の前の人非人ひとでなしに何らかの感情を持つことすら億劫だ。

バーサーカーはここに至るまで、雁夜の時臣への印象を大げさなものだと思っていた。

憎い相手に対しての評価は、主観が入ってしまい碌なものにはならないと理解しているからだ。

そしてやはり、雁夜の言葉は間違っていた。

雁夜の言葉以上に、遠坂時臣は人として何か欠落しているとしか思えなかった。

魔術師としての生き方というものが、呪いか何かのようにさえ感じてしまう。

一方で、雁夜は喪失感に苛まれていた。

雁夜の人生を支配し続けてきた臓硯の呆気ない幕切れよりも、それははるかに強かった。

これまでの雁夜の人生は、時臣に対しての羨望の連続と言っても過言ではない。

この男に自分は遠く及ばず、生まれ出でた時から生物として格が違うのだろうと思っていた。

だからこそ、この優雅で完璧な男が、雁夜にとって目標のようなも

のでさえあった。

それが、たつた今、絶対にこの男のようにはなりたくないとの底から願ってしまった。

これまで、この男を目指してやってきたことは何だったのか。すべてが無意味なものとした今、雁夜は時臣に対する熱を、完全に失ったのだ。

『カリヤ、よくトキオミは聖杯戦争に参加しようとしたな。一般人の感性から離れすぎじゃあないかこいつ』

『……待ってくれバーサーカー、すぐ俺は落ち込みそうなんだ。何というか、小学生くらいの子供がクリスマスプレゼントにでっかい箱を渡されて、わくわくしながら中身を覗き込んだら、1000000ピースのミルクパズルが詰まってたって感じの落ち込み具合だ』

『……それは、相当落ち込むな。そのプレゼントを渡した奴は、相当ひねくれてるか、常人には理解できない思考回路をもってそうだね』  
『全くだな。そんな奴が、人間としての意識があるサーヴァントを使役したって、どこかで裏切られるか、存在そのものをなかつたことにされてもおかしくないくらいにな』

念話を使つて、空虚な心を何とかして埋めようとするバーサーカー陣営二人。

そうしてないと、目の前のこの男に何をするか分かったものではないのだから、仕方ないと言えば仕方ないのだが。

もはや二人には、これ以上時臣と話すことはない。なるべくならさっさと帰ってしまいたいくらいだ。

しかし、そう都合よくいくはずもない。雁夜達が遠坂家に入ることができたのは、向こうにも何らかの思惑があつての事。今度はこちらが向こうの用件を聞く番になる。

「……俺達からお前への話はこれで終わりだ。恥知らずにはなりたくないから、お前の質問にはちゃんと答えてやる。何でも聞け」

「魔導に背を向けた裏切り者にも、ある程度の気概と言うのはあるよ  
うだな。そうだとしても、間桐が墮落したという誹りからは逃れられ  
んぞ」

「好きに言えよ。俺達の価値観のずれからして、互いに互いが相容れ  
ないって理解できただろ。そんな皮肉を言うだけ無駄だ。面倒だか  
ら要点だけまとめて話をしろ」

もう雁夜は諦めた。

時臣が、少しでも昨晩桜を巻き添えにしようとしたことに後悔の念  
を抱いていたなら、仲の良かった姉妹を離れ離れにしたことを悩んで  
いたのであれば、今までの時臣への逆恨みを全て謝罪して、今度こそ  
正々堂々と両者の間に決着をつけようと思っていた。

しかし、その期待を裏切られた今、時臣が『聖杯戦争における障害  
物』にしか見えなくなってしまった。

この男に何と言われようと、雁夜には壊れたラジオのノイズ音以上  
の価値もないだろう。

「では聞かせてもらおう。——バーサーカーの真名は本当にジョナサ  
ン・ジョースターでいいんだな？」

「……他の誰でもない僕がそう言ったじゃあないか」

「しかし、君の語った経歴と、現存しているジョナサン・ジョースター  
に関する資料を照らし合わせると、相当な数の相違点があるのだよ。  
出身地も違えば生年月日も違う、体格も髪の色も、何もかもが異なっ  
ている。これで信じるという方が無理だと思わないかね？」

この手の質問をされることは、バーサーカーはある程度予測してい  
た。

というより、実際にバーサーカーがこの世界のジョナサン・ジョー  
スターの資料を見て、『うそだらかりや！ ええ!? なにこれ? こ  
の資料おかしいぞ……』と自分でツツコミをいれていたくらいだ。

自嘲するくらいゲスだと思っっているはずの自分が、別世界で高潔な

魂を持っている誇り高い紳士になっていたなら、その反応も無理もない。

「そうだとしても、僕がジョナサン・ジョースターであることは間違いないよ。もしかしたら同姓同名の別人だったんじゃないのかそいつ」

「英霊になれるほどの逸話を持っているジョナサン・ジョースターはその一人しかいない。だとするなら、君は一体誰だ？」

「嘘はついてないさ。それとも何かい、あんたのサーヴァントがいる前で僕が嘘をついたとでもいうつもりか？」

結局その結論に落ち着いてしまう。

時臣のサーヴァントの目の前で堂々と真名だと言って出した名前が、偽りのものであるという可能性が低すぎる。

あれからかの黄金のサーヴァントは怒りを覚えている様子もないことから、間違いないのだろう。

「……そうだな。確かに君の言う通りだ」

「分かってくれたようで何よりだよ。で、あんたの用件はこれで終わりか？」

「ああ、私からは以上だ」

時臣もまた、この二人を視界に入れることを煩わしく思っていた。

マスターは魔導から逃げ出した魔術師の恥さらしであり、サーヴァントは紳士と名高い高潔な貴族の名を騙る愚か者。

できることなら、早くこの家から追い出してしまいたいくらいだ。

「そうか、じゃあ僕達とあんたの楽しい話し合いはこれで終わりだ」

話の切り上げを向こうから振られたとき、時臣は安堵した。

これで、この腹立たしい凡愚達の顔を見ずに済むと。

——そんな安堵など、次のバーサーカーの言葉を聞くまでの束の間のもものではあったが。

「ここから先は話し合いじゃあなくて……殺し合いの時間だ」

「……なんだと？」

「おいアーチャー——いやウルクの王様、いるんだろ？」

何でもないことかのようにアーチャーの正体を口に出すバーサーカーの呼びかけに、その相手は金色の輝きでもってそれに応えた。

黄金のサーヴァント——ギルガメッシュが、不敵な笑みを浮かべながらその場に姿を現した。

「ほう、ようやく我の名を察する雑種が現れたか」

「むしろなんで今まで僕が気づけなかったのか不思議なくらいだよ。思えばあちこちにヒントはちりばめられていたっていうのにさ」

アーチャーは最初から自ら言っていたではないか。

『真の英雄たる王は天上天下に我ただ一人』と。

イスカンドル相手にあそこまで啖呵を切ることができ、無尽蔵の宝具を所持しており、自分を英雄の王と称した。

そんな英霊、原初の王であり、世界最古の英雄譚の主人公——ギルガメッシュにおいて誰がいるのか。

「多分ライダー辺りも気づいていると思うけどな。なんだかんだ言つて、あいつも察しはいい方だ」

「全く嘆かわしいにもほどがある、この我の姿を目に入れるという光栄に浴してなお、この王の名を察せぬ輩があまりにも多すぎると思わんか？」

「……会ったこともない人間の顔を覚えてろってのは無理があると思うんだけどな。僕もあんたの容貌自体が現存している文献の記述と違いすぎるじゃあないか」



「そうであっても、<sup>オレ</sup>我が姿をその場で解しろと言っているのだ。この我が身体はこの世で最高水準の宝石に勝るものだ。それだけで説得力があるというものであろう」

「90kgの斧や15kgの黄金剣、それに巨大な弓を携えつつ300kg相当の武装で身を固めたり、弓と211・5kgの剣と210kgの斧を扱ったり、掴み合いや殴り合いのような己の拳で戦う武勇に優れた人物って書いてあったら、誰でもヘラクレスとかの同類の筋骨隆々な奴を思い浮かべるだろう……」

しかも、そんな記述があるのに筋力はBである。

正直なところ、Aであってもおかしくないような逸話を持っているのだ、こんな細身な人間とは思えないだろう。

「それはいい。して、この<sup>オレ</sup>我に何の用だ？ 下らぬ理由であるならば、代償として貴様の首をもらおうぞ」

「なんだ、どつちにしろ変わらないじゃあないか」

……変わらない？

時臣はバーサーカーの言葉に違和感を覚えた。

首を出す。という言葉と変わらないとは、自殺ということではないのだろうか？

そう戸惑っている時臣をよそに、二人にサーヴァントの会話は続いていく。

「というより、あなたは昨日の段階で予測できていたはずだ。そうでもなかったら、あんな言葉を吐くはずがない」

「さてな。しかし、もしも期待通りの言葉を貴様<sup>オレ</sup>が我に言い出すのであれば、この退屈な感情を紛らわせた褒美として、首ではなく四肢のどれかで許すという恩情を与えてやっても良いぞ？」

「そうさせはしないさ。この足が動かなくなるのは、二度とゴメンだからな」

昨晚の段階でバーサーカーは『覚悟』できていた。

あの別れ際にギルガメツシュはバーサーカーにこう言ったのだ。

『——翌日の邂逅は、それなりに覚悟しておけ。といったところか？』と。

時臣との邂逅であるならば、覚悟する必要などどこにもないはずだ。

だというのに、英雄王はそう忠告した。

それはつまり、バーサーカーの思惑が、すでにギルガメツシュに露呈していたことを意味している。

窓に差し込む夕日の光が、いつの間にか街灯によるもの変わっていることを確認したバーサーカーは、アーチャーを正面から睨みつけて、その引き金を引いた。

この遠坂家への訪問のバーサーカーの『真の目的』、それは——

「——表に出るギルガメツシュ。あんたには『再起不能』になつてもらう」

「よく吠えたな、狂犬。やはり貴様は随分と我を興じさせる」

——ギルガメツシュの打倒である。

バーサーカーの覚悟に対し黄金のサーヴァントは、寧猛な笑みを浮かべながら、その挑戦を受け入れた。

## 運命の分かれ道

バーサーカーがアーチャーに挑む。というのは、はたから見れば自殺行為だ。

しかし、バーサーカーが聖杯を手にするには、そうするしか道がないというのが事実になりつつある。

というのも、ギルガメツシュを倒せるサーヴァントが昨夜の時点でいなくなってしまったというのが原因だ。

ギルガメツシュを倒すのに必要な条件はいくつかある。

一つに、ギルガメツシュの宝具に対応ができる力を持っていること。

一つに、ギルガメツシュが本気を出さないであろうサーヴァントであること。

一つに、ギルガメツシュを一撃で倒せる火力の出る宝具を持っていること。

ジョニイは聖杯問答に至るまで、二つ目の条件は問題視していなかった。

元より、あのサーヴァントが本気を出す可能性がある英霊なんて、倉庫街からの因縁がある自分くらいしかいなかったから。

なので、それ以外の二つに当てはまるセイバーなら倒せると踏んでいた。

自分はアーチャーの怒りを買っているために、姿を現しただけでぶち殺される。

キヤスターは勝負にすらならず殲滅される。

ランサーも武人としては一流だが、宝具が対人であり、その効果もアーチャーと相性がいいとは到底言えない。

ライダーならばいい勝負ができるかもしれないが、あの絨毯爆撃を回避しつつ突撃するのは至難の業。

その点セイバーなら、あの有名なアーサー王だ。

剣の英雄と問われればまず名前が挙がるほどに有名な騎士で、誰もが知っていると言っても過言ではないくらいに知れ渡っている

約束された勝利の剣を宝具として持っている。

彼女ならば、あの宝具をしのぎつつ、致命的な一撃を加えられるだろう。

だが、それはあくまで黄金のサーヴァントが、慢心している状態での話だ。

本気を出していないからこそ、そこに付け入る隙があったというのに、聖杯問答の末にセイバーはアーチャーに執着されるようになってしまった。

となれば、ギルガメツシユと言えど、セイバーを手に入れるために多少は気を抜かずに戦おうとするだろう。

この多少、というだけで大きな違いになってしまうほど、アーチャーは強いのだ。

そのせいで、セイバーにアーチャーを倒してもらうのは現実的でなくなってしまった。

ならば、いつそアーチャー相手に同盟を組むことも考えたが、あの聖杯問答の後でセイバーがライダーと手を組むだろうか？

そもそもギルガメツシユとイスカンドルに、どこか相手を認め合っている節すらあるのに、セイバーの助力をライダーが許すだろうか？

それにもし、この二人が息を合わせて戦いを挑んでも、それはますますあの英雄王の本気を引き出すだけの話になるのではないだろうか？

その結論に至ったバーサーカーは悩んだ。

どうにかしてアーチャーを倒さなければ聖杯は手に入らないのに、それを倒す手段がないことに。

そして、倒すための条件を再確認しているときに気づいた。

この条件に、今では自分も当てはまっていると。

何の因果か、最古の王の憤怒は収まっていたし、それでもなお自分は甘く見られている。

他のサーヴァントほどではないとはいえ、ある程度ならあの攻撃にも持ちこたえられる。

そして——自分の能力は、スタンドまともに発動さえすれば一撃必殺だ。

キャスターのように軽装であれば、爪タスクの穴も別の場所に移せるだろうが、ギルガメツシユは鎧を身に着けている。

その鎧の上から弾痕を確認するのは難しいし、とっさにどこかに押し付けるのも手間がかかる。

唯一露出している顔に撃ち込むことができれば、それで勝てる、勝ててしまう。

これらのことを踏まえた結果、今この段階においては、アーチャーへの勝率が一番高いのは己自身であるという結論が出た。

……そう出てしまったのだ。目的を達成する唯一の方法が。

そうなってしまうては、もはやバーサーカーを止めることができる者は誰もいない。

自分自身ですらも、その衝動を止めることができないのだから。

.....

「ぐツ……！ 攻め込む隙が……！」

投げる。ただひたすらに無心で投げる。

友から受け継いだ『技術』でもって、友から受け継いだ『鉄球』を絶え間なく投げ続ける。

しかしその標的は決して黄金のサーヴァントではなく、彼が操る命無き無限の軍勢だ。

初日に倉庫街で味わった程度しか射出できないのであれば、その時と同じようにギルガメッシュに『爪』<sup>タスク</sup>を撃ち込むタイミングもあっただろう。

だが、それが今の戦闘において一刻の猶予もない。むしろ、それらも防御に専念するために使われるほどだ。

『鉄球』と『鉄球』の合間に時折生じる隙を埋めるために、攻撃手段を使わされることにバーサーカーは歯がゆさを感じる。

憎々し気に、バーサーカーは右手の人差し指に唯一残った『爪』を睨みつける。

幸いにもまだ左手の分が残っているが、このまま長丁場になれば同じように減っていくだけだろう。

それほどまでに、英雄王は休む間もなく、潜り抜ける隙間もなく、『王の財宝』<sup>ゲートオブバビロン</sup>をバーサーカーに惜しみなく使い続けている。

「どうした狂犬。貴様の我<sup>オレ</sup>に対する挑戦は、苦し紛れの博打であったのか、それともただの死滅願望かのどちらかであったか？」

もちろんそんなことはない。バーサーカーは必死に最強のサーヴァントに追いつがろうとしているのだ。

ただ、そうだとしても、アーチャーにはそんなバーサーカーの懸命さなど評価するに値しない。

先ほどから何ら変わらぬ千日手を繰り返しているだけでは、ギルガメッシュがこの戦いに飽きてしまう。

このサーヴァントが飽きるということは、それすなわち即座にこの戦いを終わらせるために、遠慮なしの一撃を放ってくる——すなわ

ち、ジョニイの死が確定することと同義だ。

「そう言っていていられるのも今の内だ！　せいぜい見くびっている！」

吠えつつ、バーサーカーは自らに向かつてくる死の雨に、もうすでに何度投げたのか分からない鉄球を繰り返して投げつける。

「なッ!？」

だが、あろうことかジョニイの放った鉄球は、明後日の方向に山なりの放物線を描くだけ。

緊張の連続でミスを犯したのか、バーサーカーの鉄球には『黄金の回転』がかかっていたいなかったのだ。

迎え撃つつもりが、見間違いの方へと飛んでいく鉄球を見て、我に返ったバーサーカーの顔から血の気が引いた。

すぐそこまで迫っている宝具の雨から逃れるために、咄嗟に回避行動をとった。

「あがッ！」

何とか直撃は避けたものの、それでも無傷でとはいかなかったように、バーサーカーの右脚が吹き飛んでいた。

たまらずジョニイは地面に転がってしまふ。

「やはり凡夫の最期というのは呆気ないものよな。我に臆さず、馬鹿正直に正面から挑んできたことは褒めてやるが、ここまで中身がないとは拍子抜けも甚だしい。……よもや、我に吠え面を書かせるがためだけにその身を投げうったわけではあるまいな？」

嘲りと怒りが混ざったような表情をしながら、ギルガメッシュは宝具の射出を止めた。

そして軽く右腕を掲げ、防衛の役割を果たすことのできなかつた鉄球をその手中に収める。

黄金の回転がかかっているのなら、このような真似は例え慢心しているアーチャーであってもやりはしないが、誰の目から見てもその鉄球には何の回転もかかっているのが明らかだった。

「しかし、その脆弱な身で宝具を使わずに我が王の財宝を耐え凌ぐとは、近代の英霊にしては骨のあるやつよ。その足も無くなつたことだ、地に平伏して助けを請うなら見逃してやつても構わんぞ？」

まただ。なぜかアーチャーはバーサーカーに甘い態度をとり続ける。

他のサーヴァントであるなら、このような慈悲を見せることはないだろうに、英雄王はただの人間にはチャンスを与える。

その原因はバーサーカーには分からない。

自分に対して明確に反発することが面白いのか、聖杯への願いがそれほどに染み渡つたのか、それとも——ジョニイがそれらを投げ捨てても生き残りたいと醜く喘ぐ様を見たいだけなのか、どれもが正解で、どれもが間違っているような回答しか出てこない。

だが、回答が出ないこと自体は問題ではない。

どれほど甘く誘惑しようが、バーサーカーには関係がない。

「嫌だね」

聖杯が取れないのなら、押し並べて万物無意味なのだから。

「お前を倒すことができるチャンスは、現状じゃあこの場面以外ありえない。それをみすみす自分から投げ捨てるなんて御免だ」

「ほう……この状況でもそのような大言壮語を宣うか。全く利口な言葉とは思えんぞ？」

「僕は何度だって言つてやる。どれほど僕が弱かろうが、どれだけ勝



ち目が薄かろうが、例え足をもがれようが、それは僕が聖杯を諦める理由なんかになりはしない！ だから——」

右脚の切断面を抑えながら、それでも闘志は——漆黒の意志は燃やし続けてバーサーカーは言い切る。

「——絶対にあんたには屈服しない！ もう二度と、友を見捨てたりはしたくないッ！」

「そうか——ならば、ここまでだ」

隣れみからか、それともまた別の感情なのか、アーチャーは目を細めて再び宝具を展開する。

その死刑宣告を受けて、バーサーカーのマスターの雁夜は悔しそうに歯を食いしばる。令呪で避けるように指示しようが、いずれはその効果は薄れていく。かといって撤退しようにも、あのようなことを口走ったバーサーカー相手に命令できやしない。なんとか切り抜かれる指示を考えようにも、焦れば焦るほど考えがまとまらない。

今度こそ、バーサーカーはこの攻撃に耐えることはできないだろう。鉄球は一つしかなく、『爪』も左手の五発だけ。避けることもままならないジョニイでは、このまま攻撃されればあっさりと殺されるだろう。

「雑種にしては楽しめたぞ。この我を楽しませた榮譽を胸に消え去るがいい」

「……………したな」

「……………何だ？ よく聞こえんぞ」

このまま攻撃されればあっさりと殺されるだろう。  
ならば——

「やっぱり慢心したな？」



の武器を掴みなんてしなければ、こんなことにはならなかったって言うのに」

ジョニー自身、ここまで事が運ぶとは思っていなかった。

『鉄球』がギルガメッシュの近くに落ちればラッキーだ、と位にしか考えていなかったのに、丁寧に相手の方から近づいてくれた。

こんな好機、後にも先にもありえないだろう。

「サーヴァントが背後をとられることの意味、知らないあんたじゃあないだろう？」

英霊同士の戦いにおいて、敵が後ろに回ることほど恐ろしいものはない。

背後をとられると致命傷と言われると、有名な英雄にジークフリートなどが挙げられるが、そもそもがサーヴァントの戦闘というものは、隙を見せれば一瞬で勝敗が決まると言われるほどにハイレベルなのだ。

故に、かの竜殺しの剣士でなくとも、このような状況に陥ることは、相手に生殺与奪を握られているも同然ということだ。

「ここまで張り付けば、『王の財宝』ゲートオブバビロンだってそう簡単に使えない。これで終わりだ」

ギルガメッシュの宝具は強力無比だ。しかしそれは、自分に跳ね返ってきたときにも致命傷になることを示す。

今ここで、バーサーカーに宝具の雨を降らせようものなら、アーチャーとて無事ではられない。

まさにこの時、ジョニーは確実に勝っていた。

「——そうさな、確かに我相手にオレここまで迫れたならば、勝ちと言ってもいいかもしれんな」

「な——がッ!？」

だが、そのチャンスは即座に潰された。

バーサーカーの腹部に何か巻き付いて、その体を後方へ弾き飛ばされたからだ。

……完全にバーサーカーは見誤っていた。

いや、むしろアーチャーに少し本気を出させてしまったことが原因と言えるだろう。

なにせ今までギルガメッシュは、『宝具を射出する』という形でしか攻撃してこなかったのだ。故に、ジョニイは黄金のサーヴァントは直線的な攻撃しかできないものと思い込んでしまった。

だからこそ、よもや、『鎖を巻き付ける』などという攻撃など、バーサーカーの想像の埒外であった。

「我オレに天エルキドゥの鎖クワを使わせた雑種はそうは居らぬぞ。誇るがいい」

「……嘘だろ」

バーサーカーは愕然としていた。

たった今チャンスを潰されたことにはではない。

そんなもの、また別の手段を講じればいいだけだ。

思いもよらない攻撃手段に驚いたわけでもない。

そんなこと、生前での戦いから身に染みている。

ましてや、今まさに自分の命を握られているこの状況に対してでは断じてない。

いざとなれば、令呪で回避できる。

——目の前のギルガメッシュから、慢心している気配が消えてしまったことに、ジョニイは愕然としていた。

「喜べバーサーカー、ただの人間の身でこの英雄王の本気を見られたのだ。凡百の雑種より格上であると認めてやろう」

『そんなものに認められなくなかった』

今バーサーカーの心境は、この一文で埋め尽くされていた。

ジョニイがギルガメッシュに対して勝機があったのは、相手が油断してくれていることに尽きる。

それが今、消え去った。万に一つの勝ち目が無くなってしまった。わざわざ背後に回らず、腕だけを移動させるべきだったか？

……だめだ、『爪』の射線に入らないようにするため、相手は腕に注視していた。

そうしたなら、すぐにばれてしまっていただろう。

ならば、『ACT3』ではなく『ACT2』を鉄球に乗せるべきだったか？

……それもだめだ。鎧を伝っているときに、それが露呈してしまう。

では、何も言わずに撃ち殺していればよかったのか？

……それこそ無意味だ。この鎖の巻き付く速度はすさまじいものだった。

おそらくアーチャーはいつでもバーサーカーを引きはがせたのだろう。

それをしなかったのは、自らが優位に立ったつもりでいるジョニイを見て『愉悦』を感じるためだったのか――

「……本気って言ったって、全力じゃあないんだろう？」

「当然のことよ。我が至宝を貴様に抜くなどありえん。二つの意味でな」

「僕ごときには勿体ないって理由以外にあるのか？」

「無論その言葉も正しいが、一方の意味の方が我オレには重要だ」

ろくでもない理由に決まっている。

今までの戦いにおいて、ジョニイはギルガメッシュの悪趣味さを嫌というほど見せつけられているのだから。

「そんなことをすれば、せつかくの玩具を壊してしまうのではないか——！」

そう言つて、アーチャーは再び『王の財宝』ゲートオブバビロンによる爆撃を再開した。

(——いや、これは明らかにさつきまでのものとは違う——!?)

精度が上がっている。量が増えている。武器が多彩になっている。まるで先読みをしているかのように撃ちだされる宝具。

先ほどまでの宝具の雨が、小雨であったとさえ思えるほどの密度。

刃のついている武器はもちろんの事、矢や銃弾、はては先ほどの鎖やブーメランと言つた武器さえも飛び出す始末。

それでも迎撃はまだ可能だ。

密集すればするほど蹴散らしやすくなるのは間違いない。

だが、このままでは『鉄球』がもたなくなる。

密度が増えたということは、単純に刃が増えたということに他ならない。

先ほどまでは柄を狙つて撃ち落とすことができたが、それをするのに集中力が続かない。

しかも、武器の種類がバラバラすぎて、その軌道を読むことも多大な負荷になる。

自らの体を使って避けようにも、その先にもまた命無き軍勢が襲い掛かつてくる。

「再び『穴』に隠れるか？ ならば今度は地面ごとその『穴』を粉碎してくれるわ」

「——ッ！」

まさに万事休す。

慢心を捨てているアーチャーを相手に、今打てる手立てはない。

姑息な手段とは分かかっていても、バースーカーが令呪での撤退を雁

夜に求めようとした――

「……？」

その瞬間、宝具の雨が突如として止まった。

……いや、止まったわけではない。依然としてギルガメッシュは『ゲイトオブバビロン王の財宝』による攻撃を続けているのだから。

正確に言えば、別のサーヴァントがジョニイの盾になっているのだ。

ライダーは連れてきていない。

セイバーもランサーも仲間ではない。

アサシンは脱落しているし、キャスターがバーサーカーを守るとは思えない。

……では一体誰が？

ジョニイの目の前に立っているこのサーヴァントは一体誰だというのか？

この――

「■■■■■■■■■■――！」

――あろうことが、アーチャーの宝具を掴み取り、迎撃せしめた黒騎士は何者なのか？

漆黒の狂人は足を得る。

バーサーカーには何がなんなのかさっぱり分からなかった。

すでに七騎のサーヴァントが出そろっているこの聖杯戦争において、新たな英霊が加わることなどありえない話だ。

だというのに、事実目の前には明らかにサーヴァントであると理解できてしまう存在が立っている。

しかも、その様子からして、自らのクラスと同じ『バーサーカー』のサーヴァントが。

「……我が遊興を邪魔立てするとは、とんだ愚者が迷い込んできたな。この不埒者と比べれば、狂犬と称するにはバーサーカーは躰が行き届いているとも言えるか」

だが、この突然の乱入者には、アーチャーは驚くより湧き立たされた怒りが上回ったらしい。

先ほどまでは上機嫌ですらあったその顔貌からは笑みが消え、それを見た者が凍り付いてしまいそうなほどに冷え切った殺意を漲らせていた。

「よもや、貴様の策ではあるまいな？　だとするなら、そこな狂犬が汚れた手で我が宝物に触れた無礼、その身を方に引き裂いても償いには足りぬぞ」

「僕が知るかよ。こんな奴が仲間にしたなら、わざわざ僕があんたと戦うなんてことをせず、最初っからこいつをあんたに喋けてたよ」  
「まあ、そうであろうな。なぜかは知らんが、貴様に与しているのもただの偶然か」

そこがジョニイにも理解ができない最大のポイントだ。

どうして明らかに劣勢であるバーサーカーを攻撃せずに、強大な力を持つアーチャーに立ち向かったのか。



この黒騎士は、戦略的に考えてまず取りえない選択を選んでいるのだ。

「そもそも都合がよすぎるじゃあないか。相手の武器を奪うサーヴァントが味方になるなんてさア」

最早、誰かが仕組んだとしか言えない相性だ。

ギルガメッシュを相手取るのに、あまりにも適切すぎる能力を黒騎士は持っている。

あろうことか、他人の宝具を軽々と使いこなし、そのままアーチャーの攻撃を全て斬り払うなどと、なぜ今まで矢面に出ず戦っていなかったのか疑問になるほどの戦闘力。ジョニイがこのサーヴァントと手を組んでいたなら、あれほどまでにギルガメッシュ相手の戦略に悩まずに済んだことだろう。

確かに未知のサーヴァントの乱入はこの場合はバーサーカーにとっては助けになった。

だが、次に自分に襲い掛からないという保証などどこにもありはしない。

この黒い騎士の一挙手一投足を見逃すまいと、ジョニイは正体不明の敵の動きに警戒する。

「マジに訳が分からなくなってきた。サーヴァントは7騎とも出ているはずだろう？ しかもバーサーカーだなんて、僕に挑戦状でも叩きつけに来たか？」

そう軽口をたたくが、実際にそれをされたら一目散に逃げるだろう。

間違いなく今がギルガメッシュを倒す絶好の機会——それも半ば破綻したものだ——だとしても、正体不明の敵を相手するならば、ま

ずは逃げるか、そのふりをして観察するかのどちらかだ。

しかし、この状況下で暢気に観察なんかできようはずもないので、

逃げの一手しかなくなるのだが。

そうして三人が、バーサーカーが永遠とも思えるほどの長い時間対峙し続けると、突如この場に乱入してきた黒騎士は、もはや用はないと言わんばかりにこの場から離脱した。

果たしてあのバーサーカーは一体何がしたかったのか。

ライダーのように、なんとなく面白そうだったから、というだけで横槍を入れるようには見えない。

ジョニイが、英雄になれるような奴らは、やっぱりどこか常人には理解できない思考回路を持っているのかと頭が痛くなるようなことを考え始めたと同時に。

『王よ、どうか聞き入れていただきたいことがございます』

「なんだ時臣。今の我は相当に腹を据えかねておるところだぞ。詰まらぬ瑣事であるならば、その覚悟をして口を開け」

時臣からアーチャーへ、念話が届く。

その言葉通り、黄金のサーヴァントは非常に機嫌が悪い。

及第点レベルだが、ようやく自らが戦うにふさわしいと思えた相手との戦いに、赤の他人から水差しされたうえ、その本人がどこかへ消えていってしまったのだ。

バーサーカーによって、自らの宝具を汚されたとき以上の憤怒をギルガメツシユは抱えていた。

『キャスターが、暴走しました。神秘の秘匿や周りの被害など考えもせずに、その身を弁えぬほどの巨獣を召喚しております』

「……………ほう?」

だが、時臣はそのギルガメツシユの心情を慮る余裕がないほどに、必死の思いで告げた。

『他の者も討伐に向かっておりますが、誰の手にも余る始末。どうか、

御身の庭を荒らす害獣に、手ずからの誅戮を！」

「そんなもの、我が出向くようなことではないわ。庭の問題など庭師にやらせればよい」

ギルガメツシユは、生前の民達のことを思い返した。

彼らは、世界の存亡が目の前で起ころうとも、彼ら自身で奮起し皆で立ち向かっていたものだ。

時間稼ぎのために自らの命を賭す者、死が目の前に迫ろうとも戦う意思を捨てない者、世界の終りまで王と共に生きる者。

この程度の問題、王である自分が出向く必要などない。アーチャーはそう判断した。

「それとも、この我に庭師の真似事でもせよと宣うつもりか？ それは大きく出たな時臣」

『滅相ありません！ しかし、事実として、あの怪物を倒しうる英雄は、御身しかあらせられませぬ！』

時臣も食い下がる。もはや忠臣の慎みを保っていられず、『乖離剣』を抜くことを提案しようとした瞬間――

「何を言う、まだ対峙すらしておらぬ狂犬がそこにいるではないか」

『……王よ、今何と？』

時臣が聞き返すがギルガメツシユはそれを無視し、目の前に立つ人間に視線を向けた。

当のジョニイは急に視線を投げかけられ、どう反応して良いものか困惑していたが、それすらも歯牙にもかけずに試すような笑みでもって問いかける。

「おい、バーサーカー、貴様であれば汚物の排除など容易かろう？ この場合は収めてやるが故、見るに耐えぬ汚物を始末して来い」

「……いきなり何言ってるんだ？ あんた」

「まあ聞け。どうも我が臣下が自らの範疇を超えた問題を我に押し付けてくるのだ。しかし我はそれを対処する気が全く起きぬ。それ故、バーサーカー、貴様に私の代わりにその汚物の処理をする榮譽を与えてやろうという話だ」

マジにイッてんな、この王様。

バーサーカーの頭には、そういう感想しか出てこなかった。

誰が好き好んで、敵対していた奴の頼みを、まさに今対峙している真つただ中で請け負うと思うのか。

しかも話を聞く限り、他のサーヴァント——つまりは、アーサー王やイスカンダル、デイルムツドなどの名立たる英雄達の手にすら負えないもののようなのだ。

なんでそんな無理難題を押し付けるのを当然かのように振る舞ってるんだ、この傍若無人が服を着て歩いているような黄金のサーヴァントは。

……だが。

「何をくれるんだ？」

「……ほう？ 何、とは？」

「庭師が仕事をするのは、雇い主から報酬が支払われるからだろうか？」

まさかあんた、最古の英雄王だったのに、僕をただ働きさせる腹積もりじゃあないよな？ もっと気前がいい所見せてくれよ」

「この場を見逃してやるだけでは足りぬと？」

「当たり前だろ。僕は今、どうしてもあんたを倒したいってのに、それを抑えて得にもならない掃除屋の真似事をしなくっちゃあいけないんだぞ？ 正当な報酬を払ってほしいもんだね」

勿論、こんなのバーサーカーの強がりである。

先ほどまで撤退すら視野に入れていたのだ、この場で倒せるなどとは少ししか思っていない。

だとしても、剥ぎ取れるものがあるなら、自らがアドバンテージをとれるようなものが得られるのなら、その機会を無為にする必要などどこにもない。

そんな挑戦的なバーサーカーの言葉に、アーチャーは気分を悪くするそぶりを全く見せず、それどころか愉快そうに口端をゆがませた。

「貴様の言う通りだ。よかろう、あの汚物を始末した暁には我自ら報酬をくれてやろうではないか」

「そう来なくっちゃ。あんたの依頼、確かに引き受けた」

緊張からの解放感からか、想定外の下賜を賜われるからか、ジョニイはニイツと笑った。

「話を詰めなくて良いのか？　我はまだ報酬をくれてやるとしか言っておらんのだが？」

「別にいいさ。そこで報酬を出し惜しみするような王様だったら、『へえ、英雄王ともあろうものがこんなにケチ臭いだなんて幻滅だなあ』って表情に隠しもせずと思うだけだからさ」

どんな言葉より、それが一番あんたのプライドを傷つけられるだろう？　それだけでも満足さ。とジョニイは言外に滲ませた。

こと言葉の応酬において、バーサーカーは基本的に優位に立っている。

いや、優位に立つ。というよりは、互いに気分良く会話できる術が上手いとも言うべきか。

生前まともな会話もできないような人間相手に立ちまわってきたからか、初日ほどアーチャー相手に苦手意識を持っていないという理由もあるのだろうか。

「その屈辱は確かに許容できんな。良い、必ずや貴様の欲する対価をくれてやることを約束してくれようぞ」

「楽しみにしてるよ。……おいカリヤ、頼みがある」

早々にギルガメッシュとの対話を終えたジヨニイは、すかさず自らの主人に言葉を投げる。

ただ茫然としていることしかできなかった雁夜が、それに少し体を震えさせてなんとか返事をした。

「……なんだ、バーサーカー?」

「令呪を使つてくれ」

「……………はあ?」

「聞こえなかったのかい? ならもう一度言うぞ。令呪を使つてくれと言つたんだ」

雁夜が聞き間違いかと聞き返しても、バーサーカーの口から出てくる言葉は全く同じもの。

何ゆえに、何の意味もなしに令呪を使つてくれなどと頼んでくるのか、雁夜にはまったく理解出来なかった。

「アーチャーの頼み通り、その怪魔とやらを倒しに行きたいんだけど、どうにも体がアーチャーを倒すようにしか動かないんだ。だから、令呪で命じてくれ。『今すぐにキャスターを倒してこい』ってな」

「いやいや、何を言ってるんだ。そうしたいんなら、自分で……」

そこまで言つて気付いた。

今まさに、バーサーカーは『漆黒の意志』によって、行動の自由が利かないのだと。

元より、バーサーカーはアーチャーを倒すためにここにやってきた。

しかも、今現在、限りなく可能性が低くはあるものの、『そのギルガメッシュを倒せるかもしれない状況』なのだ。

この機を逃せば、今後ギルガメッシュを打倒できる保証はない。

それをさせまいと、『漆黒の意志』が、ジョニイの意思に反してその  
矛先をずらそうとしないのだ。

「……お前は、それでいいのか？ 折角の貴重な令呪を、時臣のサー  
ヴァントを倒すためじゃなくて、誰かのために使うだなんて」

「質問を質問で返すだなんてナンセンスだとは思うけれど、逆に聞こ  
うか。カリヤは、助けたくないのかい？」

「……………それはズルい聞き方だな、バーサーカー」

あの森の中、子供たちを助けるために令呪を切ったことに対する意  
趣返しをされて、雁夜はバーサーカーに苦笑いで返すしかできなかつ  
た。

一度やってしまったというのに、今更そんな言い訳染みたことを  
言っても説得力に欠けるだけだ。

なにより、そう聞き返すということは、心のどこかでジョニイも『誰  
かを助けたい』と思っっているということなのかもしれない。

その真意は測ることはできなかつた。雁夜にも、そしてなによりそ  
の本人であるバーサーカー自身にも。

「じゃあ、令呪を持って命じる。『バーサーカー、今すぐアーチャーと  
の戦いを中断し、キャスターの討伐に全力を出せ』！」

「了解、<sup>マスター</sup>カリヤ」

……………

絶望感に齒噛みしていた。

それは誰かではなく、その場にいる誰しもが抱いた感情だった。

無限再生を繰り返す不死の化け物を相手に、誰もが有効打を叩き込めていない。

セイバーの剣戟も、ランサーの魔槍も、ライダーの蹂躪も、どれもが確かな威力を秘めているというのに、そのいずれも悪あがきにしかならなかった。

海魔の進行を遅らせることには成功しているので、全くの無意味ではないのだが、根本的な解決にならない。

このままでは、この怪物が、河岸まで辿り着き、かつてない被害をもたらすことは想像に難くない。

せめて、左手が使えるのならば。

セイバーはそう思わずにはいられなかった。

もしも両手が十全であったなら、『約束された勝利の剣』の力を解放して、一瞬のうちに消し去れるというのに。

ただ、その恨み言をランサーにぶつける気はセイバーには毛頭ない。

この傷は、ランサーとの尋常な決闘によってもたらされた傷、それを理由に責め立てるなど、セイバーには到底できもしないのだから。

「セイバー、このままじゃ埒があかん。一旦退け！」

「馬鹿を言うな、ここで食い止めなければ——」

「いいから退くのだ！ どうあっても手詰まりであろう！ 余に考えがある！」

ライダーの言葉を聞いて、セイバーは八つ当たり気味に最後の一撃



をくれてやると、ライダー達に引き続いて河岸まで退却する。  
それと同時に、イスカンドルの戦車も堤防の上に着地した。

「良いか皆の衆、この先どういう策を講じるにせよ、まずは時間稼ぎが必要だ。ひとまず余が『王アイオニオン・ヘタイロイの軍勢』に奴を引きずりこむ。如何に余の精鋭たちでもアレを殺しつくすことは不可能であろう。足止めするのが関の山だ」

「その後はどうする?」

「わからん」

ランサーのもつともな問いに、ライダーはあっけらかんと返す。

しかし、事実としてそれくらいしかこの場で建てられる対策はない。  
い。

あの規格外の宝具であつても足止めすることしかできないというこの現状が異常事態なのだから。

「あんなデカ物を取り込むとなれば、余の結界が持つのはせいぜい数分が限度。その間に勝機をつかみうる策を見出して——」

「その必要はないよ」

ライダーの言葉を聞いていたセイバーの頭上から、乱入者の声が響く。

それは、この場にはいないはずのサーヴァントの声。

アーチャーに勝負を挑みに行つたと聞いて、ライダー以外の誰しもが、その生存を期待することができなかつた男の声が、ライダーの言葉を遮つた。

「おお、バーサーカーではないか。貴様が帰ってきたということ、あの金ピカを、ついにやってしまったのか?」

「いや、ほとんど見逃されたようなものだよ。代わりにあの化け物を倒して来いつてき。……つたく、とんでもないものを押し付けられた

もんだよ全く」

今にも迫りくる海魔の姿を見て、まさにうんざりだと言った表情を浮かべるバーサーカー。

「待つてくださいいバーサーカー、あれは貴方の手に負えるものではありません。何もみすみす自らの命を投げうたなくとも……」

「何言ってるんだセイバー。僕がそんな自殺志願者に見えるってのかい？」

バーサーカーとライダー以外の全員が、あの黄金のサーヴァントを相手に、単独で勝負を挑みに行っている時点で、自殺志願者以外の何に見えるのかと問い返したい。という気持ちで一つになった。

その微妙な空気を察したバーサーカーは、少し目をそらして話をづけた。

「まあいい……とにかく、あれは僕が始末する。その邪魔だけはしないでくれ」

「しかしだな、お前にあのキャスターを倒せるとは、俺には到底思えないのだ。それとも、何か隠し玉でもあると言うのか？」

「そんなもの、あるに決まってるじゃあないか」

バーサーカーのその言葉に、周りが皆息をのんだ。

宝具すらないはずのバーサーカーに、奥の手がある。そんな事実を誰もが受け入れることができなかった。

それは、ここまで平静だったライダーも例外ではなく。

「待ちおれバーサーカー。貴様、正気か？ あれは一人の小細工や戦術でどうにかなるようなものではないのだぞ？ それを、貴様は倒せると豪語するのか？」

「ああ、『保障』してやってもいいくらいだ。あんなただデカいだけの

的、僕にとつちや今まで戦ってきた誰よりも与しやすいくらいだから  
な」

何を言っているのか、誰にも理解が追い付かなくなってきた。

あの誰しもが手を焼いている化け物を、挙句の果てに雑魚呼ばわり  
とは、今になってバーサーカーの『狂化』が仕事をし始めたのかと考  
え始める。

「ま、見ときなつて。あれつて、中にキャスターがいるんだろ？ 僕の  
能力はそう言うのが得意だからな、一発だけでケリをつけよう」

そう言い捨てて、バーサーカーは一人その場を後にした。

——いや、正確には、一人と一頭と言った方がいいだろうか。

「……ライダー、一つ質問をしてもいいだろうか？」

「うん？ どうした騎士王」

「バーサーカーは宝具を持っていないはずではなかったのか？」

「ああ、余もそう聞いているはずだ。奴は宝具など持っておらんと  
……いや、数日前に、宝具のようなものが出たとは言っていたか？」

だがその宝具の詳細は、精々がバーサーカーのステータスを上昇さ  
せるにとどまっていたはずだ。

それでは、いまの光景に全く説明がつかない。

「貴様が奴に貸し与えたのか？ それにしては随分と小型なものでは  
あつたが」

「いや、余は誰にも貸し出してなどおらん。それに余が与えるならば、

もつと若いのを宛がうわい」

「そもそも、あれでどうしようというのだ？」

——あんな老いた馬などに騎乗して」

漆黒の意志は銀の弾丸となりて。

「お前と再会ができるだなんて、夢にも思わなかったよ」

ジョニイは、今まさに河岸にたどり着こうとする怪物と対峙しながらも、その脅威に目を奪われず、自らの愛馬を愛おしそうな眼差しを込めて撫でる。

その馬の名は『スローダンサー』。

年を取った性格のいじけた暴れ馬、しかし経験の積み重ねにより、体力だけの若い馬のように危険な土地に勢いで突っ込んだりしない、確かな走りを実現させてくれた、『あの長い旅路』における、ジョニイにとって大切な、もう一人の相棒とも言える馬だ。

「……いや、結構無茶な走り方を強要させたっけか？」

そのバーサーカーの独り言を肯定するかのようには、スローダンサーが鼻を鳴らした。

思えば、険しい渓谷にてワイヤーの上を走らせるなど、非常識すぎるルートを走らせた覚えがある。

……それでも、難なく走りぬいてくれたのだから、経験は確かなものだという事だろう。

「ま、今回も頼むよ。なに、今度はドジつたりしないよ、安心してくれ」

そう言えば、スローダンサーに乗っての回転で、一度だけとんでもないミスをしたことがあった。

この聖杯戦争において、その弱点を知っている人物はいないし、その対策をされる心配も今はないけれど、少しだけ苦い思いをかみしめる。

もう二度と、そんなへまなど犯さない。

「じゃあ見せてやろうぜ。僕の……いや僕達の『完全なる黄金の回転エネルギー』の力を」

『僕達』と言うところに、ジョニイは自分の中に渦巻くありつただけの感情をこめて、ゆつくりと馬を走らせる。

馬自身が良いと思うように、この地面を自然体で走って喜ぶように

「馬自身が……この大地と空の下に生まれてきたことを感謝するように……！」

それこそが、『黄金長方形』を作る時だ。

バーサーカーの旅路は、常にこの『黄金長方形』と共にあった。

物語の始まりも、戦い続けてこられたのも、そして、再び立ち上がるようになったのも、全てはこの『回転』によるもの。

ジョニイがもしも『彼』に出会わなければ、このようなことにはなっていないはずだ。

もつと、惨めで、醜悪で、世の中全てを恨みながら死んでいったであろう自分に、希望を見せてくれた、唯一無二の親友。

その彼に、再会するためにも今は……。

「形が……出来てきた……」

今日の前に立ちほだかるのは、生前でも見かけたことのない化物。

それがその気になれば、一瞬で自分の霊核など粉碎されてしまうだろう。

ただ、ジョニイにとって、その程度の恐怖は飲み込むのに容易いものだ。

間違はなく自分たちは、その脅威に向かってはいるが、それでも心の奥底から『勇氣』が湧いてくる。

『黄金長方形』の中に、自分とスローダンサーがいることを感覚で理解し、自らの意志を『爪タスク』に乗せる。

失敗は許されない。『馬の力』を利用した、『黄金長方形』。

『鎧』を両足で踏ん張って、この一発に全てを込めて——！

「……『ありがとう、ジャイロ』。……今度こそ……今度こそ、直接、この言葉を君に伝えるよ……」

だから、そのためにも、力を貸してくれ。

そんな願いを込めた、ジョニイの感謝の言葉と共に放たれた『黄金エの回転ネ／スタンドル』は——

……

キャスターは狂喜乱舞していた。

かの聖女を貶めた神自身が、己の下へと向かってきたのだから。

海魔は自分には操れない。だが、向こうから近づいてくるのであれば、この巨体をもつてあっけなく踏みつぶせる。

そのような予想図が建てられて、ジル・ド・レエはまさにその時を待ち焦がれた。

……が、様子がおかしい。

その神は、間違いなく自分たちに向かってきているのだが、なぜか今までその姿さえ見せなかった老いた馬に乗っている。

見たところ、その馬には戦闘能力はなさそうであるし、ペガサスのように宙を飛ぶこともできないだろう、ただの馬。

なぜ、今際の時にそんな駄馬に乗っているのか。  
が、そんなことさほど問題ではない。

いかな力を秘めていようと、この質量差ではどうしようもないのは  
自明の理。

策略や戦術、作戦などがあるうと、そのまま押しつぶすのみ。

それだけで、邪悪なる神を滅ぼせる。そのはずだ。

——そのはず、だが。一体あれは何なのだ？

バーサーカーの指先から放たれた『何か』が、海魔に近づいてくる。  
それは、首をすくめた人間のような姿をしていた。

鎖帷子のようなものが胴体全体からぶら下がっていて、中身はよく  
見えない。

おかしい。今までのバーサーカーの攻撃は、他人にはその実態を認  
めることが不可能であったはずではないのか？

いや、これは見えていない。サーヴァント英霊にも、マスター魔術師にも、この姿が目  
に映っていない。

誰も、この言い様もない恐怖をおおる人型の『何か』の方に、  
視線を向けることができていないのだから。

というこことはつまり、この化け物は、  
キヤスターにしか見えていないということだ。

ジル・ド・レエの脳内は疑問符で埋め尽くされていた。

何故自分のみに見えているのか、何故こんなものを差し向けてきた  
のか、何故、

——このおぞましい怪物が、海魔の巨体に張り付いているのか。

背筋に冷や汗が垂れる。『フレア・テイルズ・スベルブック螺湮城教本』を持つ手が震える。歯  
の根が合わず、ガタガタと耳障りな音を鳴らす。

それでもキヤスターの疑問は尽きない——いや、尽きさせることを  
本能が拒む。



そうしなければ、キャスターは、自分でも理由が説明できない恐怖に襲われると、理解してしまっていた。

そしてジル・ド・レエの脳内は、徐々に疑問文ではなく己を安心させる言葉の羅列にへと変換されていった。

大丈夫だ。これだけの装甲があれば問題ない。その前に叩き潰せばいい。あれもきつと張り付いているだけ。何もできやしない。聖女にも、この牙城を崩すことができなかったのだから、

『オラ——』

一発。

その怪物の拳が、たった一発撃ち込まただけで、キャスターは気づかされてしまった。

まだ、直接的にキャスターに被害をもたらされていないというのに、骨の髄から理解できてしまった。

『もう逃げ場など存在しないのだ』と。

『オラオラ——』

二発三発。

化け物が海魔の中へと侵入してくる。

その海魔の身体というキャスターへの障害物を、まるで障子を破るかの如く容易く突き破りながら。

『オラオラオラオラ——』

四発五発六発七発。

止まない。掛け声とともに繰り出される拳のラッシュが止まらない。

少しずつ、だが確実に、その化け物はキャスターの許へと近づいてきている。

その恐ろしい容貌を見せつけながら、一步、また一步と。

『オラオラオラオラオラオラオラオラ——』

八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五。

どうかその歩みが遅れてくれるようにと、祈ることしかできないキヤスター。

その祈りは、かつて自分が捨ててしまった神へのものか、それとも聖処女へのものなのか、本人ですら判然としていないのだろう。

しかし、そんなキヤスターの淡い希望など鼻で笑うかのように、その怪物の勢いは増していく。

もはや、キヤスターにその手が届くのも時間の問題だった。

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ——』

十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一。

遂に、その悪魔の手が、キヤスターの首にかかった。

何とかその手から逃れようと半狂乱して暴れるも、その怪物は意にも介さず、無機質な瞳でもって容赦なくジル・ド・レエを睨みつける。

逃げ出したい。なのに、それを許してもらえない。そんな無力感がキヤスターの体を包み、

そして、

『オラ——』

三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十



「――『爪・ACT4』だ。『生贄』になるのは……ジル・ド・レエ、そっちだったみたいだな」

ジョニイは、キャスターが存在していた――最早痕跡も無くなったが――場所を見つめ、ポツリと呟いた。

スロ―ダンサーの頭を軽くなでて、一人ごちる。

キャスターを倒せたはいいけれど、その代償が令呪二画。全くもって割に合っていない。

討伐報酬と、ギルガメツシユからの褒美はあるけれど、それでもかなりの痛い出費である。

何はともあれ、これで自分を執拗に狙ってくるキャスターはいなくなったのだ。

一日ぐらいはゆつくりしたい気分になる。

「これで後は、セイバー、ランサー、アーチャー、……で、何だかよく分からないサーヴァント一騎か」

だが、別にあれを倒す必要はない気がする。

バーサーカーは『直感』でだが、そう認識していた。

あれはまさしくイレギュラーな存在であって、自分達の聖杯戦争とは関係ない――いや、一度介入はしてきたが――のだから、放っておいていい案件だ。

しかも、なぜか自分の味方になってくれた訳だし、闇雲に襲撃をかける様なサーヴァントではないのだろう。

「これについては、またカリヤ達と相談するとして……」

もう、いい加減無視をするのも限界が来ていた。

先ほどから自分の後頭部に突き刺さる多くの視線。

それらから逃れるためにも現実逃避していたのだが。

「……あんたら、何か僕に用でもあるのか？　もうキャスターは消滅したんだし、解散って流れには……ならないよなア」

そこには、自分に何か聞きたそうな顔をしている面々が。

その気持ちは分かる。大いに分かる。

自分も同じ状況に置かれたら、全く同じ反応をしていたら、予想できるから。

「今のは一体何だったのですか？　貴方が馬に乗りながら攻撃した途端、急にあの海魔が収縮するかのようにならなくなったのですか？　……」

「そんなことを聞かれて、僕が正直に答えるとも思ってるのかい？　僕の切り札なんだ、そう易々とその仕組みを教えるわけにはいかないな」

何があっても、この『爪・ACT4』タスクアクトフォーについて語るつもりは、ジョニイにはさらさらない。

むしろ今まで、ライダーほどではないにしても、どれだけ自分の手の内を明かしてきたことか。

そこに、この切り札まで把握されては、非常にまずい。

『切り札』というものは、その正体を突き止められた瞬間、その効力を失ってしまうものだ。

これはあくまで見せ札。存在だけをチラつかせて、それに警戒してくれるように促さなければいけない。

「それは、確かに……。では、その馬は？　貴方は宝具を持っていないはずでは？」

「……なんか、いつの間にか出てきた」

「バーサーカー、いくら何でも、雑にごまかし過ぎではないか？　いくら俺でも、そのような言い方をされては見逃すわけにはいかんぞ」

「それがさア、嘘偽りなしに、本当にいつの間にか出てきてたんだよ

なア……」

バーサーカー自身、どうしてスローダンサーが現れたのか把握できていない。

雁夜に令呪を切られたと思ったら、途端に傍に現れたのだから。

おそらくは自分の正体不明な宝具によるものだとは予測はできているものの、それでどうして自分の愛馬を召喚できたのかは説明しようがない。

「……嘘では、なさそうですね。いや、その、こちらから貴方の秘密を探るのは失礼に値するとは分かっているのですが、いくら何でも常識を超えた光景を目の当たりにしたせいで……」

「いや、気にしてないからいいよ。探り探られなんて、僕の生前でもよくあったことだ。むしろこれくらい、生温くて笑っちゃうくらいだしね」

そんなバーサーカーの言葉を聞いた一同は、バーサーカーが元は一般人であったことに対する懐疑心が強まっていく。

実はそれは出まかせで、マフィアか何かに属していた裏世界の住人だったのでは、とさえも思えてしまう。

「うむ、まさか狂戦士バーサーカーに、騎手のお株をとられてしまうとは思ってもよらなんだわ。そして、その馬だ。そ奴、一見みすぼらしいが、なかなかどうして優秀な走りを見せるではないか！」

どこか空気が淀み始めた瞬間、ライダーの快活な声が響き渡る。

やっぱりこいつはいつでも平常運転だなと、ジョニイは呆れもまじりで苦笑した。

「そりゃあ、ライダーのブケフアラスと比べたら、大概の馬は見劣りするだろうよ。むしろ、それに匹敵する馬なんているのかって話だ」

「む、それは聞き捨てならないなバーサーカー。確かに大きさでは分が悪いですが、私のラムレイやダウン・スタリオンも負けてはいませんよ」

「……セイバー。なんでそこで対抗意識を燃やしてるんだよ」

しかも名前だけ聞いても、全くどんな馬なのかという情報が出てこない。

言いぶりからして、生前の愛馬だとは推察できるが、別段アーサー王の馬についての逸話など、バーサーカーは聞いたことも無いので、さほど重要な情報ではないのだろうとジョニイは判断した。

「まさか、今から勝負するとか言い出さないよな？　自分で言うのもなんだけど、僕はキャスターを討伐した功労者だぞ？　騎士道的にはそれもありなわけ？」

「い、いえ！　そんなまさか！　我々は貴方に敬意を表しているほどののですよ？　そのような人物に、弱り切ったところで戦いを挑むなどありえません」

「我々を見くびらないで貰おうかバーサーカー。そのような非道な真似、このデイルムツド・オデイナの名に懸けて決して行わないと誓おう」

「……………」

バーサーカーは内心、僕だったら迷わず行つてたけど、こいつら本当に人が出来てるな。と感心していた。

ライダーがいる手前、それを実行に移すことはできないけれど、敵が弱っているなら、そこに棒で叩いてとどめを刺すくらい、バーサーカーにはどうってことはない。

しかも、バーサーカーはライダーと手を組んでいるのだから、その戦力を削っておきたいと思うのは当然である。

「……ねえ、バーサーカー、私から、一つ聞いてもいいかしら？」

「あんたは……えーつと、確かセイバーの……」

「アイリスフィール。アイリスフィール・フォン・アインツベルンよ」

ああ、確かそんな名前だったな。今の今までさほど興味も無かった相手だったから忘れてた。

そんな無礼極まることを頭の中だけでつぶやいて、バーサーカーはアイリスフィールの方へと向きなおす。

だが、そうやって暢気そうにしているジョニイとは対照的に、アイリスフィールの顔はどこまでも険しい。

……まさか、今考えてたことを読み取られたとかじゃないよな？と、とりとめもないことを考え始めた時。

「貴方、どうやってキャスターを倒したの？」

アイリスフィールは、先ほどから疑問に思っていたことをバーサーカーに問いかけた。

彼女は、何もバーサーカーの切り札を探ろうという意図はない。ないのだが、どうしても聞かずにはいられなかったのだ。

アイリスフィールの体内には、聖杯が内蔵されている。

そのためサーヴァントが消滅し、聖杯の中にサーヴァントが取り込まれるたびに、アイリスフィールは、それを検知することができるはずなのだ。

しかし、たった今キャスターが消滅したというのに、聖杯に取り込まれた様子がない。

キャスターが雲隠れしたとは思えない。ならばバーサーカーの手によるものだとは断定したアイリスフィールは、何が何でも聞きださなければと使命感に駆られていた。

なにせ、聖杯としての機能が確実に遂行されるといふ保証が、たった今無くなったのだから。

「……それに答える義務はない。勝手に想像してくれ」



「いいえ、そうもいかないわ。貴方がどうやって倒したのかを白状するまで、ここから離れることは許しません」

だが、そんな事情を知らないジョニイからすれば、そんな質問は答えるに値しない。

ならば、と、アイリスフィールは、根競べ勝負に持ち込もうとした。バーサーカーは狂戦士であるにもかかわらず、その精神性は一般人と変わらない。

その上、単純な戦力で言えばセイバーの方が格上である。

何が何でも粘って、向こうから口を開かせるように仕向けようとして――

「アイリスフィール！」

あまりにも頑なにバーサーカーに詰め寄るアイリスフィールを、セイバーが制止する。

それは、アイリスフィールの態度が、バーサーカーに対してあまりにも失礼だったからというのもあったが、それ以上にセイバーの身体を動かしたのは、バーサーカーの瞳だった。

先ほどまで気だるげだったバーサーカーの目つきが、アイリスフィールに詰問され始めた途端、あまりにも底冷えするような剣呑なものに変わったのだ。

まるで、自分に纏わりついてくる蠅を鬱陶しいからという理由で叩き潰すような、あまりにも自然すぎる『殺意』を、バーサーカーが発し始めたため、それを守る形でセイバーは両者の間に割って入った。

「……………あんた、僕を争いごとを好まない平和主義者か何かと勘違いしてるんじゃないだろうな？　いくら僕が喚ばれた七騎の中で最弱だとは言え、これでも英霊なんだぞ？　あんた程度殺すくらいならわけないってことを、その身をもって味あわせてやろうか？」

「……………っ！」

出来れば殺したくないというのは間違いなくバーサーカーの本音ではある。

だが、邪魔になるのなら何の感慨もなく殺せてしまうのも、バーサーカーだ。

普段のバーサーカーの行動、言動、態度。それらがあまりにも『普通』すぎるため気づきにくいのが、『殺意』という尺度で言えば、この聖杯戦争の中でもトップクラスに高いとも言える。

この純粋な殺意を初めて受けたアイリスフィールは、自分が目の前の男のことを、どこか軽く見ていたことに気づかされた。

『セイバーを敵に回したくないと言っていたのだから、その主である自分に易々と手荒な真似はしないはず』そう思い込んでいた。

だが、今思うと、そんなことはありえないのだ。

バーサーカーが一度その相手を明確な自分への敵であると判断したならば、あらゆる条件を無視して躊躇なく始末にかかる人間なのは、誰の目に見ても明らかだった。

何故なら、バーサーカーがキャスターの討伐戦に遅れてやってきたのは、あのアーチャーと戦っていたからなのだから。

「……………ごめんなさい。少し興奮して貴方に無礼を働いてしまっていたようです。さっきの質問はなかったことにしてもらえるかしら？」

「……………ならいいよ。じゃ、もう僕は帰る。色々疲れたし」

そう言い捨てると、バーサーカーは踵を返してライダーの下に歩み寄っていく。

そのままバーサーカーがライダーの戦車に乗り込むと、三人ともが空の彼方へ消えていった。

「……………アインツベルン嬢よ。もう少し、相手が英霊であるということ念頭に入れてから、会話というものを試みた方が良いのではな

「いかね？」

「……………返す言葉もありません」

敵であるはずのケイネスの忠告が、アイリスフィールの心に突き刺さった。